

【完結】チートツール×フルライフ！～女神から貰った能力で勇者選抜されたので頑張ってたラスダン前まで来たら勇者にパーティ追放されたので復讐します～

黒片大豆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「お前、追放な。田舎に帰ってゆっくりしてろ」
涙が止まらなかった。

この一言で世界が変わったけど、
救われた気がした。

この日、一人の勇者が追放された。

そのゴシップニュースは、

箝口令解除を待って、世界中にバラまかれた。

『勇者 道化師 ベルキッド、追放される』

※本作品は「小説家になろう」「カクヨム」にも掲載（清書版）されます。ハーメルンにて先行公開となります。

目次

能力使って覗いちやったので、そのぶんちゃんと奉仕します

第1話【前編】 | 1

第1話【後編】 | 12

第1話【エピローグ】 | 24

能力で旨い飯探して、そのぶん嫌なこと忘れようと思いました

第2話【前編】 | 26

第2話【回想編】 | 36

第2話【後編】 | 50

第2話【エピローグ】 | 56

能力使ってひと稼ぎしてたら、そのぶん厄介事に巻き込まれました

第3話【前編】 | 59

第3話【すれ違い編】 | 65

第3話【投獄編】 | 71

第3話【後編】 | 79

第3話【エピローグ】 | 88

能力使って邪なこと企てたら、そのぶん本気で死にかけました

第4話【その1】 | 93

第4話【その2】 | 99

第4話【その3】 | 106

第4話【その4】 | 111

第4話【その5】 | 116

第4話【エピローグ】 | 122

能力使ってデートして、そのぶん経験値上がりました

第5話【その1】 | 126

第5話【その2】

130

第5話【その3】

135

第5話【その4】

141

第5話【エピソード】

146

能力使わず後悔したけど、そのぶん未来に繋げたい

第6話【その1】

149

第6話【その2】

155

第6話【その3】

161

第6話【その4】

166

第6話【その5】

171

第6話【エピソード】

176

能力使いすぎてしんどいけど、そんなこと言ってる場合じゃねえ

第7話【その1】

181

第7話【その2】

186

第7話【その3】

191

第7話【その4】

197

第7話 エピソード

203

能力使うにも道具がない、けどそのぶん何とかしてみせる

第8話【その1】

210

第8話【その2】

217

第8話【その3】

220

第8話【その4】

223

第8話【その5】

228

第8話【その6】

233

第8話【その7】

236

第8話 【エピローグ】

能力使ってケジメ付けるけど、そのぶん失うものも多そうだ

第9話 【その1】

第9話 【その2】

第9話 【その3】

第9話 【その4】

第9話 【その5】

第9話 【その6】

第9話 【その7】

第9話 【その8】

第9話 【その9】

第9話 【その10】

第9話 【エピローグ】

能力使って魔王討伐できなくても、そのぶん女神をぶん殴ればそれでいいや

最終話 【その1】

最終話 【その2】

最終話 【その3】

最終話 【その4】

最終話 【その5】

最終話 【その6】

最終話 【その7】

最終話 【その8】

最終話 【その9】

最終話 【その10】

【?????】	355
【?????】	351
最終話【エピソード2】	344
最終話【エピソード1】	344

能力使って覗いちやったので、そのぶんちゃんと奉仕します

第1話【前編】

「きやあああつ!!」

絹を裂くような悲鳴。

実際、その女のドレスは、胸元から引き裂かれた。

たわわに実った果実が露になる。

「いやああつ!」

「ぐへへへ……こつちも良いもん持ってんじやねえか」

「兄貴い! いいよな? やつちまう前にやつちまっついていいよな!」

「この……痛つ! いやあ! 誰か! 誰か助けて!」

……それを遠くから、音声付きで覗いていた一人の男。

彼は自らの望遠鏡の『力』の引き出しに、心の底から後悔した。

つい興味本位で覗き込んでしまった。もともと、あそこの参道を抜けるつもりであつたため、多少騒がしいなと思ひ安全確認のために見ただけだつた。

ここに来るまでにこういつた『厄介ごと』は極力避けてきたつもりだつたが……。まあ、つい、見続けてしまったのは、魔が差したというか。

「山賊の数は……5人つてとこか。さすがに……このまま無視するのは後味悪すぎるよなあ」

だいぶ年季の入つた望遠鏡——ところどころ繊細な装飾が目に入る——を懐に押し込んだ。そして再度悩んだ。できれば目立つことせず故郷に帰りたいかつたのだが。

「ちつ。見ちやつた『お詫び』も兼ねる、か」

そう独白すると彼は、昨日防具屋で買ったばかりの《なめし皮のグリーブ》に力を込めた。

「ん？ なん……」

女の胸を揉みしだく山賊風貌の男の首に、鋭いドロップキックが飛んできた。彼は残念ながら、男としての絶倫の時を迎える前に絶命してもらった。

まあまあ体格のある男の首はひしゃげ、あり得ない方向に曲がったまま、キックの力のベクトル方向に吹っ飛んだ。

「よし。一丁上がり。女神の加護があらんことを」

代わり(?)に、山賊がいた場所には、男が立っていた。中肉中背の男性。黒の短髪に皮のマント。どこにでも居そうな青年だった。

「君、大丈夫……!! っっ!」

押し倒されていた女性も、年齢は彼と近い年くらいか。ピンクと白を基調とした洋服を着ていたが、胸元は大きく裂かれ、平均より大きな彼女の胸はこれ見よがしに開放されていた。

「……す、すごい……」

「……す、すごいっすね……」

これは彼女と彼のセリフ。

彼女は、彼のキックの威力に。

彼は、彼女のお胸の迫力に対しての感想だ。

ばっ! と咄嗟に、彼は身に着けていたマントを翻し、彼女に被せた。

「いったんこれで隠しておいて」

「あっ! は、はい」

胸があらわになっていくことに気が付き、急いで彼女はマントで胸元を隠した。

年季の入った、通常よりも厚手に編んであったマントは、彼女の知らない動物の毛と皮でできていた。

「さて……今なら見逃してやるが、どうする山賊さん」

「な、なんだてめえ!!」

彼の慈悲の言葉は残った山賊には届かなかった。

小柄な山賊は背丈並みの青龍刀を構え、そのまま彼に襲いかかった。

(まあまああの『手練れ』だな。油断せず、全力を『出そう』)

彼はまっすぐ襲ってくる山賊を一蹴した。小柄な山賊は確かに腕に自信があった、なんなら、この組で一番強いと自負していた。

が、上には上がいる。彼の全力キックは、青龍刀ごと山賊を吹き飛ばした。

誰も、本当に彼が蹴ったのかどうかすら、全く見えなかったレベルの神速。

「か……かふっ」

変な声と一緒にあり得ない血液量を口から噴き出した。折れた青龍刀は身体に突き刺さっていた。

「わりい、こうなったら手加減できねえんだ。よし、次……」

「に、逃げろ！」

「ありや」

残りの山賊はさっさと逃げてしまった。

(ちようどよかった。グリーブも限界だった)

彼は片足を上げ、グリーブを見た。靴底は抜け、なめし皮で固くしてあるはずの脛部分は大きな穴が開いていた。あれだけの衝撃を加えれば壊れるのも無理はないか。

「あ、あの！ 助けて下さり、ありがとうございました！」

彼女が頭を下げる。

上半身はほとんど開けてしまっており、皮のマントで押さえてはいるが、重めのマントと重めのお胸のせいで、お辞儀した瞬間、彼の目には強烈な谷間がドドンと飛び込んでくることになった。

「わつとつと！ ……いい、いえ、ご無事でなにより……」

さすがに凝視は悪い、と、目をそらしたら、盗賊以外にも人が倒れていることに気付いた。

「……彼らは？」

「あー！ あれはトゴとジェフ！」

彼女はトゴ、ジェフと呼ばれた『遺体』に近づいた。正直この離れた距離から見ても、胴体はひん曲がり、身体の一部はつぶれていたり。どう見ても生きていない。

遺体に近づいた彼女は、右手の親指と人差し指を第一関節で交差させ、胸の前で二回回した。世界の理を構築した女神への祈り。死者への弔いでもある。

「お知り合いか？」

「ええ、今回の荷物運びの用心棒をお願いしてました……あつ！」

彼女は祈りも程々に、参道の脇に入っただけだった。何か大きなものが通過したのか、草木が分けられ道になっていた。

「よかった！ 無事だったのね！」

その奥には、優雅に草をむさぼる一頭の馬と、帆を張った大きな荷馬車があった。馬自体には特に大きな傷もないようで、むしろ草を食べることに必死だ。

帆は、山賊たちの弓矢で穴だらけだったが……。

彼女は、荷馬車に飛び乗った。

ついてきた彼も、馬車を覗き込んだ。

「荷物も無事ですわ！」

彼女は詰まれた麻袋に抱きついていて、一部に矢がぶつ刺さっているが……？

スンスンと、彼は鼻を利かせた。空いた穴から僅かに香る甘く、頭に抜ける香、なるほど。

「お茶、か」

「え、ええ。そうです」

ビクツ！ と、彼女は驚いた。荷物の所在を一発であてられるとは思っていなかった。

「嗅いだことのある匂いだったんで……つて！ 胸！ 胸！」

「あ、きやあつつ!!!」

お胸の開放のことをすっかり忘れていた彼女。

男は、おいおい、といった表情で、破れた帆をナイフで成型し彼女に渡した（顔を伏せながら）。

「こ、これ、胸に巻いてー！」

「あ、ありがとう……」

そういえばお互い、自己紹介もまだだった。

たわわな胸にいい塩梅にフィットしたブラを身に着け、彼女が振り向いた。……うーんでかい。

「私の名前は、ニオーレ。ニオーレIIイーガス。このお茶を、町まで運んでいるときにこんなことに……助けていただき、本当にありがとう！ ええと」

「オレはサック。まあ、生業は行商人かな」

え、と、ニオーレが驚きの表情を浮かべた。

「本当に行商人なんですか!? てつきり、武闘家かと思いました」

先ほどの『足技』を見ての彼女なりの感想だろう。

「一人旅だからな、自分の身は自分で守らないと」
なるほどと、彼女は納得したようだった。

馬を引き、通りに出た。しばらく町から離れている通りであり、また山賊などが現れない理由もない。

となると、ニオーレの選択肢はひとつになる。

「サックさん、あなたのその武術を買ってお願いがあります、町まで用心棒をお願いできませんか」

そうなるよな……。サックは少し後悔した。できるだけ人と接せず、旅を終えたかったのだが。しかし、これは不可抗力だ。サックはニオーレの提案に同意した。

「ありがとうサックさん！ 私困っていましたの。馬車の運転方法もわからず、もし断られていたら、どうすればよかったのか……。お礼は弾ませていただきますわ」

違うところも一瞬弾む。もちろん、サックは見逃さなかった。

+++++

「イーガス家は、元々は小さな家元でしたが、わたしたちの代で高級志向の紅茶を売りに出したところ、一定の貴族に大ヒットしまして」

馬車に揺られながら、目的の町に向かう、サックとニオーレ。

「それが、このお茶か」

「ええ、かなり特別な栽培方法なので、畑も加工場も秘密にしております」

馬車の振動で彼女の胸が揺れる。

それを、横目でちらちらと見ながらの運転。

この男、意外とむつつりである。

「ですのでサックさん、この道で出会ったことは内密に。もちろん、ただとは言いませんわ。今回のお礼も含めて、今夜は当館でお休みください」

「ありがとう、ぜひともそうさせて貰うよ」

たゆんたゆんに気を取られつつも、華麗な手綱さばきで馬車を走らせるサック。

自身の旅は、まあ、あまりゆつくりはできないが、当初からその街で宿をとる予定だったので、

「宿代浮いた……あわよくば……」

くらしいの気持ちで考えていた。

+++++

——ミクドラム——

魔王が住まう「北の大地」において南側。山に囲まれており魔王軍の侵攻からほど遠い場所。北の大地でも比較的まだ安全が担保されている地域だ。

ミクドラムの町に入ったサックとニオーレであったが、街に入るや否や、降り注ぐ『紙切れ』に驚かされた。

「号外〜！ 号外〜!!!」

撒かれていたのは『新聞』だった。

「この街は、『新聞』を配るのか……」

馬車をゆつくり走らせながら、サックはひらひら舞う新聞を2枚キャッチし、1枚をニオーレに渡した。

「他の街では、新聞は有料ですものね。ミクドラムは、領主が新聞の印刷費用をすべて負担してまして、朝刊も全市民に配られますの」

へえ、と、サックは感心した。

新聞は、この国や教会、あと特例の新聞記者が情報をまとめて発行する手段ではあるが、それを世界中に配るのには限界がある。

そのため、各拠点（街など）の代表に、毎日、新聞の『記録』が飛

ばされる。

特殊な魔法加工を施した鉄板に、毎朝決まった時間に、文字と、イラストなどが浮かび上がるのだ。

あとは、その情報をその町に一任する。多くの所では、鉄板は最も位の高い人間が保有し、印刷会社などを経由して情報『販売』をして富を得ている。

金銭がかかると町内で情報格差が生じることを懸念している場所では、街の中心に板を掲げて、全員に周知させる『掲示板方式』を取るところもあるが。

「この町は裕福なんだな……」

印刷も紙もタダではない。それをこれだけ大量に行えるのは、この街が富んでいる証拠だ。

「ミクドラムは、他の大地とも交易できる貿易市ですもの。裕福ですわ。あなた行商人なのに何もご存知ないのね」

ニオーレは号外に目を向けた、と同時に、黄色い声援を上げた。

「きゃー！ 『七勇者』様たち、とうとう魔王城の第1層を突破ですって！ 勇者イザム様の肖像付きよ、この号外！」

「そっか」

「なによ、世界の命運がかかっているのよ!? そんな軽い感じではないの!？」

「だいぶ時間がかかったなって」

「当たり前でしょ！ 魔王城よ、敵の最深部よ！ それに……ほら、ここ見なさいよ！」

馬車を操舵しているサツクの目の前に、ニオーレは号外を差し出した。無論、そうされると前が見えないのだが。

「勇者の一人が……追放？」

「そう！ 以前から『愚か者』なんて言われてた、七勇者の一人 とうとう追放されたのですって!!」

「追放って……はは、相当に嫌なことがあったのだろうか」

「命かけて戦って貰ってるから、こちらは文句言えませんが……それでも、女神様選ばれた七勇者なのに、情けない!! さすが『道化師、

ベルキッド』！ 二つ名に恥じない活躍っぷりね！」

「……？ 道化師？ 勇者パーティに道化師なんているのか」

サツクの疑問に、さらにニオーレが答える。

サツクの目の前に出された号外をやつと引き払ってくれた。

「あなた何もご存じないのね。『七勇者』は女神様選ばれた、魔王討伐のための戦士の相称よ。役割が決まっていて、『勇者』『ナイト』『ビショップ』『ウィッチ』『盗賊』『踊り子』、そしてハズレの『道化師』『道化師だけ浮いてないか？」

「だから追放されたのでしょ？ いま勇者様たちは6人で魔王討伐中なのよ……あ、その道を右ね！」

「……道化師、ねえ」

サツクはニオーレに言われるがまま、馬車を操り、街の中で大き目の屋敷へと向かっていった。

+++++

各々の諸事情が伝え終わり。

サツクは屋敷のメイドに、部屋を案内された。

「いちらず」

一般的な客室だろう。小さな机に、木のベッド。宿より少し格上と
いった所か。

「ありがとう」

サツクはメイドに感謝の声を掛けた、が。

「……」

彼女は何も言わず出て行った。

「……ふうん？ そういうことか」

部屋の中には、甘い香りがするお香が炊かれていた。
壊れたグリーブの代わりに、家主が靴を用意してくれた。簡素なサ
ンダルではあったが、底の抜けた靴よりマシだ。なにより、
「案外、いい素材じゃないか。高級品だな」

サツクの足に良く馴染み、彼は満足げだった。

しばらくすると、家主に食事を誘われた。全く拒否する理由はなかった。サツクは失礼にならない程度に服を整え、食堂へ向かった。

「いやあサツクさん、あなたは娘の命の恩人だ!!」

ワインを片手に上機嫌な、イーガス家の家主。ニオーレの父親だ。ちよつと中年太り気味。

「ちよつとお父さん! ……でも、本当にありがとう、改めてお礼を言わせてもらおうわ」

ニオーレは服を着替え、しかし今度は、あえて胸元を大きく開いたドレスを着ていた。

サツクのほうを意識した服のチョイスだった。

「いえ、俺は、できることをしたまでで……」

すると母親が口を開いた。父親とは正反対の、かなり細身の女性だった。

「サツクさん、こちら当家自慢の紅茶なのよ、是非ご賞味あれ」

ニオーレの顔立ちは母親に似て、身体付(お胸部分)は父親似だな、などとサツクは思いながら、目の前に出されたオススメ紅茶を嗜んだ。

「……! ……これは、なるほど」

サツクはさらに二口、三口と、紅茶をすすり、すべて飲み切った。

「……うふふつ、いい香りでしょう?」

「ええ、これはおいしい。多少お値段が張っても、貴族の方に人気出ますよ」

そんな会話の交わしている中、夕食が運ばれてきた。野菜と肉類をバランスよく組み合わせた夕食は、非常に満足いくものだった。

「こちらのメイドはよく教育されておりますね」

サツクは世間話に乗じて、メイドについて尋ねた。

貿易都市でそこそこの大きさのお屋敷。そこで働くメイドや執事を一瞥した。

ぱつと見、かなり若いメイドもいる。まだ年増も行かない子供じやないか？

あと、執事がなぜか異様に体つきが良い気がする。

「え、ええ、元は田舎から出てきた者たちですが、妻が徹底的に教育を施しまして。外に出しても恥ずかしくないレベルですよ」

「事実、貴族のかたから、メイドと執事の教育をお願いされることもあるのですよ」

「なるほど、田舎からの出稼ぎですか。それにしても統率が取れていると言いますか……」

サツクは、目の前の鶏肉をほおぼった。

「……ねえ、サツクさん、行商人のお仕事は何を販売してらっしゃるの？」

ニオーレに、急に話題を振られ、少し鶏肉がのどに詰まったが、ゆっくり嚥下し事なきを得た。

「着く街で、主に骨とう品を仕入れて転売しています。今はあいにく、商品が無いですけど」

「あら、行商人というより、『鑑定士』の技能もお持ちなのね？」

「むしろ、そつちが得意です」

「ねえお母様！ サツクさん、武術にも長けてらっしゃるのよ！ 華麗な足技で私を助けてもらったの！」

「なんと！ それは素晴らしい……なあサツクくん。しばらくうちに雇われてはどうかね？ 娘も君をお気に入りだしのう！」

「ちよ、お父様！」

「……素敵なお申し出ですが、急ぐ旅なので、申し訳ありません」

丁寧な挨拶でサツクは断り。

そして、

「……も、申し訳ありません、ちよつと体調が優れない様なので……先に休ませて貰って良いですか」

サツクは椅子から立ち上がった。

「あつ……メイド！ サツクさんに肩を貸して上げて！」

ニオーレの号令に、後ろに立っていた若いメイドが駆け寄り、サツ

クを支えた。

(……やはりな)

「長旅の途中でしたものね。ごゆっくりなさってください」

「そうさせて貰う……なんだかとても眠い……」

サツクは、メイドに補助されながら自室へと戻っていった。

「……お父様、『お香』は？」

「しっかりと炊いておいた、あれは良く効くからなあ」

「お茶と併せて効果倍増ね、今回はニオーレにあげるわ。早ければ今夜にでも……」

「ありがとうございますお父様、お母様。また素敵な人に巡りあえて、ニオーレは幸せ者ですわ！」

第1話【後編】

「さてと」

サツクは部屋に入って早々、『お香』を覗き込んだ。

そして、腰ベルトのホルダーから薬包紙に包まれた粉末を二種類取りだし、お香の中に放り込んだ。

サツクを部屋に送り届けて暫くしてから、メイドはその場を出ようとした。

「ちよつとまって……と言っても、無理か。強引に行くね」

サツクはメイドの首根っこを掴んでお香の前まで引っ張った。

首が締まって苦しいはずだが、メイドは特になんともせず、まるで人形だ。

サツクはメイドにお香の匂いを嗅がせた。先ほど別の何かを追加したため、甘い香りは消え、するどい尖った香り変わっていた。

「……!!!」

すると、匂いを嗅いだメイドが急に眼を見開き、そのまま白目を剥いて気を失ってしまった。

「おっと！……直接だと濃すぎたか。でもこれで、建物に充満させれば……」

メイドが倒れる前にキャッチし、ゆっくりとベットに寝かせた。

「あとは、もう少し『証拠集め』かな、キッチンと……あと、裏庭にあった小屋だろうな」

ベットに寝かせたメイドに深く毛布を被せ、誰が寝ているかわからない状態にした。

「全く。俺は……と……『女運』が無い」

そして、皮のマントを手に取り、部屋をあとにした。

メイドが戻ってこないことに、ニオーレは気になっていた。

「あのむつつりスケベ……メイドに手を出したか！」

ニオーレは執事を二人つれ、サツクの部屋に向かっていった。

客人を慰める……といった風貌ではない。

彼女は右手に皮のムチを持ち、執事もそれぞれ物騒な武器を携えていた。

バン！

ノックもなく勢い良く扉を開け、ニオーレはベットの毛布を剥いだ。

「……あの男っ！　なんで動けるのっ！」

そこに寝ていた、気を失っているメイドを気にかけることなく、サックが居ないことが信じられなかった。

「まさかあいつ……私たちの秘密を嗅ぎ付けてきたかつ！　おいお前ら！　奴を捕まえに……！」

声を荒らげニオーレが執事たちに命令したが、

「……！」

2人の執事は急に倒れこんだ。

メイドと同じく『お香』の匂いを嗅いだからだろう。

「こ、この香りかつ！」

ニオーレは即座に、お香の器を床に投げつけ、割れ出た香を踏みつけ消した。

「なめた真似をつっ！　行商人の分際でっ！」

怒りに任せてムチで香の灰を叩いた。うつすらと灰が部屋に舞った。

+++++

「あつは♪　あなたの中身、素敵ね」

ザクリ。ザクリ。

家主の妻……ニオーレの母親だ。

屋敷の裏庭。目立たない場所に建てられた小屋の中で、彼女は『解体』を楽しんでいた。

「……」

解体『されている』男は、先ほどまで執事として働いていたが、薬

の効きが悪く、命令に従わなくなったため、彼女自らが『解体』しているのだ。

「どう？ 痛覚を麻痺されたまま、身体を分解されて行くキモチ……ゾクゾクするわ。あなたもわたしも……」

ザク。ザク。

天井から両腕を吊るされた男。だが、すでに男の腹部より下は無くなっていた。

軽くなった身体が風に煽られ、簡単に左右に揺れる。

「……風?! 扉は閉めて……」

「なかなかご趣味で。教育熱心なのですね」

トスン。

彼女の首に『何か』が刺さった感覚がした。

が、どうやら、それは神経にまで達していたようだ。

激痛が彼女を襲うが、しかし、併せて『何か』が喉にも刺さった。声帯を貫いたのだ。

「……!! ……!!」

ひゅー、ひゅーと、息が抜けるだけの音が小屋に流れた。

「……想像を遥かに超えてきたな。こいつは」

突然、男が姿を表した。何もなかったはずの場に、サツクはマントを翻し立っていた。

「……いま下ろしてやる」

サツクは、下手な口笛よろしく空気の抜ける音を奏でるニオーレの母を無視し、吊るされた男を下ろし横たえた。腹部より下はすでに無く、内蔵がもてあそばれていた。

出血も激しく、もう永くはないだろう。

「遺言は聞く。しゃべれるか」

サツクは男の口元に耳を近づけた。

男は最期の力を振り絞り話した。

「……娘を……奴らに捕まった……助けて……」

それ以上は、彼は話すことはできなかった。

「……」

サツクは、彼の眼を静かに閉じた。
バタツ！ バタツ！

激痛よりのたうち回る母。男の鮮血にまみれた床に自らの身体を擦り付ける格好となり、全身血まみれだ。

「痛覚を増進させつつ、気を失わないよう覚醒のツボも刺しておいた。良かったな、まだ生きていられるよ」

+++++

「お父様！ お父様大変です！」

ニオーレは父親の部屋に向かった。

母の部屋には誰もいなかった。いつもの『お遊び』に行っただろう。

薬が効きにくい『廃品』を処分する遊びだ。

父も父で、今は『お遊び』をしている頃だ。

お気に入りの『メイド』にさらに薬を盛り、完全催眠状態で性的な夜伽をさせている。

最近が目下、かなり若い娘にお熱だ。

「お父様……」

ニオーレが父親の部屋の前に着いたとたん、

「う、うあああああつ!!!」

父親が飛び出してきた。

裸一貫、何も身につけて無かった。

彼も彼で夜伽を楽しんでいた最中に、透明な彼に襲われたのだ。

飛び出してきた父は、首に長い『串』が刺さっていた。

台所の調理場にある、バーベキュー用の串だ。

はっ！ と、ニオーレは父親の部屋を覗き込んだ。

夜の営みを行う直前だったのか、強めのお香が炊かれており、ベツトには齡10歳ほどのメイドの女が、服を脱いで横になっていた。

が、そのメイドの裸を隠すように、ふわりと毛布が舞った。

「……そっ……」

ニオーレはムチを振るった。そこに誰かがいる！

「おっと」

ムチはマントを叩いた。すると透過していたマントは効力を失い、そこに、サックが現れた。

「……面白いマジックアイテムを持っているのね、行商人！」

ニオーレのするどい眼差し。

「……『擬態獣』の体毛で編んだマント。衝撃を受けると暫く使えないのだからね」

パンパンつと、叩かれた場所に付いた汚れを叩くサック。

ギリギリと、ニオーレは歯軋りした。

「あなた、なぜ紅茶とお香が効かないの?! 私達親子の最高傑作なのよ！」

ああ、と、サックは残念そうに返事をした。

「やっぱそういうことか。強烈な麻酔作用の紅茶と催眠のお香で、旅人を奴隷に仕上げていたな、小屋は差し詰め屠殺場か」

「……お母様に会ったのね」

「小屋で寝てるよ」

ニオーレの怒りの表情は変わらなかった。

「いつから気づいてましたの?」

サックが少し上向きに目線を向け、出会ったときの事を思い出した。

「トゴとジェフって人たちの遺体かな。用心棒って割には、肉付きが不自然。薬で痩せたあと増進剤で無理やり筋肉つけたような感じだった。あ、確信はお茶の葉の香りだね」

サックは自分の鼻に指をやった。

匂いでわかったよ、というジェスチャーだった。

「……お香に細工し、自分は無事。あなたは本当は『薬師』ね、それなら薬に抗体があるのも理解できるわ」

ニオーレはふつと表情を和らげた。

ドタドタと、廊下から足音。

館のメイドと執事が集まってきた。

彼らは一様に手に武器を携えていた。

「秘密を知ったからには生かしておけませんわ。あなたの得意の足技も、そんな粗末な靴では本領発揮できないでしょ」

『出来ない』ね。する必要もない」

ニオーレはメイドたちに号令を出した。目の前の侵入者を始末しろと。

が、

彼らが部屋に入るや否や、突然バタバタと倒れ始めた。

「この部屋の『お香』も変えておいた。さつきとは違って、匂いは変えずに調合したから、気づかなかったかな？」

「なっ……この短期間で調合なんて不可能よ!! この配合を見つけるのに何年かかったか……ひっ!!」

突然、サツクがニオーレの目の前に現れた。

常人が気づかないほどの高速移動であった。

「いい靴だ。『使えば』足音も消せる」

トンっ……。

刹那。ひらけたニオーレの胸元に、短い金属の針状のものが突き刺さった。

これも調理用の『串』だった。

「あ……れ……」

痛くはなかった。しかしニオーレは、強烈な脱力に見回れその場で崩れ落ちた。

「神経に作用させて麻痺させたよ」

こいつ何者だ。

ニオーレは思った。

自身は『鑑定士』『行商人』と名乗るが、並みの『薬師』以上の調合能力。

そして、キッチンにある串をまるで『暗器使い』のごとく使いこなす。

「……に、ニオーレ……」

「お、お父様！」

倒れた先に、すつぽんぽんの中年（ニオーレ父）がいた。彼はまだ生きているが、首から下は痺れて動けないようだ。

「ニオーレ、ワシ思い出したぞ、この男！ 七勇者が一人『道化師 アイスツクⅡベルキッド』だ！」

その時、窓から月の光が差し込みサツクを照らした。すると彼の左首筋から額にかけて、花弁状の痣が浮かび上がった。

女神に祝福され、勇者として認められた者に浮かぶ痣……。

七勇者の一人である、確たる証拠だ。

「……いや、違うよ？」

「嘘おっしやい!!」

渾身のツツコミを入れるニオーレ。

ここまでバレバレで、なぜかシラを切るサツク。

「ホント違うんだって……」

ポリポリと、頬を搔きながら説明を続ける。

「俺の最終能力は、マスタースキル潜在解放ウエイクアップ」

サツクはニオーレが落とした皮のムチを拝借した。

「道具の秘めた力を、根底から引き出す能力。例えば何の変哲もないこの皮のムチに『潜在解放』すると……」

ブヒュン。

サツクはムチを壁に打ち付けた。

すると、

ドゴオオオ!!!

激しい音と共に、壁に穴が空いた。

砂埃が部屋を満たす。

啞然とするニオーレ。単なる皮のムチで強固な石の壁を軽々と吹き飛ばしたのだから無理もない。

「ただ、解放しすぎると壊れる」

ポイ。

サツクは手に持った皮のムチをニオーレに返した。ムチ部分はロボロに解け、使い物にならなくなっていた。

ニオーレは思い出した。彼に初めて会ったとき、グローブはボロボロに壊れた。

彼はグローブにこの力を使っていたのだ。

「この力、あらゆる道具に精通しなければ使えない。『鑑定』『行商』『薬剤』『調査』、あと『錬金術』『暗器』『武器鍛冶』『修理』その他もろもろ……」

つまり、彼が言いたいことは。

「……『道化師』じゃなくて、『道具師』ね。『道具師』、アイサック＝ベルキッド」

「……へ？」

「新聞屋が誤字つたあと訂正せず、そのまま広まったらしい。まー、『新聞』らしいことしてくれたよな……」

「じゃあ、追放されたのも誤報……?」

うーん……。

サックは腕を組み、返答に悩んだ。

「そこはまあ……ノーコメントつてことで……」

「……隙ありっ!!」

ニオーレが突然起き上がり、襲ってきた。

彼女を留めていた『串』が外れていたのだ。ずっと『隙』を伺っていた。

太もものベルトに仕込んでおいたナイフを握りしめ、サックの首めがけて飛びかかった。

『影踏み』

ガクン!

突然ニオーレの動きが止まった。

突進する格好のまま固まってしまった。

今度は首から上も動かない。

「素敵な靴をありがとう。粗末なんてとんでもない。『縮地』に『絶歩』、それに『影踏み』……希に存在する『レア物』だったよ」

サックは履く靴を鳴らした。ニオーレの影がサックの足元まで延びていた。

影を踏みつけることで対象の動きを完全固定する、その靴の固有スキル。サックはそれを『解放』したのだ。

「あ……あ……」

先ほどとは異なり、会話することすら封じられたニオーレ。わずかに声が漏れるだけだった。

「さてと」

影を踏みながら、ニオーレに近づき、今度はナイフを拝借。

「オイオイ、これも一級品じゃないか！ 解放すれば『首狩り』が使えるぞ！ ……どれどれ」

サックは早速、ナイフをニオーレの首に近づけた。

「ひ……」

影踏みでまともに声すら出せない状態。

顔が強ばる。汗だけは人並みに吹き出す。

助けてください、の命乞いすら出来ない。

「や、やめろー！ 娘だけは助けてやってくれっ！」

家主であるニオーレの父が叫んだ。

彼は、ここで真の父親らしいことをした。

「サック！ 勇者アイサック！ 勇者でありながら命乞いする人間に手を掛けるか！ やめろ！ 止めてくれ！ 殺すならワシにしろ!!」

まだ肩から下がまともに動かない状態の、裸体小太り中年が、父親の威厳を見せつけた。

「……」

ニオーレの眼から、涙が溢れた。父の優しさに涙した。

「やめた」

サックは、ニオーレの太ももに巻いてるホルダからナイフの鞘を外した。

そして、青光りする刀身のナイフを入れ、自分の腰ベルトに挟み込んだ。

『影踏み』も外すよ」

途端、ニオーレの体が勢いよく倒れた。影踏みは慣性はそのままだに縛るようだ。

「お、お、お父様!!」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしなから、父親のところへ駆け寄った。

サツクは、父親に刺さっていた串を抜いた。

「に、ニオーレ!!」

抱き合う二人。

真に死の間際まで追い詰められたことで、改めて親子愛が強くなったのだろう。

いわゆる、これも『吊り橋効果』である。

「なんか、どうでもよくなっちゃった。あんたらに特に恨みとか、俺、よく考えたら無いわ、あとは憲兵とかに任せる」

サツクは、そんな親子劇場を見せつけられて、興覚めしたようだ。

「あ、ありがとうございます。もうこんなことはしません！ 女神に誓って！」

ニオーレが泣き顔で感謝を述べた。

……が。

内心は、サツクに舌を出していた。

この街の憲兵だったら、上部にワイロをたんまり配っている。なんなら、お茶も渡している。

うまく辻褃合わせて、なんなら「追放された勇者」をダシにして、サツクを脅迫できるんじゃないか……。

と、腹黒い算段を立てていた。

兎にも角にも、ここで私たちの命を奪わなかったサツクには感謝だ。

「……ま、俺はそう思うけど」

サツクは、かれらを指さした。

「こいつらは、どう思ってるのかね」
むくり。むくり。

執事とメイドが起き上がり始めた。

彼らの目は、先ほどとは打って変わって、生気に満ち溢れていた。が、一様に、怒りの表情であったり、大粒の涙を流すものだったり。拳を強く握りすぎて出血しているものだったり。

様々な感情が見え隠れしていた。

「……はへ？」

これに驚いたのは、ニオーレだった。

お茶とお香を嗅ぎ続けた人間が、感情を取り戻すとは思ってなかったからだ。

「このお香、彼らを気絶させるものじゃない。『治療』させてたんだ。脳のかなり深い部分まで侵されてたから時間かかったけど……あ、安心しな、奴隷だったころの記憶は『すべて残っている』よ」

「なん……ひっ!!」

気づいたら、ニオーレと父親は、元メイドたちに囲まれていた。

田舎からの出稼ぎに来た者たち、

冒険者として旅をしていた者たち。

親。

子供。

配偶者。

旅の仲間。

無二の親友。

そして、自身の人生をぐちゃぐちゃにされた者たちだ。

彼らが、ニオーレたちを許すとは、到底想像できない。

「ま、まっってくださいま……ぐぶっ!」

ニオーレの整った顔に、女メイドが持つ杖のメイス一振りがクリーンヒットした。

これを皮切りに、執事とメイドの復讐劇が開幕した。

「息子のカタキだ!」

「よくも! よくも!」

「父をどこへやった!」

「トゴとジェフを……返せっ!」

「くそっ! くそっ! お前らのせいだ!!」

ばぎっ ぶぎっ ぐしや

「いやあ! 誰か! 誰か助けて! た、助け……」

「ぎやああああ!!」

二人の断末魔を背に、サツクは屋敷を後にした。
擬態獣のマントを羽織り、彼はそのまま、夜の街を歩き始めた。
「……女神の加護があらんことを」

第1話【エピローグ】

ミクドラムには大きな港がある。ここでは交易品が、昼夜問わず入れ替わり立ち代わり運ばれ運び入れられる。

そのため夜通し働くものや、日雇いのために、簡易な宿が多くたち並んでいる地域だ。

サックは、その宿の一つにチェックインした。

宿に向かう途中、夜勤の人向けの夜食販売の出店を見つけ、ローストビーフのサンドイッチを購入していた。

「……む、思ったより固いな」

『目利き』を使って、サックは一番「おいしくない」物を選んだ。夜勤であくせく働く者たちの、些細な幸せをあまり横取りしたくないという気持ちもあり、謙遜した結果だったが。

「水も一緒に買って置いてよかった」

皮の袋に水を貯めてもらっていた。これが無ければ飲み込めなかったかもしれない。

「さて、と」

サックは一気にサンドイッチをほおぼり、3階建ての宿の最上階、3階の窓から、外を眺めた。

「燃えてるなあ……」

もう少して日の出ではあるが、それにしても外が明るい。

それもそのはず、遠くで大きな屋敷が燃えているのだ。

「葉っぱは燃やすとガスが出るからな。『うまのふん』を潜在解放させて、全部腐らせて堆肥にしておいて、正解だった」

あのお茶の葉をそのままにしておいたら、この火事で風下の人間たちが大変なことになっていただろう。

咄嗟の思い付き（イタズラ）が、功を奏した。

「……」

この火事。誰かが屋敷に火を放ったのだろうか。

自暴自棄になり、自殺を図ったか。

全てを消してしまいたかったのか。

その辺の事情は、もう、誰も知る由もない。

「……もつたいない、おっぱいだった……」

サツクは改めて『女運の無き』に愕然とした。

そして、

「復讐……か」

大きなあくびとともに独り言。

と同時に、『復讐』について考え始めた。

元々、復讐なんて行っても、失ったものは何も戻ってこない。

ただ虚しいだけだ、などという思考であった。

が、今回の一軒で、復讐の考え方を改めることとしたのだ。

復讐で、相手に同じかそれ以上の屈辱を与えられれば。

どれだけ、ココロが清々しうるだろう。

最高の自己満足じゃないか。

「……」

きしむ安物ベッドに横たえながら、サツクは、この旅の目標を修正した。

単に田舎に帰って、能力を使ったスローライフを願っていたが、それは辞めだ。

「折角だし、やってみるか！」

右手を天井に突き出し、中指を天に向けて突き立てた。相手を最高に侮辱するハンドサインだ。

『復讐』してやるよ……。こんな能力付けて、貧乏くじ引かせやがって……

待ってる！ クソ『女神』！」

FIN

能力で旨い飯探して、そのぶん嫌なこと忘れようとし
ました

第2話【前編】

彼は腹が減っていた。

ここは、北と南を結ぶ街、ブロクダート。

魔王城のある『北の大地』と、南の国とを結ぶ定期船が唯一走る港だ。

ここから、船で海を越え南の大陸に渡ることになる。

魔王が永い眠りから目覚めてから、北の土地から逃げる人も多い。また、南から多くの軍人や兵士たちが集まってくる関係上、定期便の数が減便している。そのため、定期船はなかなか空席が出来ない

結局、サックが取れた予約の船は2日後となってしまった。

こればかりは仕方ない。急ぐ旅だが半分諦めていたので、そこまで気落ちしていない。

それより、飯だ。

俺は腹が減っている。

完全に昼飯の時間を逃した。

折角の港町だからと、新鮮な海鮮を狙ってはみたものの、残念ながらこの港町周辺の飯屋は、すでにランチ営業を終了している。

そして、空いている店はどれもこれも『観光地値段』かつ『飯も不味い』と来たもんだ。

道具師アイサック。彼の能力の一部は、戦闘用に洗練され続けた結果、困ったことに《なんでも鑑定》が常時機能してしまっている。

彼は常に、人一倍の情報が脳に飛び込んでくる。

見える看板、店の佇まい、店員の雰囲気。

それら全て、鑑定済みの結果が付きまってくる。

だから彼はわかってしまう。

(ここはぼったくり値段……ここは魚が不味い……ここも観光地用の値段設定……)

確かに『ハズレ』を引くことは無くなるが、全てにおいて結果が見えてしまっているのです、自ら新たなものを開拓する楽しさは失なわれてしまう。

だったら、せめて、最高の鑑定結果を出す店で最高に旨いものを食って、鋭気を養いたい。

……お。

サックは、港から離れた場所でこじんまりとした定食屋を見つけました。しかしそこは海鮮は扱っていないようだが、

「ほう、こういうところいいんだよ」

店の暖簾はそこそこに年季が入っている。鑑定結果は30年物。いい塩梅の老舗だ。

そして、幟には『フリア スパシール』と書いてあった。

フリアとは、豚肉を厚くスライスし、卵とフロア粉、乾燥パンの粉末をまとわせ、油で揚げたものだ。

低温でゆっくり火を通したのち、高温で二度揚げして表面をサククリ仕上げる。このひと手間で、フリアの味は大きく変わる。

二度揚げする時に油が燃えそうになることを、古代火炎魔法《フレイア》に見立てて、それが訛ってフリアとなった、とも言われている（諸説ある）。

サックは、この店が、先ほどの手法で揚げている事を鑑定で確認した。

海鮮ではなかったけど、決まりだ。

とにかく彼は今、旨いものを口一杯に頬張りたいたいのだ。

「らっしやいー」

「1名ね」

店にはふくよかな体型の女将さんと、奥には調理場が見える。

お昼のピーク過ぎていたため、人は殆どいなかった。

サックは中程のテーブル席に案内された。

「豚のフリアと……あ、ハクバクとトウシ汁、あとキサラ豆にエール」

「あいよー」

お腹の空腹に負けて、たくさん注文してしまった。

「ほい、キサラ豆とエールお待ち！」

エール（炭酸入りアルコール飲料）に、塩茹でしたキサラ豆を合わせて一杯いただく。この店のフリーアは調理に時間がかかる。そう読みきったサクは、料理をいただく前に、エールとキサラ豆で乾杯をした。

緑色の固い鞘に包まれたキサラ豆。しっかりと塩味で茹でることで、鞘の繋ぎ目が緩くなり、中の豆がポロリととれる。ポイっぽいとそれを口に頬張り租借した。

少し青臭さが残っているが、それもこの豆の個性。強めの塩味と相まって噛めば噛むほど甘味を感じる。サク、ホクと解れる食感も、この豆の醍醐味だ。

グイツと、エールで流し込む。

口の中の塩味と甘味と、豆の存在はエールの苦味とシユワシユワによつて流されていく。ついで、飲み込まれるエールののど越しに、サクは爽やかな快感を覚えた。

「……………つつくううう！ うんめえ……………」

昼過ぎから酒を飲む背徳感も重なる。これ程のエールを味わったのは久しぶりだ。

（あの『ナイフ』、いい値段だったものなあ）

キサラ豆を摘まみながら、ナイフを高値で買い取った骨董商に感謝した。

お陰で、旅費にはかなりの余裕が生まれた。

豆とエールをほぼほぼ嗜んだころに、主役が登場した。

「おまーちー」

出来上がった豚のフリーアを見て、サクはこの店に入れたことを女神に感謝した（嫌いだけど）。

鑑定眼など無くとも、豚のフリーアはまるで「旨い」の形容詞で作られたようだった。

二度揚げで揚げたての表面を、まだ小さな油が跳ねる。パチパチ

と、表面の水分を飛ばす音が、まだ微かに残っていた。

フリアには、茹でたスレツタが添えてあった。サクク個人的には、スレツタは生のまま、千切りで頂きたかったが、一口サイズに湯がいたそれも甘味が増していて旨し。

何よりサククが感心したのは、フリアとスレツタが盛り付けられた皿に対してである。

半月状の金網の上に、揚げたてフリアが乗せてあった。しかも、すでに一口サイズにカット済みである。

お皿からフリアを分断することで、皿に余分な油を落とすし、また、フリアが油を再度吸ってしまうことを防いでいた。

かつ、備え付けのスレツタのゆで汁も、フリアに触れることはない。そのため、いつまでもサクサク食感が損なわれることはない。

(……よし！)

サククはテーブルに置かれていたツボの蓋を開けた。中には黒色の濃厚なソースが入っていた。どうやら自家製だ。一般的なものよりもスパイスを効かせている。鼻に抜ける香辛料の香りが心地よい。流石、フリアと一緒にスパシルを売りにしている店だけある。

備え付けのスプーンで、フリアとスレツタにソースをかける。フリアのサククリ感も楽しみたいので、衣にはほどほどに。

一緒に注文していたハクバクは、一粒一粒がしっかり立っていた。そして粒にツヤがあり、白く輝いていた。小山に盛られた頭からはほっこり湯気が立ち、もう香りだけで、コイツが「旨い」ことが理解できる。

気温や湿気で炊き上がりが変わってしまうこのハクバク。ここまです上手く調理出来るこの店には、専用の職人がいるのだろう。

(いただきます)

サクク、箸《チョップス》をとる。

そして、まだ熱がこもっているフリアを一切れ。箸で持ち上げた。断面はほんのり桜色を呈しており、赤身と脂身の比率、コントラストに心が踊る。

がぶっ、さくっ、くっ、しゅわ。

固めに揚げた衣。歯ごたえを感じるものの、それは程よく砕け、そして、彼の歯は豚肉に達した。ぐつ、と肉の感覚を覚えた瞬間、サシ（赤身に走る脂身）を介して肉がキレイにほぐれた。そして口の中に、甘い脂が肉汁と共に溢れた。

さくつ、じゅわ、さくつ、じゅわ。

噛むほどに衣と肉と肉汁とが口の中で踊り狂う。脂の甘味と肉の旨味。そして、衣の食感と塩味がそれらを存分に引き立てる。

さらにスパイスを効かせた特製ソースが追い討ちを仕掛ける。濃い味のソースではあるが、このフリアはそれに負けない旨味だ。

『味の暴力』。そんな表現が正確なのかもしれない。

サツクは、ここでハクバクに手を掛けた。

真っ白いハクバクを、旨味が暴れ狂う口に一口。ほおりこんだ。

するとどうだろう。さつきまで口の中で暴れていた味の暴力たちが一斉に大人しくなった。……いや、ハクバクに『乗った』のだった。

ハクバクは彼らの仲裁を始めた。すると一気に味たちが纏まり始めた。

誰が言ったか。

『この世のおかずは、ハクバクを引き立てるためにある』

「……うんめえ……」

至福。

この二文字は、今、この時のためにある。

サツクは確信した。

……が。

その至福の時は、彼女によって打ち砕かれることになった。

カランカラン。

扉の開く音。

「へいらっしやいー」

「えーと……あ！ 居た♪」

女性の声、いや、少女の声、だろうか。

サツクは入り口を背に座っていたので、その女の顔は見えない……んが。

彼は彼女のことを知っていたし、

彼女も彼のことをよく知っていた。

「えへー。みーつけた！」

「……」

サツクは無視を決め込み、食事を続けた。

よく見たら、トウシ汁（発酵させたキサラ豆とハクバクをベースにしたスープ）、この辺りでしか使われない海藻『アズサ』の汁じゃないか。

地元のもの何も口にせず終わるかと思っていたから、これはありがたい。

「ずずず……んまつ」

「あー、美味しそう！ わたしもご飯たーべよっ♪」

どかつ。サツクの向かいに座った彼女。

「女将さんー！ 野菜のスパシールでお肉抜きハクバク大盛！」

同席で勝手に注文を入れてきた。

足を組み、サツクを向き笑顔の挨拶。

「ご無沙汰ですっ♪ サツクさん。《クリエⅡアイメシア》ですっ！」

「……」

あくまでも無視をし続けるサツク。

《クリエ》のことを極力目にいれないようにしている。

フリアを二切れ、三切れと口に放り込む。

が、先ほどとは打って変わって、味などしない。

「あー、そういうことしますかサツクさん。いや、道具師、アイサ……」

「やめろ、新聞屋」

根負けしたサツク。

追放され、身元を隠して旅をしている身としては、その名前を公共の場に出されるのは避けたい。

ふふん！ と、勝ち誇ったようにクリエは胸を張って意気がった。

(なお胸はあまり無い)

全体ブラウン色を基調とした衣装。

チエック柄ケープを纏い、同じ柄のベレー帽にジャンパースカートを召したこの女。

見た目はかなり幼く見えるが、実年齢は不詳。サックより上なのは確か。

そして本業は、かなりやり手の『新聞記者』だ。

「なんのようだ新聞屋」

「いいえ、特には。偶然あなたを見かけまして！」
よくいう。

クリエの言葉は、サックは殆ど信用していない。というか、サックはクリエのことを『鑑定できない』。

「はい、野菜スパシールね」

「わーい、美味しそう！」

クリエの前にスパシールが届けられた。

スパシールは数種類の香辛料と野菜、肉などを一緒に炒め、その後水とサマヒアミルク(常夏の島国に成る実から取れるジュース)を入れてじっくりと煮込む料理である。一般的にスープ状で、ハクバクやパンを浸けて食べるものだ。地方によってはフレア粉でとろみをつける場合もある。

「あーん(〇〇)！ おふっ！ ここのスパシール美味しい!!」

香辛料の香りだけでわかる。この店のスパシールもレベルが高い。

熱々のスパシールをパクパク食べるクリエ。湯気でメガネが曇り始める。

「ありや、メガネが曇ってしまいました」

「……取ればいいんじゃないか？」

舌をだす新聞屋。ベロは香辛料で黄色くなっていた。

この新聞屋、行動がいちいち子供っぽいのが、繰り返すがサックより年上である。

「あなたに私を『鑑定』されてしまいますからね。新聞記者として、自分の弱みを見られるのは最大の侮辱！ なので、絶対取りませーん」

そう、彼女の身に付けているメガネは『チエックキャンセラー』。鑑定士やその他、偵察系スキルをガードするマジックアイテムだ。

「新聞屋。本当に何も無いのか？」

「まあ、本音を言おうと『真相』を知りたくて？　みたいなの」

あつという間にスパシールを平らげてしまった。ハクバク大盛だったはずだが。

サツクの肩ほどまでしかない身長差。この体によく入ること。

「真相……ねえ。じゃあないんだよ新聞屋！　この記事の『真相』はなんだ」

サツクは、あの時拾った『号外』を突きつけた。

「ほうほう、拝借」

クリエはメガネを直す所作から、号外を手にとった。

金髪ショートにインナーカラーで赤い髪がチラチラ覗く。

派手な髪色になっているが本人曰く『地毛』。

鑑定できないので真贋は不明だが。

「ああー、もしかして『誤字』にお怒りで？」

「誤字はさっさと直せ。それより、追放の件だよ。なんで記事にした。情報統制されているはずだ」

ああ、と、クリエは、サツクの怒りに理解を示した。

「つい先日、勇者イザムから本情報については解禁令ができました。そんで記事にしたってことっすよん」

「……」

イザムが、記事にすることを許可した。

サツクを『追放』した張本人だ。

「あら？　信用なりませんか？　でも私も『勇者専属新聞屋』としてやっている以上、勇者の命令には従いますよ」

「……そか」

これ以上の詮索は、多分無意味だ。サツクは、イザムが単純な理由で解禁するとは考えていなかった。

何か別の意図があるのか。勘ぐってしまうだけで、それこそ『真相』は、イザムにしかわからない。

「さて、アイサ……じゃなかった、サツクさん、『ギブアンドテイク』ってお言葉ご存じですかね？」

「？ 『誤字あるで訂正』？」

「お耳をお掃除したほうがよろしいですね、もしくは精神系解呪をオススメします」

「さつさと『道化師』の修正しろって意味だよ」

夫婦漫才よろしく、テンポ良い受け答えが行われた。

なお、サツクとクリエ曰く「互いに好みのタイプではない」とのこと。

「それはそれですね、サツクさん」

「俺は情報屋じゃない。ネタになるものはなにもない」

いいえ。クリエは首を横に振った。

「私は今、喉から手が出るほど欲しい情報があるのですよ」

「……」

サツクはなんとなく察しがついた。

「サツクさん、あなたが追放された『理由』をお聞かせください」

「ノーコメントだ、少なくとも、ギブ&テイクに見合うほどの情報ではない」

残りの昼食をすべて掻き込みながら、サツクは返答した。

「だと思ってました。なので、今回は私も、追加で『見合う情報』お持ちしましたよ」

ん？ 珍しい。情報屋が取引に自分の情報を持ち出すなんて。

「……何か、『裏があるな』」

「まあ、ご明察ですが……サツクさん、あなた、『当日ミクドラムに居ました』ね」

カタン、と、サツクは箸をおいた。

「何を根拠に」

「先ほど見せていただいた『号外』」

「あ」

くすくすと、クリエが笑う。サツクは自分の軽率な行動を悔やんだ。

「あと私は『当日居た』としか聞いてません。何かあったのかご存じです
ね」

「……さあ、な」

「号外に日付があるので色々と言いつい訳不可能ですからね」

くつくつく。クリエが見下している。

「で、この件、どうします？ 新聞にどでかく乗せようか悩んでるんで
すよねえ」

「……」

「見出しは……そう、『屋敷の火災、まさかあの『追放勇者』が関与か
！』、シンプルにそれで……」

バンツ！

思わず、サツクは机を叩いてしまった。

ざわ、ざわ。

店員や、周りの客の注目が集まる。

「……場所を変えよう」

サツクは、食事の伝票を手にとろうとした、が。

「ここはおごりです。あ、公園においしいアイス屋さんがあるみたい
ですよ」

いつの間にか伝票はクリエに握られていた。

既に、料金に加えてお店へのチップ料金が記載されていた。

「さすが、早いな」

「これが仕事ですから。『誰よりも早く、正確にお伝えします！』」

後者をしっかりとほしいな、と、

サツクは思いながら、最高に旨かった定食屋を後にした。

第2話【回想編】

『魔王城』

最北の地『インllサクル』に封じられていた魔王が、復活した際に併せて建立した城。といっても、便宜上の名前だけで、そこに建物は実在しない。

魔王城の入り口は、異空間へのゲートのようなものだった。

その城門は、『次元錠』により封じられていた。

元々は数百年前の『勇者』達が、魔王を異空間に封じた際に用いた強固な封印だった。

実際にそれは、錠前の形をしており、物理的なロックが掛けられてあつた。だが現代の魔王はこれを改良し、逆にこちらからの進入を防ぐ『鉄壁の鍵』としてしまったのだ。

魔王城に攻め入るには、この『鍵』の開錠が必須になる。

人間は外から攻め入れないが、しかし魔王は、魔王城から禍々しい瘴気——『魔瘴気』——を発生させ、生命を死に追いやった。

魔瘴気を浴びた命あるものは、まず例外なく、闇に侵され命を落とす。魔瘴気を浴びた台地には草木が枯れ死の大地となる。

そしてまた、魔物たちはこの瘴気を浴びることで更なる力を得る。魔王の配下になることで自身の能力の限界を突破させるのだ。

この魔瘴気を止めない限り、人間に未来はない。

数日前から、魔瘴気の発生量が多くなってきたことが、先方の伝令から伝えられた。

が、その後すぐに、伝令からの連絡が途絶えた。

過去に前例のない程の、大量の魔瘴気が発生していたのだ。

瘴気が届かないギリギリで偵察していたものは全員、魔瘴気にあてられ帰らぬ人となった。

そして時を同じくして、魔王城の周りには、魔瘴気を目当てに数多くの魔物や、悪魔、生ける屍たちが集まり始めた。その数は、数えきれないほど。

比喩ではない。上空からの偵察では地面が見えなかった。魔王城を囲うように幾千幾万幾億の魔物が集まったのだ。もしかしたら、北の大地全土から召集されたのではないか……。

そして瞬く間に、魔瘴気の漏れ出しはかつてない量となった。瘴気を浴びた魔物はどんどん活性化していく。この数の魔物すべてが、魔瘴気を吸ったとしたら。もう、人間は太刀打ちなどできないだろう。

文字通りの、足の踏み場もない場所。

紫色に漏れ出る魔瘴気と、怪しく発光する『次元錠』。ここは、魔王城正面。

錠の隙間から漏れ出る魔瘴気が一番濃厚なため、高レベルモンスター……デユラハーンやデスサイズ、ワイトロードといった魔物が多く集まり、魔瘴気を貪っていた。

そんな魔瘴気のおぼれに預かろうと、ゴブリンの群れやレッサーデーモン、悪戯イビルといった雑魚モンスターたちもこぞって集まってきていた。小柄な体格な分、魔物たちの隙間に収まりちやつかりと魔瘴気を浴びていた。

めきめきと、力が湧いてくるのが実感できる。彼らは歓喜した。もう人間など我々の足元に及ばない。これからは暗黒の世界がやってくる、魔王万歳……。

「……………おおおおおおつ りやあああああああ!!!」

空から、雄たけびが聞こえた。人間の声。しかも、女の声だ!

その人間は、聖銀で作られた重厚な鎧を身に着け、自身の背丈並みの大きさの巨大な『オノ』を振りかざしながら落ちてきた。ちょうど、魔王城の正門前だ。

「ぶつとべええええええええええっ!!!」

人間の落ちてくる速度と併せてオノの落下速度も重なった、重い一撃が、正門前にいたティアマツトを叩き潰した。

瞬間、そのオノを中心に巨大な光が爆発した。激しい閃光はまるで光の矢のごとく周囲を貫き、爆風に撒かれたモンスターは瞬時に粉々に粉碎された。先ほどまでいた、魔瘴気を浴びた上級レベルの魔物す

ら、この一撃で一瞬で消滅させた。

地面には大きくなくぼみができた。

いま、魔王城正面には、環状にきれいに空隙ができていた。その場に先ほどまでいたはずの魔物は、すべて跡形もなく消え去った。

「さあこい！ アタイら人間の存続を掛けた勝負事だ！ 手加減なんてできねえぞ!!!」

その女は、軽々と巨大なオノを持ち上げ、肩に担いだ。

この斧の光る刃は、併せて邪を纏う。光と闇が重なり輝く巨大戦斧『ムーンエクリップス』。

扱うは、女神に祝福されし七勇者が一人。

『ゴッドハンド
神手 ネアⅡマイア』

成人男性並みの身長、顔は、何もしていなければ美人。肩まである黒髪を雑に後ろに纏め、『精霊王のリボン』で結っていた。

『フオオオオオオ……』

魔物たちが触発されて、正門に集まってきた。今なら濃い魔瘴気を浴びられる。そう考えていたのだろう。

「うおおおおりやつ!!」

そんな雑魚級の魔物が束になっても、七勇者ネアの敵ではない。

斧の一太刀で100のゴブリンの胴体を分断し、返す刃で30体のゴーレムを破壊した。

そして。

彼女が開けた空間。魔王城正面に向かっているのは、魔物だけではなかった。

ダダダダダダ……

目にもとまらぬ俊足。そしてジャンプ力。

ネアの後方に、青年が着地した。

「ネアー！」

「いけっ！ 道は開けといたぜ!!」

だっ！ 一瞬土埃が立ったかと思ったら、その青年は、既に魔王城の正面……『次元錠』の前に立っていた。

このスピードは、正確には彼の力ではない。

彼の靴は、神速の足を持つ神の名を模した靴、超一級品『韋駄天足』だ。超希少な金属《ヒヒイロカネ》を装飾に使うことで、神の足のごとく素早くなれる。さらに彼は、潜在的に眠る装備の力を意図的に引き出し、神速を超える超足を見せつけたのだ。

彼は、女神に祝福されし七勇者が一人。

ゴッドツール
『神具 アイサツクIIベルキツド』

《深層鑑定》……解明!! 想定通り!)

『次元錠』に向かい、能力《深層鑑定》を実施。開錠方法から、魔障気の止め方の最終確認を、一瞬のうちに終えた。

(開錠:『三鬼神』の武器を《解放》、錠前に突き立てる!)

サンドバック状の麻袋から、3本の刀を取り出した。いずれも魔王の部下『三鬼神』が所有していた刀だ。そのうち1本を手にとった。

「……! アイサツク! すまん、抜けた!!」

ネアの声だ。

アイサツクが『次元錠』の開錠を行う間。敵をひきつけるのが彼女の役目だったが、敵の量が想定をはるかに超えていた。

細身のハイオークが2匹、《潜在解放》を試みているアイサツクに襲いかかる。

「くっ!」

だが、オークたちはアイサツクに近づく前に細切れになった。

「間に合ったようじゃアイサツク殿。わっしの出番残してくれてありがとうニャ」

「まったく、埃っぽくて嫌ね……ここは私たちに任せて、サツクちゃんには『開錠』を!」

残った希少なヒヒイロカネも、すべてこのために、二足の『韋駄天足』に加工をした。

これを装備した、女性が二人が文字通り神速で駆け付けてくれた。

一人は、人間の身長の中程度しかない、猫と人との合いの子の種族である『フェルキツト族』の女性だ。人間に比べて非常に柔軟性に富み、また夜目も効く。

年齢は30を超えており、語尾が少し特徴的ではあるが、戦闘能力

は折り紙付き。

それもそのはず、昔は大盗賊として名をはせ国中を混乱させた人物だ。

そして今は、魔王を討つべく、ここにいる。彼女が握るは、古に魔王と対等の力を持った幻竜の爪を鍛えた二対の短剣『幻竜の小太刀』。

女神に祝福されし七勇者が一人。

『ゴッドスキル
神業 アリンシヨア』

そしてもう一人の女性。

七勇者の中で一番背が高く、清楚な顔立ち。元は某国で国営雑技一座の花形を勤めていた女性だ。

彼女が舞うだけで国が傾くとまで言わしめた魅惑のダンス。そのあまりに過ぎた力を持つてしまったため、国を追放され、紆余曲折あり、いま七勇者として鼓舞している。

両の手に構えるは美しい扇。火山の爆発を一仰ぎで凌いだ伝説を持つ『羅刹芭蕉扇』に、金輪際争いが起きぬ世の中にと多くの人の願いが込められ編まれた光の扇『天下泰平』。

女神に祝福されし七勇者が一人。

『ゴッドダンス
神舞 ユーナリスIIテンオウ』

「……うっ、くそ！ 魔瘴気が……」

アリンシヨアとユーナリスが、アイサックに向かって（正確には、アイサックが開けようとしている『次元錠』近くから漏れ出る、濃厚な魔瘴気目当て）突進してくる魔物を、一瞬のうちに片づけている。

一方、魔瘴気に直にあてられているアイサックは、思い通りに能力が発揮できない。

今回のために、耐魔瘴気用の薬を調合していた。アイサック一同、今回の作戦参加者にはそれらをふるまわれているのだが、魔王城から漏れ出る魔瘴気の濃度が、想定を超えていたのだ。

（薬……もってくれよ）

魔瘴気による息苦しさに耐え、アイサックは一本目の武器を潜在開放した。

「まぎずは、一本！」

それを力強く『次元錠』に突き刺した。すべての破壊攻撃を弾くはずの次元錠に、刃が通った。

「次！ 《潜在開放》 ……！」

「サツクちゃん！ まだ開かないの！」

ユーナリスの焦りの声。アイサツクも驚いた。既に周りには魔物が集まっていたのだ。

「どういうことだ、ネア殿!! いったい何が……！」

「う……うおおおおおおおっ!!!」

あまりに巨大な戦車。チャリオットを駆るデュラハンであるが、大きさが規格外だった。

どうやら、魔瘴気を十分に浴びていた魔族だったようで、力のため込む際に巨大化したらしい。

それをいま、ネアが一人で抑えている。自身の身長の上はあはる巨大な戦車を、アイサツクのところに行かせないだけで、精一杯になっていた。

「ジリ貧だ。」

あまりに多い魔物の数。想定以上に濃い魔障気。魔障気は、耐性薬の上から着実に、みんなの力を奪っていつていた。

「俺も戦う！」

「ダメじゃ！ アイサツク殿は早く解錠を！」

とは言われるものの、魔障気を一番当てられる中で、能力を使うのは限界がある。

(作戦ミスだったか……もう一人、こちらに来てくれていれば！)

その瞬間。少し離れた位置で巨大な爆発が起こった。

ネアの《獣皇無塵断》ほどではないにしろ、魔物が爆発に巻き込まれて消滅していく。

この遠くの爆発が目に入ったアイサツクは、瞬時に、爆発に含まれる《属性》を鑑定し、

《超速調合》、耐性属性レジストフレイム、ライト【炎と光】、そして《アイテム範囲化》!!)

目にも止まらぬ早さで、腰のホルダーから色々な薬草と薬瓶を放り

投げ、空中でそれらを配合、調合を終えた。

炎と光属性ダメージを軽減する薬だ。

それらはアイサックを中心に、アリンシヨアとユーナリスに降りかかった。

つズドオオオ……。

その瞬間、先ほどの爆発が正門を襲った。

力無き魔物は蒸発し、また強靱なものも、全てを焼き消す光の炎により致命傷だ。

「……ぶあつぷ！　ちよつとー！　ヒメコちゃん！　危ないじゃないの！」

ホコリまみれのユーナリスと、同じく砂まみれなアリンシヨアとアイサック。

多少ダメージは負ったが、大したレベルではない。

レジストが十分に仕事をした。

爆発の張本人は、空に居た。

「ごめんなさいっ！　でも『アイサックならやってくれる』って、イザムがっ！」

攻撃魔力を最大限にまで高めた女性専用装備『ハイウィツチロ―ブ』を纏い、先ほどの古代魔法《フレイヤ》を、常人ならざる早さで詠唱、連続発動させた彼女。

降り注ぐ星の欠片を加工した、流星の名前を模した魔杖『ミーティアライト』に跨がり飛ぶ姿は、正に魔女のごとく。

女神に祝福されし七勇者が一人。

『神術 ゴッドスペル ヒメコグラセオール』

最初に放った爆発は、アイサックに属性を鑑定してもらうため。そうすれば二発目は味方巻き込みでも最小限に被害は抑えられる。

勇者リーダー『イザム』の、アイサックを信じきった作戦バックだった。

「……アタイを、忘れてんじやねええええっ！」

同じく爆発に巻き込まれたネア。だが、持ち前の体力と、『聖銀鎧』の【光耐性】によって無事だった。

焼け焦げたチャリオットが、斧で真っ二つになっていた。

「忘れてないわー！ 貴方ほどの脳筋なら耐えると信じてた！」
「ヒメちゃん！ こんなときにまでネアを^{からか}擲揄わない！」

ユーナリスが、ヒメコを叱る。が、

「お、おおう！ こんな屁でもねえぜ！ アタイ最強だからなー！」
擲揄られた自覚の無いネア。

七勇者一の脳筋は伊達ではない。

と、和やかな雰囲気の流れているように見えるが、しかし事態は全く好転していない。

魔障気は全く衰える気配がなかった。

そして、魔物の数もトータルで換算すると、ほとんど減ってない。一部が消滅したまでだ。

すでに地平線は、魔物で黒く染まっていた。

「どうじゃ、アイサツク殿」

「……行けた、2本目!!」

三鬼神の2本目の刀の《潜在解放》を終え錠前に突き刺した。
残りはあと1本。

急いで《潜在解放》に取りかかる、が。

「う……ぐああああ!!」

「ぬおっ！ なんじゃ……がああっ！」

「ひいつ！ お、音波攻撃!?!」

突然、激しすぎる耳鳴りに襲われた。耳の鼓膜を脳みそごと焼けた棒でえぐられるような、形容しがたい痛み。

音波攻撃の耐性薬を作るにも、スタン状態ではなにもできない。

そして、攻撃を発する敵影が見当たらない。どこから攻撃が来ているのか検討がつかなかった。

アイサツクは耳を押さえながら周囲を見渡し、自分の《いつでも鑑定》に引っ掛かることを願った。

……ビンゴ。見つけた。

「地面からだ！ ネアっ！」

「お、おうつ!!」

比較的軽症だったネア（聖銀は音波耐性有）、オノを適当に地面に叩

きつける。

『ウオラフ……』

断末魔と共に、マントラ土竜が一匹消滅した。だが、音波攻撃は止まない。何びきも地面に潜っているのだ。

「これは……マズい……っ！ ヒメコさん！」

アイサツクは空にいたヒメコを見た。が、

「くっ!! ゴメンー！」

ヒメコも、敵に襲われていた。

黒い炎に包まれた不死鳥のような魔物だった。

「こいつ、属性魔法が効かないの！」

決定打を与えられず、空で逃げまわっているヒメコ。

音波攻撃を直撃し、動けなくなった三人。

「このっ！ このっ！」

一人もぐら叩きを始めるも、圧倒的な数に翻弄されるネア（知力25）。

そして全く止まる気配を見せない魔障気。

（早く……早く……っ。急いでくれっ！）

彼ら5人は、残りの2人に賭けていたのだ。

自分たち4人（当初ヒメコは入っていなかった）を『オトリ』にしてまで、勇者イザムに賭けていた。

イザムと、もう一人の七勇者に。

眩い光が一直線に地面を走った。

複雑な模様を描きながら、その光に触れた魔物は瞬時に光に吸い込まれていった。

そしてその光がひとつの紋様……魔方陣を描ききった瞬間。

魔方陣から光の柱が立ち上がった。

その魔方陣はあまりに強大で巨大であった。

魔王城に集まっていた多くの魔物が、その魔方陣の上に乗っていたため、ほとんどが消滅した。

そして、それは魔障気でさえも、浄化し薄めていった。

「間に合った……」

音波攻撃が収まり、また、魔障気も薄くなったため、全員が動けるようになった。

空を舞っていた鳥も消え去り、ヒメコも地面に降りてきた。暖かな光が、彼らを迎え入れた。

大浄化術式《エア||ナテイカ》。

この術式を扱えるのは、女神の祝福を受けた聖職者だけだ。

また、今回に限っては一般的な効果範囲を逸脱してる。ここまで広域な術を敷いた前例などない。

しかし今回は、彼はやってくれた。やってのけた。

これの仕込みに、一週間以上前から準備をし、死に物狂いで完成させた。

女神に祝福されし七勇者が一人。

『ゴッドブレス神福 ボツサ||シークレ』

「ボツサ、間に合ったにやあ」

安堵の表情で地面に経たり座るアリンシヨア。

しかし、まだ終わっていない。

正面の『次元錠』の隙間から、魔障気がまだ止まらない。

そうだ、早く鍵をあけて、中で『女神の涙』を《潜在解放》しなければ、魔障気は止まらない。

アイサツクは、懐に仕舞い込んでいた拳大の大きさの宝石を確認した。

このとき、彼は慌ててしまっていた。

もちろん、この結界も効果時間は有限である。そのため、急ぐ必要があるが、回りが一息ついている中で、先走ってしまった。

3本目の刀を《潜在解放》……！！

そして、次元錠に刺した。

パァン!!

次元錠が、弾けるように開放された。

その場の全員が、そのあとの悲劇の目撃者となった。

門から出てきた魔障気はあまりに濃厚で、それはもう霧ではなかった。

まるで、粘度の高いインクだ。一気にそれが漏れ出し、アイサツクを押し潰した。

ドボン。

霧でさえ吸い込めれば一瞬で昇天する魔障気。その濃密な液に飲み込まれ、溺れた。

すなわち、即死を意味する。

(あ、最後に油断したわ)

死を覚悟したアイサツクだが、意外と物事を冷静に判断できた。

(魔障気を止めるには『女神の涙』の《潜在解放》が必要……。なのに、俺ここで死んじまうとどうなるんだ?)

七勇者の神具ゴッドツールの役目を果たせずじまい。

この世界の命運を握っていたのに……。アイサツクは後悔に苛まれたが、

(でも、さすがにこりやダメだ。ごめんよ皆、あとは、任せた)

薄れいく意識。

(……ああ……)

最後に思うことは、存外、些細なことなのかもしれない。

(……童貞のまま死んじまうのかあ……。悔しいなあ)

いや、それかい。

(なんだよ、男として大切なことだろ)

ま、まあ、そこは否定しないが。

(女神の祝福を受けてからずっと女難が続いてたんだ。祝福の副作用なんだと)

それは大変だったな。

道理で異様に女運が無いわけだ。

(ネア、ヒメコ、ユーナリス。彼女たちとワンチャン、なんて考えたけど)

考えてたんだ。

(まあアリンシヨアは例外な。オバさんだし何より種族が違う)

オバさんというと怒られるよ。

(でも蓋を開けてみたら……まさか、ネアとユーナリスがなあ……百合の間には入れん)

仲睦まじいよね。

見ててこつちも幸せになる。

(ヒメコは、ずっとイザムLOVEだし。イザムは鈍いし……。幼なじみとして、恥ずかしかった)

まあ、ごめんよ。

心配かけたよ、でも大丈夫。

(昨夜、とうとう『致してた』ものな！ 宿の壁薄いから丸聞こえで、こつちもシモがヤバかったぞ)

えっ……聞こえてたの!!

(本気で羨ましかった。あまりに悔しくて。パンツよりむしろ枕を濡らしてたぜ……)

マジかよ……このまま置いていこうかな。

(は? ……そういや、お前誰だよ、なんで走馬灯に受け答えできてんの?)

そりゃ、お前を迎えに来たからだよ。

「よくやってくれた！ アイサクク！」

「……イザ、ム……?」

『福音奏者のマント』。

味方にテレパシー通信が可能になるマントだが、魔力を込めれば空を飛ぶことも可能。

元はボツサが装備していたはずだが、緊急事態だったのでイザムに

貸したのか。

彼は、正に飛んできた。仲間のピンチに駆けつけるのが、真の勇者であるとの思いと共に。

女神に祝福されし七勇者が一人。

ゴットフレイブ
『神 勇 イザムⅡアーシユ』

アイサツクはイザムに抱かれていた。

仰向けのアイサツクの顔の先に、イザムの顔がある。

「……魔障気……は……」

完全に魔障気に飲み込まれたアイサツク。意識混濁し現状を理解できていない。

「……なんとか、してみせるさー!」

イザムは、右手に握った『勇者の剣「ハルペリオ」』にさらに力を込めた。

すると魔障気はみるみる浄化されていく。

魔障気の浄化には『女神の涙』が必要なのだが、この勇者の剣にも、『女神の涙』が使われていた、そのため、浄化が可能となっていた。

しかし、あくまで浄化のみで、根底から魔障気を止めることはできない。

二人に降り注ぐ魔障気をイザムが剣を突き出し浄化し続けていた。しかし、これも時間の問題に思えた。

「……アイサツク。聞こえるか?」

イザムが語りかける。アイサツクは、かすかに残っていた意識を保ち、耳を傾けていた。

「俺たち、訳も分からず女神から神託受けて、こんなところまで来てしまったけどさ」

「……」

「なんというか、あとは『やけくそ』だよな。これほどまで強力な力を授かっちゃったら、たぶん、もう普通の人間としては生活できない。顔も名前も何も知られてるし、もしかしたら、国家間の戦争の道具に、体よく使われちゃうかもな」

何を急に言い出すのか。「世のため人のため」が信条だった、勇者の

リーダーイザムの言葉とはちよつと思えない。

「何が言いたいかつていうと、アイザック。最後の最後だけ、お前の能力を使ってほしい。あとは、全部、勇者イザムに任せてくれ。今だけ、頼む」

イザムは、アイサックに『女神の涙』を手渡した。

既に満身創痍なアイサックには、その石を握ることすら難しかった。

しかし。

これが最後だ。

あとはイザムがどうにかしてくれる。

彼はそういうやつだ。

この次元錠の開錠と、魔障気の完全停止を終えれば。

俺は、この命、失おうとも。

彼は、混濁する意識の中『握った』。

強く、誰よりも強く、確かに『握りしめた』

神具が最終奥義。《潜在解放》。

全力で行う《潜在解放》には、使用後には『破損』が伴う。

『女神の涙』も、粉々に砕け使い物にならなくなるだろう。

しかし、そんなこと知ったことじゃない。

「ぜんぶ……持っていけ……」

「！　　まで、アイサック!!」

アイサックの信条を察してか。

勇者イザムが制した。が、もう、アイサックの信念は止められない。

みせてやる、最後の大花火。

「これが……俺の！　クライマックスだっ!」

「だからっ!　ちよつとまってアイザック!!　ストップ!!」

アイサック全身全霊の《潜在開放》は……女神の石……ではなく。間違つて握られた『勇者の剣』に発動され……。

その後、勇者の剣は粉々に砕け散ることとなった。

自分がヤラカシタ事に、死んでる暇なんて無かった。

第2話【後編】

「……んで、勇者の剣をぶっ壊した責任を取って、俺は追放された……って、おい、すごい顔してるぞ」

新聞屋クリエは、目を大きく見開き、顎か外れそうなくらい口を開けて驚愕していた。……確か、アインツ地方の表現で『エネルギー』とか言うらしい。

「け、けけ、剣を……ぶっ壊したんですか?! あの、魔王に唯一無二に対抗できうる『ハルペリオ』を！」

定食屋を後にして、公園の出店で見つけたアイスキャンディーを買って、同じく公園で見つけたテーブルに着席して。

サツクは、追放の経緯をクリエに話した。

クリエのアイスキャンディーは食べ終わることなく、当の昔に溶け落ちていた。

「ああ。粉々にやっちゃまった」

あわわわわわ。

今度は歯をガタガタ言わせながら顔がどんどん青くなってきた。

「……世界、滅ぶ? 滅んじゃう?」

みたいな言葉をぶつぶつと繰り返してる。

今まで見たクリエの中で一番面白い。

サツクは内心、楽しんでた。

話の内容は全く笑えるものではなかったが。

「んで、これ記事にするの?」

「ととととととととととととんでもない! 出来る訳無いじゃないですか!!」

ごもつとも。

対魔王最強武器、『勇者の剣「ハルペリオ」』が粉々に砕けた。

こんなの記事にしてしまったら、全人類失意のドン底に突き落とされて希望もへったくれも有ったもんじゃなくなる。

「でも追放の理由が知りたかったんだろ?」

「私はてつきり、ネタ記事にできそうな理由だと思ってたんですつ!!」

ん、今ネタ記事ってはつきり言ったな。

「例えば……」

『お前ホント何もできないよな、さっさと田舎帰れよ』

『ねえ、そこ立ってるのも邪魔なんですけど』

『アタイらに比べて戦闘能力低すぎんの、足手まとい』

『アイテムばっか消耗して、この金食い虫が』

『結局、前衛にも後衛にもならない、半端もんニヤ』

『名前も、道具師から道化師に改名したらどうですか』

……なんて他の勇者から暴言吐かれて追放されたのち、その後は能力使って田舎でスローライフとか、元勇者って名前でBクラス冒険者にマウント取って冒険するとか、スキル使ってボツタくり店始めるとか、実は能力隠し持ってて勇者に復讐するとか……そういう展開を期待していたんです!!」

暴言も地味にリアルだし、その後の展開も俺にはプライドってもんじゃないのか。

「こうなるんじゃないかと予測してて、私、既にシナリオを書いていたんですよ！ 書籍発行も！ タイトルも決まってたんです！ どうしてくれんですか私の印税生活！」

どかつ！ とクリエは懐から本を出してきた。

『勇者で道化師、役立たずで大した力もなく追放させられたけど名声だけ利用して田舎で薬屋経営したらBクラスの冒険者にも認められず詐欺がバレて破産しました!』

くく道化師アイサックⅡベルキッド 認定自伝くく

著；クリエⅡアイメシア

「認定するわけないだろ、この捏造新聞記者」

シュボ。

火打石（解放済み）で本を一気に灰にした。

サックはこの世から一つの悪事を消し去った。

「うわああああああ!!! 私のか月の大作がああああああ!!!」

「まったく……色々暴走しすぎだろ」

今しがた、クリエに伝えた『追放』について。

イザムには正面から、

「お前、追放な。田舎に帰ってゆっくりしてろ」

と言われたところまで、常々事実ではあるが。

『真実』は、異なる。

+++++

アイサツクは、あの後3日間、生死の境をさまよった。

僧侶ボツサも賢明な治療を受け続けたが、なかなか意識が戻らなかった。

その後、何とか一命を取り留め、昏睡から目覚めゆっくり歩けるレベルに回復したアイサツク。

彼にかけられた、無慈悲な言葉。

砕け散った『勇者の剣』を目の前にして、アイサツクから『パーティ追放』を宣言された。

「お前、追放な。田舎に帰ってゆっくりしてろ」

だが、アイサツクは、この言葉の『真意』を理解していた。

アイサツクの体内は魔瘴気に深く侵され、全盛期の体力にはほど遠かった。

魔瘴気は肺の奥から血液を介して、アイサツクの心臓や脳にまで達していた。もう、昔の身体には戻れない。

「元医師として正直にお話しします。もって、1年です」

「だろうね……自分自身の身体だ。よくI鑑定《わかつて》いるよ」
七勇者のボツサにも余命宣告を受けた。

そして致命的だったのが、道具師としての《潜在解放》の力だ。

力の解放はアイテムのリミッターを超えると、粉々に砕け散る。本来はぎりぎりで止めるのが正しい運用なのだが、それができなくなったのだ。《潜在解放》すると常にマックス発動。装備は絶対に破壊される。

普段は後衛に回り、他の勇者たちの持つ武器防具に能力付与でサ

ポートを行っていたのだが、それが叶わなくなった。

対魔王用の、残った貴重な装備、壊すわけにいかない。

『真の役立たず』になったのだ。

だから、本当は『引退』と言った方が正確なのだろう。田舎で余生を過ごししてほしい。嘘偽りない、勇者イザムの本音だ。

これがなぜ『追放』として、イザムが公表し伝搬したのか。

一番の理由は、勇者の剣の破損をカモフラージュするため。

勇者追放というインパクトありかつ新聞屋が挙って飛び付きそうなタイトルを提示することで、この大事件を出来るだけ隠し通そうと、考えたのだ。

目論みは成功し、事実、今の今までクリエは本当の事実を知らなかった。

クリエなら、一部の『人気取りのためだけ』に箝口令すら無視して記事を書く記者とは異なり、その辺りは弁えていると思い、サツクは真実の一部を伝えたのだった。

+++++

「さ、ギブアンドテイクだろ？ 俺が欲しい情報を提供して貰うぞ」

灰塵と化した本を目の前に大粒の涙を流すクロエ。

自業自得の因果応報である。

「……ぐずつ、ほじい情報つて……なんですか？」

「女神に会いたい。どこに住んでいる？」

スツ……。クロエの背筋が伸びた。先ほどまで嗚咽を漏らしていた少女（年齢不詳）とは思えない顔立ち。

「女神様のお住まいは我々記者でも存じ上げません。そこに触れること自体、不敬です。七勇者アイサツク様」

ハッキリと否定され、怒られた。クリエ本気記者モードだ。

「不敬を承知で聞いた。だから、それに見合う『大事件』を伝えただ」

サツクは女神の居場所を知りたかった。

いきなり夢枕に立ち、人には過ぎた能力を勝手に付与して、世界の

運命を背負わせ、人生を狂わせた女神を、

一発、ぶん殴りたかった。

ただ、それだけ。

「……はあ、こんな大事件を聞かされて、見返り無しなのは私も申し訳ない……」

クリエは、むむむと考え込んだ後、ひとつの情報を引き出した。

「魔王……。過去の魔王との戦いの際、女神も手を貸したとの伝説があります」

「……なるほどな、そのタイミングか」

「何をされたいのか解りませんが、私が持つ情報は、これで全てです。内容に見合わず申し訳ありません……。でも、『剣』が砕けてたなんて……」

「そこは『大丈夫だ』。イザムならやってくれる」

「そんな根拠も無しに……。まるで道化師《ピエロ》ですね」

根拠は、確かに無かった。けど、

追放宣言の後の彼の言葉。

悔しさと感情が溢れ、涙が止まらなかったアイサックにかけた言葉。

「『大丈夫だ』。後は俺たちに任せろ」

イザムの、いつもの口癖。彼は他の勇者たちを信じている。

そして本人も、ホントに今まで『大丈夫』の一言で、全て乗り越えた。

彼は『真の勇者』なのだ。

+++++

「あ、そうでした、忘れるところでした」
夕刻。

公園に夕陽が差し、そろそろ日の入りだ。

クリエは、背中に光の翼を生やし、サツクの頭より少し高いところを浮いていた。

有翼種。

一番女神に近いとされる種族で、長寿であるが出生率が異常に低い。レア属だ。

そんな有翼種のクリエが、なんで新聞屋をやっているのかが一番の謎なのかもしれないが。

「? 忘れてたって、なに?」

サツクが聞き返した。

「元々お伝えするつもりでしたが、あまりの情報の濃さで忘れてました」

テへ、と舌をだすクリエ。

「サツクさん、《イチホ》という女性、ご存知ですよね?!」

「? 知らん」

ドサーっ。

クリエが落ちてきた。ちょうど芝の上だから、そんな痛くないだろう。

「ちよ! なんで知らないんですか!」

「知らんもんは知らん」

「……あ、こう言えば良かったですね」

芝を叩きながら立ち上がりクリエが伝えたかったこと。

「《イチホ》イーガス》。ミクドラム火災の家主の妻です」

ああ……。サツクの顔が曇る。

「嫌なやつだったよ」

しかしなぜそいつのことをクリエが話すのか、

その疑問は後で。

今は、彼女から語られた事実が問題だった。

「イチホ》イーガスは、生きています。すくなくとも、あの火災で遺体が見つかっていません」

嫌な予感しか、残らなかった。

第2話【エピローグ】

朝起きた時から、嫌な予感はしていた。

雨が宿の窓を強く叩き、強風が建物を揺らすほどだった。だいたい、こういう不安は伝播する。

そして案の定、今日の定期船は欠航となった。

魔王から逃げる人たちは足止めされ、多くの悲観が垣間見られた。

だが、そんな中に明るい話もあった。

朝刊に、国の大本営発表が載っていたのだが、

『次元錠前決戦において、北の大地に住む魔物の実に9割以上が消失か』。

アイサツクたち七勇者と、無数の魔物との戦い。

アイサツクが戦線離脱となった、あの戦いだ。

あそこで大多数の魔物を倒すことができたが、こうやって国が正確に数値を示してくれることで、あの時の戦いの激しさを改めて実感した。

しかし幾分、数字を盛っている可能性もなくはないが。

北の大地の魔物のほとんどは退治されたという事実を、改めて『9割以上』と、具体的に示してきたこの記事は、絶望に飲み込まれそうだった人間たちに希望を与えた。

やるやん新聞屋。

サツクは、昨日の去り際のクリエの言葉を思い出した。

『私たち新聞屋も、イーガス家を危険人物として注視していたんですよ。そしたらまさか、あなたが出しゃばって来るとは想定外でした』
正確には巻き込まれたんだがな……。

——しかし、まさかあの怪我で、生きているとは。

確かに直接命に関わる怪我ではなかったが、痛覚と覚醒のツボを捉えていた。

のたうち回りそのうち絶命するものと思っていた。

「腕が訛ったかな」

などと独白しながら、イチホーイーガスの今の所存が気になる。どうやって脱出したのか。

そして、今どうしているのか。

生きているのか、野垂れ死んでいるのか。

もし、生きているとしたら――

「復讐、か」

十分考えられる、最悪の事柄だ。

「あーダメだダメだ!」

サツクは頭を振った。不安は伝播する。

あまり深く考える事は止めだ。

サツクは頭を切り替え。

新たに決めた目標に向かって前進することした。

女神への復讐だ。

それには、女神の居場所を突き止める必要がある。

「――ビルガド、行くか」

元首都ビルガド。

魔王復活から進軍の影響を受ける可能性があるとして、首都機能を別の場所に移管された大都市。

首都ではなくなったが、未だに多くの人々が住まい集まる場所だ。

もちろん、それに乗じた、数々の情報も集まる。

希望は薄いだが、女神の情報も、何かしらあるかもしれない。

それに……。

サツクは、ビルガドの街の中央街にある、とある場所を思い描いていた。

余命1年を宣告されている中、一つの心残りが、この街にあった。

「ビルガドは、確か、魔王討伐軍の募集していたもんな」

さすがに討伐軍には立候補しないが、ビルガドへ直行する荷馬車が多く出ていることになる。それに便乗して乗せてもらおう算段だ。

持ち合わせは少し心もとない(定期船のチケットは払い戻しされな

かった)が、ビルガドに着いてしまえば、そこで『鑑定師』として少し稼がせてもらおう。

サツクは、雨の降りしきる中。馬車の集まるセンター街に向かった。

+++++

一人の男が、雨に打たれて泣いていた。

何度も泣いたが、まだ涙が枯れることは無い。

これだけの力を持ちながら。

最愛の人を救えなかった。

だから彼は。

誰彼構わず、治療をしまくった。

それは、死を望んでいたものも、

死ななければいけないかったものも。

全員例外なく。

ありがとう神父様。

私はまだ生きている。

これで私は奴に、復讐できる。

能力使ってひと稼ぎしてたら、そのぶん厄介事に巻き込まれました

第3話【前編】

せどり。

転売の意味で使われる言葉でもあるが、本来は漢字で『背取り』と書く。

元々は、主に古本屋を巡り、価値のある本を、背表紙だけ見て取り上げることから呼ばれた名前だ。

「安く買い、高く売る」

の根本的概念は転売のそれと同じだが、本当の背取りは、適正価格の表紙がない本の山から、的確に価値のあるものを発掘する作業を伴うものであり、また、廃棄寸前の本を、本当に欲している人に届ける効果もある。

鑑定士曰く、『転売とは一線を描す。一緒にして欲しくない』とのこと。

アイサックIIベルキッドも同じ思いである。

そして彼は、古本屋の奥に押し込まれていた本を目の前にして固まっていた。

真正正銘『掘り出し物』を見つけたのだ。

(早く手に取らないと、誰かに買われてしまう……!!) し、しかしっ!!)

彼の手は動かなかった。

いや、動かすことが出来なかった。

このタイミングで『買って』しまうと、心に大きな傷——トラウマが植え付けられる。それは必然だった。

ちらっ……。

サツクは本を少し引き出し、表紙を確認した。

確定だ、こいつは『禁断の本』。

だが。

ちらっ……。

販売レジに眼を向けると、そこには若い女性。

この本屋のアルバイトだろう。学生だろうか。少し陽気な雰囲気
を醸していた。

あの女性バイトでさえなければ。

焦りは禁物。必ずチャンスはある。

その時。女性バイトがカウンターの奥に移動した。

代わりに、店長と思われる初老の男性がレジに立った。

……いまだっ！

サツクは本を手を取った。

その際、合わせて、並んでいた適当な小説も重ねて持っていく。

表紙が周囲に見られないようにする、カモフラージュだ。

(移動スキル 《絶歩》！)

足音を立てず素早く進む能力。

彼は愛用の靴から、暗殺向けの移動スキルを発動させ、レジに向
かった。

誰にも見られることなく。

それはまるで風の如く。

「……親父、この本を会計を……」

「あ、店長レジ変わります」

終わった。

「いらっしやいませ〜」

舌足らずな声。

やる気があるのかないのかわからない女性バイトが、サツクが差し
出した本を手を会計を始めた。

終わった。

「小説が一点とお、あと……うっわ……」

明らかにバイトが身を引いた。
当たり前だ。

小説を退けたら、下から出てきた本の表紙は
『裸の男女がイチャコラヤツちやつてる本』

(しかも発禁されてる無○正モノ)

「えっ……うわっ」

改めて、本とサックを交互に見る女性。

うん、その、なんだ。

殺してくれ。

サックは羞恥と悲しみに襲われ。

そしてしんだ。

+++++

「厄日だ」

宿に戻ったサックは枕を濡らした。

夜もすっかり更け、町は静かに眠りにつこうとしていた。

ここは、旧首都ビルガド。

その中でも旧市街に近い、閑散とした場所に宿を見つけたサック。
古物商や古本屋、骨董市を回り、お得意の『いつでも鑑定』を使っ
て掘り出し物の転売をしながら路銀を稼いでいた。

その折、見つけた古本屋にて、先ほどの顛末となる。

本国では一般販売は禁止された、曰く付きの禁書(無○正エ○本)。
掘り出し物(意味深)を見つけ高揚した気持ちは一気に萎えてしまっ
た(彼女無し歴Ⅱ年齢の童貞勇者)。もちろん、下半身も一緒に萎え
た。

「くうううう。これもすべて女神の所為だ！」

女神から勇者の神託を授かったメンバーは、一様に、なにかしらの
『デメリット』能力を付与されていた。

例えば、『監獄の魔女』の異名を持つ、亡国のお姫様『ヒメコIIグラセオール』は、勇者に選ばれた際に味覚がぶつ飛んでしまい、まともな料理が作れなかったりしている。

そのデメリットにおいて、サツクは『女難の相』を付与された。元々、そこまでモテる人柄でなく、彼女ができたこともなかったが、それに上乗せされ、女性運がことごとく悪くなった。

「やっぱり復讐すんべ」

さらに女神への復讐心が募ることになった。

「……」

そして、いま、サツクの手元には。

その禁書がある。

この男、なんだかんだで、ちゃっかり購入していた。

「この筋のマニアなら言い値で買うはずだ……そう、俺は価値ある本を収集したまでだ。本当に必要な人に行き渡るよう」

うんうん。と、謎の納得をするサツク。

だが、表紙の段階で既にいろいろ『ヤバイ』モノが写ってるエロ本。チエリーボーイには些か刺激が強すぎた。

一旦は萎えたサツクの御子息（隠語）であったが、改めてその本の魔力によって元気を取り戻し始めていた。

(……ぐくり)

生唾を飲み込む音と共に、サツクは禁書のページを、パラパラと開いた。

(おお……、おおお……!!)

想定以上の良モノだ。

表紙の男女の絡み（意味深）だけではなく、他にも数組の取っ組み合い（意味深）も載り、

幅広いニーズ（意味深）に対応していた。

(——ふむ、ふむ。これは、あれだな、うん。売り飛ばす前に……)

サツクは、ベッドに座り直し、ズボンのベルトを外した。

(ちゃんと使えるか確認しておかないとな！ うん！)

鼻息が荒くなる。

心臓の鼓動はハードビート（同じ意味）。

御子息（隠語）は当の昔に準備万端。

（ここまで添えられ、男として、抜かぬは無作法というもの（言い訳）。
（では僭越ながら……これは、この本の内容確認だよ？）

ぺら……ページをめくり、サツクはズボンを下げ。

ドンドンドンドン!!!

『ビルガド憲兵隊だ！ このドアをあけろ!!』

激しくノックされるサツクの部屋のドア。

そして、何故か『女性の』声の憲兵。

「……まずいっ！ やばいっ！」

サツクは声を上げてしまった。

ズボンもパンツも下がっており、御子息丸出しなこの姿。

そして肝心なところで大ミス。

宿の部屋のドアに、鍵をかけた忘れていたことに、今気が付いた。

『！ 何がまずいのか！ 貴様、何を隠している！』

サツクの咄嗟に出してしまった言葉を少し勘違いした女性の憲兵。

隠すって……そりやあ大事な所ですよ。

そして彼女は、そのまま勢いで扉を開けてしまいました。

「あふん……」

「……き……ききき貴様っ！ なんたる格好！ 不潔っ！」

なんとかぎりぎり。

パンツ一丁までにリカバー成功。御子息も抑え込んだ。

サツクは自分自身を褒めたいと思う反面、目の前に現れたブロンド
髪をポニーテールにした憲兵は、パンツ姿のサツクを見るや否や、顔
を真っ赤にしながら、怒りの表情に移行していった。

「た、逮捕だ！ 逮捕！」

廊下には他の男性憲兵も2名ほどいた。

彼らもサツクの安宿の部屋に突入し、

「ちよちゆおちよちよ!!!」

サツクの言い分など聞く耳持たず。

手枷を付けられ、捕らえられてしまった。

『元勇者アイサツク、わいせつ物所持で逮捕』

第3話【すれ違い編】

「サック＝リンガダルト。職業は鑑定師、21歳。一人旅、行商目的……」

冒険者ギルドから発行される身分証を見ながら、調書にペンを走らせる女性。

長いブロンドを適宜掻き上げながら、ちらちらと見え隠れする整った顔立ち。

青い瞳とぷつくらとした唇。いふなれば『愛らしい』。ただ、憲兵という仕事柄か、顔や腕には汚れや生傷、また、夜勤などで寝不足による肌荒れも目立つ。ただ、頬のそばかすも愛らしい顔にはチャームポイントになっっている。

「……何をじろじろ見ている」

「あ、すみません」

手枷を付けられたまま、サックは憲兵に詰所まで連行された。

この詰所はそこそこ大き目で、3階建ての立派な建屋だった。また地下には一時的に容疑者を収監する、牢屋まで完備しており、公共機関へ税の羽振りの良さがうかがえる。

こういうところにお金を掛けられる地域は、財政が潤っていると推察される。

「さて、サック。いまから調書を取るので質問をさせていただく」

ポイ、と、ギルド身分証を雑に投げ返された。

サックは一応冒険者として旅をしているので、ギルドの身分証を所持していた。が、これはもちろん偽造である。

身分証の偽造は固く禁じられていて、取り締まりも厳しい。また偽造自体も難しいよう、幾重にもプロテクトが付けられる。

が、曲がりなりにも、ここにいるのは腐っても七勇者が一人の道具使い。アイテムのコピーや、偽造などはお手の物。

「私の名前は『ナツカ＝ノワール』、憲兵だ」

ナツカは、自分が憲兵である証拠の身分証を提示した。本人の名前、自筆サイン、そして顔写真まで載っている結構ちゃんとしたもの。

「ん？ ノワールって、付加術師エンチャンターの？」

サツクは、彼女の名前に覚えがあった。

実は以前、七勇者としてこの街に来たことがあるのだ。そのときに、武器や防具にスキルなどを付加する、腕のいい付加術師を尋ねたことがあった。

その時の男の名前が、たしか、『ノワール』だったような……。

「——父の話はどうでもいい。尋問を始めるぞ」

強い眼差し。ナツカはサツクをにらみつけた。

どうやら、彼女の前で父親のお話は御法度らしい。触らぬ神に祟りなし。

「さて、早速だが本題に入ろう」

ナツカがテーブルをはさんで、サツクと対峙した。

自分の両の手を絡め、面と向き合い、ナツカは尋問を開始した。

「単刀直入に問う。私たちが探しているのは、本だ」

「本」

ドキリ、とサツクは動揺してしまった。

こんなかわいい子に、いきなり『あの本』のことについて聞かれるとは……。

その表情の揺れを、ナツカは逃さなかった。

ナツカノワールは、その筋の情報から、サツクが『あの本』を持っていることを確信していた。本来なら表舞台にすら出ることなどないはずの、門外不出の本。

ナツカの父は、その本——上級貴族や政治家が受領していたワイロの流れと、そのメンバーが記載されたリスト——を入手し、殺されたのだ。

その間際に、ナツカの父は、リストをどこかに隠した。

「私が死んだ場合、しばらくしたら発見されるよう細工した」

との遺言を残して……。

彼女は父の死の真相を探るべく、また、街の治安を守るため、リストを血眼になって探していた。

もし、憲兵や上司の軍人たちが、そのリストに、ワイロメンバーと

して記載されていたら。街の治安は大きく傾く。その恐れもあったが、彼女の持ち前の正義感が先行し、そしてとうとう今夜、ついにそのリストを入手したという冒険者の手がかりを入手したのだ。

尋問にも力が入る。

「その『本（リスト）』は、市場に流れるはず無いものなの」

（極秘文章だ、発見されると街の情勢が大混乱する）

「そりやそうだ。だから、買ったんだ」

（発禁モノだぞ、希少価値は高い）

「買った？ 意図して『本』を見つけたというのか」

（こいつ、リストのメンバーと関係があるのか!?)

「まあ……そういうものを意識して探してましたし。あ、今回のジャンルは偶然ですよ」

（価値の鑑定してたら、エロジャンルでレアものが見つかったわけで）
「ジャンル！ いくつもあるのか!？」

（ワイロの流れ以外に、何かの告発なども記載されているのか?）

「そりや……人によって『好み』があるでしょ!」

（俺は、胸が大きいのが好みだ）

「好みなどで問題でない！ 私たち憲兵の勢力に関わるのだ!」

（リストメンバーによつては、我々憲兵の信頼に関わる!）

「性力！ だいぶお盛んだなオイ!」

「何を言っているんだ?」

ふう、と、ナツカが一息。

「あれは素人が見てはいけない、こちらに戻つてこれなくなる」

（犯罪に巻き込まれ、普通の生活など送れなくなるぞ!）

「あ、確かに刺激強すぎた」

「な……見たのか！ 中身を！ 何が書かれていた」

「えええ、しゃべっていいの？ ええ……」

ナツカの剣幕に、押され気味のサツク。

「中身の説明をしてみる、構わん。これも仕事だ」

「で、では……」

サツクは、「ああ、こういう性癖の人もいるもんな」などと思いが

ら、『本』の中身を説明し始めた。

「まず、載っていた人達は、素人なのかフェイク（演技）なのかかわからない」

「そうか、偽名を使っている可能性もあるな」

「表紙の段階で、いきなり（服脱いで裸を）さらけ出して、その……黒塗りとかも無く」

「表紙から既に！ しかも（名前に）黒塗りされてないのか！」

サツクは思った。

これは想定以上に恥ずかしい。

「あと、本には何人も出ていて……」

「具体的な人数は？ 男女の割合とか」

「男女比は1：1だ。合計で6人かな」

「6人か……思ったより少ないな」

「もっと多人数をご希望とな!?!」

「あと男女比が1:iというのも不自然だ。もっとう、男性が多いもの思っていた」

「それ方面の趣味の方でしたか」

「そうなる、それが本物かどうか、少し怪しくなるな」

「このニセモノって逆にどういことつすか」

ふうと、再度ナツカが息をつき、声のトーンを落としてサツクに説明した。

「もし本物なら……おそらく、それは私の父が遺した物だ」

「お父様のっ!!」

「何故 様付け!?!」

「い、いや、あまりに素晴らしいご趣味なもので」

趣味……? この男何を言っているんだ。みたいな顔でナツカがサツクを睨んだ。

しかし、このリスト。思っていたより闇が深いかもしれない。

ニセモノの可能性も捨てきれないが、やはり早々に現物を見て判断すべきだ。

「サツク、本の現物を見せろ」

「え……さすがに女性に見せるのは、恥ずかしいんですけど」
が、ナツカは、サツクの懐を指さした。

「そこに隠しているのだから？ サツク、あなたは今容疑者として逮捕されている。この意味は判るか？」

はあ……。

サツクは頭を抱えた。

こんな容疑が大っぴらになってしまったら。

『勇者の道化師、変態の所存！』

『ベルキッド、外道の道をひた走る！』

みたいな見出しで、新聞屋クッエに面白おかしく書かれるのが目に見える。
いる。

何とか、サツクの偽名で通すしかない。

「わ、判ったよ！」

サツクは懐から、布に包まれた本を取り出し、そしてテーブルの上に乗せた。

「こ、これが……リストか」

食い入るように、ナツカが本に顔を近づけた。そして、布を解き、本の表紙があらわになる。

「……」

「……」

ナツカは、すごく真面目な女性だった。今回、それが災いした。

本の表紙を見続けたナツカ。

思考が停止したように固まっていたが、

しばらくすると、

表情をそのままに、首の下からどんどんと赤くなっていった。

赤みが頭に到達すると、汗が蒸発する湯気が立ち、しばらくはまだ硬直したまま。

「ナツカさん、これが、俺が見つけた本です。ご指摘の通り、発禁本です。売買は違法になりま……」

ここで、サツクの意識は途切れている。

以下、当時同じフロアにいた憲兵の証言である。

「急に、ナツカ憲兵の悲鳴が上がったと思ったら、ドゴオオオツ！ つて音が、詰所中に響いて建屋が震えたんです、どうやら渾身のフルスイングで、容疑者の右頬をメイスでぶん殴ったようでした……。ええ、そうです、その後容疑者は、牢屋に放り込まれました。適当に薬草を口に突っ込まれて」

第3話【投獄編】

詰所の地下に設置されている牢屋。

「厄日だ」

手枷を付けられ、右頬は真っ赤に腫れ。口にはいつぱいの薬草を詰められ。

サツクは牢屋の中で横になっていた。

「この男、リストは持っていませんね」

「そんな馬鹿な、あの情報はウソだったのか?」

そんなやり取りが、牢屋の外から聞こえてきた。

気が付いた時にはすでに、サツクはマントを引っぺがされ、腰につけている薬品のホルダーも、懐に入れていた本も、何もかもすべて取り上げられていた。

すると一人の憲兵が、サツクの持つものに違和感を覚えたようだった。

その件について、ナツカに説明がなされた。

「ナツカさん、この男、大量の薬物を所持しております」

「なんと、こいつ薬の売人か?」

「判りません、見たことない薬品や、知らない調合品ばかりで」

「なら、とにかく調査と報告だ。今夜中に確認できるか?」

「ええ、わかりました」

一体、何を入れていたのか、サツクすら忘れていた薬品だ。

あの『魔王城 次元錠前決戦』で使った薬品を残していたような……。

カツ、カツ、と、暗い牢屋に足音が響く。

半地下になっていているため、上部から月の光が差し込み、薄暗くはあるがほんのり明かりがある。

「ここなら、十分に頭を冷やせるな!」

ナツカが怒っていた。

頬を冷やして欲しいんですけど、とは、サツクの思い。悪態の一つくらい言いたくもなる。

そして、毛布一枚。牢屋の隙間からぶち込まれた。サツクはそれを手に取り、まじまじと眺めた。

だいたい年季が入っているが、そこそこに丈夫な布で編んである。

ある意味骨とう品レベルのボロさ。まだ辛うじて、毛布としての役割は果たせそうだ。

「てーか、ナツカさん。俺リストだなんて一言も言っていないし」

「ええい!! もうお前はリスト関係なく『発禁図書所持および準販売ほう助罪』!! 私に恥をかかせおって!!!」

ちゃんと内容を話さないから……なんという言い訳は、今は無理か。

カツ、カツ。

ナツカは牢部屋を出て行った。

詰所の地下の牢屋。見張りはいないようだが、すぐ真上には多くの憲兵が24時間体制であくせく働いている。

すんなり脱走などはできない構成だ。

さてと。

サツクは、口の中に詰め込まれた薬草を使って、ヒビの入ったアゴ骨と腫れた頬を治療した。

薬草3個程度では普通は回復しない大怪我であるが、サツクのもつ、薬師のスキル『アイテム効果倍増』によって、何倍もの効果が上乘せされ、薬草2個でほぼ完治した。

つぎは。

手枷は、ほいと、手首を返すと、簡単に鍵が外れた。

これもサツクのスキル。暗器使いスキル『構造解析』。あらゆるモノを暗殺の武器に変換する暗器使いが、武器に使う前に構造を理解するために習得するもの。

よし、手が軽くなった。

そしてサツクは、牢屋の鍵を『鑑定』した。

かなり頑丈に作ってはあるが、鍵の構造は至極簡単で、これなら針金一本で簡単に開けられそうである。

が。

『脱獄』行為自体もれっきとした犯罪。

さらに罪を重ね逃げるか、ここにとどまり反省するか。
悩む。

「おい、兄ちゃん」

サツクが悩んでいると、向かいの牢屋から男の声がした。
どうやら男性が一人、牢屋に監禁されていたらしい。

「こんなところに突っ込まれて。何悪いことしたんだ、へへへ」

下品な笑い声だ。服はボロボロで、髭や髪はボサボサ。この距離からでも、歯は何本も欠け抜けているのが判る。

「……ナツカという憲兵を怒らせた。そういうあんたは？」

サツクはしかし、既に『鑑定』で、その男の正体を暴いていた。

「おう、俺は新聞屋だ！　ちと強引に取材しすぎた」

ガツハツハ！　と大笑いする新聞屋。

ふと、気になってサツクは新聞屋に訪ねてみた。

「取材って、『リスト』関係か？」

「お？　新聞屋に情報を貰うには、タダとはいかねえぞ？」

ちつ。サツクは見えないように舌打ちした。

新聞屋の原理原則はよく解っている。

「だが、『面白いもの』を見せて貰ったからな、その分は答えてやるぞ」

面白いもの？

サツクに身に覚えは無かったが、

「その手錠の外しと、手品みたいな薬草の回復力だよ。……後で取材させてくれよ」

うっかりしていた。対面の牢屋に人が居ることを確認し忘れていた。

しかしこちらも今は情報が欲しい。

仕方なく、新聞屋の提案に乗ったとたん。

彼はべらべらと情報を喋りだした。

「あの女。ナツカ^{エンチャンダー}ノワールの親父さん、有名な付与術師だったんだがな、どういう経緯か、役人のワイロの流れが記されたリストを入手し、それで命を狙われたって話だ」

「なるほどな」

「んで、嬢ちゃんは血眼になってリストを探している。自分の父親がなぜ命を懸けてまで、ワイロのメンバーリストを守り抜いたのか。真相を知りたいのだそうだ」

「まだリストは見つかってないのだから？」

「そうなんだよ。それが不思議でな。俺たち新聞屋も探してみたんだが、どうも見つかからない」

新聞屋が本気を出して見つけられない。

そして、隠したのは優秀な『付与術師』。

自ずと、サックは答えが見えてきたように思えた。

新聞屋は話を続けた。

「でもな、ノワールさん、遺言で『私が死んだ場合、暫くしてからリストは公開される』って記していたんだと」

確定だ。

ノワール氏は、何か、時限式に公開される術式を使ったのだ。

付与術ならそういうことも可能だろう。いくつかの術式に、サックは心当たりがあった。

「お、兄ちゃん。なにか心当たりでもあるのかい？」

（時限式……もしかして、あのときの違和感——）

「……いや、全くわからん」

サックはシラを切った。

「そりやそうか！ ワツハツハー！」

あまり上品でない笑い声が牢屋に響いた。

その時だった。

地下室の唯一の出入口付近に、人影だ。

あまり騒がしかったから、見回りが来たのだろうか。

（おっと、誰かが降りてきて……違うー！）

ごろん、ごろん。

出入口から、何かが転がってきた。
樽だ。

中に液体が入っているようだが。

「なんじやい？ ……液体が溢れとるぞ」

（——！！ 油とアルコール！）

サツクはその液体を瞬時に鑑定し終えた。

そして、叫んだ。

「伏せろ！」

刹那、炎が走った。

樽から発生した爆発性の蒸気が空気と程よく混ざり、派手に爆発音を立て爆発した。

そして、半地下という立地の関係で、炎は下方から十分な酸素供給が成される格好となり。

詰め所全体は瞬く間に炎に包まれた。

+++++

「なんて……ことだ……」

燃える詰め所。炎は瞬時に建屋を回ってしまった。

ナツカは交替勤務を終え、ちょうど自宅に戻っていた。そのためこの惨事から逃れることができた。

彼女は帰宅するや否や、詰め所から発生した爆発音に驚き、大急ぎで詰め所にUターンした。

詰め所では24時間勤務体制を敷いているため、夜中でも多くの憲兵が働いていた。何人もの人間が炎の中から救出されていたが、大やけどを負った者も多く、現場は阿鼻叫喚としていた。

——そして、まだ、逃げ遅れがいる。地下の収容者が2人。

「炎はどうやら、地下の収容所からだそうです」

無事だった憲兵たちの証言から判った事実。

「なんてことだ。誰かが火を放ったのか!？」

「まだ不明ですが、地下は危険物持ち込み制限してましたから……」
ナツカは、はっ、と、サツクの持ち物検査をしていた時を思い出した。

「あの男、謎の薬を持ち歩いていた！ 爆薬を調査した可能性もある」
ナツカは後悔した。この大惨事は、あの変態男が引き金なのか。
こんなことになるのだったら、温情掛けずにさっさと腕の1本や2本を切り落としておくべきだった。

——が。

「あっちいいいっ！」

突然の大声とともに、人が出てきた。地下からだ。

誰もが、地下の人間は絶望的と思っていた分かなり驚いた。

「み、水を掛けてやって!!」

ナツカは咄嗟に命令した。

炎に巻かれた大人二人に対して、多量の水がかけられた。

「……ふいー、助かった！ さっすがにアイテムゼロだったから終わったと思った」

サツクは、炎に巻かれた割には、あまり火傷らしい火傷を負ってなかった。一緒に救出された新聞屋も、髪や髭はチリチリになっていたが、比較的無事なようだ。

が、ナツカはそんなことお構いなしに、サツクに詰め寄った。

「サツク、貴様が爆発の首謀者か！ 薬師のスキルで爆薬を作ったのか!!」

命からがら、燃え盛る建物から脱出し、しかも一人救出させました人間に対してのまさかの嫌疑疑惑。

さすがのサツクもプツン来た。

「——ふざけんっ！ こっちも被害者だ！ 貴重な薬はホルダーごと全部衛兵に取られているよ！」

牢屋にぶち込まれた際に全て没収されている。どこかに隠し持っていた訳でもない。

「じゃあ地下で何があった!」

燃え盛る詰め所。何人もの人間が運び出され、また懸命の処置を受けている。

——それを横目で見ていた、サツク。

「——なあ、ナツカさん、ケンカは後だ。俺も治療を手伝うよ」

「き、貴様! 容疑者に手を借りるほど我々は落ちぶれてない!」

ヒートアップしてしまったナツカ。彼女はどうかやら、熱くなると引くに引けなくなるタイプのようだ。が、

パンツ!

サツクは、ナツカの頬を叩いた。

「プライドで人命救えるなら結構。けどよお嬢さん。この現実見て、まだ戯言吐けるかい」

急に頬を叩かれ、目を見開き呆気にとられたナツカ。思考がフリーズしてしまった。

サツクは、そんなナツカを尻目に、怪我人が集められている場所に向かった。

「何でもいい! 薬をありったけ持ってきてくれ! あとは……『何とかする!』」

そのあとのサツクの行動は早かった。

薬師の上位スキル『アイテム効果倍増』で、何段階にも回復量を増した薬草を使い、また、限りある薬から最適な『調合』で、火傷の薬を量産し、道具師スキル『アイテム範囲化』で、広範囲に薬剤を撒くなどし、瞬く間に人々を回復させていった。

(な、なんだあの男……?)

炎の明かりに照らされ、大混乱の現場ではある。だが彼は場馴れしているのか、淡々と作業をこなしていた。

はっ、と、我に返ったナツカ。

私は馬鹿だ。

叩かれた頬より、心が唯々痛かった

「ひ、人払いと、周辺の整備、安否確認！」

自分に今、何ができる？

そんなことは限られてる。

なら、それを行うのみ。

いち憲兵として、自然と体が動いた。

その時、ナツカは気が付かなかった。

彼の顔。

わずかに射す月の光によって、チラチラと痣が見え隠れしていたことに。

第3話【後編】

詰め所は全焼。サツクの荷物も一緒に燃えてしまいましたとき。
くおしまい」

「厄日だ」

そしてサツクは、火災現場での功績を認められて、晴れて無罪放免——とは問屋が卸さない。翌日も、場所を変えて事情聴取となった。

「厄日だ」

テーブルに突っ伏しながら、サツクは何度も唸っていた。

女神から貰った女難の相。女運の無さを、これ程恨んだことがあっただろうか。

「サツク、渡したいものがある」

ここは、火災のあった詰め所から程近い、安宿の一角。サツクはここで一晚をすごし、今からこの場を借りて、改めて事情聴取を受けることになった。

「厄日だ……ん？ あれ？」

ナツカがテーブルに置いた、サツクに渡したいもの。それは、サツク愛用の革のホルダーと、問題の本だった。あの火災に見舞われながらも、ホルダーも本もほぼ無傷であった。

「——あ」

サツクは思い出した。このホルダーには、『次元錠前決戦』でヒメコの古代魔法^{フレイヤ}を防いだ『レジストフレイム』の残りを入れておいたのだった。

「その薬を調査中だった鑑識は、無傷で済んだ。とても驚いていたよ、全く炎を寄せ付けなかったらしい」

「……それはよかった」

勇者で神具道具師の謹製だもの。古代魔法の炎すら退ける特製品。この程度の火事を防ぐことなど造作もない。

サツクはホルダーを受け取り腰に付けた。

「結局、いくら探してもリストは見つからなかった。これ以上、君も事情は知らないだろうな」

本は、丁寧に布で包まれていた。表紙を見せないよう重ねて買った小説も併せて一緒に。

「あの……そちらの本は、返却——」

「没収」

「あと——マントは——」

「……それは、すまない」

「ですよー」。

希少な『擬態獣のマント』。偏光させ周囲の景色に溶け込めるレアアイテムだったのだが……。

ガツクシ。またサツクは項垂れた。

「……火災の原因を聞きたい。あと、君がほぼ無傷だった理由も」

本に手を重ね押さえながら、ナツカはサツクに尋ねた。

なるほど、今日も事情聴取で拘束されているのは、リストではなくそっち火事が理由か。

気を取り直して、まずサツクは、昨晚の火災の原因を話した。突然転がってきた爆発物。樽の自身その他もろもろ。

「入り口から？ 馬鹿な……外部から持ち込むなど不可能だ」

「じゃあ内部の犯行じゃないか？」

外でなければ、中。短絡的に繋がるロジック。だが、ナツカは煮え切らない顔だ。

「……まあ、一つの可能性として受け取っておこう。次は、君が無事だった理由を教えてくださいないか」

「それは……その、秘密ってことで」

炎を防げるものなど、あの時は無かった。唯一身を守れそうなものとして、手渡された年季の入った毛布。

実はこの毛布。多くの人が使っていくうちに、年代物、骨とう品レベルにまで仕上がっていた。サツクはそれを『潜在解放』して、【炎耐性】を解放させた。そのため何とか脱出に至ったのだ。完璧に炎ガードはできなかったが、焼ける家から出るには間に合った。

「それよりもさ、ナツカ」

「軽々しく名前を呼ぶな」

ギロリとサツクは睨まれた。が、それに退くこと無く、サツクは尋ねた。

「——リストを見つけて何をしたいんだ？」

「……父の無念を晴らしたいだけだ」

ふうん。サツクは一応納得の表情を示したが、

「なぜお父さんが持っていたのか、理由を考えたことは無いのか？」

この一連の事件の真相に近づく質問を、投げつけた。

ばん！

ナツカは机を平手打ちし、

「リストは無いのだから！」

あからさまな怒りを表した。

するとサツクは腕を組み、

「うーん……」

と、悩み、そして、

「はあ~~~~」

と深いため息をつき、

「覚悟はあるな」

急に真面目な顔つきでナツカの顔色を正面から伺った。

「な、なんだ急に」

ナツカはサツクの挙動を理解できなかった。

するとサツクは、ナツカが押さえていた『本』の包みを、半ば強引に取り返した。

「あ、ちよつ……」

「未だ使っていないし、高値で売りさばきたかったんだがなあ」

包みを剥き、サツクは、あの問題の発禁本を机に置きペラっとペー
ジを捲った。

「これが、君の探してたりリスト……ぶべらっつ!!!」

「このこのこの破廉恥ヤロウ！ また牢屋にブチ込まれたいかつ！」

ナツカの容赦ない顔面ストレートが、サツクの顔にクリーンヒット。
ト。

まあ、そりゃ確かに。

うぶな女の前に、裸の女たちが男数人に囲まれちゃっててヤラかし
ちやつてる危険な絵面なページを、あの会話の流れで突然目の前に差
し出されたのだ。

これはサックに非がある。

「……………ちやう！　いいからー！」

サックは鼻を抑えながら弁明し、そして、静かに本に手をかざした。

『デイスエンチャント
解　呪』』

アイテムその他に付加されている呪いを解く術だ。基礎的な術で
はあるが、例えばアイテムの呪いを解く場合、下手な術者が行くとア
イテム自体を破損してしまうこともある。使いこなすには熟練が必
要だ。

もちろん、アイテムマスターにとっては、物を壊すこと無く呪いを
解くのは朝飯前。

すると、エロ本の表層がペリペリと剥がれ始めた。

「なっ!!」

驚いているナツカに、サックが説明を始めた。

「上つ面だけ、別の本のコピーが張られていた。カモフラージュだよ。

……………このエロ本が、君の欲した『リスト』だ」

ぴびぴびぴび……。薄いシート状にエロっちい部分が剥離してい
き、粉々になっていく。

その下からは、人物名と数字、その他の情報が列挙されているもの
が現れた。

（ああ、もったいない！）

などと残念がるサック。しかしナツカはすでに表面の女の裸など
眼中になく、後ろから剥がれ見えてくる人物のリストに釘付けだっ
た。

「……………かなり硬質なプロテクトがかけてあった。俺も使う前に、やつ
と違和感に気づけたレベルさ。さすが、付与術師として名を馳せてい
ただけある」

「……………使うとは?」

「言わせんな恥ずかしい」

そして、全てのページの表層が完全に剥がれ、リストが鮮明に現れた。

すると、突然、ナツカが崩れ落ち、床に膝をついた。大きく気落ちしているようだ。

「……」

(やはりな)

サツクはこの悲劇を十分予見できていた。ナツカも、信じてはいたが、心の奥では最悪の想定をしていたつもりだった。

ナツカの父親であろう『ウインブルノワール』という名前が、リストに記載されていた。彼もワイロのやり取りに関与していたのだ。しかしながら、だからこそ、メンバーのリストを入手できたのだ。

唇を噛むナツカ。なんとか平静を取り戻そうとしている。

「……あまり噛みすぎると血が出るよ」

この場でこの台詞が最適かどうかは解らない。けどなにか声をかけざるを得なかった。

しばしの沈黙のあと。

「なあ」

サツクはナツカに聞いた。今の今までで一番疑問に思っていたことだ。

「リスト情報の出所は、誰だ？」

「なぜそれを聞く？」

簡単なことだ。サツクは答えた。

「本全体に、コピーのほかに『失念』が付与されていた」

「失念？」

ナツカは首をかしげた。あまり耳にしない付与能力だ。

「物忘れの事さ。付与した物の存在を忘れる——それこそ関係者全員が」

つまりは、リストのメンバーも、ナツカの父を殺した犯人も、例外無く。この本の存在を忘れてはいるはずである。

「失念は時限式にゆっくり解ける術式だ。『形』『おおよその内容』『場所』『詳細な内容』の順に、時間をかけて思い出す。そして、思い出す

速さは個人差がある」

つまりサツクが言いたいことは。

「リストの存在を最初にナツカに教えた人物。そいつは、リストが本の形を呈していることを思い出したんだ。そして、君のお父様に一番関与していた……つまり、殺した犯人の可能性が高い」

「リストを——探している人間、まさか憲兵長……」

ナツカには心当たりがあったようだ。

「その人間、今しがた、気持ちが高ぶっているはずだ。本来はゆっくり戻ってくる記憶が、俺が『解呪』したため、一度に記憶が返ってきたからな。頭大混乱か、超ハイになっているかのどっちかだね」
あわよくば、ハイテンションになって、『私が犯人です！』レベルのポカ発言ぐらいしてくれろと、すべてが簡単に丸く収まるのだが……。

その時。宿の廊下が騒がしくなった。ガチャガチャと鎧が擦れる音が大きくなる。安宿だったから廊下からの音が部屋によく響く。

そして、バンツ!! と、ノックもなく、サツクたちの部屋の扉が開けられた。

「失礼するー!」

本当に失礼なやつ。

「キザブ憲兵長!」

ナツカはその男を知っているようだ。

サツクくらいの身長だが体はかなり絞っており、ほどよい筋肉。鎧の胸板部分は青と金色の装飾でどこかの紋章が掘られていた。薄茶色の髪は耳にかかるくらいで整っていた。

非常に『キザつたい』。サツクの第一印象だった。

「ナツカ、生きてい……無事で何より!」

急いでいたからか、キザブと呼ばれた男は多量の汗が噴き出でていた。——単に、急いで来たからなのか。それとも……?

(……いや、こいつ犯人じゃね?)

なんてことをサツクは思った。いやいやしかし。初対面の第一印象で決めつけるのは流石に悪い。

「キザブ憲兵長、本日はどうされました？」

ナツカは敬礼ポーズを取っていた。なるほどナツカの上司か。しかし、身に着けていた鎧に刻まれているマークが異なる。おそらく、担当区画が異なるのだろう。

なんで別担当区画に現れたのだろうか。不思議だね。

「驚いたぞ。参考人が油の入った樽に火をつけ、火事を起こしたと聞いてな！……流石に、リストも燃えてしまっただろう、残念だ」

(犯人じゃん)

「いや。キザブ……憲兵長？」

少し鈍いナツカも、この衛兵長様の発言には違和感を覚えてくれた。牢屋に可燃性液体満載の樽が転がってきた件においては、サックと、新聞屋と、今話したナツカしか知らない事実である。

そんなナツカの表情の変化に気が付かない衛兵長様は、さらにボロを出しに出した。

「ナツカ。お父上のことは残念だったな、だがリストは燃えて正解だった。君はお父上の無実を信じていたんだろう。リストに名前が乗っている以上、罪は免れないからな」

(犯人確定やん)

「……キザブ……あなたが……」

ナツカの父親の名前がリストに記載されている情報は、ナツカすら知り得ていないことだったのに。つまるところ、こいつはリストを『思い出した』。放火犯、かつ、リスト関係者ということだ。

「ん？ どうしたんだい、ナツカ憲兵」

「……」

ナツカはなんとも複雑な顔をしていた。おそらくこのキザブってやつにはお世話になっていたんだろうし、憲兵の上下関係もある。でも、先ほどの口の滑らせ方を鑑みれば、どう見立ててもコイツが犯人。……それにしても。

(術の所為もあるのだろうか……。よくそんな精神で、今の今までバレずにやって来られたな)

謎方向に感心するサックであった。

「キザブ憲兵長……父の名の件……どこで……？」

「詰所の火事の一件もね」

ナツカとサツクが一緒に尋ねた。むしろツツコミといったほうが正しいだろう。

「あ……っ!! 貴様ら! 私を嵌めたな!」

何もしておりません。

「おのれ、下っ端と犯罪者の分際で!」

するとキザブは、腰の剣を抜いた。

「ここで二人を亡き者にし、ノワール殺しの罪も、貴様らに擦り付けてやる!」

さらに『ボロ』を出したこの男。これほど口が軽いのは、むしろ術の副作用であってほしい。

「憲兵長が、私の父を……きやあつ!」

呆然とするナツカに、キザブが切りかかった。が、ギリギリのところでナツカは剣を避け、彼女も剣の柄に手を掛けた。

すると今度は、キザブがサツクのほうに向き、いきり立って襲ってきた。サツクは椅子に座ったままだったが、特に武器など持たず、丸腰だった。

バゴツ。

ギザブの剣は、サツクが座っていた椅子を両断した。サツクは素早く剣をよけていた。

「おのれ! 丸腰の薬師の癖に、チョロチョロと!」

武器を持っていないほうを優先的に潰す思考だったのだろう。再度ギザブはサツクに剣を向けた。が、

キンツ!!

「あれ?」

キザブが持っていた剣は、華麗に弾かれ、天井に突き刺さった。がごっ!!

鈍い音が響いた。キザブの左の肩の骨が碎ける音だ。

サツクは、先ほどキザブが壊した『椅子』の足を持っていた。椅子の足から背もたれ部分まで繋がる、一本の固い檜の棒。これを武器

『木刀』と見立てて、『装備』したのだ。

薬師や暗器使い、ましてや鑑定士や錬金術師などは、『長剣』の装備は不可能（扱いきれない）だが、それらをマスターした『道具師』は異なる。道具師スキル『全装備可能』により、サックはあらゆる装備品を扱うことができる（なお、性別専用装備は除く）。

「か……なんでっ」

しかしキザブも、憲兵長なだけあって、剣術は長けていた。今も油断はしていない。が、そんな彼の技術や戦闘力では、サックには全く歯がたたかなかつた。

転倒した彼に、サックは延髄にソバットをぶち込み、さらに、体をひねって着地と同時にかかと落とし。キザブの顔を顔面から地面に叩きつけた。

轟音ののち、シン……と静まり返った宿屋の一角。あまりに華麗な武術を目の当たりにしたナツカも、目を見開き驚きの表情を見せていた。キザブの強さはよく知っているからなおさらだ。

するとサックは、キザブの髪を持ち、顔を上げさせた。鼻は口から血を流し、歯は何本も折れていたが、まだ意識はあった。意味不明な強さの薬師に、彼は怯えていた。

「なん……だ、貴様のそのデタラメな強さは……ひっ!!!」

「あのなあ……この辺りのザコ魔物モンスターなんて、せいぜい『グリスリー』くらいだろ?」

サックがキザブに顔を近づけ話し掛けるも、恐怖でキザブが慄いた。

「つい先日まで、こっちは『デュラハン』『アークデーモン』『ティアマツト』辺りと命懸けで戦ってたんだよ。単純に、格レベルが違いすぎる、それだけさ」

サックはキザブの顔を、そのまま地面に叩きつけた。脳を揺さぶるように打ち付けたので、キザブはそのまま気を失った。

「ケンカする相手を間違えたね、憲兵長さん。女神の祝福があらんことを」

第3話【エピローグ】

「感謝してもしきれない」

夕日をバックに、ナツカはサックに頭を下げていた。そしてその後ろでは、複数の憲兵に連れられていく容疑者が見えた。茫然自失としており、手枷を嵌められたまま空を仰いでいた。心ここに有らず、といったところか。

「大変なのは、これからだろ」

身支度……は、特にないが。革のホルダーがしつかり腰に巻かれていることを確認しながら、サックはナツカに言った。

「ああ、そうだな」

と、ナツカは答えた。

「父はワイロに荷担していた。これは事実。だが……」

「だが？」

「あのリストで、この街の『膿』を出すことができそうだ」

ナツカは笑った。だが、なんとなくぎこちない笑顔だった。

「ナツカ、お父さんのこと、恨んでるかい？」

「いや、逆に私が恨まれていたのさ。私は生まれつき、付与術の才能タレントが無かったからな。大切な家業を継ぐことができなかった」

夕日をバックに彼女がまた笑った。今度は自傷を含んだ笑い方。

「私の……夢だったんだ。『人を護る』仕事に就くことが。だが、父の名前がメンバーストにある可能性があった時点で、覚悟を決めていた」

（あ——）

そうか、ナツカは、憲兵の仕事を辞めるつもりなのか。と、サックは感づいた。

確かに、それもそのはずだ。身内に犯罪者がいるとなるとそれらを取り締まる憲兵の仕事は非常にに行いにくくなる。

それをわかっていて、彼女はリストを探していた。そして、公開するのだ。

彼女の持つ『正義』の心によって。

「私利私欲に飲み込まれた奴らは皆……父も例外なく、断罪する。それが私の最後の仕事だ」

「……どうも、腑に落ちないんだよなあ」

「？　なんだと？」

サツクは腕を組んで考え事をしていた。

「お父さん、そもそもリストなんて、燃やしてしまえばよかつたんだよ。それをせず、時限式に分かるように細工したのには、訳があるはず」

「それは——そうだな」

一緒になってナツカも考え込んだ。ここまで回り諄く、『リスト』を隠せざるを得なかった理由があるはずだ。

「これは俺の妄想だが。最初にリストを見つけて欲しかった人物がいたんじゃないかな」

サツクは、自前の推理を披露した。

「どういうことだ？」

ナツカはその真意がわからなかった。が、サツクには一つの『想定』があった。

『失念』の付与術は、才能が無い人間には効きづらいんだ。だから、最初にリストを思い出す人物は、ある程度搾れる。つまりは、ナツカ、君のことだ」

「!!　でも何故!?!」

ナツカは声を荒げた。興奮すると彼女はすぐに態度に出してしまうようだ。そして、ここでヒートアップするということは——彼女も、何か察したのだ。

「最初に見つけて、手柄にしてほしかった。じゃないかな」

「……!!」

「元から、ワイロに手を染めていたのだが、娘が憲兵になったのを皮切りに、ノワールさんはリストの公開を試みた。だが、キザブや他の要人に止められ、殺されそうになった。だから、今回の茶番を仕込んだ。

『私を殺すと時限式に公開される』と言ってね」

「父は——それでは自殺ではないか——!!」

「ノワールさんの、自分なりの『けじめ』……もしくは、娘への『贖罪』か、それとも、自身なりの『正義』かも。とにかく、殺された場合は、すぐに娘にリストを発見してもらえらるような細工にしたってことじゃないかな、と思う」

「……」

「……」

しばしの沈黙のあとナツカが口を開いた。

「父が贖罪のためだとしても。もう、何もかも遅い」

だがそれは、諦めの言葉だった。

「犯罪者の身内が憲兵という、前例がないんだ」

「じゃあ、簡単だ、前例作っちゃえよ」

「……！」

「こんだけお膳立てしてもらってたら、もしかしたら、ワガママ通るかもよ。死に物狂いで掴んでいこうぜ」

憲兵の考え方に囚われていたら出てこない返答を、サックから受け取ったナツカ。

あまりに単純に単細胞で幼稚な意見にも思えたのだが、今のナツカには思いつかなかった回答だった。

「夢叶えられた一握り。掴めなかった人もいっぱいいる。いま掴んでいる手は自分の力だけで繋がってない。他の人の『想い』も乗せている。だからその手、死んでも離すな」

「……貴様は、単純なのだな……他人事だと思って……」

ナツカはうつむき、泣いていた。

「ああ、他人事さ。だけど、俺も諦めず死に物狂いで『掴んだ』から、今ここにいるんだ。慰めにならなくて申し訳ない」

「いや……。私一人では、出せない答えだった。ありがとう、もう少し、『足掻いて』みるよ。折角叶った夢なものな」

泣き顔の中に、ナツカの笑顔があった。先ほどとは違う、前を向いたきれいな笑顔だった。

その笑顔を見ながら、サックは必死に堪え、そして飲み込み、胸の奥底にしまっておくことにした。ナツカの父親が残した最後の大問

題だ。

（あのエロ本。必ず『原本』があるはずなんだよ。リスト偽造するにあたって、原本が近くに無いと、あれだけの精巧なコピーを作るのは難しい……つまり、お父上は……）

「——ナツカ、お前のお父上様はすげえ人だよ……」

+++++

「おーいっ！ 憲兵のお嬢ちゃん！」

サックを見送ったナツカは、暫く現場の宿の前で惚けていた。そこに、髭と髪がもじやもじやの小柄な男が走ってきた。

サックと一緒に牢屋に入っていた新聞屋だ。昨夜の火事で多少のやけどを負っていたが、すぐ退院して出てきたのだ。本来ならその後に取り調べがあるのだが、混乱に紛れて行方をくらましていたらしい。

「おい憲兵の嬢ちゃん！ あのサックって男はどこに行っちゃ!!」

「サックなら、既に旅立ったよ——急ぎのようでもあったのか？」

新聞屋は『やられた!』といった顔つきをした。

「奴を早く引き戻させてくれ！ 奴は『道化師、ベルキッド』だ！ 夜に花弁状の痣が光っているのを見たんだ！」

新聞屋は、牢屋に入れられている際に、サックの光る痣を見ていた。その後それを調べ、神託を受けた勇者のみ、その痣は月の光に当てられ光ることを確認した。

しかし、その話を聞いたナツカは全く動じなかった。なんとなく、彼のことを『察していた』のだ。

そしてナツカは、おそらく憲兵としての最後の仕事をした。

「新聞屋。昨日の詰所火災において、『サック』の名前を載せるのは禁ずる！ もちろん、勇者としての掲載も禁止だ！」

新聞の内容に箝口令を敷いた。サックが去り際にお願ひしてきたことでもあった。

「な……まじかあ！ 勘弁してくださいよ、こっちは命懸けスクープなんだよお？」

「残念だったな。私の目の黒いうちは、本件の公開は禁ずる！」

時間稼ぎにはなるだろう。彼へのせめてもの恩返しだ。

ナツカは、うーんと背伸びをした。これからが大変だ。

詰所火災の処理を行っている間は大丈夫だろうが、落ち着いてきたら、ナツカの職も追われるだろう。だが、彼女は決めていた。

「死ぬ気で足掻く。か。そうすれば、なにか新たに掴めるかもな」

空に見え始めた月に手を差し伸べ、それを握りつぶす所作をした。彼女なりの、決意の表し方だった。

+++++

翌日の地方紙の見出しは、おととい夜の詰所火災の件であった。全国区の新聞にも記事が載った。

『ビルガド西武の詰め所で大火事』

しかしながら詳細は省かれ、火事の主要原因であった、『リスト』の件においては、内容が非常にデリケートなことから極秘裏に調査が進められた。情報が小出しになることは、新聞屋にとってたまったものではない。

だが、あのひげもじゃ新聞屋。とんでもない隠し玉を仕込んでいた。

憲兵から出された箝口令に触れることなく、確実に世論が騒ぐこととなる記事。

三面に小さく、しかし、十分なインパクトを含めた、ゴシップ記事が載っていた。

『追放勇者ベルキッド、わいせつ物所持で逮捕か!?!』

この日の新聞は、飛ぶように売れたという。

能力使って邪なこと企てたら、そのぶん本気で死にか
けました

第4話【その1】

夜の歓楽街。木造と石造りの建物が並び、街灯が暗闇を照らしてい
た。そのため表通りはまるで昼間のように明るく、先程までは多くの
人通りも見られた。

そんな賑やかな繁華街から、道を一本ずらした路地裏。街灯の光も
入って来ず、非常に薄暗い。赤の他人を巻き込まないようと、サツ
クは大通りに戻ることを避けたのだが、結果的には『暗闇』という、暗
殺向きな場所を提供しただけだった。

（脇腹の傷は……塞がったな）

サツクは建物に寄りかかり、刺された脇腹に手を添えた。旅人の服
には穴が空き、おびただしい量の血液が流れた跡がついていたが、身
体の傷の方は既に瘡蓋が出来ており、失血は止まっていた。

（この傷……『クナイ』か）

傷の形状から瞬時に凶器の鑑定を済ませ、サツクは今、『何に追われ
ているのか』を今一度冷静になって考えていた。

ヒュッ！

風を切る音。すかさずサツクは身を伏せた。すると先程までサツ
クが立っていたところに、鉄製の棒が打ち込まれた。

これは『棒手裏剣』と呼ばれ、一般的にイメージされる手裏剣とは
異なり、ペン軸大の鉄棒先端を研いだ非常にシンプルなものである。
平たい手裏剣に比べ、扱うには相当の技量がいるが、殺傷能力は高く、
また量産しやすい。

（投げたのは一本だけ。牽制か）

サツクは立ち上がり、壁に突き刺さった棒手裏剣を抜いた。例に漏
れず先端は鋭利に加工されていた。飛んできた方向を見るが、闇が邪
魔して見えない。それにおそらく、もう敵はいないだろう。

敵は暗闇に乗じて襲ってくる。このままではジリ貧だ。

(マント、新調しておいてよかったぜ)

サツクは路地裏に落ちている適当なゴミや、廃材などを拾い集めた。

このままな訳にはいけない。サツクは状況を打開すべく、攻めの体制に入った。

(いくぜ、久々の『本気』モード！)

マントに力を込め、靡かせた。するとサツクの身体が軽くなった。マントに付加されていた能力の効果だ。

そして、彼は空高く闇夜に舞い上がった。

+++++

12時間前。

ビルガドの最北端、ハクノ区。

サツクの目的地のひとつである。彼は昨晚遅くにこの区画を訪れ、適当な宿に宿泊した。そして、彼は今、朝食を摂っていた。

宿に併設されていた、小洒落たカフェテリア。香り高い紅茶に、あつさりグラスティー。濃いめのミルクティーなど飲み物の種類も豊富で、何より朝御飯に最適なエッグトーストなどの軽食も楽しめる。

よく日の当たるテラス席も常設しており、サツクはそこで、遅めのモーニングを頂いていた。今しがたトーストを食べ終え、美味しい紅茶を嗜みつつ、小説を優雅に読み進めていた。

女神の情報を集めてビルガドに来たのだが、昨今の、憲兵詰所火事の件もあり、あまり情報収集の進捗は芳しくなかった。が、唯一ともいえる手がかりとして、一冊の本をサツクは入手していた。

なんの変哲もない、勇者の冒険譚をモチーフにした、どちらかという子供向けの文学小説だ。

暖かな日差しを浴びながら、黙々と読書に励むサツク。読み進めれば進めるほど、この本から感じられる違和感は大きくなっていった。

何よりこの本。

中古屋で手に取った時には既に『失念』の付与術が施されていたのだ。

あのエロ本……もとい、ワイロメンバーのリストを古本屋で見つけたとき。そのときに一緒に手に取った小説である。

驚いたことに、小説に付いていた失念能力は非常に強く、長年忘れ去られていた形跡がみられた。サックすらも最初は、この小説は偶然に入手したものであった。

そして当初は適当に売り払うつもりでいたが、これほどまで強い『失念』が付いた本の中身が気になり読み始めた次第だ。

「あまりに、詳しすぎる」

サックの、本に対する感想である。勇者一行が魔王を倒すまでが、子供でも解りやすい文章で描かれているのだが、問題はその内容だ。出てくる国名はもちろん、アイテムを入手するために訪れた場所、そのアイテム名、魔王の部下の名前、役職、攻略法……。

まるで本当にその場所に居たかのようにであった。

が、異なる部分も多々あった。クエストの攻略法や、心理描写、アイテム入手方法などなど。特に人物名は全く異なる。出てくる勇者の名前は、全く知らない人たちだ。

(もしかして……先代の勇者の記録か?)

数百年前にも、魔王は復活し、そして勇者たちに封印された。その当時の記録は殆ど残っていない。

一部が口伝され、おとぎ話として残る程度だった。

「これは……大発見かもな」

「なーにが『大発見かもな』ですかっ!!」

バンっ!

激しく叩きつける小柄な手が、オシャレなテーブルを揺らした。

寸前のところで、サックは飲みかけの紅茶を手に取り浮かしていたので、お茶はこぼれずにすんだ。

「朝から激しいな新聞屋——てか、よくここが分かったな」

「勇者専属新聞屋の探索能力、舐めないで頂きたいですね。本気を出せばすぐ探し出せますー!」

それって、いつでも監視可能って脅しているようにも聞こえるが……などとサツクは思いながらも、紅茶を定位置に戻して小説を閉じ懐に押し込んだ。

「そんなことより！ これ何ですかっ!!」

新聞屋『クリエ』アイメシア』が、突然朝のカフェテリアに現れたかと思っただが束の間、なにやら紙の束を机においた。数十枚ほどの揃えられた紙束は端を紐で綴られていた。

ぺらっ。

サツクは怪訝な顔をしながら、その束を一枚めくった。中身はどうやら新聞の切り抜きのようなようだ。特に地方紙が中心のようだが、その見出しにサツクは脅き、そして呆れた。

『道化師 結婚詐欺か 近く立件へ』

『追放勇者、教団を設立か』

『私は勇者』街中で裸の男逮捕』

『食い逃げ犯、勇者ベルキッドを名乗る』

『自称勇者、食い逃げか、余罪追求』

『食べ放題で持ち帰り！ 追放勇者の素顔』

エトセトラエトセトラ。

でるわでるわの、見出しだけで皆がワクワクしちゃうようなゴシツプ記事の集まりだった。

全てが『勇者道化師ベルキッド』の記事だが、むろん、本人はここにいる。つまりは全てが『ニセモノ』だ。

「食い逃げしすぎだろ、俺」

「本当ですよ！ なんでこんな、面白いことしてるんですか！」

「……ん？」

「こんなに特ダネ有るなら、私を呼んで下さいよ……あいたっ!!」

プンスカプン〇(*、ω、*)〇と言わんばかりのクリエの頭を、サツクは分厚い紙束で叩いた。

「全部『ニセモノ』に決まってるだろっ！」

「えっ！ そうなんですっかっ！」

驚きの表情のクリエであるが、彼女愛用の鑑定ガードのせいで、全

く真意が見えない。サツクにとっては非常にやりにくい相手だ。

「じゃあこの、結婚詐欺も……」

「女難持ちに勤まるか?」

「ですね笑」

(あ、小馬鹿にしたな。鑑定しなくても解るぞ、オイ)

「え、『教団設立』してないんですか?」

「教祖つて柄じゃない」

「ですね笑」

(……堪忍袋に穴が空きそうだ)

「食い逃げ犯でも無い、と?」

「宿も飯も、なんとかなってるよ」

「さすが転売ヤー、稼いでますね笑」

(よし、次は本気でぶん殴ろう)

「じゃあこの『追放勇者ベルキッド、わいせつ物所持で逮捕か!』も、嘘なんですね」

「……………」

「……」

「……」

「……なんで最後だけ黙るんです?」

ニヤニヤ(へー)、と笑顔の新聞屋。この女、確信犯だ。

「とにかくっ! 俺は忙しいのっ!」

サツクはバンバンとテーブルを叩いた。なんとか話題を変えたかった。

「説得力ゼロですね、あ、オネーサン私に野菜サンドとグラスティー、アイスで!」

クリエはサツクの意見を無視して注文を取った。さすがのサツクも、辱しめられていきなり同席し注文されるとなっただことに嫌気が差し、この場を離れようとした。

が、クリエが差し出した、もう一枚のゲラ(校正中の新聞記事)に、一気に興味を持っていかれた。

『勇者』一行、魔王城第3階層を突破!』

「サツクさん、速報です。皆さんとうとう魔王城折り返し地点です！」
嬉しそうな新聞屋。

「……そっか」

しかし、サツクの返答はかなりあっさりとしたものだった。

「ちよつと！ 皆さん命懸けでここまで攻略したんですよ！ 元同僚としてなにか一言無いんですか！」

サツクの感想があまりに想定外だったことで、新聞屋は珍しく取り乱した。

なんとなく『一矢報いたザマアミロ』的な顔を見せたサツクだったが、直ぐに真顔に戻った。そして、以前から疑問に思っていたことを口にした。

「……なあ新聞屋。それ本当に『速報』なのか？」

「へ？」

サツクの、またしても想定外の方からの指摘に、クリエは普段は見せないマヌケ顔を晒してしまったのだった。

第4話【その2】

魔王城、門前。

元は次元錠が設置されていた場所には、今現在は国の兵士たちが集まり、『最前線基地』が準備された。といっても、簡素なキャンプ地程度ではあるが。

幌やテント張っただけの休憩場や露店、宿などが並んでいた。

勇者たち一行は魔王城内部へ攻め入った。だが内部は幾重もの階層に分かれていることが判明したため、一気に攻略はせず、このキャンプ地を起点に1層ごとの攻略へと切り替えたのだ。

この最前線基地には、一般人はもちろんのこと、勇者専属新聞屋すら、入ることを許されていない。かなり強い情報統制がされており、新聞記者たちは、手前の第二中継地点から、勇者たちの活躍を伝聞で受け取っていた。

報告される内容には、一旦公開を規制されるほどの最重要機密事項も含まれていたため、クリエたち記者は、得られる情報が常に最新であると思いついでいた。

「すこし、遅い気がするんだ」

勇者イザムたちの性格から推測すると攻略が遅い気がする。サツクはそう考えていた。

「つまりは……モグモグ。公開されていない情報があるか？」

クリエが、少し前のめりになり話に聞き入った。……もしかもしやと野菜サンドを咀嚼しながらであるが。

「機密情報も織り交せて、さも内容が最新であるように思わせる。イザムがやりそうなことだよ」

「——あつー」

クリエは、『勇者の剣「ハルペリオ」』のことを思い出した。サツクの勇者引退を『追放』と銘打ち、新聞屋すら興味を引かせて、未だに『勇者の剣』が砕けた事実を隠し通している。

が、ここでサツクは思い止まった。少し考えすぎていたのかもしれない。

「いや、思い過ごしかも知れん。俺が抜けて戦況は変わっている。着実な攻略に舵を切ったのかも」

「ふむふむ……ゴックン。つまりは……ズズズズ……私の好奇心を駆り立てて真意を探ろうと言う魂胆ですね」

野菜サンドとグラスティーを一気に口に流し込み、クリエは頷いた。

「いや、そんなつもりは——」

「言いたいことは判りました！ けど。私も勇者専属記者の権利？ 奪は避けたいので。そういう強行取材は行いません」

「なんだ、残念だ。好奇心の塊みたいなのにな」

ちっ。サックは心の中で舌打ちした。クリエの好奇心や探求心は良く知っていたので、きっかけを与えれば勝手に情報を集めてくれると思っていたのだ。

しかしながら、結局のところサックの目論み通りに事が進む。

「ええ、なので『取材』はしません。自己満足の世界です。今回はあなたの企みに乗ってみますよ。仰る通り、私は好奇心だけで生きているようなモノですからね！ それに——」

野菜サンドを食べ終えたクリエはそういうと、にやっと笑い、伝票を持って席を立った。

「真実を追うのが、新聞屋ですから」

「真実を追う、ねえ。だったら早く『道化師』の修正を」

「そういえばサックさんは、何故この街に？」

話の方向を180度曲げられた。おそらく彼女は、暫く修正記事を出すつもりはないらしい。

サックは、結局彼女に弄ばれる運命であった。

「まあいい……いやよくないが。この街に来たのは、人生で遣り残したことを遂げに来たんだ」

「ぷっ！ 遣り残したなんて大げさな。まるで余命宣告受けてるみたいですよ」

冗談だと思っただろう、クリエはまた人を小馬鹿にするような笑顔を見せた。しかも自分が質問してきたにも関わらず、すぐに興味を

逸したようで、すぐに踵を返しサックに背を向けた。

「これから忙しくなりますねー。何とか伝手つてを使つて、最前線基地まで入り込めると良いんですけどね。では、ごきげんよう」

「もし有用な情報が入ったら教えてくれ。無論、報酬は弾む」

すると、クリエはくるりと振り返り、そして人差し指を立てて「1」のハンドサインを示した。

「本件、1回だけ情報はサービスしますよ、あと新聞屋は、報酬より情報を欲するので、お間違えないよう」

さて。

クリエは早速、北の魔王城方面に『飛んで行った』。彼女は有翼種であり、かつ、特殊能力『めがみのつばさ』を使える。一日に使える回数制限はあるが、行ったことのある場所へ瞬時に移動できるスキルだ。

魔王の復活に併せて、各都市を結ぶ転移装置ゲートが封鎖されているため、移動スキルを持つ彼女が羨ましい。

サックは背伸びして、席を立った。ちょうど、露店や薬局、バザーなどのお店が開き始める時間帯だ。

「俺も、今夜に向けていろいろ準備しておかないとな」

目的の薬品や、調合用のアイテムは入手できるだろうか。失くしたマントの代替品も欲しい。それには転売で十分稼がないとな。

これから、店が閉じるまでの間で、サックの仕入れの腕が試される。

+++++

夜。

ビルガドからかなり北に外れた一画であるハクノ区は、昼間にもそこそこの賑わいを見せてはいるが、しかし、この街が本領を發揮するのは、この時間帯だ。

この街は、公的にギャンブルが認められている。そのため夜になれば一攫千金を夢見て集まる猛者達で、街は昼間以上の賑やかしを見せ

る。そうすると自然に、お酒が呑める夜の店も増え、夜限定のシヨップも現れる。

そして何より。

ここには、『遊郭』。花街があるのだ。

これも実は、街が行う公営事業だというから、外から来た人たちには驚かれる。

花街に立つ娼婦はみな、例外なく首から『ギルド証』をぶら下げていた。とてつもなく際どい服でも、可愛らしいファッションの格好でも、何なら、殆ど裸のような格好の女性もいた。

この街では、『娼婦』がギルドの職業として認められているのだ。

公共事業として、風俗業を許可制にすることで、厳しい審査が定期的に行われ風俗店の室は否応なく向上する。違法な風俗は公的機関が強く取り締まることができ、汚いお金の流れを断つことができる。そして娼婦が公共事業の職業、つまりは『公務員』として登録できるため、人権的な問題も解決できている。利用者も運営も、娼婦にとってもWin-Winの関係を作ることができ、ある意味、理にかなっている。

そして今宵。この、ハクノ花街の表通りに、一人の男が立っていた。そう、我らが勇者アイサックⅡベルキッドである。

(金は……まあまあ！ 薬もOK！)

勇者、今朝がたの『人生の遣り残し』とは、この事。

今夜はどうとう、彼はここで『捨てる』つもりである。

そう。この男。全く諦めていない。そして、懲りていないのである。

(やべえ……やべえよ……)

しかし気合い込めて花街に来てみたものの。前屈みになった状態で街を闊歩することになった。

既に多くの人で賑わっており、ガラス張りの建物ではショーケースよろしく娼婦が並んで客を待っていた。可憐な服やきわどい衣装、獣の耳を付けた女性など色々なニーズに対応できるようにになっていた。そして身なりのよい男が建物の中に入ると、女性の一人が奥に消えて

いった。中で呼ばれ、営みが行われるのだろう。

(す、すげえー！ すげえよ！)

この花街に入った瞬間からサツクの語彙力とはつくに消え失せていた。そして緊張で体が震え、汗が噴き出ていた。こんなにも切迫したのは、魔王城の攻城以来といっても過言ではない(過言である)。

すーっ、ふうーっ。

サツクは大きく深呼吸をし、覚悟を決めた。

街灯の下や道端でも、客を拾う娼婦が点在している。もちろん、外で客を待つ娼婦も、ギルド証がよく確認できるよう首からぶら下げていた。公営の『娼婦』である証だ。

まれに、非公認で客引きを行う女性もいるらしいが、大抵は忌避される。殆どが何かしら問題のある人であるからだ。

(やばい。やばい。ここにいただけで、気持ちが高ぶりすぎて果ててしまいそうだ。聞き及んでいたより、遥かに刺激が強すぎる……!!) 顔を赤面しつつ、既に御子息(隠語)は元気に立ち上がりんとしている。

月の光が眩しい今夜。顔のアザが浮き出ないよう、調合した化粧品でファンデーションを塗り、さらにフード付きマントとマフラーで顔を隠していた。だが、あまりに顔が真っ赤になっていたためか、

「あら、お兄さん大丈夫？ 顔が真っ赤よ」

一人の娼婦が、サツクに声をかけてきた。体調が優れないサツクを心配したのか、禁止されてる客引きを正当化する建前か。

癖が強い巻き髪茶髪の、少し濃いめの化粧の女。年齢はサツクと同じくらい。背は彼より高く、俯いたサツクの顔を覗くのに前屈みになっっていた。

「あつ、だ、だ、だ、大丈夫っす！」

顔を伏せ相手の顔を見ずに返事したが、サツクの目線はちょうど娼婦の胸元を覗いてしまった。たわわに実った禁断の果实。一枚布を緩く体に巻き付けただけの非常に無防備なドレス姿。ふわりとした布ドレスは、前屈みになることで胸元が大きく開き、胸の谷間が強調されていた。

(おおお……！ おおおお……女神よ今だけは感謝いたしますっ)

目の前に現れた禁断の園に釘付けになった、アイサツクⅡベルキッド(世界を救う勇者)であったが、まじまじと胸の谷間を凝視するサツクの行動から、娼婦は彼が『初めて』であることを感づいた。

「あら——あらあら。こういうの『初めて』なのね」

優しく、囁くように、サツクの耳元で声をかけた。これが『プロ』の業なのだろう。サツクは、その娼婦の声色に一気に堕ちた。さすが童貞、優しい言葉にめっぽう弱い。

何度も繰り返すが、アイサツクⅡベルキッドは女神に選ばれし七勇者が一人である。

サツクは、今夜のお相手を決めた。人生の『初めて』を受け止めてくれる女性。ああ、麗しき貴女に出会えてよかった。僕の初めてを預けます。

君に、決め——。

サツクは気づくのが遅かった。

完全に花香に惑わされ、飲まれていた。

その娼婦が『鑑定できない』ことに、もっと早く気づくべきだったのだ。

ドスツ。

「父のカタキだ、ニセ勇者」

娼婦が、サツクの耳元で囁いた。憎悪と怒りを含んだ声色だった。

サツクの下腹部……脇腹から胸椎の手前にかけて。鉄製の刃物が突き刺さった。サツクの体内に激痛が走る。

(えっ——)

刃物は強く押し付けられ、肺にまで達したのが感覚的に理解できた。冷たい鉄の触感が体を突き刺していた。そして肺からの出血はサツクの体の中を逆流し、吐血に至った。血液が喉を汚し、声は出なかった。

女は刃物を素早く引き抜き、数歩、サックから離れた。

どさつと、前のめりにたおれるサック。刺し傷からは多量の出血。肺に穴が開き、まともに息ができない。

刺し方が『プロ』だった。暗殺術に長けた人間の仕業だ。

「……きやあああああつ!!!」

「な、うわああああ!」

近くで客引きしていた娼婦や男性客達が、殺傷現場を目撃して悲鳴を上げた。明るく賑やかだった通り怒った突然の悲劇。現場からは蜘蛛の子を散らすように一斉に人が引き、近くの店は一斉に扉を閉ざした。

「父の……カタキだつ!」

娼婦は髪を引つ張り、くせ毛のウィッグを外した。

腰まである長い艶やかな髪が、夜風に靡き月夜に映えた。

彼女の顔は、未だ怒りと憎悪と、復讐心に燃えていた。

第4話【その3】

公営の風俗街において、客同士の問題解決の速さは治安の良し悪しに直結する。そのため、こういったトラブルに関しては、即座に憲兵が対応するように手筈がされていた。

人が散った街道に4名の憲兵が急行し、既に娼婦と負傷者を囲んでいた。娼婦は未だに、血の滴る刃物を握っていた。

「女！ 武器を捨て手を上げろ！」

鉄の槍を携えた憲兵が、剣先を向けて定型文で警告した。他の憲兵も、剣や棒などの武器を構え女を捕らえんと身構えていた。

――が。

カラン。

金属特有の乾いた音が響いた。娼婦がサツクを刺した刃物を落としたのだ。

そして彼女は膝から崩れ落ち、両の手で顔を覆い、大粒の涙を流しながら嗚咽した。

「ううっ、やったよ父ちゃん……アッチ……カタキを討てたよ……」
サツクにやさしく囁いていた時と同じくらい、優しい、可愛らしい声色だった。これが彼女の『素』なのだろう。

通り魔がいるという通報で集まった憲兵たちも、この行動には驚かされたものの、すぐに、負傷者の状況確認と通り魔の逮捕に動きだした。

2名が、負傷者のサツクのほうに向かった。腹部から肺に到達する刺突で、出血量も激しかった。サツクの足元には血液の水たまりができていた。もう、手遅れだ。誰の目でも明らかである。

そして2名が、女を取り抑えようと娼婦に近づいて行った。彼女は全てを成し遂げ終えたかのように脱力し、地面に膝をつき俯いていた。

憲兵が、娼婦を拿捕しようとするむき出しの肩に手を掛けたその刹那、娼婦が動いた。

さつきまで項垂れ泣いていたとは思えない速度で、まずは肩に手を

置いた憲兵の腕をつかみ、そのまま担いで投げ飛ばした。激しく背中を強打した憲兵は一瞬のうちに気絶した。

「う、うわっ！」

もう一人の憲兵は、あまりの彼女の早業に理解が追いつかなかった。娼婦は、憲兵が出遅れたその一瞬のうちに、落とした刃物を拾い切先を残りの憲兵に向けていた。

しかしその切先はすぐに、憲兵ではなく、彼女自身に向けられた。刃物が彼女の喉を突かんと動く。あまりに一瞬の出来事。憲兵たちはまったく対応できなかった。

彼女は、自殺を試みたのだ。

しかし、その刃物は、娼婦の喉を貫くことは無かった。

彼女が持つ刃物と右手を包み込むように、黒い布に包まれたのだ。がちりと、手と刃の部分に布が絡み付き、さらに強く引つ張られ刃先は喉元から離された。

「なんだ、これはっ!!」

驚いた娼婦は、布の出所を探り、またさらに驚愕することになる。

黒く長い反物。その布は長く伸び、先ほど刺殺したはずの偽勇者、アイサツクに繋がっていた。右ひざと左手をまだ地面に付けたまま、右手に巻いた反物を目一杯伸ばし、操り、すんでのところで娼婦の右手に巻きつけ自殺を食い止めていた。

アイサツク＝ベルキッド。『装備（E）：黒絨絹の反物』。

職業：踊り子は、反物（たんもの）を武器として装備し、扱うことができる。

布を自分の身体の一部のように操ることで、舞踊の美しさが増し効果が上乘せされる。また戦闘においても、ムチのような打撃のほか、腕や足などに絡めて自由を奪うといった戦い方ができる。しかし扱うには、相当の技術が必要になる装備品だ。

サツクは咄嗟に、顔の痣を隠すために巻いていた『反物』を装備し、彼女の自殺を阻止したのだ。道具師のスキル『全装備可能』によって可能になる芸当である。

しかし彼女が驚いているのは、反物の件だけではない。彼女は確か

に、ニセモノに致命傷を与えたはずだった。

つい彼女はサックに質問してしまった。

「何故生きているのっ!」

「ふざけんなっ! 致命傷『だった』よっ! ……ごふっ、くそ、血で上手く喋れねえ!」

サックの居る場所の地面は、確かに血液で水たまりができており、またサックの口からは吐血の跡が見られる。

しかしその血液の海の中に、割れた瓶が落ちていた。

サックは、自分が生きている種明かしをした。

「俺謹製の『マキシムポーション絶倫回復薬』。使うと精神力と体力を大回復できる……

『今夜用』にと準備したら、まさかこれに命を救われるとはな。笑えねえよ!」

「……アイテムを使う隙や暇は、与えたつもりはなかったわ!」

娼婦の女の言うとおりである。

あの刺し傷では、回復アイテムを使ってもいわゆる『手遅れ』な状態なはずだ。それに回復アイテムを使うタイミングなど無かったはず。

サックは血液の海から立ち上がった。吐血で汚れた口周りを乱暴に袖で拭い、口内に溜まっていた血を無造作に吐き出した。

「反撃スキル『オートポーション』。ひん死の重傷を受ける寸前に、持っているポーション系のアイテムを事前に使用するスキルさ。尤も、一撃で死んでしまうと『ダメ』なんだがな……ほんと、ギリツギりだったぞ!」

そういうと、サックは砕けたガラス瓶を取り出し地面に投げ捨てた。先ほどの『マキシムポーション絶倫回復薬』というアイテムが入っていた瓶なのだろう。

「そう、か。失敗なのね!」

右手を布で固定された娼婦は、悲しみの表情でまた項垂れた。

「……なら、まだ死ねない! 父のカタキを取るまでっ!」

その台詞と共に、彼女は怒りを露にし、即座に左太ももに括り付けていた武器を取り出した。サックを突き刺した刃物と同じものよ

うだ。

「疾っ！」

それを、サツクに向かって投げつけた。確実にサツクの眉間をめがけて真っ直ぐ飛んでいった。

「マジかつ!!」

とつぎにサツクは武器によるガードを選択してしまった。黒い反物がヒュンと風を切りサツクに飛んできた刃物を叩き落とした。

しかしそのため、娼婦の右手を解放させてしまった。

殺意むき出しで、サツクに対峙する女。右手に血まみれの刃物と、左手には見慣れない金属の棒状の、釘のようなものを握っていた。

サツクも反物を構え臨戦態勢を取った。先程まで生死の境に立っていたとは思えない回復力だ。

だが。

(やべえ、血が抜けすぎた。貧血でぶっ倒れそうだ)

流れ出た血液は回復できていない。それに加え、回りには戦意喪失した憲兵に、気を失った憲兵。他の二人も『強敵』を相手するには些か心細い感じだった。既に腰が引けていた。

この娼婦、隙だらけだったとはいえ、サツクを一撃で仕留めたのだ。実際かなり強い。

(……ここで殺り合うのは、マズいか)

一瞬悩んだサツクではあるが、既に答えは出ている。この現状を打破する方法。

(……よし、逃げよう)

だっ！ と、サツクは、路地裏の方角に駆け出した。

「貴様！・逃げるかつ！」

娼婦は左手に持っていた、釘のような武器を投げつけた。かなりの速度でサツクを襲った。が、

「移動スキル『縮地』!!」

サツクは、サンダルを蹴動させ、瞬時に裏路地の奥に消えていった。

カツ、カツ、カツ、と、金属の棒が誰もいない地面に、小気味良く

突き刺さった。

「な、なんとという速さ！ おのれ偽勇者め！」

女は、サツクを追うため、助走をつけてジャンプをした。二階建ての娼婦館を軽々と越えていき、そのまま、女も見えなくなった。

残された憲兵たちは、明らかにレベルが違う人間の争いを、ただただ呆然と見送るしかなかった。

第4話【その4】

歓楽街から外れた路地裏に身を潜めたサツクは、今一度、脇腹の傷を確認した。既に止血されていたが、多量の血を吸った、穴の空いた服がケガの重大さを物語っている。

(忍者……いや、女性だから『くのいち』か。厄介この上無いな)

周囲に落ちている使えそうなガラクタやゴミを拾いながら、サツクは策を練っていた。といっても、手元の調合薬品は心許なく、尚且つ相手は忍者だ。やれることは限られる。

忍者は常時スキル『隠密行動』によって、鑑定系スキル無効に加え、不意打ち率を底上げしている。彼らは暗殺のスペシャリストといっても過言ではない。

「マント、新調しておいてよかったぜ……いくぜ、久々の本気モード！」

マントに力を込め、靡かせた。するとサツクの身体が軽くなった。マントに付加されていた能力の効果だ。

そして、彼は空高く闇夜に舞い上がった。

月の光に当てられ、彼の頬に浮かぶ花卉状の痣は、青白く仄かに輝いていた。

(さて、くのいちさんは、挑発に乗ってくるかね?)

殺したくて堪らない暗殺のターゲットが、月を背に飛んでいるのだ。暗がりから見上げるとさぞ目立つだろうし、言うなれば格好の『的』である。

マントの潜在能力を引き出しながら、路地裏を中心に見下ろしていたサツク。特に、先ほど棒手裏剣が飛んできた方角に注意を払っていた。

——ビンゴだ。

その方向から、鋭く風を切る音。手裏剣が飛んできた。

しかしその手裏剣は、薄い木の板に阻まれた。

サツクが構えていたのは『おなべのふた』。ゴミとして捨てられていた物だ。それをサツクは盾として『装備』し、さらに『潜在解放』に

より防御力を極限まで引き出していた。

単なる板切れであれば、棒手裏剣なら容易に貫通する。しかし鋼板並みに固くなつた『おなべのふた』に対しては、浅く突き刺さる程度にしかならなかつた。

「いやいや！ 突き刺さるんかい！ 鉄の盾レベルの固さだぞ?!」

弾くことを想定していたので、つい声をあげてしまった。この距離を保っているのに、鋼板に穴を空ける投擲。あのくのいちの技量は相当な物だ。

しかし、サツクのプランに大きな変更はなかつた。突き刺さつた棒手裏剣を2本抜き取り、空中で体制を立て直しながら、1本を飛んできた方向に投げ返した。

「利子付きで返すよ——『潜在解放』」
ウエイクアップ

ドンッ！

サツクが投げた棒手裏剣は、赤く燃えていた。潜在に眠る【炎属性】を引き出したのだ。

赤熱した手裏剣は、煙をあげながら高速で飛んでいった。狙うは、手裏剣を投げてきた相手。しかし、暗がりの中に身を潜める忍者の居場所は、空からでは皆目検討がつかない。その手裏剣は当たるわけがなかつた。

「爆ぜろ」

サツクが投げた手裏剣に命じた。すると鉄製の手裏剣が炸裂し、閃光を発生させた。

細かい金属粉と起爆剤を混ぜ合わせた、閃光弾と同じ原理だ。

「きゃあっ!!」

いた。投げ返された手裏剣に注視していたため、閃光をまともに浴び驚かされたようだ。

（見つけた！）

さらに、サツクはもう1本の手裏剣を手に取り、くのいちに投げ返そうと体制を再度整えた。

そのときであった。

ビュッ!! ズバツ!!

「なにっ!!」

サツクが予期せぬ、あらぬ方角から手裏剣が飛んできたのだ。十字に刃がある平形の手裏剣は、サツクの背中に翻っていたマントを二つに裂いて飛んでいった。

「マズイっ!」

マントとしての形状を成さなくなり、うまく浮遊できなくなった。サツクの体重を支えることができなくなり、比較的ゆっくりではあったが、垂直にサツクは落下していった。

(もう一人の忍者は想定外だったな……これは、かなーりピンチだぞ!)

くのいち一人に殺されかけた身としては、同じ技量の暗殺者がもう一人いるのは悪夢でしかなかった。

ゆっくり落ち、地面に着地したサツクは、ボロボロに朽ちたマントを剥ぎ捨てた。『潜在解放』^{ウエイクアップ}による劣化の影響も大きい。

落ちた場所は、道が狭く、しかし月明かりが良く入る場所だった。サツクの立っている場所に、まるでスポットライトのように月が照らしていた。『私はここに居ます』と主張せんとばかりに。

異様に目立つ場所に降り立ったサツクだったが、あえて動かなかった。忍者二人に囲まれている現状、逆に闇に紛れるほうが危険と判断した。それに――

「……たあああああっ!!」

甲高い叫び声。先程の十字手裏剣が飛んできた方向から、忍者が突っ込んできた。

反りの少ない刀――忍者刀を、深く腰だめに構え、真っ直ぐに突進してきたのだ。

全体重をかけて、刀を人間の腸に突き刺さんとす、非常に殺傷能力と威力の高い攻撃方法である。

だが、その攻撃は難なく弾かれることになった。サツクの脇腹にめがけた刺突であったが、

ガギイイツ!!

聞きなれない音。金属と石がぶつかり合う音と共に、忍者刀は弾か

れ飛んでいった。

「レンガで、ブロック。つてな！」

ダジャレである。

「なっ……うわあっ!!」

刀を弾かれた忍者が一瞬呆けた瞬間をサツクは見逃さなかった。

暗がりでもまだよう見えぬ相手の服を素手で掴んだ。ちょうど襟首辺りをつかめたので、月明かりの照らす場所に引きずりだし、そのまま壁に打ち付け、肘で首を締めた。

「……つて、子供かよ！」

闇から取り上げたのは、子供の忍者だった。年齢は10を越えたかくらい。サツクとは一回りの差があるかもしれない。

黒装束に黒頭巾を身に付け、顔は目元しか確認できない。

「くっ！ 離せっ！」

「黙ってる！」

もう1本の棒手裏剣を取り出し、サツクは、子供忍者の腕……ではなく、月明かりで浮かぶ、腕の『影』が映る壁に突き立てた。

『影縫い』っ！」

影を縫い付け、動きを制限させた。

「くっ！ 離せっ！ 離せっ！」

身体の自由を縛られ身動きが取れない子供忍者を横目に、サツクは信じられないといった表情を浮かべていた。

(こんな小さな子が暗殺術を使えるとは)

そういえば……。サツクは昔のことを思い出した。七勇者が一人『ゴッドスキル神業アリンシヨア』が、口を酸っぱくして皆に警告していたことだ。

『いいかい、忍者つてのは、任務のためなら女子供に、爆弾巻いて自爆させるのも躊躇わない奴らさね。気を抜くんじゃにやいわよ』

……！ 爆弾か！

サツクは動けない子忍者の脇腹を弄った。

「な……くそ！ やめろ！」

動けないなりに身体を捻り、必死の抵抗を見せたことで、サツクの

疑いは確信に変わった。

(こいつ、爆弾で自爆を狙ったな！)

ワサワサ、と、黒装束の上からボディチェックを始めてみると、閃光弾や煙玉といった、逃走用のアイテムがポロポロ出てきた。まだ何か持っているかと考え、装束の中に手をつ込み、入念に探りまくった。

「……………ん？ あれ？」

しかし、それ以上のものは出てこなかった。おかしいな、と、更に更に手を服の奥に入れてみた。

「……………え」

サツクは、とてつもなく重大な事実に気づかされた。

あるべきところに、『無かった』のだ。

「ええと……………」

サツクは顔を上げて、忍者の顔色を伺ったところ、羞恥で顔を真っ赤にし、睨み付けながらも大粒の涙を流していた。

「コロス……………コロス！」

すつ……………」

サツクは、服の中から手を引き、抜き取った閃光弾と煙玉を地面に整頓して並べ、踵を返して三步進み、また回れ右したところで、両ひざ両手を地面について、おでこを地べたに擦り付けながら謝罪した。

「すみませんでしたああああっ!!」

忍者の里のある『クーガイーガ』地方に伝わる、最上級の誠心誠意を込めた謝罪『土下座』である。

「お、お、『女の子』だと知らず存ぜず……………ホントスマンっ!!」

この男。勘違いしたとはいえ、一回り違う赤の他人の女子の柔肌を弄んだのだった。

少女のくのいち。更に一層目付きを鋭く睨み付けるも、大粒の涙が止まることは無かった。

第4話【その5】

その時。

サツクの背中側からとてつもないプレッシャーを感じた。直感的に感じた『それ』は、いわゆる『殺気』であった。

あまりの気迫に、サツクの全身の皮膚が粟立つ。

子供のくのいちが所持していた忍者刀は、運悪く、そいつの方角に飛んでいっていた。女はサツクたちに近づく途中に、刀を拾った。サツクのお腹に穴を空けた娼婦だ。

服はそのまま、娼婦の時の一枚布の白ドレスであるが、走り回ったり閃光を浴びたりしたことで、土埃や煤汚れが目立っていた。

魔王直属の『三鬼神』を彷彿とさせる、鬼のような形相……。

サツクの第一印象だ。父親のカタキがどうか言っていたときよりも怒りのボルテージは上がっているようだった。

「……姉様！ サザンカ姉様！」

先程まで大粒の涙を流していた子供忍者は、彼女をみるや否や、名前らしきものを叫びだした。

呼ばれた女は、眉をピクつかせ、

「ヒマワリっ！」

一喝した。

こちらも、子忍者の名前だったらしく、彼女は肩をビクツと萎縮させ沈黙した。

「ヒマワリ、アッチは何度も教えてるじゃないか。『忍び足るもの、迂闊に名前呼びしてはいけない』って……ん？」

「え？」

「あっ」

とある矛盾点に、三人が同時に気がついた。三者三様のリアクション。

……もしかしてこの忍び、実は天然なんじゃないか？

するとサザンカと呼ばれたくのいちは、事の重大さに気がつき、ワナワナと口を震えさせた。

「きつ、貴様っ！ 巧みな話術でアツチらの名を抜いたなっ！」

「ナニモシテナイ。ナニモシテナイ」

サツクは首を横にふった。しかしその首振り行動が逆に彼女——サザンカの琴線に触れたようだ。

「アツチらの父を殺し！ 偽勇者を名乗り女を誑かし！ アツチの妹にまで手をだした外道め！」

「まてまてまて！ 少し落ち着け！」

良く良く考えたら、何故サツクが忍者に追われているのか。皆目見当が付かない。

暗殺者と対峙して、こうやって話し合えるのはある意味奇跡だ、この好機を逃すわけにはいかない。

「まず俺は偽勇者じゃないし、女を誑かしたこともない！ 父親殺しなんて全く身に覚えがないし、ましてや女兒に手を出して……あれ？」

いや、手をだしてるわ。不可抗力だけど。

影縫いで無抵抗な女兒を服の上から中からイジイジしてましたゴメンナサイ。お召し物も幾分、着崩れてしまってるし、現状言い訳は出来ない。

「……腐れ外道め……」

ヒュン、ヒュンと忍者刀の素振りを始めた。

こりやだめだ。話し合えるような状態ではない。

(仕方ない……こっちも死にたくないからな)

サツクは、手元に巻いていた『反物』を両手に持ち、左右に張り構えた。

そして、妹の忍者が背になるように位置取りした。これで棒手裏剣の投擲はやりにくくなったはずだ。サツクが避けると妹に突き刺さることになる。

(背に腹は代えられない……やるしかないか)

サツクは自分の着ている服(旅人の服)に対して、『潜在解放』^{ウエイクアップ}を行つた。潜在的に眠る効果は、「全ステータス上乘せ」。効果は小さいが、無いよりはマシだ。特に、忍者の素早さに対応するには、少しでも身

体が動いたほうが良い。

(やべえ……少し気を抜くと、ぶっ倒れそうだ)

しかし、サツクの体調は万全でなかった。結局のところ彼は今、血が足りていないのだ。圧倒的に貧血状態。何とか気力で立っている状態である。

相手のくのいち——『サザンカ』は、多少天然かもしれないが、忍者としての実力は確かだ。本来は全く油断できない相手である。そしておそらく、サツクの体調も相まって、高レベル帯同士であるこの勝負は一瞬で決着するだろう。

サツクは両足を広げ身体を低く構えた。しかしサザンカは、それよりもさらに身体を伏せていた。

暫くの間ものち、先に動いたのは、サザンカのほうだった。

身体全体を使った、全力の突進。刀は前に突き出した格好だ。

(すっげえ速いっ！ 間に合うかっ！)

サツクはそれにギリギリ反応できた。反物を伸ばし、突進するサザンカの武器を弾こうとした。が、彼女は身体を大きくひねり、反物を避けた。そのまま彼女は、『反物の上を走った』。

たったたっ たっ たっ!!!

(うそだろー！)

伸びきった反物の上を伝って、サツクに高速で近づく女。

「くっそー！」

サツクは左手に掴んでいた、筒状の『何か』を投げつけた。それは、先ほど子供の忍者から奪った『閃光弾』であった。

が、サザンカは、サツクが閃光弾を拾っていたのに気付いていた。隠し玉として使ったのだろうか、知られている秘密兵器ほど無意味なものはない。

目つぶしのために投げられた閃光弾に対して、サザンカは、着ていた『ドレス』を左手で剥ぎ脱いだ。一枚布のドレスは大きく広がり、シートほどの大きさになった。それをサツクごと覆い被せた。白い布は『がぼっ』と、サツクと閃光弾を包み込んだのだ。

「うわっぶー！」

(殺つた)

人型の膨らみに対して、忍者刀を突き立てると、体重全てを掛けて突進した。

白い布と、自ら仕掛けた閃光弾で資格を完全に奪ったエモノ。こうなってしまうと赤子同然。どう足掻いても、忍者の敵ではない。

しかしこの戦いは、サツクの『仕込み』によって終焉する。

サツクが狙っていたのは、『反物による武器弾き』でも、『閃光弾による目くらまし』でもなく——この1点だった。

『影踏み』っ!! ……つて、危ねええっ!!」

目と鼻の先どころではない。サツクの左ほおと耳の真横を、忍者刀が突き抜けていった。

「な……んだ……」

勝利を確信していたサザンカであったため、この結末は信じられなといったところか。『影踏み』によって完全に体の自由を奪われた。

何故、サツクがわざわざ月明かりが強く入るこの路地で敵を迎え撃ったか。最大の理由は、これであった。サザンカがサツクに近づいたことで、彼女の影をしっかりと映し、それを踏むことができた。

「そろそろ靴を新調しようか迷っていたところだったんだ……変えなくてよかった」

あのイーガス家で準備してもらったサンダルを、未だに愛用していたのだ。さすがにガタが来ていたため、交換を考えていた矢先の出来事だった。

「姉様っ!!」

ヒマワリが、姉を心配して声を荒げた。

サザンカは、口元すらまともに動かせない状態になっていた。『影踏み』にも強弱はあるが、サツクの格レベルが高いこともあり、強力な縛り効果を与えていた。今もし、サツクが刃物の一本でも持っていれば、サザンカ刺殺されていてもおかしくない状態。つまりは、彼女の敗北である。

(アツチが……負けた!?)

サザンカは一つの疑問があった。先に投げた『閃光弾』は、なぜ炸裂しなかったのか。

(……まさか、この男！ 閃光弾で影が消えることも計算に入れて『わざと起爆させなかった』のか！ ……なんたる策士！)

すると、白い布の塊が動き始めた。刀は布を突き抜け、サツクの左ほおを掠っていたが、特に大きな怪我はなかった。

「よ……、ふう、あぶなかったぜ」

サツクは、顔に巻かれた白い布を外した。

「あ……ダメだっ！ 布を取るなっ！」

「はあ？ 取らないと何も見えないだろ」

未だに影縫いから抜け出せていない子忍者ヒマワリが、サツクに懇願した。が、サツクは布を脱いでしまった。

「しかし、こんな布どこに隠し持っていたんだ？ 忍者のスキルのせいで、こつちは隠し武器とか一切鑑定できないんだ。こうも………その………いろいろ………おおう………」

サツクの目の前には。

月明かりに当てられ、上半身スッポンポンの女性の姿があった。豊満に育った禁断の果実が、ちょうどサツクの目の前に『どでん』と待ち構えていた。

「お………お………う」

「ひ………き………ま………い………」

縛られて声を出せないサザンカと、圧巻の裸体を目の当たりにして声が出ないサツク。

そして、さらに事は最悪な方向へ傾く。

(あ、やべ)

一気に血圧が上がってしまったサツク(童貞勇者)。顔を真っ赤にして、鼻血を垂らした瞬間、彼の意識が一気に遠のいた。血液不足による貧血だ。

しかしここで意識を失ってしまうと、『影踏み』が解かれる、それだけは避けなければならない。

必死になって気を張ろうとするも、めまいによってサツクは『前の

めりに』倒れてしまう。

そう、サザンカが固まっている方角……二つのクッションに向かって倒れてしまったのである。

ぽにん、ぽにん。

「が……きさま……きさま……っ！」

わなわなと身体を微細運動させ怒りを露わにしているサザンカ。動きは未だに縛られているが、こんな辱めを受けるとは思ってもいなかった。

そして、人生で初めて異性のお胸様を揉みしだいた、勇者アイサツク。本来なら幸福の絶頂にいるはずであるが、さらに血圧が上がり、意識が混濁し始めていた。実は相当にピンチだったりする。

さらに、災厄は訪れる。

サツクの着ている服の、潜在効果解放のタイムリミットだ。限界を突破して使用された武器防具は、例外なく破壊される。

パァン!!

サツクの『旅人の服』が、派手に爆ぜた。彼の上半身とズボンが吹っ飛び、おパンツ一丁の痴態を晒した。

身動き取れない裸の姉が、父親のカタキである男に、裸で抱かかれている。

そんな力オスな現場を見せつけられる彼女も、ココロに大きな傷を付けられた。

「姉様も……アタシも、こいつの『慰みもの』にされてしまったあ……」

ヒマワリは耐え兼ね、泣き出してしまう。

命を掛けた決闘が数秒前に行われていた場所。今、この路地裏は、それとは全く想像できない修羅場と化していた。

第4話 【エピローグ】

影縫いで縛られたまま泣き叫ぶ幼子。

たわわな乳房を剥き出しのまま、影を踏まれ身動きが取れない女。その女に抱きつき胸の谷間に顔を埋める、貧血で失神寸前の成人男性。

高名な美術家の名画か、はたまた、地獄絵図か。

(まっつたく嬉しくない！ 気を失したら確実に殺される！)

シチュエーションだけなら男として羨ましい限りだが、当の本人は生き延びるため必死だった。なんせ、いま動きを止めているくのいち——サザンカの顔色が明らかに悪い方向に傾いている。耳まで赤面し目を見開き、サツクを睨みつけていた。

その時、何かが聞こえてきた。警笛の音だ。

ドカドカと、そこそこに大人数の足音も聞こえてきた。暗殺犯を捕らえるべく多くの憲兵が動員されたようだ。

先ほどサツクが放った棒手裏剣の炸裂もあって、おおよその場所が割れたらしい。

サツクは安どのため息を吐いた。なんとかこの沈黙が打破されそうだ。

「いたぞー！ こっちだー！」

一人の憲兵が、サツクたちの居場所を見つけた。すぐに、大勢の憲兵が集まってきた。

「た、助かつ……てないっ！」

憲兵が手に持っていたカンテラの明かりが、サツクたちを照らすことになるが、つまりそれは『上半身裸の女に抱きつき胸の谷間に顔を埋める変態男』のこの絵面を大衆の面々にさらすこととなってしまう。

(あかんやつー！)

追放勇者として今まで過ごしてきたが、これほどの辱めは初めてだ。貧血で顔面蒼白だったサツクの顔に、また赤みが戻ってきた。そして、大変なことに気付いた。

「……だめだ！ 明かりを向けるな！ 『影が動く』！」

先に術が解けたのは、ヒマワリだった。壁に刺した手裏剣と影の位置がずれたことに気付いたヒマワリは、素早く足元の煙玉を手に取り、そしてサツクのほうに投げつけた。

多量の煙を発生し、サツクを中心に視界が奪われることになった。ランタンの光は煙によって乱反射してしまい、目くらまし効果を倍増させた。

「しまった……！」

影が見え隠れすることで、『影踏み』の効果が薄れ、対象から術が外れた感覚が分かった。サザンカの縛りが解けた。

「くっそー！」

サツクは、僅かに残った気力を振り絞り、全力で身を引いた。それを追ってサザンカが猛襲する……と、サツクは思っていたのだが、予想外に、彼女は襲ってこなかった。

煙玉の白煙が、少しずつ収まってきた。細い路地に詰まった憲兵たちのパニックはだいぶ落ち着いたようだ。

そこには、くのいち二人の姿はなかった。煙に乗じて逃走したらしい。

「ま……まじで助かった……！」

ぼそり、とサツクは独白するも、その瞬間一気に気が抜けてしまい、膝を付きぶつ倒れた。

「お、オイ！ 大丈夫かっ！」

いかにもベテラン感のある、ひげを蓄えた男性の憲兵が、サツクに近づき仰向けにされ肩を揺さぶった。

その憲兵に、サツクは見おぼえがあった。そして憲兵のほうも、サツクのことを知っていた。

「……ジャクレイ総隊長……？」

「も、もしかして、勇者殿っ！」

こんな会話をしたのち、サツクはゆっくり気を失っていった。ジャクレイと呼ばれた男の呼びかけ声を、はるか遠くに聞きながら――。

「……」

「姉様、とりあえずこちらを」

ヒマワリが、どこからかシートを調達してきた。誰かの取り込み忘れだろうか。ヒマワリは、裸同然のサザンカにシートを被せた。マントを羽織ったような格好となった。

「……」

ギョツ、と、サザンカはシートの裾を握りしめた。

憲兵と偽勇者から這々の体で逃げ出し、街の外れのスラム街近くに身を潜めていた。

「姉様……」

ヒマワリは、なんと声をかけて良いかわからなかった。

里の中でも、抜きん出た実力を持ったサザンカ。大人たちも彼女の技量には敵わなかった。少なくとも、ヒマワリは姉が負けたところなど見たことがなかった。

「……」

そんな姉が、こんなにも気落ちするとは。先程から全くサザンカの反応がない。姉の『色香』を使った暗殺が通じなかった。『大教祖様のご信託』に従ったのに……。

「姉様、一度『教団』に戻りましょう、偽物の報告をして、『司祭様』と『大教祖様』の（ご）助言を……」

「……ヒマワリ」

一旦戻ろうというヒマワリの提案を、サザンカが制した。しばらくぶりに口を開いたサザンカに、ヒマワリは少し安堵した。

「アツチ、里の男どもにも負けたことない」

「うん。姉様は最強の忍者だよ」

「でも、父上のカタキに負けちゃった」

「姉様、ウチら生きてるうちはまた機会があるよ」

「父上のカタキに負けたってことは」

「……うん」

「あの男、父上より強いってことよね」

「……………うん……………うん？」

ヒマワリは、風向きの悪さを仄かに感じた。

「父上、よく言ってた。『俺より強い男にしか、娘は嫁にやらん』って」
「……………うん？」

すると、サザンカの顔が急に赤く染まっていった。火照った頬を擦りながら、とんでもないことを言い出した。

「アッチ、あの男に……………ほ、ほ、ほ……………」

やめてくれ、姉様。それ以上のことは聞きたくない。

何かの間違いであってくれ。ヒマワリは心の底から女神に願った。

「惚れてしもうた……………」

「はあ?？」

無情にも、ヒマワリが一番聞きたくなかった回答であった。

能力使ってデートして、そのぶん経験値上がりました 第5話【その1】

「血が足りねえ」

起き抜けにサックが発した一言だったらしい。当の本人は全く記憶がない。

昨夜の暗殺者襲撃事件は、或る意味『衝撃的な』結末を迎えた。サックはあまりの出血で気を失い、憲兵たちに抱きかかえられて、ハクノ区の憲兵詰所で介抱された。

サックは昨晩はその詰所の休憩室を間借りし、死んだように眠っていたのだった。

「……肉料理、で、いいか？」

「おう」

彼の急なリクエストに回答をしたのは、その休憩室にサックの様子を見に来ていた、50歳を超えるかくらいの男性憲兵だった。ベテランな風貌でがっしりとした体つき。トレードマークといえるひげは、白髪交じりであった。

その憲兵は部下に命じて、近くの料理店から食事のケータリングの手配を行った。

焼きたての塊肉から、レバーをふんだんに使った野菜炒め、又焼山盛りの麺料理に、スパイスの香りが心地よいテールスープ。そして、たっぷりのヤギのミルク。

「さて、勇者アイサック様。お話をうかがえますかな?」

「……モグモグ……。今の俺は『サック』だ。サックでいい」

塊肉をナイフで分厚くスライスし口に頬張っていたため、喋りながらの返答になってしまった。

「じゃあ、お言葉に甘えて。サック、昨晩何があった? お前さ、田舎帰ったんじゃないの?」

先程とは大きく態度が変わり、まるで年下の友人と話すような口調で、ジャクレイは話し始めた。

ジャクレイ総隊長。ハクノ区内の憲兵を統率するエライ人。現場主義で直ぐ操作に首を突っ込みたがりであるが、陽気な性格に加えて剣の実力も相まって、部下からは相当信頼されている。

魔王城へ進行するに際して、七勇者たちはハクノの区画にも訪れていた。そのときに世話になったのが、ジャクレイの部隊だった。

勇者一行というだけで、普通はみんな敬遠し改まってしまおうが、ジャクレイ部隊だけは違った。最初からかなりフレンドリーに、悪く言えば、プライベート無視して接してきたのだ。

しかしながらその後も友好関係は続いており、魔王城投入前などにも何度も世話になっている。特にサックとジャクレイは、非常に『ウマ』が合い、年齢差を越えた親友同士となっていた。

ジャクレイは、サックの『追放』理由を知らない。だが、田舎に帰ったとの風のうわさは耳にしていたため、ビルガド最北端の地に彼が居たことに心底驚いていた。

「やり残したことが有ったからな」

「おおっ！　とうとう『遊郭』で捨てる気になったか！　……んで？

『初めて』はどうだった?！」

「……死にかけたよ」

「童貞は失わず、命を失いかけたと！　ガツハツハ!!」

バンバンバンっ、と机を叩き笑うオツサン。まったく面白くねえ、と、又焼を齧りながら、不満顔のサック。

ジャクレイという男。実は妻が3人いる。この陽気な性格に惚れこむ女性が多いらしい。サックは正直羨んだが、逆に彼に、女性関係のアドバイスを貰うことも多々あった。

なお、そのアドバイスの凡そは『花街で遊べ』であったことは、念のためここで記しておく。

「しかしまあ、派手にやられたな」

ジャクレイは急に、渋い顔になり、サックの脇腹に目を向けた。

いくら油断していたとはいえ、元勇者に重傷を負わせた暗殺者。その女を取り逃がしたのだから、厳しい表情になるのも伺える。

ぐびぐび……と、スープを一气飲みして、ほぼほぼ食事を平らげた

サツクは、同じく怪訝な顔をして答えた。

「あいつ俺を、父親殺しのカタキと言っていた。俺は少なくとも、忍者の父親なぞ手にかけてたことは無い」

「勘違いで殺されかけたってことか？」

「催眠の類かもしれない。誰かにウソを吹き込まれた可能性が高い」

「ごくごく。最後にヤギのミルクを豪快にあおった。」

「なるほどな、厄介だな」

ジャクレイは厳しい表情のまま、うーんと、昨夜のことを再度思い出していた。

「すげー厄介。俺の鑑定が効かない、暗殺のスペシャリスト。なによ
り……」

「なにより?」

ぐびっ。

残ったミルクを全部飲み干したサツクは、ジャクレイの疑問に真面目な顔で答えた。

「……色香を使う」

「わかる。あのくのいちネーチャン、プロポーションよかったな」

「ああ……ジャクレイ」

「なんだ?」

「女のひとのアレって……柔らけーんだな」

薄れ行く意識の中、ハッキリと記憶に残っていたのは、二つの柔らかな感触。

サツクは両の手を『ワキワキ』させ、あの触感を思い出していた。顔がだいぶ綻んでいる。

「大分余裕じゃねーか」

「今だから出来ることだよ。ただ……び、美人さんだったのは確かだ」

「それには同意だ。忍者じゃなかったら、ワシ口説いていたぞ」

「おま——奥さんたちにチクるぞ」

思春期の少年レベルの会話が続く。しかしそんな馬鹿馬鹿しい下衆な話をしているなかでも、彼らの緊張の糸は途切れることはなかった。

いつ、あのくのいちが再度襲撃してくるのかわからない。彼女たちが、復讐を諦めるとは思えない。

窓の外から強襲。

娼婦の時のように、誰かに化けてくる。

それとも、建屋を火攻めする……なんて可能性も排除できない。

あらゆる可能性を考慮し、詰め所は昨夜から厳戒態勢を敷いていたのだった。

「……外が、騒がしくなってきたな」

確かに。なんというか、人が集まってきているような、雑踏の音。

ざわざわ、と、何かを観るための野次馬の集団のような、そんな騒がしさ。

「……ジャクレイ総隊長！」

廊下からジャクレイの部下らしき人物が、部屋に飛び込んできた。

「きたか！ どこだった！」

ジャクレイが立ち上がった。サツクもほぼ同時に席を立ち、いつでも動けるように体勢を整えた。

「そ、それが……昨夜の女たち、正面玄関に向かってまっすぐ歩いてきているんです！」

「な、正面からだど！」

ジャクレイもサツクも、予想外だった。彼女たちは、真正面から、詰め所に向かっていったのだった。

シャン……シャン……と、

鳴り響く、鈴の音とともに。

第5話【その2】

詰所の外に出たサツクとジャクレイは、ただ啞然として固まっていた。
まった。

シヤン……シヤン……。

忍者姉妹の妹——ヒマワリが、昨晚と同じ黒装束を纏い、三段重ねの鈴の輪を棒に刺した特異なベルを鳴らし歩いていた。黒頭巾のマスク部分は外れており、顔を出していたが、彼女の顔は非常に複雑な感情にまみれていた。

そして問題なのは、姉のくのいち、サザンカだ。

後ろ襟をうなじから背中にかけて大きく開けるように着付けられた、赤と白を基調とした着物。もともとスタイルは抜群な彼女の、妖艶な魅力をさらに引き出す様相だ。

頭部は、こちらの特徴的な、真っ白い大きな袋状の布で覆われていた。フードのようにそれをかぶり、かつ俯いていたため、サザンカの表情ははつきりと伺うことができなかつたが、ちらちらと見える顔は微笑んでいるようであった。頬もほんのり赤らんでいる。

サツクは、その着物の意味を知っていた。過去にバザーの装備品を鑑定していた際に見たことがある。この格好は、忍者の里がある国特有の——ウエディングドレス婚姻装束だ。

「なんじゃありゃ、なあサツク、オレは何を見せられてるんだ」
知るか。

サツクも何が起こっているのか判らなかつた。これは、サツクを油断させるための作戦なのか。それとも別の意図があるのか。

シヤン……シヤン……。

そんな心配をよそに、忍者姉妹は詰所正面の街道を練り歩き、とうとうサツクたちの前まで来て立ち止まった。

「偽勇者!!」

シヤン！ と、ヒマワリの大声に合わせて鈴がなる。サツクを睨み付けるその顔には、やはり、怒りとも悲しみともとれる、複雑な心情を浮かべていた。

「な、なんだっ！ ……って、偽じゃない！」

場の空気に飲まれて、サツクはつい返事をしてしまった。

「おい、サツク！ なに身分バラシてんだ！」

突っ込むジャクレイ。が、このお陰で、サツクの名前が相手にも知られることになった。

まるで、昨晚の意趣返しだ。

「……サツクって、お名前なんですね」

白頭巾を深く被ったサザンカが口を開いた。

しまった、と、顔をしかめるジャクレイ。

頭を抱えてしまったサツク。

渋い顔を崩さないヒマワリ。

三者三様の思いが入り乱れるこの場の空気に、さらにサザンカが一歩入り込む。

「アツチの名前は、サザンカⅡカズラ。カズラ家長女。今日は、主ぬしに

……求婚を申し込みに来た」

するとサザンカは頬をさらに赤らめ、両の手で顔を隠してしまった。どうやら恥ずかしいようだ。

そしてサツクも両の手で顔を隠してしまった。どうやらこっちは激しい頭痛に見舞われたようだ。それは、貧血が由来なのか、それとも。

「えーと、一旦整理しよう。な？」

「もう、アツチのココロは決まっております。アツチはあんたに惚れてしもうたんや」

「姉様の気持ちを汲み取れこの外道がっ！」

「サツク……よかったな、綺麗な嫁さん見つかった」

なんでジャクレイもそっち側なんだ！ という怒号を発する前に、ギリギリ飲み込んだ。

既に周囲には、野次馬が群がっていた。

珍しい異国の花嫁が、詰所に立つ男に対して、女性側からプロポーズしている。そんなシチュエーションが白昼堂々行われていたら、そりや通り過ぎる人も踵を返して戻ってくる。

雑踏の中から「素敵ね……」「綺麗だなあ……」などといった感嘆の
声が聞こえてくる。彼女たちが『暗殺を生業としている』姉妹だとい
う事実を知らない、対岸の第三者による平和な意見。

「ちよつと待つてくれよな！　なあ、あんたは俺を殺そうとしている
んだろ?!?!」

「うむ、その気持ちは変わりない。主は、アツチたちの父上のカタキ
だ」

矛盾。強靱な矛と盾の逸話ではあるが、正に今がこの慣用句の使い
時だ。

「……だがな、サツク殿」

サザンカは顔を上げた。頬を赤らめ、目は憧れの人を思う羨望の眼
差し。そしてハニカミ。恥ずかしそう。

(サツク、これはやばい。彼女本気でお前を惚れてるぞ)

ジャクレイが小声でサツクに話しかけた。一瞬だけ悪乗りこそし
たものの、事の重大さに改めて気付かされた格好だ。

「アツチは里の中で、一番強い男と結ばれる筈だった……だが、里で一
番はアツチの父だった。だから……主を婿に迎えることにしたん
じゃ」

「こつちの希望は無視かい!!　——てーか！　俺はお前さんの父つて
奴を殺して……」

シャン!!

激しく鈴が鳴った。婚礼用の玉鈴を持ったヒマワリが強くかき鳴
らしたのだ。

「この外道！　姉様にさらに恥をさらさせる気か！　姉様の本気に答
えてみるよー!」

などとカツコいいセリフを申しているものの、ヒマワリの顔は以前
こわばったまま。いまにも泣きそうである。たぶん、彼女はこの婚礼
には大反対なのだろう。

そして、サツクにとってさらに追い打ちがかけられた。

ヒソヒソ……

『ええ……あんなかわいい娘のプロポーズよ……』

ヒソヒソ……

『ひどい男だな……前で恥かかせるのか』

ヒソヒソ……

『ああいう男が女を不幸にするのよ……』

事情を知らない野次馬たちである。

完全にサツクは悪者の体だ。

「……不幸だ……」

「アツチの思いの、答えを聞かせてくりやれ……」

サザンカが、サツクからの回答を求めてきた。

赤面しているが、少しずつ目付きが鋭くなってきた。答えを急かしているようだ。

「さて！ 1個だけ確認させてくれ！」

「なんででしょう」

「お前たちにとって、俺は『親のカタキ』なのだろう？ で、『復讐』は果たしたいんだろ？」

変な汗をかきながらサツクは質問した。

しかし、そんなの当たり前じゃないかくらいの軽い回答が、サザンカの口から飛び出した。

「もちろん、だからアツチは、主と婚姻し……」

「婚姻し……？」

「一夜を共にしたのち、主を殺して、アツチも死ぬのじゃ」

ニヤリと、妖艶な笑みを浮かべたサザンカ。

キラリ。サザンカはいつの間にか、裾からクナイを取り出していた。良く研がれたそれは怪しい金属の輝きを呈していた。

この女、本気だ。頭のねじが3本くらい吹っ飛んでる。

するとサツクの肩に手が置かれた。ジャクレイの手だ。

「腹をくくりな、サツク。童貞卒業とともに死ぬるなんて、男として本望じゃねえか」

てめえ他人事だと思って……。妾3人の万年発情期男に言われたくねえ。ワナワナと肩を震わせるサツク。

「……ちなみに嬢ちゃん、サツクが婚約拒否したら一体どうすうんだ

？」

ジャクレイの素朴な疑問だったが、この質問はするべきではなかった。

再度、サザンカが「当り前じゃないか」みたいな顔をして答えた。

「その時は……ここに集まった人間、皆殺しじゃ」

一瞬、空気がピリ付いた。彼女の『殺気』によるものだ。これを感じていたのは、サツクと、ジャクレイと、実力のある数名の憲兵くらいだったが、つまりは彼女たちの言葉は『本気』という証拠でもあった。

サザンカは左手にも武器（棒手裏剣）を隠し持っており、また、ヒマワリは既に忍者刀の柄に手を添えていた。

拒否したら、集まった一般人の命が危ない。野次馬を集めた時点で、サザンカたちは多くの『人質』を獲得していたのだ。

再度、ジャクレイがサツクの肩を叩いた。

「腹をくくりな、サツク。オレはまだ死にたくねえ」

サツクの『選択肢』は、一つしかなかった。

第5話【その3】

「まずは……お付き合いからっ！」

一番犠牲者を出さない、無難な回答。サツクが悩み抜き、返した答えだ。

一瞬雲行きが怪しくなったが、『この国では結婚前にデートという儀式を行う』と、まるで国のしきたりの如く説明（言い訳）し、なんとかサザンカを丸め込むことができた。

「とういうわけなので、今日のところはお引き取りを……」

「いやじゃ。すぐに、その『デート』とやらをするぞ」

丸め込めてなかった。

サザンカは一刻も早く、サツクと結ばれてからの『仇討ち』を望んでいた。

そこからは議論を行う余裕もなく、サツクはサザンカに半ば無理矢理デートを強制させられた。

ただ、サザンカは『デート』を知らない。そして、サツク自体も女性とのお付き合い経験が無い。

何をすればよいのか二人で判っていないかった。

「……ええい！ オレがプランを作ってやつから！ ちと待つとけ！！」

こういう時には、女三人を娶ったおじさんの経験が役に立つ。

ジャクレイが用意したメモを持ち、サツクとサザンカは早速、デートを開始した。もちろん憲兵たちは2人を自由にさせる訳はなく。憲兵総出で、二人を遠目で監視しながらのデートであった。

+++++

「ほう！ これが『デート』というものか！」

ハクノ区の中でも、ブティックやスイーツ店などが立ち並ぶ、いわゆる『女の人受け』しそうな商店街を、サザンカとサツクは歩いていった。

事情をなにも知らない人から見れば、仲睦まじい恋人同士にも見え
たかもしれない。

サザンカはサツクの腕に絡みつき、胸を腕に押し付けている。
「どうしたサツク？ この体勢はイヤかえ？」

サツクより少し身長が高いサザンカが、軽く前屈みになりサツクの
顔を覗き込む。

「い、いやー！ いやー！ いいと思うよー！」

顔を真っ赤にしながら、返答した。

（むむむ胸！ 胸！）

暖かな、柔らかな温もりをサツクは右腕に感じていた。

「母から『色香』を学んだ時の技じゃ。ほうれほうれ」

さらにサザンカは体を押し付けてきた。

（嗚呼、女神様ありがとう。けど、お胸を触ったら私殺されます）

嬉しさ半分悲しさ半分な状況に、なんだか胃どころか心臓までシク
シク痛みだした。

そんな状況の二人であるが、周囲の空気は緊張で張りつめていた。
いつサザンカやヒマワリが暴走してもおかしくない状況のため、一般
人の規制を張りながらのデート。まるで、要人のお忍びである。

そしてその二人の後ろを、尾行する二つの影——ジャクレイと、ヒ
マワリだ。

憲兵の長でありサツクの友として、後ろからサポートをせんとする
ジャクレイ。

一方ヒマワリは、なぜかジャクレイと一緒にあってついていってお
り、サツクの動向を逐次気にしていた。

「……なあ、妹さん、お姉さんの結婚は祝福できんのか」

「できるわけないだろう!!」

ジャクレイの質問に、ヒマワリは噛みついた。

「姉様が、あんなに一途になったことなんて見たことない。……相手
が父上のカタキでなければ、アタシも祝福したさ」

そりゃそうか、といった表情を見せたジャクレイであったが、どう
も、そう簡単な感情を抱いているわけではなさそうだなと、思った。

ヒマワリは単純に、唯一の家族である姉が盗られるのがイヤなのだ。

ふつ、と、ジャクレイは小さく笑った。本当なら年齢10歳ほどの少女の頭を撫でまわしてやりたいが、多分そうすると、右手が身体からバイバイするので控えた。

（サツクよ……ちゃんと、『策』はあるのか？ この姉妹の『カタキ』って誤解を解かないと、全員が不幸になっちまうぜ……？）

そんなジャクレイの心配をよそに、サツクとサザンカが最初に訪れたのは呉服屋だ。

さすがにサザンカの婚礼衣装で街を巡るのは少々派手過ぎであるし、本人も動きにくいだろうとの、ジャクレイの考えから、最初に服屋を選んだ。

幅広い年齢層に対応した服を扱うお店で、ジャクレイの行きつけでもある。

余談ではあるが。このお店、夜中に泥棒に入れ、他国の婚礼衣装一式を盗まれたらしい。つい今朝がた、盗難届が出されたばかりだ。

「……勇者一行に、全部ツケとくからな」

「え、支払いこつちななの？」

そんな、ジャクレイとサツクの会話をよそに、サザンカは見知らぬ服のデザイナーの豊富さに、目を輝かせていた。

「アッチ、こんなにかわいい服初めてみた……」

「姉様……アタシもです……」

ヒマワリも一緒になって、ちやつかり服を見て回っていた。この部分だけ切り取れば、仲の良い姉妹が田舎から都会に出てきてギャップに驚いている、くらしいのほのぼの話なのだが。

現実には、非情な殺し屋姉妹の戯れだ。

しかし結局、服の種類豊富さと、彼女らの知識のなさから全く服が決まらず。最終的にはジャクレイが適当に見繕うことになった。

「ホントは彼氏を選ぶもんだぞ」

「……まじ、スマン」

しかし、ジャクレイのチョイスは流石のものであった。背中の子

た膝まであるトップスに、足のラインが出る細めの麻ズボン。シンプルであるが、サザンカの長い髪と非常によくマッチした可愛い服だ。

「ほおおお」

「ねえさまかわいいっ」

「おおおお」

「……」

鏡の前でぐるぐる回るサザンカ。長い髪が綺麗に広がり、さらに美しさを際立たせた。回るたびに、髪の毛から仄かにいい匂いがした。回る姿を見て感嘆の声を上げるのは、ヒマワリとジャクレイ。妖艶な美しさは、身内も魅了していた。

「どうじゃ、サツク」

回転を止めたサザンカは、振り向きざまにサツクを向き、感想を求めた。『振り返り美人』とはまさに彼女のためにある言葉だった。

「……あ、ああ。綺麗だ」

一瞬、サツクも見惚れてしまっていた。この女に惚れたら殺されるはずなのに、しかし自分の中で、少しずつ彼女に惹かれてしまっていることが感じ取れた。

「さあ、次はどこへ行く？」

楽しそうに笑うサザンカ。彼女の心境は、誰にも伺い知れない。

次に向かうは、アクセサリー屋だ。ここもジャクレイ顔馴染みの店である。

安全上、一般の店に行くことはできない。

きらびやかな宝石が並ぶショーケースを眺める、サザンカとサツク。

それを、今回も遠目で覗き見る、ジャクレイとヒマワリ。

「綺麗……」

宝石が付いたブローチを見て、サザンカが呟いた。彼女の横顔をサツクが横目で覗く。こうしていると、本当に『かわいい彼女』しか見えない。

しかし実際は、腰には反物を巻き忍者の暗器が仕舞われているのが

確認できる。ちらちらと見え隠れするクナイや手裏剣が、サツクを現実に引き戻す。

「……買おうか?」

「え?」

驚くサザンカを尻目に、サツクはアクセサリーが陳列されている棚の中から、一つを指さした。

「これってさ、簪（かんざし）だよな」

親指の爪より一回り大きな、緑色の宝石があしらわれており、そこから二又に分かれた長い金属の棒が水平方向に延びている。先端は丸めであるため、刺す道具ではないらしい。

「……ああ、異国で簪を見るところは思わなんだ」

これはこの国のものではない。サザンカ達の国で使用されている、髪留めの一種だった。

サツクは、得意の鑑定で、数ある陳列物から『それ』を見つけ、どういったモノであるかを理解していた。

すると、サツクは店員を呼び、先ほどの簪を購入した。

「ほれ。付けてみなよ、付け方わかるんだろ?」

買った簪を、すぐにサザンカに渡した。髪飾りであることまでは理解していたが、その付け方は判らなかつたのだ（全装備可能スキルは、異性専用装備は例外となる）。

「……うん」

コクリ、とサザンカは頷いたのち、サツクから受け渡された簪を使って、長い髪を結わった。長い髪を後頭部で纏めるとぐるりと巻き、出来上がったおだんごに簪を器用に突き刺し、固定させる。

「どうじゃ?」

はにかんだ笑顔が眩しかった。髪を書き上げたことで、背中からうなじのラインが現れる。

頬は赤らみ、恥ずかしさによる照れを感じさせた。

「似合ってるよ」

サツクは微笑んだ。すると、サザンカはさらに顔を赤くした。耳からうなじまで紅潮していった。

そんな二人のやり取りを、店内の物陰から覗く二人。

ジャクレイは『いよっし!!』とガッツポーズ。最適なタイミングで最高のプレゼントを手渡し、返す言葉も及第点。サツクの初デート成功を見届けられ満足げだった。

なお、結婚したら殺される件については一旦忘却の彼方に追いやっていた。

一方、ヒマワリはやはり不満顔だ。

何とかあの男を、サザンカと結ばれる前に絞めてしまいたい衝動に駆られるも、大好きな姉が選んだ男に簡単に手を出すわけにいかない。

自分と姉との想いのすれ違いに、ずっと葛藤していた。

そして、サツクも一息つくことができた。とりあえずの『打開策』を何とか見出すことができたのだ。

あとは、ちゃんと効果が現れることを願うばかりだった。

第5話【その4】

甘いケーキの香りや、爽やかな紅茶の匂いが混ざりあう、人気の喫茶店。

だが、本日のみ、貸切状態だ。

衛兵が店舗入り口を塞ぎ、他からの入店を拒んでいた。何故なら、お店の中では『暗殺者』が初めてのパンケーキに挑戦していたからである。

「ナイフとフォークの使い方、上手いな」

「ひと通り、作法は学んでいた。暗殺対象に近づくのに必要になるからな」

そういうと、生クリームがたっぷり乗ったパンケーキを口に運んだ。

「……!!」

サザンカは目を見開いた。とても驚いているようだ。

「どうした？」

サックも同じものを注文していたが、見た目は普通のパンケーキである。まあ、かなりたっぷりりのクリームでデコレーションしてあるが。

「アッチ、こんな旨いの食べたの初めて……」

サザンカの顔がどんどん緩くなっていった。幸せをかみしめている、そんな表情だ。

……とても、目の前の人間を殺そうとしているとは思えない。

（……『効いて』きたか？）

サックは黙ってパンケーキを食った。一緒に注文した紅茶は無糖のストレートにしておいてよかったと思えるほど甘かった。

「……サザンカ、もう一回確認したい。『何故、オレを襲う?』」

「愚問だ。アッチの父のカタキだからさ。忘れたとは言わせない」

忘れた以前の問題である。サックは全く記憶にない。しかしサックは、今が好機と考え、さらに深く追求した。

「いつ、どこで、どうやって、そして何故『オレ』だと思った? 人違

「いの可能性は無いのか？」

今の今まで襲われるだけであつたが、ここでサツクは初めて、核心に迫った質問を投げることができた。今のリラックスした精神状態で、かつ、サツクの目論見通りに『効いて』いるなら、彼女の答えに矛盾が生じるはず。

「……」

カタン、と、サザンカはナイフとフォークを置いた。そして、ゆっくり紅茶を口にした。

「はい！ グラスティート、特製ジャンボパフェお待ちしました〜」

サツクたちの席の後ろでは、ジャクレイとヒマワリが注文していた品が届いたようだ。超巨大なパフェ（本来は数人でシェアするもの）を目の前にしたヒマワリが、あまりの迫力に目を真ん丸にしていた。

一方のジャクレイは、そんなヒマワリのリアクションがいちいち面白いらしく、ニヤニヤと笑っていた。まるで孫の成長を見守る爺だ。うしろで何してんだあいつら。

「……アツチらは、魔王軍討伐で名を上げるため、里を出たんだ」

そんな後ろの席の事情など露知らず。サザンカは身の上話を始めた。

忍者が私情を語ることなど、本来はあつてはならない。だが、今のサザンカは、『催眠が解けかかっている』状態。虚と現実があいまいな状態になっていたのだ。

『ペリドット』。

先ほど、サツクがサザンカにプレゼントした簪かんざしに施されていた宝玉の名前だ。

この石には元々、邪気を払う魔除け効果が付与されている。サツクは偶然、アクセサリ屋でそれが装飾されている簪を見つけたのだ。

そして、彼女に手渡す前に、さらにその簪に対して『潜在解放ウェイイクアツプ』を試みていた。

破邪の効果の上乗せである。

これが功を奏し、少しずつであるが、サザンカに掛かっていた暗示が覚め始めていた。

かなり強い催眠は、一度に解くと後遺症が残る。だから、ゆっくり時間をかける必要があったのだ。

(本当なら、経口摂取で薬を飲ませたいのだが、それも難しいし、何よりどんな類の催眠かはつきりしないからな)

「父とアッチと、ヒマワリの3人で、荷物に紛れて北の大地に密航してきた。でも、着いた先は思っていた街じゃなくて、魔王討伐の募集をしてなかった」

「なるほど、定期便じゃなく交易品の船にでも忍び込んだのか」

「そこで、路銀も尽きてしまったので、アッチらは一仕事することにした」

「暗殺か？」

「いや、日雇いの給仕の仕事だった」

そういうと、再度紅茶に口を運んだ。パンケーキはいつの間にか食べ終わっていた。

「だが……それが間違いだった」

「何かあったのか」

「ああ、雇われていたお屋敷に、強盗が入ってきて、父が殺された」

すると、後ろの席のジャクレイが衛兵を呼び、何かメモを渡した。どうやら、サックとサザンカの会話を逐次記録していたようで、サザンカたちの記憶に繋がるヒントがないかをずっと探っていたのだ。

彼はちゃんと、仕事はしていた。

一方、ヒマワリは巨大パフェに夢中になっていた。どうやら、サックたちの会話に全く気付いていないようだ。口の周りにクリームを付けながら、残すまいと夢中に食べ進めていた。

「で、その強盗が、オレだと言いたい訳か」

「確かにアッチは、月明かりに照らされるオマエさんの顔を見た。そして、腹を裂かれ殺害された、わが父の遺体も」

「だが、俺には全く身に覚えがない。強盗に入る理由もない」

「……でも確かにアッチは見たんだ、お前さんの顔を……」

気が付けば、彼女の目はうつろになっていた。破邪の宝玉の効果が色濃く現れ、催眠の状態を打ち消そうと強く作用しているようだ。

そして時折、彼女の顔が苦痛にゆがむ。脳に直接作用する効果であるため、どうしても頭痛や吐き気といった症状が伴う。

「……少し話題を変えようか」

心理カウンセラーよろしく、サックが話をさえぎった。これ以上、この話題を続けると、彼女の精神が壊れる可能性がある。

しかし彼女は話を続けた。

術が解け始めているのだろうか？ いや、宝玉の力が効きすぎている可能性もある。

「その後アツチらは、父を失い路頭に迷うことになった。途方に暮れていたとき、『勇者様』が助けてくれたんだ」

「勇者？」

「月明かりに反射して、花卉状の痣が見えた。勇者の証と聞いたことが……」

サザンカの額に大量の汗が浮かぶ。

頭の中で、本当の記録と偽りの記憶が混ざってしまい、混乱をきたしているのだろう。脳の処理が追いついていないのかもしれない。

「サザンカ、ごめん、止めよう」

サックはサザンカの髪留めに手を触れた。

強制的に潜在能力を解放させられている宝玉を、彼女から遠ざけようとした。

バシッ!!

だが、その手をサザンカが振り払った。

彼女が立ち上がった勢いで、テーブル上のお皿やカップが落ち、派手な音を立てて砕けた。

「……サザンカっ！」

サックがサザンカに呼び掛けた。彼女の意識が逸脱する前に、引き戻そうとした。

「あ……」

立ち上がったサザンカの目は空を仰いでいた。カタカタと痙攣し、そして、そのままの体勢で、背中側から倒れた。

「あぶねえっ！」

ギリギリのところ、サツクはサザンカをキャッチした。彼女はぐったりとしており、昏睡状態だった。

「ね、姉様っ！」

異変に気づいたヒマワリが、サツクたちに近づいた、が。

「あ……あれ、れ」

ヒマワリも、なにか様子がおかしい。『何か』を一点に見つめており、そして肩を小刻みに振るわせ始めた。

「む、危ないっ！」

咄嗟に、ジャクレイが手を伸ばし、ヒマワリを抱え込んだ。刹那、ヒマワリも気を失ってしまった。

「おい……おい！ サザンカっ！」

サツクが声をかけるも、サザンカは微動だにしない。

(……やり過ぎたっ！)

サツクはサザンカの頭から簪を抜き放った。

すると同時に、緑の宝石にヒビが入り、派手に砕け散った。

『潜在解放』ウエイクアップの加減が効かない。

十分気を付けていたつもりだったが、サツクがコントロールできないレベルで効果が強く出てしまった。

(オレの能力は、ここまで堕ちたかっ！)

魔瘴気を浴びて余命宣告を出されてから、日に日に力を失っているのが判っていたが、これほどまで制御が効かなくなるとは……。

「……誰かっ！ 救護班を連れてこいっ！」

ジャクレイの大声で、サツクは我に返った。自分の心配など二の次だ。早く、サザンカを介抱してあげないと。

彼女たち……サザンカもヒマワリも、『謎の勇者』に記憶を刷り込まれた『被害者』なのだ。

第5話【エピローグ】

ジャクレイが陣頭指揮を取ってくれたお陰で、事はスムーズに進んだ。

すぐに憲兵たちが医者呼び、さらに、サックに気を利かせて多量の薬品を持ってきてくれた。

サックが使用するアイテムの効果は何倍にも膨れ上がる。気つけ薬などで窮地を凌ぎ、サザンカ、ヒマワリとも心音が安定してきた。

「……………ここはホテルじゃないんだが、仕方なしか」

そして詰所の牢屋に、彼女たちを運んだ。

ふたりぶんの寝床を急造し、鉄格子の中で寝かせることにしたのだ。

急に意識が覚醒した際に、彼女らが暴れない保証などどこにもない。一番、彼女たちにとつても、サックたちにとつても安心な場所である。

「……………」

静かに寝息を立てるサザンカを、鉄格子越しにサックが覗いていた。彼女の寝顔はとても穏やかであった。

「サック、何か分かったか？」

ジャクレイの呼びかけに、サックは我に返った。サザンカの寝顔に見とれていたのだ。

「あ。ああ……………。ひとつ、心当たりがある」

「……………父親殺しのか？」

「そういう冗談はよしてくれ——『オレが恨まれる』心当たりだよ」

そういうと、サックは腰に巻いた革のホルダーから、幾重にも折られた薬包紙を取り出し、ジャクレイの前で開いた。

「葉っぱ？…これは紅茶の葉か？」

「ああ、ただの紅茶の葉っぱだ。だけど、彼女たちはこの紅茶の香りや色で、記憶がフラッシュバックしていたみたいだ」

元々仕込んだ破邪の宝玉の効果の暴走に加えて、彼女たちの記憶を

混濁させる『トリガー』になった、と、サツクは推測していた。

「ヒマワリには、宝玉の効果は届いていなかったが、床にこぼれた『紅茶』の匂いを嗅ぎ、凝視した瞬間、昏睡した」

「紅茶がきつかけねえ。てんで意味が解らん」

「あとは、服屋で感じた『匂い』だ」

「呉服屋か？ 何かあったか？」

「あの時、サザンカの髪から、かすかに御香のにおいがした……催眠香の残り香だ」

なんと、と、ジャクレイが驚いた。確かにサザンカがくるくる回つた際に、いいにおいがしていた。

「そして、『紅茶』と『御香』、俺への『恨み』。この三つでつながる人物がいる」

薬包紙を乱暴に包み直し、サツクはポケットに押し込んだ。

「ジャクレイ、頼みがある。『イチホーイーガス』という人間についてできるだけ情報を集めてくれ」

「……！ ミクドラム火災の行方不明者か！」

話が早い。サツクはコクリと頷いた。

「ソイツが生きていれば、オレへの復讐心は相当なものだろう。それに……茶葉の在庫は処分したが、奴の『加工場』は全く手を付けなかった」

今更ながらの後悔だ。当事者が全員亡くなれば、秘密の加工場も自然に忘れ去られるだろうと思っていたのだ。

だが、彼女は『生きている』。どうやって生き延びたか全く判らないが、状況証拠から推測するに、イーガス家の紅茶の影響が考えられた。サツクはさらにポケットからいくつかの紙の包みを取り出し、空中で混ぜ合わせた。

「急造だが、催眠を解く御香を調査した。後で炊いておいてくれ。かなり根深いところまで侵されているから、2〜3日かけてゆっくり『治療』させたい。それと……」

またなにかサツクがやろうとしたことを、ジャクレイが制した。「病み上がりが無理するな。へばっている時にいろいろしても、良い

結果は生まれないぜ」

「……でも、彼女たちは、オレのせいで」

「何もするな、とは言っていない。『一旦休め』ってこと。お前さん、『力を制御』できてるのか？」

くつ。と、サツクの顔がゆがむ。

ジャクレイは普段、飄々としてはいるが、見ているところは見ている。

サツクの『潜在解放』についても理解をしてもらっている数少ない人物だ。

「逃げやしないよ。ここの牢屋は最新鋭。物理＋魔法＋付与術の3重ロック機構だ。たとえ忍者でも、道具使いでも、この鍵を開けることはできないだろ？」

「……」

ジャクレイの言う通り。この鍵は非常に強力なロックがかけられ、おそらくサツクでも、鍵無しで簡単に開けることはできないレベルの錠だった。

「一旦休め。一晩ゆっくり寝て、今よりさらに良い策を考えよう。お前さんが寝てる間に、夜勤の連中使って、イーガスの所在を調べさせてやるからさ」

そうジャクレイがいうと、ウインクを飛ばしてきた。50歳のおじさんウインクは正直キモイが……何故か心強かった。

その後サツクは、言われるがまま、ジャクレイが用意してくれた安宿に連れていかれた。

半ば強引に部屋に連れ込まれたが、ベットで横になると突然睡魔に襲われた。やはり疲労が蓄積していたのだ。

（悔しいが、一回休もう。明日、改めて治療法と……イチホ||イーガスの居場所を突き止める）

決意を固めた次の瞬間には、サツクは深い眠りに落ちていった。

能力使わず後悔したけど、そのぶん未来に繋げたい 第6話【その1】

翌日になっても、彼女たちは目覚めなかった。牢の中では、昨晚にサツクが調査した御香が焚かれており、鼻に抜ける独特な臭いが充満していた。

「……」

サツクは鉄格子を挟み、サザンカの顔を覗き見た。時折、何かになされていくようで、顔を僅かに歪めたりしていた。

すぐ横のベッドでは、ヒマワリも寝息を立てていた。彼女のほうは比較的、穏やかに眠りに着いていた。

「お、早くからお勤めご苦労さんっ！」

早朝からサザンカたちの見舞いに来ていたサツクの後ろから、デリカシーのない一言が飛んできた。ジャクレイだ。

「……」

「す、すまん、そんな怖い顔をするなよ」

いつになく、サツクは苛立っていた。ジャクレイも、これほどまで感情を露にしたサツクはあまり見たことがない。

「お詫び……じゃないが。昨日の依頼の品だ。受け取れ」

するとジャクレイは、左小脇に抱えていた紙の束をサツクに押し付けた。

長方形に揃えられたそれは、短辺側で紐で綴じられていた。

「イチホーイーガスの所在か！」

サツクは受け取った紙束、もとい、捜査報告書を見た、が。

「残念ながら、居場所は不明。ミクドラムの憲兵の奴ら、買収がバレるのが嫌でか、捜査は穴だらけ。分かってるのはこれだけだ」

紙には、『イチホーイーガス、所在不明』の一文のみで、残りは、彼女の紅茶についてと、秘密の加工場の場所について書かれていた。

「加工場の場所は分かったのか」

「……このページだな」

横からジャクレイがレポートに手を掛け、数ページほど送った。そこには、写真機で撮られた小屋とその中身が記されていたが、「もぬけの殻……か」

「綺麗さっぱり、持ち出されてたらしい。おそらく在庫の葉っぱもな」
ギリツ、と、サツクが歯を食いしばった。

「俺があの後、加工場^{こっ}まで対処していれば……」

御香の効果か、少し寝息が落ち着いてきたサザンカとヒマワリの寝顔を見て、何度も過去を悔やむサツクであった。

そんなサツクを見かねて、ジャクレイが話しかけた。

「サツク、『後悔』は此くらいにしておけ。悔やみは遺恨を残し、自らの足を引っ張るだけだ」

「分かっている」

「分かかってねーよ。するなら『反省』だろ。反省し、二度と同じ過ちを起こさせるな」

『皆、『後悔』はここまでだ。同じ間違いを二度と起こさせない！ 『後悔』を『希望の糸』に変え、これを未来に繋ぐ！』

勇者イザム——七勇者のリーダーの言葉を、サツクは思い出した。

極寒の街『イリサーヴァ』。

魔王の城からは少し離れた街で、サツクたち七勇者が数日の間、世話になったことがある。

その街は、勇者たちが離れた翌日、魔王の右腕と称される三鬼神たちによって、たった一晩で壊滅させられた。

人類、そして勇者たちへの見せしめであった。

イザムは悔やんだ。いや、その場の七勇者全員が悔やんだ。

一旦街を離れ、翌日に戻ろうとしたら、全てが失くなっていったのだから。

絶望に打ちひしがれ、後悔の念に苛まれたその場の空気を、先のイザムの言葉が変えた。

彼は、他の勇者が持たない『真の勇者の心』を持っていたのかもし

れない。人類の希望たる心構えは、他の勇者とは違っていた。

「……そうだな、ジャクレイ。これを糧に、未来に繋げないとな。とにかく、まずは彼女たちの治療と、真相解明が先決だ」

「ふん！ やつと目が覚めたか『勇者様』」

「よせよ、オレは引退済みだ」

イチホーイーガスの行方は分からなかったが、秘密の加工場の中身がすべて無くなっていった事実は、彼女の生存と、今回の原因であることを明確にした。

彼女は一体どうやって、あの窮地から生き延びたのか。

「……誰か『協力者』がいる可能性は？」

サツクは、ジャクレイに聞いてみた。イチホに手を貸した、例えば憲兵などがあるのでないか。

「その線なんだが、これを見てくれ」

サツクに渡した紙束を一旦ジャクレイが引き取り、ページをめくってサツクに見せた。

そこには、新聞記事の切り抜きが貼り付けられていた。そして見出しはすべて、『偽勇者』に関係するものだった。

「彼女ら、お前さんを『偽勇者』と決めつけてただろ？ で、『勇者』に助けられたとも言っていた」

「パンケーキ屋での会話だな。確かに言っていた」

「それって、『逆』なのかなと思ってな、少し調べてもらった」
「なるほどな」

つまりは、サツクは『勇者』であることは間違いないが、彼女たちサザンカとヒマワリを保護し、紅茶で偽の記憶を植え付けたのが『ニセモノ』というわけだ。

「オレの暗殺を指示した『ニセモノ』と、イチホーイーガスが無関係とは言い難い」

「ああ、で、特に気になったのが、この二つの記事だ」

まずは一つ目、と、ジャクレイが紙束からその部分を抜き外した。

その記事の切り抜きの見出しには、こう書かれていた。

『追放勇者、教団を設立か』

「いかにも、売り目的で書かれたゴシップ記事の見出しといった感じだな」

サツクの性格では到底起こしえない内容だ。ついサツクは鼻で笑ってしまった。

「最初はそう、俺も思った。アイサック・ベルキッドは、陰キャで狡猾でむっつりでカリスマ性もない。こんな男が教団を作るなんて、豚が火起こしするくらい不可能だ」

今の言葉をすっかり胸に刻み、女神の後はコイツをぶん殴ろうと心に決めたサツクであったが、その気持ちを知ってか知らずか、ジャクレイはもう一枚の報告書を見せた。

「だがな、この宗教団体……ここ数日で、信者の数の伸びが異常なんだ。見てくれ」

報告書には信者数のグラフが示されていた。憲兵たちが集めたデータで構成されている数値だったが、素人目から見ても、グラフの立ち上がり方には違和感しかなかった。

「これは……」

「今、詳細は調査中だ。ただ非常にきな臭い。最初の記事を書いた新聞屋も、今はこの地下で寝ている」

サツクは、ジャクレイの皮肉に気付いてしまった。こここの詰所の地下最下部は、霊安室になっている。

「コイツは……ビンゴかもな」

「もう一個気になる記事がある。こつちも見えてくれないか？」

ジャクレイは、もう一枚の記事をサツクに示した。

『追放勇者、わいせつ物所持で逮捕！』

「……」

「……」

「……これは……違うな」

「いや、この記事が書かれた日は、ビルガド西部の詰所火災があつたんだ」

「……いや、違うよ」

「オレは、この火事も偽勇者が関与しているのではと睨んでいる」

「……関係ないヨ」

「この火事に併せて、兵の何人かが逮捕されている。上層部は何かをひた隠しにしているようなんだ」

「……」

「衛兵が何らかの関与が考えられる。可能性はゼロではない」

「ゼロだ。可能性はゼロだからこの記事から離れようジャクレイ」

「！ どうしたサック！ 目が血走っているぞ！ 何か知っていない………
る……」

ジャクレイの目がうつろになり、ゆっくりと膝から崩れ落ちた。

サックは、ジャクレイの死角で薬品を調合し、それを撒いていた。

「……寝たな」

サックは、倒れたジャクレイが昏睡したのを確認すると、手早く、落ちた報告書から『わいせつ物事件の部分』のみを抜き取り、服のポケットに丸めて押し込んだ。

『『意識混濁』と、『記憶消去』の薬だ。ごく少量だから、数分の記憶が飛ぶ程度さ』

ぼそりと、独り言のように呟いた後、サックはジャクレイの肩を揺すった。

「おい、ジャクレイ！ 大丈夫か！」

すると、朦朧とした意識の中、ジャクレイが覚醒した。まだ目はぼんやりとしていた。

「……あれ、オレ、意識飛んでたか？」

「大丈夫かジャクレイ、急に倒れたぞ。徹夜で疲れが出たんじゃないか？」

さも心配そうに、ジャクレイに手を差し伸べるサックであるが、コイツが元凶である。

「まいったな、寄る年には勝てねえなあ」

「いろいろ情報をありがとう。一旦休んだほうがいい」

「……なんか忘れてるような……いや、これも疲労かもな」

頭を抱えるジャクレイ。だが、サックはそれを良しとしなかった。

「あまり深く考えるな、頼む」

思考しすぎると頭痛が悪化する、だから考えるな。という意味にもとれる懇願。

サックはジャクレイに肩を貸しながら、牢屋を後にし休憩室へと向かったのだった。

第6話【その2】

「オレが疲労でぶっ倒れるなんてな」

「もう年なんだから、無理すんな」

全くだ、わはは……などと、ジャクレイとサックが談笑している。

ここは、詰所に作られていた総隊長室。ジャクレイの仕事場だ。

応接間よろしく革張りのソファーに、中央には赤を基調としたカーペット。部屋の奥には、いかにもな事務机が鎮座していた。

サックは昏睡したジャクレイを抱え、この部屋にやって来た。そして入室するや否や、彼をソファーに横たえさせた。

が、彼は少し休んだかと思ったら、すぐに立ち上がった。

「動いて大丈夫なのか？」

「おうよ、丈夫で明るいのが、オレの取り柄だからな！」

サックは、彼の底抜けに明るいさまと、異常な体力に感心しきっていた。

（流石だな。半日は倦怠感が残るよう調べたんだがな）

「……つと、どこまで話したっけ？ ええと……」

「話は一通り終わったよ」

「ん？ ……そうか」

なにか腑に落ちないような、もやもやした気持ちを抱えながら、とりあえずジャクレイはサックの話を信頼することとした。

サックは、先ほどの報告書のうち、『勇者の教団』関係のものを中心に、テーブルの上に並べた。

しかし、いずれもその内容は薄く、うわさ話や、報告者の憶測によるものばかりだった。

「教団名『きよつこうきよつ極幸教』。最初に確認されたのはミクドラム。だが、教祖の名前も、信仰対象も、その後の拠点も不明、ね」

「どうやら『勇者の力』と称して、いろいろ奇跡を起こしているらしい」「勇者の力？」

確かに、女神の天恵を受けた勇者は、常人ならざるスキルと体力を持つ。

道具師の『全装備可能』や『アイテム範囲化』もそれに類する。

「勇者の力は、信者の願いを叶え、幸せの絶頂に包むんだと。ま、いずれも確信はない」

胡散臭さ全開の教団ではあるが……だが、おそらく現状、イチホⅡイーガスの所在に一番近い団体だ。

「もう少し情報が欲しいな」

今ある情報では、想像の域を出ない。

もちろん、現在進行形でジャクレイら憲兵が動いてくれているが、もつと早く、奴らの素性を知りたい。

「……新聞屋に協力要請するとか？」

サツクは、思い付きでジャクレイに聞いてみた。しかし、彼は渋い顔をして答えた。

「同業者が口封じで殺されて、全員が協力を拒んでいる。あまり期待できない」

いかに新聞屋でも、自分の命は惜しい。当たり前だ。

「ああ、こんな時に、命知らずな新聞屋でも居たらなあ」

自分の好奇心だけで、未だ強靱な魔物が闊歩する魔王城前線基地まで飛んで行ってしまおうような、そんな新聞屋が居てくれたなら、これほど心強いことは無いのだが。

トントン。

総隊長室の扉をノックする音。誰かが入室許可を求めている。

「誰だ？」

ジャクレイは扉の向こうの人物に声をかけた。机上に機密文書を広げていたので、どここの馬の骨を入れるわけにはいかなかった。

扉の向こうから返ってきた声色は、女性の声。いや、少女の声だ。

『ご無沙汰してます、ジャクレイさん！ 勇者アイサツク様がこちらと伺って参りました！』

ジャクレイも、もちろんサツクも、よく知っている『彼女』の声。がちやりと扉が開き、陽気で朗らかな声が部屋に響いた。

「どもー！ 誰よりも早く、正確に！ 新聞屋『クリエ』アイメシア』でっすー！」

「まじか……」

サツクには、彼女の登場がまるで女神のように思えた。情報収集という任務に彼女以上の戦力を、サツクは知らない。

「まじか……」

そして、ジャクレイは、彼女の登場をまるで悪夢の再来のように感じていた。

ジャクレイは、正直なところ、彼女の事が苦手なのである。

「つい今しがた、こちらに戻ってきたばかりで、もうへロへロですよ」

そういうと彼女は、ツカツカと勝手に部屋に入ってきて、客人用ソファーに深く腰を埋めた。

『クリエII アイメシア』。勇者専属新聞記者の彼女は、確かに二日前に魔王城前線基地へ向かった。だが、彼女は相当なスピードで戻ってきたのだろう。ところどころ汚れが残る服や、あまりセットされていない髪の毛が、それを物語る。

「あ、おやおや、この資料は……極幸教?!」

オールキャンセラー
銀縁メガネのズレを右手で直しながら、彼女は机に広げっぱなしだった資料を覗き見た。

「さて新聞屋、極秘資料を勝手に見るな!」

そんなクリエを、ジャクレイが強く制した。しかし、

「……『バニーちゃんくらぶ、ユキさん』、『恋恋慕通信、マリンさん』、『ピンクパール、メイさん』……」

ぼそぼそと、ジャクレイやサツクに聞こえるか聞こえないかの小声で、クリエは謎の言葉を呟いた。どこかのお店と、そのスタッフの名前だろうか。

「こちらが追加の資料です、あ、あと、何か飲み物持ってきてますか?」

180度真逆な態度を取り始めたジャクレイ。先ほどの呪文には、ジャクレイを思うが儘に操る効果があるようだ。

「あ、じゃあお水をお願いします……奥さんたちは大切にね、ジャクレイ?」

そういうと、クリエはニヤリと、悪戯っぽく笑った。童顔の彼女の

笑みはまさに小悪魔だった。

この女を、完全に『敵』に回してはいけない。

サツクは改めて思うのだった。

ジャクレイが差し出したコップを半ば無理矢理奪い取り、クリエは水を一気に飲み干した。

「クリエ、折り入って話が……」

「ストップ、私は一言も、本件を手伝うとは申ししておりません」

手のひらをサツク側に向けて『待て』のポーズ。彼女は彼のセリフを遮った。

「じゃあ何故、ここに来たんだ？」

「急ぎの案件です」

すると、クリエはジャクレイを一瞥した。

「一旦、席を外して頂けますか？」

「どうやら、彼女はサツクにだけ伝えたいことがあるようだ。」

「おいおい、ここは総隊長室オレのへやだぞ？」

「……『モーモーミルク、モモさん』……」

「ごゆっくりどうぞ」

ジャクレイの去り際は、まるでベテランの給仕のようであった。

(弱み握られすぎだろ。しかも全部『花街』関係じゃねえか……)

奴の『夜の力』は底なしか？ サツクは逆に感心しきりだった。

ボタンと、重厚なつくりの扉が閉じ、部屋にはサツクとクリエの二人だけになった。

「サツクさん——いえ、『勇者アイサツク様』」

いつの間にか、クリエは背筋を伸ばし両の手を膝に重ねて座っていた。

先ほどまでソファの上で脱力していたとは思えない切り替えの早さ。

「……そういうことか」

「はい、そういう内容です」

クリエの様相から、多くを感じ取った。彼女がサツクを『勇者呼び』

するときは、あまり冗談が通じない、悪い知らせが大半だ。

「二日前のお話しを受けて、私的に調査した内容の報告です」

「だろうな、しかも、あまり芳しくない」

コクリ、と、クリエは小さくうなずいた。

「サツクさんの想像通りでした。第3層突破が最新情報だなんてとんでもない。既に勇者様たちは、『第5層』を攻略中でした」

「なんだ、いい報告じゃん」

「ええ、ですが……」

一旦、クリエは言葉を飲み込み、深呼吸した。顔に疲労が見え隠れしていた。

そしてその内容は、ジャクレイほどの『総隊長レベル』の人間すら人払いで避けた理由として十分だった。

「勇者アリンショア様が、逝去されました」

「……え」

あまり聞きなれない言葉に戸惑ったが、つまりは『逝去した』……『死んだ』ということだ。

「ちよつと……待てよ」

サツクの脳みそが、事実を受け入れてくれない。戦友が亡くなったことに、理解が追い付いていないのだ。

「ボツサは……ボツサは何をしていたんだよ！」

エバンジェリスト
福音奏者ボツサ・シークレ。七勇者の『ビショップ』にあたる、回復のエキスパートだ。40歳を越えたぐらいの、元医師で元牧師。いつもニコニコしている男性。

サツクに余命宣告をした本人でもある。

「ボツサ様も手を尽くしたのですが……亡くなったそうです」

七勇者のビショップをもってしても、回復ができなかったレベルの負傷だったということか。

「……そして」

クリエの報告は、未だ続いていた。伝えなければいけないことは、アリンショアの件だけではなかった。

「そのボツサ・シークレ様が、行方不明です。アリンショア様の治療

後、忽然と姿を消したそうです」

「……まじかよ、じゃあ今、イザムたちは——」

「はい、イザム様、ヒメコ様、ユーナリス様、ネア様、の4名で、魔王城第5層に挑んでいます」

アリンシヨアの死。

回復の要であるボツサの失踪。

たった4名の勇者だけで魔王に挑んでいる現実。

衝撃的なニュースを一度に目の当たりにしたサツクは、ただ呆然とするしかなかった。

第6話【その3】

「……」

「……」

しばしの沈黙が、総隊長室を包んでいた。

クリエは静かに、真っ直ぐサツクを見つめていた。

サツクは逆にうつむき、頭を抱えていた。

「……アイサツク様」

「……何だ？」

涙すら出ない自分に無性に腹が立った。

戦友が死んだという報告を受けてるはずだが、全く実感が沸かなかつたからだ。

「私^{わたくし}、クリエは、勇者イザム様から勅命を受けて、こちらに馳せ参じました」

「イザムの、勅命？」

はい。と、クリエは短く返事をした。

「ひとつは、行方不明のボツサ様の探索。もうひとつは、イザム様からの伝言を、アイサツク様にお伝えすることです」

「伝言だって？」

うつむいていた顔を上げ、クリエのほうに向いた。彼女の目元は光の加減でメガネが反射し、伺うことはできなかつた。

『サツク、こつちに戻れないか？』。以上です」

「……！」

イザム直々の、サツクへの復帰願いだつた。

サツクは驚いたが、反面、こうなることはある程度予測していた。

七勇者のうち、4人しか残っていない中での、魔王攻略。しかもメイン回復が居ない。無理難題にも程があるだろう。

だが、サツクはすぐに返事を返すことができなかつた。

「……」

「イザム様、憔悴しきつてました。あんな覇気のないイザム様、初めて拝見しました」

勇者イザムは弱音は吐かない。そんな姿見たことない。そういう奴だ。サックはよくわかっている。

クリエの報告が本当なら、彼は相当に参っている。

サックも、出来ることならすぐに戦線復帰をしたい。親友で戦友の彼らと共に戦いたい。しかし……。

「でも、俺は……」

勇者現役の時に比べて、いまの力は心許ない。特に、アイテムマスター道具師の最終技『潜在解放』ウェイクアツブの加減が全く効かない。

体力面も、魔瘴気の影響で圧倒的に落ちている。

「こんな俺が復帰しても……足を引つ張りお荷物になるのが、関の山だ」

「……そう……ですか。残念です。——お伝えはしましたよ」

そういうと、クリエは立ち上がり伸びをした。

「それでは、ごきげんよう」

「——ちよつと待って！」

部屋を出ようとノブに手を掛けようとしたクリエを、サックが引き留めた。

「なんでしよう、サックさん。私は忙しいんですが」

クリエの呼び方が、以前のものに戻っていた。心なしか、彼女の眉は釣り上がり、怒っているようにも見えた。

するとサックは、机に散らばっていた資料を手にもち、クリエの目の前に持ってきた。

『極幸教』の記事が書かれたそれは、しかし、クリエに鼻で笑われた。

「何のつもりです？ そんなゴシップ三面記事……」

「頼みがある。この『極幸教』の情報が欲しいんだ」

「は？ あのですね、私は今から、ボッサ様を探しに行くので……」

最初は小馬鹿にしたが、そうは言いつつも、クリエは記事に目を通していた。そこで気になる言葉が目についた。

『勇者の力』……」

「ボッサの情報が欲しいんじゃないのか」

ピクリ、と、クリエの眉が動いた。サックはそれを見逃さなかった。

「ここぞと、思いの丈を畳み掛ける。」

「俺たちは今、どうしてもこの宗教団体の情報が欲しい。そして、この謎の団体は『勇者』を使って信者を集めている」

「そんな三文記事、信じるほうが異常ですよ。『勇者』もどうせニセモノでしょう」

だが、サツクは首を振った。

「この記事を書いた新聞屋は、殺害されている。信憑性は高いと思う」「あなたはそれで、良いんですね。戦友が『そういうこと』始めた、という認識で」

クリエは、サツクの痛いところを突いてきた。ここでボツサを疑うことは、つまりは、命懸けで一緒に戦った戦友を疑うことだ。

だが、サツクは頭の奥底で、既に点と点が繋がっていた。

「イチホーイーガスを助けられる回復術師^{ヒール}。オレが知り得るのは、一人だけなんだ」

ずっと、心の底で引っかかっていた。彼女を助けられる人物は、彼しかないのではと。

そしてサツクは、それを確証に変えうる質問をクリエに投げた。

「ボツサが失踪したのは……『何時^{いつ}』だ?」

「……」

「……オレの推測だと、『ベルキッド追放』の箱口令解除。この時なんじゃないか?」

「……驚きました。サツクさん、あなた『探偵』にも向いてますよ」

そういうと、クリエは懐から一枚の紙を取り出した。ミクドラムで撒かれた、勇者追放の『号外』だ。

「具体的な日付は、この号外が刷られる1週間前です。サツクさんが追放されて、5日後にアリンショア様が、第3層で亡くなっています」時系列を整理すると、こうだ。

魔王城前の次元錠決戦ののち、サツクの回復を待つて彼は追放された。

その後、5日のうちに、勇者たちは草々に第1、第2層を突破していた。だが、第3層で事件が起こる。

アリンシヨアの死と、ボツサの失踪だ。

そこからの攻略の難しさは想像に難くない。本来は7人で進める筈だった戦いを、4人で取り繕っているのだから。

「つまり、『勇者追放』の記事で隠したかったのは、勇者の剣のことはなく——」

「アリンシヨア様の逝去です。そして号外発行の時点で、ボツサ様失踪から1週間がたっています」

クリエからの情報で、推測は確証に変わった。

ボツサは当日、ミクドラムにいた。そして、死にかけの女の命を繋いだのだ。殺されて当然の報いを受けるべき、イチホーイーガスを。

「イチホを助けたあと信者を集め始めたとすれば、報告書のタイミングとつじつまが合う……どうだ、新聞屋。これで、こちらの依頼と無関係じゃなくなつたら」

サザンカたちを操り、暗躍させた『ニセ勇者』が、ボツサであることはいまだに信じがたいが——状況証拠としては、それが限りなく真実に近いことを示している。

すると、クリエは大きいため息をついた。そしてサツクに向き合った。先ほどの怒りの表情は消え、幾分穏やかになっていた。

「つーまーり。私の勅命のついでに、その教団の情報を持って来いと」
「いや、事情が変わった。俺も一緒にボツサの説得に行く」

あーら、とクリエは口に手を当てて驚いた風なりアクションを見せた。

「私の事を心配してくれてるんですね、驚きました」

「事が事だからな……ん？」

その時、総隊長室の扉を強くノックされた。

扉の前に立っていたため、ノック音は強くサツクたちの耳に響いた。

「なんだ、緊急の連絡か？」

こちらの話はひと段落ついているので、サツクは扉を開けた。すると、ジャクレイが肩で息をしながら立っていた。

「ジャクレイ、どうしたんだ？ 奥さんに浮気でもバレたか？」

「……馬鹿言え。サツクおまえへの朗報を持ってきたんだよ」

ジャクレイの顔がにやけていた。喜べと言わんばかりの表情だ。

「サザンカとヒマワリ、目覚めたぞ」

それを聞いたサツクは、大きく息を吸い込み、ゆっくり吐き出した。同時に目元が緩んだ。ずっと心に残っていたシヨリが取れたような感覚だった。

「……行ってあげてください、サツクさん、待っている子がいるんですよ？」

サツクの顔色と、おそらく女性の名前を聞いたクリエは、何かを察したようだ。

「……スマン！」

「お構いなく。私も少し疲れてるので、こちらで十分休ませてもらいますね」

ジャクレイに連れられて、サツクは詰所の地下牢へ向かっていった。

それを、後ろからクリエが見送った。

「……さて、と」

クリエは、そのまま総隊長室に戻り、机上の資料を物色し始めた。めぼしいものを数枚抜き取り、そして、懐に押し込んだ。

「こういうところ抜けてるわー。『女難の相』の所為かしらね」

すると彼女は、特に周囲を気にすることなく、まっすぐに詰所の出口へ向かった。

「貴方には幻滅しました……さようなら、勇者アイサツク」

第6話【その4】

「いやだああああ!! 来るなああつ!」

地下牢に向かっていたサツクとジャクレイの耳にも届く、女の子の叫び声。

この声には、二人とも聞き覚えがあった——ヒマワリの声だ。

「何があった!!」

ジャクレイは牢に向かう階段を駆け下り、大声で叫んだ。

彼女たちの身に何かあったのか。サツクも大急ぎで、ジャクレイの後についていった。

「ジャクレイ隊長! あまり刺激しないで!」

ヒマワリは、女性の隊員の胸に抱かれていた。激しく肩を震わせ、大粒の涙を流した跡が顔に残っていた。

「一体……どうした」

困惑するジャクレイ。彼が近づこうとするも、ヒマワリは体全体を使つて逃げようとした。

それを女性隊員が優しく押さえつけ、柔らかな声で宥めていた。するとヒマワリは少しだけ、落ち着きを取り戻した。

(……心的外傷か……!)

サツクは瞬時に、ヒマワリの症状を分析した。

「心の上辺を包んでいた暗示が解けて、深層部分の心的外傷トラウマが戻ったんだ」

暗示で蓋をされていた中身まで、サツクは見ることはできていなかった。

ヒマワリが持つ忍者固有スキル『隠密行動』の所為でもある。

「現状を鑑みると……男性への恐怖心がトリガーになってるな」

「は? つい先日、一緒にパフェを食った仲だぞ?」

しかし、実際にジャクレイや男性の憲兵が近づくと、ヒマワリは殺意むき出して威嚇し、激しく怯えた。まるで野良猫のようであった。

女性の憲兵ではその症状が出ないことから、彼女の介抱をお願いした。別の牢に移ってもらったことで、少し落ち着いたようだが……。

「ヒマワリからは、まともには話は聞けなさそうだ」

「シヨックだな……あんなに優しい娘が、こうも豹変するか……じいちゃん悲しい」

いつからオマエの孫になったんだ、というツツコミ待ちだったのだろう。

サツクはそれを無視した。

「……妹が、騒がせてしまったかな」

牢屋に設置させられたベットには、サザンカが座っていた。

彼女は上半身を起こして、サツクたちのほうを伺っていた。

「サザンカ」

サツクは自ずと、彼女の名前を呼んだ。サザンカのほうには、ヒマワリのような副次効果は現れなかったようだ。

「サツク……だいぶ、アツチも覚めてきた。少し話し相手になってくりやれ？」

サザンカは優しく微笑んだ。血色は悪くなさそうだが、やはり催眠を受けたあとということもあり、精神的に気落ちしてるように見えた。

「……もちろん、喜んで」

サツクは近くにあった椅子を待ってきて、彼女のベッドの横に座った。

彼女から、謎の宗教団体の情報を少しでも得たい。

無論、その腹積もりだったが、サツクは今、素の彼女と話せていることが嬉しかった。

「体調はどう？　あまり無理はしないで」

「まだ少し、頭が重い。けど、今なら主の顔ぬしがよく見える」

彼女が手を伸ばし、サツクの頬に触れた。サツクはそれを忌避することなく受け入れた。

「……イーガス家。アツチらが日雇いの給仕に入った屋敷だ」

「やっぱりそうか。君はあの時の『メイド』か」

こくん、と、弱々しくサザンカは頷いた。

『あの時』のメイド——ニオーレに招かれた屋敷で、サツクを客室に案

内し、その時に薬で眠らされたあのメイド。

「薬を盛られ朦朧としてる中、主の頬に走る、光る痣が目焼き付いた」

そういうと、サツクの頬をまた撫でた。ちょうど、花卉状の痣が浮き出る箇所だ。

屋敷にいた際に、サツクの痣に気がついていたのだ。それが強く記憶に焼き付いていた。

「俺ももつと早く思い出していけば」

「サツクは何も悪くない」

ふつ、とサザンカが笑った。自虐を含んだ笑い方だ。

「……あの時、ヒマワリは家主に弄ばれてた」

「……」

知りたくなかった情報だ。あのニオーレの父親は、相当な小児性愛者だったようだ。

「何度も何度も、あの下衆に呼び出され、夜の相手をさせられていた……だが、薬に囚われていたアッチは、何もできなかった」

サツクの頬に触れた手に力が入る。しかしその手は小刻みに震えていた。

「君は何も悪くない、何も悪くない」

意趣返しだ。サツクは震えるサザンカの手を両手で包んだ。優しく、あたたかなサツクの手は、サザンカの怯える心をほんのり温めた。

「……すまん、サツク。アッチの無力さが情けなくて」

暖かさに包まれた手とは対照的に、サザンカの頬は涙で冷たく濡れていた。

「それにアッチは……勘違いで、主を殺そうとした、許してくれ」

サツクはさらに強く、サザンカの手を握った。

「大丈夫、オレは『勇者』だ。その程度では死なないよ。現に生きている」

にかつ、と、笑顔をつくりサザンカを宥めた。

「ありがとう……サツク」

「やつと、笑ったな」

サザンカは開いていた左手を、固く握られているサツクの両手に被せた。重なる手と手。サツクは自然に、サザンカの左手も握りしめた。

「全ては、あのイーガスが元凶だ」

旅人や出稼ぎを、私利私欲のためだけに操り、薬漬けにしていた。麻薬になりうる紅茶や御香の生産に加え、当時の口ぶりでは、人身の取引——人身売買も担っていたと思われる。

「精神障害を受けたあとだと、強い刺激になる質問は苦しいかもしれない」

イーガス家のあの一件の前後で何があったのか。当事者に聞くのが一番だ。だが、無理矢理に思い出させることは、彼女への相当の負担になる。

「かまわんね。アッチは今、主と一緒だからな、旦那様……」

「……ん？ 『それ』は有効なのか？」

「アッチが、主に惚れたのは本心じゃよ、何も偽りはない」

「えーと、ちよつと急すぎて心の準備が」

『儀式』は終えておるぞ……それとも、やはり、アッチの手は汚れすぎか……」

サザンカはゆっくりと、サツクの手を解いた。彼女は忍者として暗殺を生業としていたのは確かだろう。多くの人間を、彼女は殺めている。

(……ええい、ままよー！)

サツクは決意した。

離れ行くサザンカの手を掴み、強く自分の胸に引き寄せた。

急に引かれたため、サザンカは上半身ごとサツクの胸に飛び込む形となる。

サツクは、サザンカの体の後ろに手を回し、強く抱きしめた。

「ばっかやろう！ オマエは俺に惚れたんだろ！ だったら諦めんな！」

「ぎ、サツク……！」

「一回掴んだものは、絶対に放すな。一度勝ち取ったものは、強請りづ

づける」

「サツク、それって……」

「ああ、サザンカ、君が良いなら。オレは……」

さらに、サツクはサザンカを強く、強く抱きしめた。

もう二度と、離すまいと。

「オレは君と、添い遂げる」

第6話【その5】

「ここはホテルじゃないんだがな」

鉄格子を介して、ジャクレイが覗き込んだ。

だが、そんな揶揄を無視して、サツクとサザンカは暫く抱き合っていた。

十分に、お互いの気持ちを分かち合った二人。

ゆつくりと体を離れたのち、サザンカは、その当時『何があった』のか語り始めた。

「路銀が尽きてな。手っ取り早く稼ぐため、給仕の仕事をした」

まるで昔の事を語っているようであった。催眠で脳の思考が止まっていたこともあり、既に彼女の脳内では、遠い昔話になってしまっていた。

「その後は、皆の考え通り。慣れない仕事と都会の空気に飲まれたアツチらは、すっかり油断していた——あの御香とお茶の力に贖えず、飲み込まれた」

忍者であれば、警戒していれば避けることができた可能性がある。だが、それができなかつた。なんらかの事情で、気が緩んでいたのか……。悔やみきれない大失態だ。

「……恥ずかしながら、アツチもヒマワリも……その……『給仕服』の可愛さに、浮かれてしまっていて……」

そうだった。彼女はすこし天然^{ボンコッ}だった。

サツクは頭を抱えた。

ただ、ほのぼの話はここまでだった。

イーガス家で行われていた惨事を、サザンカは語り始めた。

予想はできていたことだが、麻薬作用のある茶葉の販売、人身売買、さらには、一部の黒魔術や禁忌へ使用するためか、人間の臓器なども取り扱っていたようだ。

（あそこの小屋は、文字どおり『屠殺場』だったわけか）

イチホーイーガスが生きた人間を弄んでいた風景を思い出し、さすがのサツクも軽い身震いを覚えた。長旅をしていた関係上、様々な人

間模様を見てきたが、奴は中でも指折りの精神異常者だ。

そして、サツクが現れ、彼女たちを解放した。

「その夜も、ヒマワリは下衆の相手をさせられていた」

「ああ、覚えてる……。あんまり見るのは悪いと思って、顔を見てなかった」

「ふふっ。サツクは優しいんだな……。誰かが炎を放ったか判らなかつたが、煙に撒かれる前に、アツチはヒマワリを抱いて屋敷から出た」
その時に、サザンカは父親の遺体を見つけた。大きく腹を裂かれ、内蔵は弄ばれていた。

そして運悪く、その時にヒマワリが目覚めてしまった。まだ10を超えたばかりの子供に、目の前にある惨劇は刺激が強すぎた。

「アツチも、父の死体を見て気が動転していた。暴れるヒマワリを宥め、炎と煙から逃げるのが精一杯だった」

淡々と語っているようであったが、サザンカの手は震えていた。

サツクは両手でサザンカの手を覆い被せた。

「その時、外から……。『勇者様』が現れた」

サザンカの表情が曇っていく。

「月明かりに照らされた『左手』に、花卉の痣があった」

左手に浮かぶ花卉状の痣。本物の勇者の証だ。

そして、サツクは『左手』に痣のある人物を知っている。残念ながら、彼の推理は当たってしまった。

「勇者様は、その後、燃える建物に入っていった。驚いたことに、炎が彼を避けているようだった」

「……」

「だが……」

「? どうした?」

サザンカは申し訳なさそうな顔をした。

「ここから、記憶がない」

「全くか?」

「ああ……。勇者様の『そこで待ってなさい』の一言から、記憶が跳んでいる」

すると、サザンカはサツクから手を離し、頭を押さえた。軽い頭痛が彼女を襲っていた。

「すまぬサツク」

「無理するな。ありがとう、サザンカのお陰で『倒すべき相手』の目星はついた」

サツクは彼女の肩に手を回し、今度は、サツクの腕がサザンカの頭を包むように抱きしめた。

「ありがとう、少し落ち着いた」

「それは良かった」

「……なあ、サツク。ヒマワリの様態はどうなんだ？」

ヒマワリは今、女性憲兵によって介抱されている。男性を全く寄せ付けないという意志が強く、男性陣は遠巻きに眺めるしかなかった。

「妹の、壊れた心、治すこと出来るか？」

「……任せろ、『大丈夫』だ」

「心強いな……アッチが見込んだ男だけある」

すると、安心しきったのか、サザンカはゆっくり寝息をたて始めた。急激に記憶を呼び戻したため、脳が疲労したんだろう。と、サツクは分析した。

「……嬢ちゃん、寝たのか」

「ああ。また今夜も、ここで寝かせていいか？」

「ホテルじゃねーんだが、仕方ねえ。妹さんの問題もあるからな」

牢の外から一部始終を覗いていたジャクレイに声をかけ、サツクはゆっくりと、サザンカをベッドに横たえた。会話する前に比べて、顔色は良くなった気がする。

「ジャクレイ、どこまで聞いていた？」

「申し訳ないが、ほとんど耳に入ってきていた。その『勇者様』ってこともな」

「なら話が早い」

サツクは牢屋から出た。魔法と物理の多重ロックの鍵を掛け、鉄格子越しにサザンカの寝顔を伺い、その場をあとにした。

本当はヒマワリの様子も確認したかったが、あまり刺激しては危険

と判断し、見送った。

「ジャクレイ、まず、今回の黒幕は確定だ。七勇者が一人、『神福、ボツサ―シークレ』」

「耳を疑ったよ」

「そして、新聞屋のクリエが、彼を追っている」

牢屋のある地下からあがる階段を登りながら、ジャクレイに話しかけていた。

「なんだ、なら丁度いいな」

「ああ。彼女は勇者を探索《サーチ》する能力持ちだ——それと、これも頼む」

ジャクレイの懐からメモ帳とペンを失敬し、サツクはサラサラと何かを書きなぐった。

「これは……？」

「薬の原料。ヒマワリの心的外傷用——というより、『記憶消去の薬』だな」

彼の説明に、ジャクレイは何かを察した。

「記憶を消すって、よっぽどヒマワリの心的外傷は根深いのか」

「ああ。完治させるには、この荒療治しかない」

「……酷だな」

「そうだな」

「準備はする。背負いすぎるなよ」

そういうと、ジャクレイは服のポケットにメモを押し込んだ。

そして2人は、クリエが待っているはずの総隊長室の扉を開けた。

しかし、彼女の姿は見えなかった。

「あれ？ トイレか？」

「……嫌な予感がする」

違和感を覚えたサツクは、踵を返し詰所の入り口に向かった。

入り口には門番よろしく、受付の憲兵が人の出入りを注視しているはずだ。

「なあ！ クリエ——ええと、小柄な女性はどこ行った？ チエツク柄のジャケットと、あとメガネをかけた、金髪に赤いインナーの髪の毛

……」

「え、ええ、見ました見ました！ 私、有翼種の方を初めて見ましたよ！」

受付の憲兵が、少し興奮気味に返答した。

有翼種は、女神に一番近い種族とされており、個体数は圧倒的に少数だ。

まるで本物の女神に出会えたかのように息巻く憲兵を宥め、サツクは、改めて聞き返した。

「ちよつと緊急なんだ。彼女は、どの道を歩いていった？」

しかしこの、サツクの質問にはなんの意味もないことを、彼自身も理解していた。

受付の気分が高揚してるということは、彼女が目の前で『翼を出した』ということだ。つまり、

「道？ いえ、あの方、美しい翼を生み出して、ふわつと上空に舞い上がって……」

「……消えた、ってか」

ええ、と、受付が頷いた。

（あいつ、先走りすぎだ！ この状況で、ボツサが説得できるわけがない！）

なんとか彼女の行方を追おうと、サツクは外に飛び出したが、もちろん彼女に追い付ける訳もなく。

サツクの心情をあざ笑うかのように、焼けるほど赤くギラつく夕日が街を照らしていた。

第6話【エピローグ】

(いやあ……想定外だわ)

町外れに建てられた、小さな礼拝堂。

近くに貧困層が暮らす地域において、ここはそんな人たちの、心よりどころのはずだった。

(ひっどいなあ……)

クリエは、そんな田舎の礼拝堂の中に入るや否や、首と羽根を腕がれ、破壊された女神像の姿に悪態をついた。

この世界は一般的には、女神への信仰が根強く、他の信仰はいずれも異端とされている。そのため、これほどまでに女神を毛嫌いするのは珍しい。

そしてそれ以上に、彼女は信者の数に驚いていた。小さな礼拝堂は溢れんばかりの人間で埋まっており、備え付けの長椅子などは単なる踏み台としか機能してなかった。

数刻前、クリエは、ボツサの居場所をサーチしこの礼拝堂前に降り立った。するとそこには、多くの信者が礼拝堂前に集まっていた。

「今夜、ありがたい説法があるのよ、ご一緒にどう？」

などと、そこらへんにいるような普通の奥様方に声を掛けられたクリエは、まあ、元々潜入する腹積もりだったし、くらいの軽い気持ちで、そのまま無抵抗に誘われ、夜の礼拝堂に入り込んだ。

(……あまりひどい場合は、奥の手を使うか)

などと腹を決めて、信者の中に紛れていると、礼拝堂の奥から、何人かが現れた。

(——見つけた)

人の頭に隠れてしつかりとは確認できなかったが、確かにあれは『ボツサ∥シークレ』だった。何度も彼とは、取材として対話している。新聞屋が人の顔を間違えることなど、まずない。

そしてボツサの他に、少なくとも二人の人影が確認できた。

車椅子に座った人間と、もう一人は背丈だけ見れば子供か。

二人とも、布の外套を深く被り、顔が全く確認できなかった。

(――あっ！)

すると、ボツサは信者を軽く一別すると、すぐに、その子供を連れて礼拝堂の奥の部屋に戻ってしまった。

礼拝堂の正面には、車椅子の人間だけが鎮座していた。若草色の鮮やかなマントが非常に目立っていた。

(ついて行ってみるか……あれ?)

クリエが、下がったボツサを追う魂胆をしていると、急に信者たちの雰囲気が変わった。何かに聞き惚れているようだったが、クリエには、彼らが何に魅了されているのか全く気づかなかった。

(あー。念話かあ。あの車いすの人が話しているのか)

クリエはご自慢のメガネのずれを直した。

『オールキャンセラー』と呼ばれる、外部からの鑑定系スキルを完全防御する銀縁メガネである。この装備は、鑑定系スキル無効に加えて、精神に作用する攻撃も例外なく避けるため、念話を使った説法が聞こえなくなっているのだ。

「ま、異端の説法なんて興味はないので」

そんなことより、ボツサのほうだ。

クリエは、聞こえない声に聞き入る人の洪水を掻き分けながら、礼拝堂の奥に向かった。

(さてさて、鬼が出るか蛇が出るか)

礼拝堂の裏側は、薄暗く、しかし採光用の窓から月明かりが差し、人物の判断くらいは可能ではあった。クリエは改めて気を引き締め、奥に進もうと数歩を踏み出した。しかし、

「……お待ちしましたよ、新聞屋」

「げっ」

白髪が目立ち始めた長身細身の、一見すると人のよさそうなおじさん。

『神父』を体現したような人物、ボツサが、思った以上に近しい場所で待ち構えていた。

そして彼の周りには、ガタイの良い男が三人と、先ほどのマントのフードで顔が見えない子供が一人。

男たちは皆、誰もが何かしら武器を握っていた。あまり、穏やかとは言えない難しい雰囲気であった。

「歓迎は……されてませんよね」

「してませんね」

クリエの営業スマイルに負けずとも劣らず、ボツサもにこやかな笑顔を見せた。

「ええと、ボツサ様、取材を申し込みたいのですが」

「無理です。貴方の取材は受けません」

「それでは、勇者イザム様の御伝言を……」

「聞く耳持ちません」

いやいやそれは困るんだけどなあ、といった表情になるクリエ。

ボツサは、頑なにクリエの言葉を拒絶しつづけた。

すると、ボツサが手に持っていた杖……よく見れば、彼の背丈ほどの『槍』であった。それを軽く傾け、先端をクリエに向けた。槍の先は布に覆われ、その刃先は確認できなかった。

これを合図として、周囲の男たちがクリエに近づいていった。

もちろん、彼らの武器を構えた格好のままである。

「えー……話し合いの場も無しですか」

屈強な男たちが、明らかに殺意をむき出しにしてクリエに襲いかかった。

しかし、男たちはクリエを捕らえることができなかった。

彼女はまるで綿毛のように軽々と男たちの攻撃を避け、ふわりと舞い距離を取った。

彼女は、背中に隠していた武器を取り出した。それは、長剣というには短く、また短刀というには長すぎた。

彼女用にカスタムされたフルーレタイプの武器。

柄と鐔に施された、鷹と疾風の彫刻が目を瞞る。

「私も舐められたものですね」

刹那、彼女は男三人を背にして立っていた。一瞬のうちに、彼らの後ろに回り込んだのだ。

「峰打ちです……峰は、無いですけど」

てへっ♪ と舌を出し可愛げに笑ったクリエとは対照的に、男たちは鮮血を吹き出し、そして倒れた。

「さてさて、ボツサ様？」

クリエはフルーレ——《精霊鷲のフルーレ》の切先を、ボツサとフリードの子供に向けた。

「こんな雑魚では、私の相手は務まりませんよ」

「……」

「単身で魔王城前までお伺いできるくらいには、鍛えてますので」

「……」

「私を捕らえたいなら、それこそ『勇者』様レベルを連れてきてくださいね」

「……」

「……先ほどから『だんまり』ですね、よく喋るアイサクとは真逆」
「……なるほど、君には『効かない』のだったね」
ぞくつ。

クリエの背中に悪寒が走った。ボツサは単に黙っていたのでは無い。何かを『仕掛けていた』のだ。

（おそらく精神系攻撃……）

オートキャンセラーのおかげで、それがクリエには届かなかった。

今回はただただ運がよかっただけである。

「ボツサ様、私はあなたを説得しにきました。お話伺えませんか？」

正直、クリエも『勇者』との本気殺し合いバトルを望んではない。話し合いで解決できれば一番穏便である。

すると、ボツサは小細工をあきらめたようだ。しかし、また手に持つ『槍』を掲げ、クリエに先端を向けた。

（一体、何を）

クリエは全く油断していない。動体視力はかなり高いほうだったのだが、ボツサの横に立っていた子供が、フード付きマントを残して『消えた』瞬間を見逃していた。

（——え、消え……）

刹那、彼女の右手からフルーレが弾かれた。刀の柄で強烈に右手を

殴られ、彼女の指があらぬ方向に曲がっていた。

クリエが痛みを感じるより早く、その人物は動いていた。

子供ほどの身長であるその人物は、次の瞬間にはクリエの眼下にいた。クリエは、その人物——彼女の事をよく知っていた。何度もインタビューしたことがある仲だったからだ。

(勇者……アリンシヨア……！)

猫と人間の中間の種族である、七勇者が一人、神業アリンシヨア。

確かに死んだと報告されているが、今、彼女は、確かにクリエと対峙していた。

僅かに採光窓から差し込む月の光は、彼女の右肩に浮かぶ花卉状の痣を浮き上がらせていた。

能力使いすぎてしんどいけど、そんなこと言ってる場合じゃねえ

第7話【その1】

「……痛ってえ……なんだこれ」

ソファで朝を迎えたサック。どうやらうっかり寝てしまったようだ。柔らかいクッションを枕にしてはいたが、体制が悪かったのだろうか。

サックはしばらく、慣れない頭痛に苛まれることになった。

「やべ、寝ちまったか」

いなくなった新聞屋——クリエの後を追うべく、サックは昨夜から、彼女が何かしらの痕跡を残していないかを探し回っていた。すると、教団に関わる資料が何枚か抜き取られていた事に気付いた。

藁にもすがる思いで、盗られた資料を精査したが、しかし結局、これといった共通点は無かった。

「単純に時間稼ぎに使われたな……くソツ」

悪態をつくサック。クリエの足取りは何も得られなかったのだ。

「……」

サックは気持ち切り替えんと、ソファから立ち上がり伸びをした。そして総隊長室の部屋を出ようと扉に向かうと、ちょうど、ジャクレイが部屋に入ってきて来るところと鉢合わせた。

「お、起きたか」

「悪い、ジャクレイ。またベッドに使ってしまった」

「気にすんな、本来なら宿を紹介すべきだったんだがな……ほれ、約束の品物だ」

ジャクレイは手に持っていた小包をサックに手渡した。両の手に十分収まるほどのそれは、白い布で包まれていた。

「ん？ 薬草か」

サックは手に取った瞬間、その包みの中身を『鑑定』していた。自然と身についてしまった『いつでも鑑定』が発動したのだ。

「おう、昨日言われた薬草だ。部下に買いに行かせてた」

「ありがとう、これでもつと深い治療ができる」

「どういたしまし……治療……ん？」

すると、ジャクレイが急に首を傾げた。そして、サックに渡した薬草の包みを呆然と見つめた。

「……なあ、サック。なんで俺、『この薬草を準備した』んだ？」

(え……?)

急に、変なことを口走ったジャクレイに、サックは驚きの声すら出せなかった。

「何って、ジャクレイ、サザンカとヒマワリの件だろ？」

とうとうボケてしまったのか。既に年齢は50を超えているが、呆けるには少し早い。もしかして、サックを^{からか}揶揄ったのだろうか。

「ああ！ そうだそうだ、忍者姉妹のことだ。なんだろう、急に忘れてしまっていたぞ」

ははは、と、照れ隠しともとれる笑い声をあげたジャクレイであった。

「勘弁してくれ、そんな大事なことを忘れるなんて……」

ギャグとしては全く笑えないボケに対して、サックは若干たじろいたが、ジャクレイはいつもの陽気なおじさんの表情を見せてきた。

すると彼は、持ち前の明るい笑顔を崩すこと無く、腰に巻いていた革ベルトに据え付けてある短刀を抜いた。

兵士に支給されるそれは、憲兵なら誰もがもっているナイフである。それを彼は、

「ははは……ほんと、どうしちゃったんだろうな」

などと笑いながら、短刀を逆手に強く握り、勢いよく自分の首に突き立てんとした。

真っ直ぐ、迷い無く。

抜き身の刃はジャクレイの右首に向かっていき、そして赤い鮮血を散らした。

「——!! つぶねえつ!!!」

刃は、ジャクレイの首の寸前のところで止まっていた。彼の首には突き刺さらず、差し出したサツクの手の甲を貫き止まっていた。

「……は？」

「痛ってえっ！……やられたっ！」

サツクは突き刺さった短刀をそのままに、ジャクレイの腕を捻り上げそのまま投げ飛ばし地面に叩きつけた。

もちろんジャクレイには武術の心得はあるが、自身が意図しない中で、自分の首を短刀で貫こうとしたことに理解が追いつかず、サツクの行動に全く対応できなかった。なんとか受け身を取るのが、彼の出来る精一杯だった。

「ぐはっ!!」

すると、ジャクレイの手から短刀が外れた。今の今まで短刀は強くジャクレイの手に握られていたのだ。

「お、俺はいつたい……」

何故、自分の考えには程遠いこと——自殺未遂を行ってしまったのか。サツクがいなければ確実に自分は死んでいた。

「ジャクレイ！　大丈夫かつ！」

「あ、ああ……なんだ……これは」

天井を仰いだまま、ジャクレイは返答した。自分自身の行動を未だに信じられないようで、口をポカンと空け呆けていた。

しかし事の重大さは理解できていて、そのため、多量の脂汗が身体中から吹き出ていた。

そして、自殺を食い止めたサツクの右手には、突き刺さったままの短刀があった。

サツクは激痛に耐えながら短刀を抜き、地面に投げ捨てた。カラ、と金属特有の乾いた音が響き渡る。

と同時に、血を留めていたものが無くなった手の甲からは、先程以上に勢いよく血が溢れ出た。流れ出た血は、薬草を包んでいた白い布を真っ赤に染めた。

「潜在解放——薬草に【止血】を付与」

ジャクレイが持ってきた薬草の束から適当に見繕い、右手に無造作

に擦り付けた。

『潜在解放』^{ウエイクアップ}による淡い光と共に、薬草は隠された能力を引き出され、サツクの右手に空いた穴を治し始めた。

しかし、止血は出来ても痛みは消えなかった。鎮痛剤の調合や、それこそ、薬草への潜在解放で痛み止め作用を引き出す事も可能ではあったが、

(強過ぎる鎮痛薬は、精神を麻痺させる。いまの俺に、細かい調整ができる気がしねえ)

現状考えうる『最悪の事態』に備え、サツクは鎮痛効果を付与することを控えた。

薬草による止血はあつという間に終え、傷こそ残るものの、サツクの右手の穴は完全に塞がった。

「サツク……」

「暗示だ」

皆まで言うな、と言わんばかりに、サツクはジャクレイの言葉を制した。

「昨日の夜中に仕込まれていた。俺も朝方、異様な頭痛に苛まれたが……くそっ！ 暗示を避けた副次的な頭痛だっ！」

サツクには暗示が効かなかつたのだ。元々、道具師は薬師の上位職であるため、薬師のもつ多くの状態異常耐性を引き継いでいる。

サツクの感じた朝の頭痛は、単なる寝違いではない。強力な暗示に對抗する事で生じたものだった。

「……寝ている……間……!!」

そしてサツクの頭の中に、考えうる最悪なシナリオが出来上がる。詰所では多くの憲兵が24時間働いている。無論、深夜にも不足の事態に備えて、起きているものもいれば、仮眠を取るものもいる。

ジャクレイも、昨今稀に見る異常事態も重なり、詰所で寝泊まりをしていた。つまり、ジャクレイも就寝中に暗示を掛けられたのだ。

(……この建物全員に、同じ暗示が掛けられたとしたら……)

「……くそマズイ！」

するとサツクは総隊長室を飛び出し、建物のエントランスに向かっ

た。

朝のこの時間なら、人が一番集まる場所だろうとの考えからだ。暗示による行動——自殺行為を行う——には、引き金^{トリガー}となるものが必要だ。

それは、人の仕草であつたり、特定のワードであつたり、時限式なものでもあつたりする。

(まだ、引き金^{トリガー}が自明じゃないけど……!!)

黙って居座るわけにはいかない。

こうしている間に、知らず知らずのうちに、『自死による大量殺人』が行われかねない。

サツクは奥歯を強く噛んだ。ギリっ！ と乾いた刷れる音がサツクの頭に響く。

(この人たち全員を人質に仕立てたな……ボツサ！)

焦るサツクではあるが、彼の思いは、誰も殺させない。たった一点だった。

「こんな下らない理由で、人が死んでたまるかつ！」

第7話【その2】

憲兵詰所の入り口に入ってすぐ。

小さなエントランスが構えていた。入り口正面には小さな受付があり、担当者はそこに立ち、外部からの侵入者へ目を光らせていた。そんな受付兼門番、今が一番眠くてたまらない時間帯だ。

今はまだ早朝であり、詰所の入り口は閉ざされていた。一般人を迎えるのには、まだ早すぎるのだ。

そんなときの眠気覚ましには、軽い雑談が最適。

早番でやってきた同僚と、お茶を片手に世間話……もとい、情報交換を行うのが、彼の日課だった。

「昨日、天使を見たんだよ」

昨夕まで受付担当だった男が、少し興奮気味に話しかけた。

「ウワサは聞いているぜ！ 有翼種の女の子だろ？ かわいかったか？」

夜番の彼は、少々睡眠不足なためか、さらに高揚していた。

「まあまあだったな！ 羽根はキレイだった」

「いいなあ、夕番はいろいろあつて飽きなくて」

「なにいつてやがる。夜の方が圧倒的に『楽』だろ！」

「まあな、今の夜番なら、毎晩可愛い女の子の寝顔も拝めるからなあ」
「誰のことだ？ まくた花街の子を連れ込んでるのか？」

「いやいや、そこらの娼婦とはレベルがちがうよ、ここの牢屋で寝てる……ええと、誰だっけ？」

「ああ、あの姉妹か。自分で言い出してなんで忘れてるんだよ、寝ぼけてるのか？」

「そうそう、思い出したわ、忍者の……」

すると、彼は帯刀している長剣を抜き、白光りする刃を自らの首……頸動脈付近にあてがった。

「うわ、長剣だと長すぎて自殺りにくいな。ちよつとこつちを引っ張ってくれ」

「あ、ああ……え？ どういうこと？」

対先程まで談笑していた同僚に、笑顔のまま、剣の柄を向けこれを引いてくれと懇願した。首元にあてがわれた刃は、このまま動かせば確実に太い血管を割き、辺りは血でまみれるだろう。

「おま、何してるんだ……？」

剣の柄を渡された男は、現状を全く理解出来ていなかった。しかし、長剣の刃は既に、彼の首元に僅かに触れ、血が滲んでいた。

「——止めろっ!!」

大きな掛け声と共に、首に当てていた剣は弾かれ、近くの壁に突き刺さった。

サツクの強烈なキックだった。ボール遊びよろしく、彼は長剣を蹴り飛ばしたのだ。

（靴が……っ！ 限界か！）

しかしその瞬間に、サツクの履く靴が爆ぜた。底が捲れ、足の甲を覆う部分は、破裂したように穴が空いた。

靴の能力を酷使し続けた結果だった。本来、一級品ともなれば、多少の無理を繰り返しても能力の使いすぎで壊れることはない。だが、『道具師』の力を制御できないサツクには難しい調整だった。

最後の最後に『縮地』を発動した瞬間に、靴はボロボロに壊れてしまったのだ。

「……はえ？」

「え、俺はいったい何を……」

剣を弾いた衝撃によるものだろうか。首に刃を当てていた彼は、意識を取り戻した。そして、今しがた自分が行おうとした『愚行』に肩を震わせていた。

（暗示の引き金は……『忍者』かつ!?!）

先程の彼らの会話と、ジャクレイの様子から想像するに、どうやら『忍者』、あるいは、サザンカたちを想起することで暗示が実行されるようだ。

（深層心理への暗示だと、通常の鑑定では判別できない……ならっ！）
するとサツクは、ギョツと強く目を瞑った。

（……『深層鑑定』!）

そして、大きく目を見開いた。

魔王城の次元錠を開ける際に使用した、対象の深層部分まで鑑定する、鑑定士の上位技術だ。

するとどうだろう。

いきなり剣を蹴り飛ばし、派手に登場したサツクに対する周囲の強い視線。

そこまで大きくない、憲兵詰所の出入口で騒ぎになっていれば、建物の奥から覗く人や、何があったのかとこちらに近づいてくる憲兵も出てくる。

そして半数が『昨夜からこの詰所にいた人物』だろう。ちょうど、夜番と早番の引き継ぎの時間だった。

(解除方法は……っ!!)

深層鑑定によつて、各個人から多量の情報が止めどなく溢れでる。

この能力は、単に情報を『見る』だけである。そこから、今必要な情報の精査は、サツクの技量に委ねられる。まるで濁流のごとく湧く情報を全て読み、仕分ける。

並みの人間では簡単に発狂するレベルの大仕事だ。

(見つからない……どこだっ!)

僅かに残る頭痛に苛立ちを覚えながら、サツクはデータ整理に追われていた。端から見れば、他人を睨み付けて唸っているだけにも見えてしまうことが、この能力の残念なところか。

「なんだ？　なんだ？」

「大丈夫かつ！」

「剣が飛んだぞ？」

などと、周囲に集まる憲兵たち。そのうちの何人かが、昨夜から泊まり込みで働いていたが、彼らのほとんどに、深層心理部分で暗示が掛けられていた。

「ねえ、あの人が連れてきたのよね……」

「そうそう、牢屋で寝てる……」

女性の憲兵。比較的若い二人組が、サツクの素性について雑談し始めていた。

そして、この場の人たちの暗示を発現させるには十分な声量で、
引き金を引いてしまった。
トリガー

「忍者の女の子を連れてきた人よ」
抜刀。

一斉に、鞘から剣を抜く音がエントランスに響いた。

シャツ！ と、鞘から滑り出た白刃は、全てその持ち主の、急所に
向かって刃先を向けた。

（確証が無いが……やるしかないっ！）

出来ることなら、暗示に対する解除方法を明らかにしたかった。

しかし、そんな暇は無くなった。目下の憲兵の実に半分は、ものの
数秒後には自決する。

「借りるぞっ!!」

サツクは、先程から唾然としている受付の憲兵の首からぶら下がっ
ていた、金属製の『警笛』をむしり取った。

異常の際や、警告のときに使用する、憲兵なら誰もが持っている、何
の変哲もない警笛だ。

「潜在解放っ!!」
ウエイクアツッ

その笛に能力を使い、潜在的に眠る効果を呼び出し、付与させた。

（音波防御無しは初めてだが……背に腹は代えられねえ！）

吹き口から一気に息を吹き込み、警笛は本来の音以上の高音を掻き
鳴らした。

そして発生した音波は、さらに笛から発生した波に重なり、巨大な
波形を描く。それらが、サツクの笛を中心に広がる。

警笛に潜在的に付与されたのは【衝撃波の発生】。

ドおおおおおっ!!!

文字通り音速の衝撃が、憲兵たちと詰所全体を突き抜けて、アン
ティーク柄の洒落た窓ガラスは内側から激しく砕け、建屋も大きく揺
さぶった。

壁は一気にひび割れ、土埃を立てた。

近くにいた人は激しく吹き飛ばされ、また遠くから覗いていた人間
にも衝撃波は届き、体を激しく揺さぶられた。

まるで内部でガス爆発でもあったかのようであった。

(暗示は、『衝撃』を受ければ覚めるはず……)

詰所に集まった人物を一度に覚醒させる方法は、急造ではこれくらいしか思いつかなかった。

もちろん危険も裏表一体ではあるが、選択の余地はなかった。

望まない自殺よりマシだろう。

だが、警笛から発せられた衝撃波は、サツクの予想を越えていた。

(……だめだ、やっぱ力の制御が効かねえ……)

衝撃波による大爆発の中心部には、サツクがいる。文字通り目の前にある警笛が発した衝撃波は、音波耐性を持たない本人自身にも、相当なダメージを与えることになった。

激しい衝撃が体を貫き、脳みそを強く揺さぶる。

女神から貰った強力な力でも、加減ができなければ身を亡ぼす。

脳震盪によって、サツクは暫く、意識を失うことになった……。

第7話【その3】

お久しぶりです。

「……ほんの、数ヶ月ぶりだな
そうでしたね。」

時の流れは光の速さ、とは良く言ったものです。

「どの面^{つら}下げて来やがった」

ほんのご挨拶です。

良い夢は観られましたか？

「悪夢以外の何者でもない」

しかしまあ、衰えましたね。

全盛期のあなたなら、即興で装備に音波耐性を付与するとか、耐性薬を調合するとか。

「……見たのか」

正確には、聞いていた、ですよ。良くご存じでしょう？

『福音奏者』。弱きものの囁きを紡ぎ、女神の声を聞く者、か」

私の役目は、生きとし生けるものの声を聞き、皆に伝えること。

「ならば、尚更だ。何が目的だ……いや、『何を聞いた』？」

……流石ですね。でもあなたでは、私の思いの丈など理解できないでしょう。

「お前のしていることは単なる殺戮だ。『勇者』の威厳はどうしたんだ」

……。

「……」

……私は……。

「？」

私は、『勇者』など望んでなかった。

「!!」

望まぬ力を与えられ、世界の命運を背負わされ。

そして挙げ句の果てには、大切なものを奪われた。

「ボッサ、お前まさか……」

私は私のやり方で、『復讐』を果たします。

ただ……私の心願成就には、新聞屋と元勇者^{あなた}が、少し煩わしかった。
「ボツサ！ お前のやり方って何だ！ あの精神異常者^{サイコパス}を治療し、サザンカとヒマワリを狂わせ、ジャクレイたちに自殺を暗示……目的が全く見えない！」

全ては、幸せの極致へ誘わん。

知らぬことが幸せなこともあります。

「……」

……そうそう、言い忘れていました。

あなたの『幸せ』、預かってますよ。

ちゃんと取りに来てくださいね。

「……!!」

+++++

「……ツク！ 目を開けろ サツク！」

ボツサと異なる、低い男の声が頭に響く。サツクがよく知っている声だ。

「……ジャクレイ？」

「おお！ 気がついたか！ サツク！」

サツクは仰向けになってジャクレイに肩を揺さぶられていた。先ほどまで気を失っていたようだ。着ていた肌着は、寝汗でぐっしよりと濡れていた。

「み……みんな無事か!？」

そんな自分の状況を他所に、サツクは、詰所にいた憲兵たちの心配をした。

ボツサの暗示によって、自殺を迫られていた人々。サツクの咄嗟の機転で、音による衝撃波で刺激を与えらるという荒療治を試みてみたが、その結果が確認できていない。

「……安心しろ、誰も死んでいねえ」

ジャクレイが指をさした所では、緊急の救護スペースが作られてい

た。

サツクは周囲を一瞥した。衝撃によって、建屋の窓ガラスは内側から破壊され、壁には数多の亀裂が走っていた。天井の一部は崩落し、受付付近は激しく損傷していた。

しかし、建物自体はなんとか耐えてくれて、完全崩壊は免れた。そして人的被害も、犠牲者を出すことなく、また、暗示自体も、サツクの目論見通りに、強い刺激によって解除させることができていた。

「ケガ人は多そうだな」

崩れた壁や天井に巻き込まれた人間も少なくなかった。救護スペースに集められたのはそういった類の人たちがメインで、頭や腕、体や足など、いたる場所から流血していたのが見て取れた。

「大丈夫だ、こいつら皆、丈夫さが取り柄だからな。それに、生きているだけで十分。傷はいずれ癒える」

多少、放任的なジャクレイの意見も、今のサツクには十分な励みになった。

が、ここでサツクは、先ほどまで頭に響いていた声のことを思い出した。

(大切なものを預かっている……い・まさかつ！)

サツクの顔が強張った。それを見て、ジャクレイは何かを悟った。と同時に、彼はサツクに頭を下げた。

「すまん！ サツク！ ……サザンカ姉妹だが、既に昨夜のうちに……」

+++++

地下牢は文字通り、もぬけの殻だった。

サツクでさえ、開けるのは困難だと太鼓判を押した三重構造の錠前は、憲兵が外側から、正規の手順を使って開けられていた。

もちろん、開錠は憲兵の意志ではない。ボツサが錠を開けるよう、遠くから操ったのだ。

(相手がボツサである時点で、この想定をしていなかった自分のミス

だ)

サツクは握った拳で、牢屋の壁を殴りつけた。壁は僅かに手の形に抉れ、パラパラと砂粒が落ちた。

「サザンカたちの行方は目下捜索中だ……馬車で連れていかれたって
いう目撃証言も見つかった」

「狙いはあくまで、俺のはずだ。彼女たちを囿につかうだろうな」

先ほどからずっと、ぼつの悪い顔をしているジャクレイ。

「……憲兵でありながら、お前の足を引っ張ってばかりだ。心底情けないぜ」

「気にすんな。まして今回の相手は『勇者』だ。常識が通じないのも無理はない」

建屋の中の人間全員を催眠状態に仕立て上げることなど、誰が想像できよう。しかし、ボツサならそれが可能だった。

彼は、『福音奏者』^{エバンジェリスト}だ。

ビショップ系最高職ではあるが、それに就くには、『回復術師』『白魔術師』のほかにも、『聖騎士』^{パラディン}などの聖職者職に加え、『話術師』『宣教師』の知識が必要になる。

一介の話術師が暗示を掛けようとする、対象を一人に搾り、ある程度時間をかける必要がある。が、勇者の力は、各能力の増幅させ、さらには、彼の装備する『福音奏者のマント』が、この暗示能力の効果を底上げさせる。

『福音奏者のマント』は、広範囲に念話^{テレパシー}を飛ばすんだ。敵味方を識別してな」

「なんてこつたい。勇者つてだけで強力な力なのに、そこにチート級装備も追加されてるのか」

「厄介この上ないな……勇者装備を持ち出していたか……」

サツクの追放——もとい、引退時には、装備していたものは全て勇者チームに預けてきていた。唯一選別として、『擬態獣のマント』を貰った程度だ。そのためサツクの身に着けている装備は、街で揃えられる質素なものばかりだった。

一方、サツクの引退とは異なり、ボツサは『脱走』だ。今回の事件

で、ボツサは勇者装備を『持ち出して』いることが自明となった。

「……くそっ！ 頭が回らねえ」

今自分が何をすればよいのか。何ができるのか。全く整理が付かなかった。

サザンカたちを攫われたことに加え、ボツサの意味不明な行動の所為で、サツクは頭に血が上りっぱなしだった。

誰もいない牢屋の石壁に額を付け、サツクは暫く項垂れていた。

ただただ、時間だけが無情にも過ぎていった。

居合わせていたジャクレイたちも、自身らの警備の不甲斐なさでサザンカたちが連れ去られたことに責任を感じ、サツクに声をかけることができなかった。

（考える……七勇者として一緒に旅してきた仲だ。ボツサが身を潜めそうな場所……）

七勇者として、同じ死線を潜り抜けてきた仲間である。ボツサの趣味嗜好や、彼の考えそうなことを、当時を思い出しながら紡いでいった。

しかし、明確な回答は浮かばない。

ボツサは寡黙な性格で、あまり自分のことを語ることはしなかった。

しかし、人を護ろうとする想いは、チームの中でも一際高く、『個よ

り全』の思想が強かったアリンシヨアとは、よく口論になっていた。

また、とかく『死』への感受性が高く、人間の遺体を見つけるとすぐに手厚く弔い、祈りの唄を謳っていたのが印象に残っている。

『福音奏者エバンジェリストも、死者の声は聞けません……もしかしたら、私、聞こえない事が怖いのかもかもしれませんね』

「……ボツサ……あの時のお前は、どこにいつちまったんだ……」

いくら考えても、過去の思い出が巡るだけだった。

未だ、最適解が見えてこないサツクは、あまりの悔しさに唇を強く噛んでしまった。

鉄の味が口の中に広がる。

「……まるで、道化師だな」

この眩きは、ボツサに向けてか、それとも自分自身のことか。
語った本人にも、それは判らなかつた。

第7話【その4】

「ふむ、かなり堪こたえているようですね」

そう呟くと、その男は静かに口に紅茶を運んだ。既に冷めてしまっていたが、乾いた喉を潤すには、これくらいの温度のほうが最適だ。「しゃべりすぎましたね」

まるで旧知の戦友との会話に花が咲いたような言い草だが、そんな面白い話ではなかった。彼の独白は、誰に語り掛けるわけでもなく、アイサツクとの会話の感想を漏らし続けていた。

彼がお茶を嗜む喫茶店では、今朝方爆発した憲兵詰所の話題で持ちきりだった。

「ガス爆発らしいよ」

「テロじゃないのか？」

「憲兵は何も発表してない」

「友達が勤めてるんだ……心配だよ」

「罰金刑の支払い滞ってたから助かったぜ」

「死んだ人はいないらしいぞ」

「……ふむ」

死者は、出ていない。それを聞いた彼——ボツサは、納得がいかなかったようだ。

「2、3人は『祝福』できると思っていたのですが。流石、アイサツクですね」

彼は残った紅茶を一気に飲み込んだ。空になったカップをテーブルに置き、椅子の背もたれに畳んで掛けてあった若草色のマントを持ち、席を立った。

伝票には、紅茶の代金に併せてチップ料金を併記してあった。ボツサは懐からくしゃくしゃになった紙幣を取り出し、伝票と一緒に給仕に渡した。

「余りはチップで」

「ありがとうございます」

若い女性の給仕であった。顔立ちも悪くなく、同年代の男性にはウ

ケがよさそうだ。

……だからだろうか、チップを多めに貰うことに慣れていたためか、ボツサが渡したチップには、感謝の言葉こそ返したものの、そこには『気持ち』が込められてなかった。

「……」

そんな心の声を、ボツサは聞いていた。いや、否応なく、声が聞こえてしまうのだ。

「君」

「？ はい？ ええと、あ、あれ」

ボツサは給仕に声掛けした。すると、給仕は手に持っていたナイフ（ケーキを切り分ける用だろうか）を、自身の喉に突き立てた。

が、それは彼女の喉元ギリギリで止まった。

「え……？」

本人も自覚しない、思いがけない行動に唾然とし、ナイフは彼女の手から滑り落ちた。

金属と石畳がぶつかる派手な音が、店内に反響した。

「あ……し、失礼しました！」

我に返った彼女は、慌ててナイフを拾い上げた。自らの首を突こうとしたナイフであるが、そのことを、今の彼女は忘れていた。

既に、ボツサはその場になかった。

「参りましたね、一般人は『巻き込まない』ルールは、私の心願成就の妨げになる」

ポリポリと、右頬を人差し指で搔きながら、ボツサはマントを翻し喫茶店をあとにした。爆発のあった詰所とは真逆の方角。彼は、ある女性と待ち合わせをしていた。

「楽しみです。彼女の『生きる』という思いは、私の力を凌駕した」

生への執着と、復讐心。その二つだけで、あの女は命を繋いでいる。彼女が、これから何を仕出かすのか。人の信念が、どれほどのものなのか。

「決して諦めないという信念に、賭けてみましょう」

「目撃証言があったぞ！ 近くの喫茶店で、茶をシバいていた！」
「……やっぱり、近くに居たかつ！」

崩壊寸前まで至った詰所で比較的原型をとどめていた地下牢に、ジャクレイとサツクの声が反響した。

急あつら詭えであるが、ここ地下牢に『対勇者対策本部』が作られていた。大ダメージを負った建屋の修復もさることながら、今は、勇者ボツサⅡシークレの居場所を明らかにすることが先決であるとの、ジャクレイの判断からである。

暗示による集団自殺。

未遂には終わつたが、詰所に勤める人間数十人を一度に亡きものにする一歩手前までいったのだ。憲兵として、そんな重大事件を起こそうとした犯罪者を野放しにする理由など微塵もない。それが元勇者だとしても。

「表上はまだボツサ様……いや、ボツサは七勇者として魔王討伐中だ」
七勇者脱走の事実は、まだ新聞に載っていない。そんなこと公になつてしまつたら、勇者の信頼が大きく揺らぐ。おそらく勇者イザムが箝口令を敷くだろう。この事実は、クリエの好奇心によつてやつとサツクの耳に入ったレベルだ。

「ボツサの顔を知る人も少ない。けど、あのマントは目立つ」

明るい若草色を呈した、勇者装備『福音奏者のマント』。雨風を凌ぎ野営時の暖をとるためのマントを、こんな派手な色に染める人は少ない。

「マントは、広範囲に念話を飛ばすのに必須だ。そして確実に暗示に賭けるのに、出来るだけ近づく必要がある」

「すると自ずと、ボツサが近辺に居たということになる、か」

ああ、と、サツクは頷いた。

「勇者現役時代に付与した俺の力。追加能力が薄れたんだ」

マントの念話能力は、勇者アイサツクが潜在解放ウエイクアップさせたものだった。今まで特に意識していなかったが、追加させた能力は、どうも時

間と共に弱く薄れていくらしい。

(勇者時代は、日々の魔王軍との戦闘で、能力を付与しない日など無かったからな……)

当時は仄かに懐かしむも、離れて分かった自身の能力の欠点に、今回は救われる事となった。

「念話を飛ばせる距離が短くなってきている可能性に掛けて正解だった。奴は、夜から朝方、そして、ついさっきまで近場にいた」

「だが……そこからの足取りはわからねえ。目撃者は口をそろえて、ぷつぷり記憶がなくなつたと言っている」

「そこまで遠くに移動しているとは思えない……ジャクレイ。ハクノ地区の近くで、身を潜められそうな場所を徹底的に洗ってくれ」

時間が掛かるかもしれないが、全く手がかりがないこの状況では、こちらができる手一杯のことだった。

(俺が標的なら、サザンカたちをダシに何か仕掛けるはず。出来るなら、それより前に、こちらから攻め込みたいが……)

しかし相手の潜伏先も、まして、正確な目的すら不明であるため、サック側の対策はどうしても後手に回ってしまう。

「こちらとしても万全の体制を備えておくか……ジャクレイ、『武器庫』を使っているか?」

「ん? 武器が欲しいのか? 自由に使ってくれ」
「ありがとう、恩に着る」

サックは武器庫へ向かった。武器庫は、牢屋とは別の地下に備えてあり、爆発から難を逃れた施設の一つだった。

(『自由に使う』許可は下りた。なら……)

一旦、地下牢から1階に上がり、別のフロアから再度地下へ潜る。先ほどまで廊下はがれきで覆われていたが、手が空いている憲兵総出で片付けが行われたことで、廊下は比較的自由に行き来できるくらいになっていた。

「あ、サック様!」

すると、サックが急に呼び止められた。サックは一旦足を止め、声の主に向かって振り向いた。

昨日から受付を受け持っていた憲兵だった。『様付け』なのは、サツクの素性をなんとなく感づいたためだろうか。

「どうした？」

呼ばれた理由が思いつかないため、また、武器庫に急いでいたため、少し不愛想な返事を返してしまった。

不機嫌そうな態度に、呼びとめた憲兵は少し狼狽えた。

「い、いえ、先ほど、サツク様宛に『荷物』を預かっておりまして……」
憲兵はぼつの悪そうな顔で、サツクに荷物を手渡した。それは細長い物体で、しっかりと厚手の布で包まれていた。

手で握った感じから、鞘に収まったショートソードのように思えたが、重さは木の枝よりも軽かった。

「……そうか、ありがとう」

サツクはお礼と共に渡された長い包みを受け取り、まっすぐ武器庫へ向かった。

「……あのバカやろう！」

武器庫へ入るや否や、サツクはすぐに重い扉を閉め、声を荒げた。
包みを持った瞬間、サツクの鑑定眼が働き、中身を知ってしまったからだ。

サツクは、大きなため息の後、無言で包みを開けた。

細長い棒は、フルーレタイプの大剣だった。長さは通常より短く、しかし短剣より長い。何より異常に軽いそれは、サツクがよく知るものだった。

柄と鰐に施された、鷹と疾風の彫刻。これは、新聞屋『クリエIIア イメシア』の武器だ。

(返り血……違う、これはクリエの血痕か)

柄には血液が付着していた。剣の刃によるものではない。血の付き方から、持ち主のものと推測できた。

そして、包みには一枚の手紙が添えられていた。
嫌な予感しかしない。

しかし、手がかりになればと、彼は手紙に記載されていた文面を覗いた。

『新聞屋と、忍者は預かった。一人で来い』

ご丁寧にも、その手紙には潜伏先の地図が記されていた。

サツクは顔をしかめ、強く奥歯を噛んだ。食いしばった歯が軋む音が、彼の頭に大きく響いた。

「……気に食わねえな」

サツクはただただ、怒りに肩を振るわせた。

第7話 エピローグ

旧首都ビルガド、ハクノ地区。

現在は実質的に、本国の最北の大型都市になる。

風俗やカジノが公的に認められた特異な街で、表向きは華やかな反面、裏向きに目をやれば、その目を覆いたくなるような黒い部分が見え隠れする。

貧富の差が大きすぎて、上を見れば果ては無く、下を覗けば底は深淵へと続く。

陽の部分と陰の部分をあわせもつ街だ。そして、陰の部分象徴するかの様に立ち並ぶ、ここスラム街にも、さらに格差社会が形成されていった。

「……」

サツクは、憲兵が使う馬を借り、スラム街の外れにやってきた。既に日は落ちていたが、今宵は月明かりがまぶしいくらいで、夜道も明るく照らされていた。しかし、サツクの足取りはお世辞にも明るくは無かった。

彼は、更に北へ馬を走らせた。すると、一棟の教会らしき建物が見えてきた。

周囲の草木は枯れ、一部は焼け落ちた後が見られた。過去に火災でも起こったのだろうか。

教会自体は、石レンガ造りであったため火災による全焼は免れていたようだが、外壁はどこどころ焼け跡が残っていた。

住民に見放された、崩れかけの教会。

しかし、その教会に近づくと、サツクは違和感を覚えた。

入り口の扉や、扉横に彫られた女神の彫刻に修繕の跡があったのだ。誰かが定期的に使用していることが伺えた。

「ここか、極幸教の隠れ家か」

サツクは独白し、そしてゆっくりと、木の扉を開けた。

元々ステンドグラスが充てがわれていたであろう場所は、修理が間に合っていないのか、木の枠だけが押し込まれていた。そのため雨風

を防ぐようなものはなかったが、ダイレクトに月明かりが差し込んでいた。

それはまるで、演劇舞台のようだった。メインの大きな窓から入り込む光はちょうど、教会の中央を幻想的に照らしていた。

「……い・ サックさん！」

そんな月明かりのスポットライトは、椅子に縛られていた彼女を神々しく、また儂く見せた。

新聞屋、クリエIIアイメシアだ。

背もたれの高い木製の椅子に、彼女はロープで括られていた。両手は後ろに回され、手首を介してしっかりと結ばれていた。顔にできていたアザが痛々しい。

「すいませんサックさん……。捕まっちゃいました」

テヘツ。と、舌を出しお道化^{どけ}て見せる。強がってはいるが、しかし彼女のトレードマークであるメガネも歪み、腫れた頬も相まって不格好な醜態をさらしていた。

「……」

サックは、動けなかった。ピンチに陥り命を奪われかけた、クリエを助けるようなそぶりも、見せなかった。

危険を顧みず勝手に行動して、結果、人質となったクリエに怒りを覚えていた……。わけではない。

動けなかったのだ。なぜなら、明かりの外からもう一人の姿が確認できたからである。もう一人の影は、手に物騒な小型の刃物を握っていた。それは、サックのよく知る特殊な武器——クナイだった。

サザンカだ。

服装は、デートと称してサックが購入した（お金だけ出した、の意）服をそのまま着ていた。長い髪は動きやすいようにか、後ろで束ねていた。宝石部分が砕け紛失した、簪を用いてお団子状に黒い髪を巻いていた。

『止まりなさい』

サックの頭に、直接声が響いてきた。しかしその声の主は、サックの想像していた人物のものではなかった。

(ボツサ……じゃないな、誰だ)

少し年配の女性の声であった。サツクは、しかし、その声を聞いたことがあったことを思い出した。

「イチホ、イーガスか！」

教会の全体に響くくらしいの大きな声で、念話の主に聞いたのだ。だが、念話の主はそれに答えなかった。代わりに、サツクが今おかれている現状を改めて知らしめさせた。

『よく見なさい、あなたを鼻肩にする新聞屋が、どうなっても良いのですか？』

その声を合図に、サザンカがさらにクリエに近づいた。そして、手に握られたクナイを、クリエの喉元に突きつけた。

「ヒイツー！」

短い女性の悲鳴が、教会に反響した。

『さあ、私の言いなりになってもらうわよ……勇者アイサツク!!』

「なんか勘違いしてねえか？」

サツクは、そんな状況を物ともせず、クリエとサザンカに歩み寄り始めた。

彼はクリエ愛用のフルーレを持ってきていた。腰に携えたそれを鞘から抜き、クリエに近づいた。職人の手によって施された、鷹と疾風の彫刻が月明かりに反射して煌めいた。

「え、ちよちよ、ちよちよちよちよつと!!」

クリエ、まさかのサツクの行動に明らかに動揺を見せた。

そんなクリエを目前にしながらも、サツクは無視して剣を構え、一気に距離を詰めんと駆け出した。

『……ちっー!』

心に直接語りかける声が、大きく焦りを見せたように思えた。新聞屋が人質として使えないことは想定外だったようだ。

『おい、サザンカ!』

しかし、その声の主は、もう一人の『人質』を使うプランに切り替えた。

サザンカがもう一本のクナイをとりだし、今度は、彼女自身の喉に

クナイ先端を向け、押し込んだ。かなり首の近くに刃を持ってきており、僅かに刃が首に触れていた。血が滲み、ぽたぽたと垂れてきていた。

「……くそっ」

サツクは、クリエとサザンカの目の前で歩みを止めた。剣は構えたままだったが、まだ距離が離れているとサツクは判断したのか、サザンカの武器を切り払うことができなかった。

『全く、油断も隙も無いわ。道化の勇者め』

脳内に響く声は、少し穏やかになっていた。やっと作戦通りに進んだことで安堵したのだろうか。

『これ以上動くなよ、道化師。さ、武器を捨てなさい』

「……」

サザンカという人質を取られたサツクは、言われるがまま、手にしていたフルーレを遠くに投げた。そして、両の手をバンザイの格好にし、武器を持っていないことを態度で示した。

『その厄介な薬品が詰まった、腰のホルダーも外して捨てろ』

「……」

サツクは短く舌打ちし、腰のホルダーを外した。薬草の粉末や治療の液体など、色々なアイテムを詰め込んだものであり、アイテムマスター道具師の生命線とも言える。

『……靴も脱げ。何を隠しているかわからないからね』

声の指示に従うサツクは、最終的には、薄手の上着1枚に、麻の粗末なズボンだけとなった。素足に、落ちている小石が食い込み、じわじわと痛みが走った。

『ふ、道具の持たない道具アイテムマスター師など、それこそ道化以下ね』

サツクは否定できなかった。その女の言っていることは常々正しかったからだ。多少、格レベルに自身はあるものの、本来の力である、道具師の持ち味は全く出せない。

しかも人質を取られており、その一人は操り人形になっているとはいえ、サツクと対等に渡り合える程の実力者なのだ。

「サザンカっ！ 目を覚ませ！」

サツクは、目の前にいる婚約者に大声で語り掛けた。しかし、サザンカの目はうつろのまま、喉にあてられたクナイの刃は外れることは無かった。

『無駄。無駄よ、アイサツク……少しでも動いてみなさい。どうなるか分かるわよね?』

この声を合図に、サザンカが近づいてきた。焦点は変わらず目には光は宿っていないが、しかし、体の動きは想定よりもハキハキとしていた。

『二オーレはね、顔を、杖で潰メイヌされていたの。綺麗な顔だったのに。痛かったでしょうね、悔しかったでしょうね』

すると、サザンカが足元に落ちていた石を拾った。ちょうど、大人の拳より一回り程大きいだろうか。サザンカの女性の手には余るほどの大きさだ。

「サザンカっ!」

サツクは、そんなサザンカに一縷の望みを託し、再度声を掛けた。だが、それは虚しく響くだけだった。

『さあ、絶望なさい、悲観しなさい、後悔なさい』

サザンカはさらにサツクに近づき、石を右手で持ち上げた。そして、まっすぐサツクの顔面を掛けて振り下ろした。

顔に激痛が走る。

鈍い音が、サツクの脳みそに響く。いや、教会全体に、頬骨が砕ける音が響いたようだ。

「ひいっ!!」

椅子に縛られたクリエが、体全体を委縮させて怯えた。目下で行われた痛々しい情景に慄いていた。

「が……っ! ぐああああ!」

顔面をこつこつした岩で殴られたサツクは、痛みで体を俯かせようとしたが、それをサザンカが許さなかった。

サツクの髪の毛を鷲掴みにし、持ち上げたのだ。

サツクの顔と、サザンカの顔の距離が、今までに無いくらい近づいたが、ロマンチックな雰囲気とは言い難い。

『連れてこい。私の家族が受けた報いを全て受けてもらう』

「いつてえ！ サザンカ!! 目を覚ませ！」

そのまま髪の毛を持ったまま、サザンカはサツクを引きずりまわした。

(なにが報いだっ！ 貴様らの狂った思想は、正当化できるものではないだろう！)

心底、胸糞悪い。サツクは強く、思った。すると、その女の声がサツクに語ってきた。

『ふ、心の声は聞こえているわ。変な事を考えないことね。策はすべてお見通し』

ふははははは。

笑い声だ。サツクの頭に、女の笑い声がこだました。異常なまでの執着。私念。憎悪。脳に届く声一つ一つが、サツクを精神を侵し削っていく。

『サザンカ。奴の手を縛って、こちらに持ってこい。続きは、私の目の前で……よく見せてくれ』

「サザンカ……っ！ 目を、覚ませ……っ！」

何度も何度も、サツクは声をかけ続けた。殴られたときに頬骨を骨折していたため、口を開けるたびに痛みを伴った。しかしながら、サツクの声は、サザンカに届くことは無かった。

(無理か……っ！ くそっ！)

サツクは、自分の深層鑑定能力ディープアナライズの無力さに落胆していた。サツクにはサザンカの現状の症状が『視えて』しまっていたのだ。そして、それを打開するには、単純な声掛けや衝撃だけでは無理であることも、理解してしまっていた。

『人質を取られているのに策もなく、飛び込んできたか……人質をほおっておいて逃げることもできたでしょうし、大勢を引き連れてやってくることもできたでしょうし』

「……馬鹿を言え。そんなことしたら、人質処分してトンズラだろ」

またしても、女は笑い始めた。笑うたびに声がサツクの脳を揺らす。

『それを判って、言われた通りクソ真面目に一人でやってきた。やはり貴様は『道化師』がお似合いね』

言われた通りだ。現状のサツクに打開策はなかった。まともな策もなく、この場に來たことは間違いないかった。

(……道具を持たない道具師は、今、正に道化師、か。けどな……)

誰に利かせる訳でもない。弱弱しい声で小さくサツクは呟いた。強いて言えば、自分自身への言い聞かせ、だろうか。彼の決意の現れでもある。

(曲がりなりにも、『勇者』なんでな。人質をほおっておけるわけないだろ)

すると、この心の声を聴いていた女の笑い声が止まった。そして、負の感情——怒りがこもった声が、サツクの頭に響いた。

『私たちの家族の人生を無茶苦茶にしてその言い分！……気に入らない。『あの御方』の言ったとおりの性格ね！』

(あの御方……『ボツサ』の事か……)

『答える義務はないわ……サザンカ！一旦コイツを黙らせる!! 耳ざわりだ!』

するとサザンカは、再度、石を持った手を振り上げ、サツクにたたきつけた。

「がつー!」

ゴリツと、先ほど以上に強い衝撃がサツクに走った。頭のこめかみ部分に強烈な打撃を受けたサツクは、そのまま、意識が遠のいてしまったのだった。

能力使うにも道具がない、けどそのぶん何とかしてみせる

第8話【その1】

礼拝堂の横にある、居室。

おそらく元は、応接室か会議室かであろう。しかしその面影は僅かで、壁は崩れヒビが入り、床は赤黒く汚れ、カーペットは捲れ上がり、土埃にまみれ風化し始めていた。

天井には、元々、小ぶりなシャンデリアが下がっていたのだろうか。照明器具を下げるためにあつらえられた、金属製の滑車があつた。シャンデリアのろうそくに着火するなどの際は滑車を用いて上下させるのだが、今現在は、サックが吊るされている。

両手の手首を鎖で縛られ、鎖で天井から垂れ下がっていた。サザン力が鎖を引き、鎖の反対側を専用のフックに固定した。ギシギシと、わずかに錆びた滑車が軋みサックの体が揺れた。

『道化^{フェール}ではなく、吊る^{ハング}された男^{ドマン}とこゝろね』

脳内に、またしても女の声が響く。しかし、サックはその声を無視し、周囲を観察した。採光用の窓は板で封じられ、密閉された空間であつた。外からの明かりは皆無だったが、壁に設置された燭台が室内を仄かに明るくしていた。そして、サックは探していた目的の物を、部屋の角で見つけた。

(やはり、あの香炉か……しかも、かなり濃いぞ)

サックにとつても忘れられない臭いだった。田舎でスローライフを営むつもりだったサックを、女神への復讐へ駆り立てた事件。この香炉の臭いから運命が変わったといつても過言ではない。

しかし、その香の濃さは、当時の比ではなかった。置かれた香炉からは真っ白い煙が多量に発せられており、匂いを嗅がせるという本来の香炉の使い方ではない。素人目から見ても異常な光景だった。そのため部屋の中は霞が掛かったようになっていた。

薬に耐性があるサックでさえ、神経に作用するこの御香の香りは、

眠気を誘発し体に痺れを覚えさせた。脳の奥にチクリと刺さるような刺激も併せて感じられた。

『気に入らないわ。やはり、香は効かないのね』

そして先ほどから、脳内に語りかける女性の声。だが礼拝堂の時とは異なり、その声の主は、もやがかかった室内で、じつと、サツクを見ていた。

『大方、予想通りといったところかしら？』

目の前の『それ』は、念話を使いサツクに話しかけてきた。

車椅子に座った『それ』が羽織る若草色のマントに、サツクは見覚えがあった。いや、常に鑑定眼が働いているため、否応無く情報が頭に飛び込んでくる。

「あんたのそのマントは、ボツサの慈悲によるものか」

『私の心願成就のため、あのお方が私に託したのよ、言葉を慎みなさい』

イチホ⇨イーガスは、ボツサが身に着けていた『福音奏者のマント』を羽織って、黙々と語った。全く声を発することなく、目の前の『それ』……いや、彼女は、念話を使い語り続けた。

『貴様が私たちの屋敷に現れなければ、こんな事にはならなかったのよ。軽率な行動を呪いなさい』

「お前ら親子の、非人道的な行いを棚に上げて……どの口が言うか」

すると、イチホは大きく体を揺すった。サツクの言動に強い怒りを覚えたのだ。表面に強く現れた感情は表に筒抜けになってしまうのは、念話でしか会話できないことの欠点だった。

『貴様のお陰で、私はすべてを失った。夫と娘は惨殺され、残った私は、口もきけず、耳は聞こえず、鼻は朽ち、手足は自由には動かせず、だ。ああ、憎い憎い憎らしい』

イチホは、憎しみの感情をとめどなく溢れさせてきた。想いが漏れるたび、イチホの体が大きく揺れ動いた。どうやら車いすに座っているが、自分自身でも幾分動くことが出来るようだ。

そして、サツクはその光景が滑稽に見えてしまった。

「……死体風情が、感情を語るか」

イチホ||イーガスは車椅子の車輪を朽ちた手で器用に回し、サックに近づいた。羽織ったマントから覗く彼女の体は、正に骨と皮だけだった。

皮膚は乾燥し固くなり、殆どの肉は削ぎ落ち、頬は痩せこけ、鼻は腐り落ち、目は陥没していた。喉元には小さな穴が空いており、それは声帯の辺りを貫いていた。呼吸をしているとはとても思えない。

一般的にいうなれば、ゾンビだった。だが、普通のゾンビは自我を持つことはまず無い。何かに操られているのが関の山だ。しかし現に、イチホはゾンビの体を持ったまま自身の意志で動いており、そしてなおかつ、生前の知識と記憶すら併せ持っていた。

『貴様を、私の家族以上に惨たらしく殺す……いや、生かさず殺さずを繰り返し、後悔の念に苛まれるがよい。貴様の悲鳴を聞きながら、流れる血と臓物を使つて、壁に飾り付けよう……。ああ、なんと美しい情景。想像するだけでなんと清々しい』

すると、イチホの目が光った。ゾンビとなり体が崩れかかっているにもかかわらず、彼女の眼だけはしっかりと確認できた。肉は無い筈だが、はつきりと、陥没していた目の奥に、ぎよろりとした目玉が存在していた。

「視覚だけは、残してるのか」

サックがしゃべるたびに、ギシギシと手首に巻かれた鎖が擦れ音が部屋に響く。

『ええ、貴方の最期を目に焼き付けたいから』

イチホはニタリと笑った。いや、顔にある筋肉は削げ落ちているため、顔の表情は変わらないはずである。しかし、念話に乗って来る感情によって、サックに下卑た笑いを想起させた。

「なら、サザンカたちは無関係だろう！ 狙いはオレだけなら、何故彼女を巻き込んだ！」

『何をいつているの？ 私の手足になるということは光栄なことよ。誇るべき大役を与えてるの。お薬で苦痛を取り除いてるし、これほどの幸せ者はいないわよ』

サックは、サザンカに目をやる。目は虚空を眺め、口からはよだれ

を垂らしていた。完全に意識が無い。が、彼女は立っており、先ほどは大人一人分の体重を鎖で引き上げていた。

イチホーイーガスの意のままに操られている。あながち、間違いではないことを、サツクは再認識した。

そして、さらに彼は、部屋の中を目をこらし、もやのかかった闇を見据えた。

「……いー ヒマワリっ!!」

部屋の隅で、ヒマワリは小さな体を床に横たえていた。暗がりでも判断できないが、サツクの見立てでは体調は芳しくない。顔色は伺えないが、口から泡を吐き、ぐったりとしていた。呼びかけに答えなかったことから、意識はないのだろう。

「香炉を、消せっ！ ヒマワリの命に係わる！」

サツクが大きな声で懇願するたびに、ジャラリと手首に撒かれた鎖が音を立てた。彼の全体重が手首の鎖に乗っかっているため、手先は鬱血状態うっけつとなっていた。さらに、動けば手に鎖が食い込み、擦れて皮は剥け、手に溜まった行き場のない血液が流れ出ていた。

『いいわあ、その顔が見たかったわ』

既に生き物としての機能を失ったイチホの顔が、また歪んだかのような錯覚を起こした。もちろん物理的にあり得ないのだが、彼女の底知れぬ怨念が、そう見せているのだろう。彼女は満面の笑顔……法悦の表情だった。

「クズめ。意識を持ったまま死者として蘇ったが、元から人の心など持ち合わせていなかったか」

『……黙らせろ、サザンカ』

「ぐっ!!」

イチホの開口一番、サザンカは素早く杖メイスイをサツク左頬に目掛けて振りぬいた。激しい音とともにサツクの口と鼻から血液が飛び散る。『娘と夫にしたことを、そのまま味わってもらおうわ。さあ、恐怖おののに慄おのきなさい』

「サザンカっ！ 目を覚ませ!!」

サツクは、イチホの思惑とは裏腹に、殴られてもサザンカへの呼び

かけを止めなかった。その行動がイチホの癩に障った。

『サザンカ、次は右頬を潰しなさい』

「ごふっ……サザンカっ！」

『次はそうね……右の脛』

「ぐあああつ！……、サザンカ！俺はここにいて！起きろ！」

『……脇腹』

「ごふお……さ、サザンカっ！助けに来たんだ……ヒマワリもっ！」

幾重にも拷問を受けるも、サツクはサザンカへの呼びかけを止めなかった。その繰り返しの行動が、とうとうイチホの逆鱗に触れた。

『無駄よ!! 香の濃度を何倍も上げた!! 私の最高傑作だ！ 普通なら吐瀉物を撒き散らして絶命する濃さだ!』

まるで、そうやって死んだ人物を見てきたような言い分であった。いや、イチホIIーガスは実際に見ているのだ。数多くの人物の人生を狂わせた、この催眠香を完成させるために。幾重にも人体実験を執り行ったのだ。

『忍びには、御香が効きにくかったの。だからこの子たち用に、ウンと濃くしたの。けど、小さい子はダメね、体が耐えられなかった。まったく脆いこと』

既に死んでいるイチホの体には無害である。だからこそ、この濃度まで上げて同じ部屋に鎮座できている。

「……っ！ ヒマワリ！ 絶対助けるからなっ！」

顔をボコボコに殴られ、足の脛は腫れあがり、肋骨にはヒビが入っていた。それでも、サツクはサザンカとヒマワリに声をかけ続けた。「サザンカ、俺は……約束したんだ！ お前らの親父さんに、娘たちを託されたんだよ！」

「遺言は聞く。しゃべれるか」

サツクは男の口元に耳を近づけた。

男は最期の力を振り絞り話した。

「……娘を……奴らに捕まった……助けて……」

それ以上は、彼は話すことはできなかった。

あのとき。サックと同じように吊るされ、内臓を弄ばれていた男の最期の言葉。

イチホーイーガスの精神異常^{サイコパス}ぶりを視認し、サックがイーガス家に関わる事を心に決めた時。

サックも、最期を看取った男が、ただものではないことは感づいていた。

だから、サザンカたちがイーガス家に関係していることを知ったときから、この父親の遺言を叶えてあげたいと思いつけていた。

「サザンカっ！ ヒマワリっ！」

サックはさらに声を張り上げた。体全体を使って大声を出すため、体が動き、それがイチホには滑稽なダンスに見えていた。

が、イチホはその愉快的踊りにすぐに飽きてしまった。むしろ、イチホの言葉を見捨てるサックに対して、ストレスを感じるようになってきた。

『……そろそろメインディッシュね。サザンカ、次は腸を抉って』

サザンカは結局、サックの呼びかけに答えることは無かった。

手に、忍び専用武器『クナイ』を握り、サックの脇腹付近へ刃を近づけた。奇しくも、花街でサックに突き刺した場所と全く同じ位置であった。

『勇者の中身って、人間と一緒になのかしらね。楽しみだわ』

「くそっ！ サザンカ！ サザンカっ!!!」

そしてサザンカはゆっくりと、良く研がれた刃をサックの脇腹に添えた。そのまま押し込み、横に裂けば、サックの内臓はおなかから零れ落ちることになる。

「……」

だが、そこから、サザンカは動かなかった。

『むー！ おい！ どうした！ 動け！』

この部屋で、勇者の臓物を拝む最悪趣味なイベントを心待ちにしていたイチホが、明らかに動揺を見せた。サザンカの動きが止まったことが予想外だったのだ。

『おい！ サザンカ！ おい！ 私の傀儡人形！』

何度呼びかけても、サザンカは微動だにしなかった。それどころか、ゆっくりとサックから離れていった。立っているのもやっとならなくなった風で、体を左右にふらふら揺らしている。

「……………あ……………さつ……………く……………」

サザンカの口から、僅かに言葉が漏れた。それは、デートという儀式を終え契りを交わした、伴侶の名前だった。

『馬鹿な！』

単なる呼びかけて、催眠香が効果を失うことなどない。屋敷での実験でも、愛する人間の呼びかけなど全く意味をなさないレベルまで精神を侵すことに成功していた。

『それを、こんな付け焼刃の交際の仲の呼びかけで解ける訳が……!!』
イチホの考え方に間違いなかった。愛や友情、信頼関係などのおぼろげなものではない。催眠が解けかかっている、『物理的な原因』があるのだ。

そんな事ができる可能性を秘めているのは、この部屋では、彼ただ一人。

(サンキュー、ジャクレイ。いろいろ、間に合いそうだ)

彼……サックは、先ほどとは打って変わって、笑顔を見せていた。

まだまだ予断を許さない状況下ではあるが、まずは打開のきっかけを作ることができた。

(反撃の『狼煙』は上がった。ここからは……一か八かの大勝負だ)

必死に叫びくるついていたのは、焼ける痛みを我慢するために流れる大量の脂汗をごまかし、念話による読心で『思い付きの打開策』を悟られないためだった。

そしてさらに、サックが吊るされる鎖に、イチホの意識を向けさせないためでもあった。

赤熱した鎖で焼かれる薬草の音と、独特の臭い。

鼻が潰れ、耳が聞こえないイチホは、それにはまだ気付いていなかった。

第8話【その2】

彼女は既に死んでいた。鼻や耳はそげ落ちて、皮膚は乾燥し、喉は潰され、内蔵は傷み始めていた。

五感のうち唯一、目だけは見えるよう残した。復讐の対象が、もがき苦しみ命を落とす様を目と心に焼き付けるために。

耳と口については、精神に作用し心を読む術を会得できたため不要だった。さらに勇者の装備品である『福音奏者のマント』の強大なサポートも重なり、彼女は声を発せずとも、相手に言葉を届け、聞き耳を立てずとも、心の声を聞くことができた。

サツクにとつてそれは、厄介きわまりなく、また好機でもあった。心を読まれるということであれば、練った策も筒抜けになり使い物にならない。

だが先ほどまでの会話で、サツクは、とある確信を持っていた。
(イチホの読心は、ほんの表層しか読めていない)

実際、表に出した激しい感情——サザンカたちへの呼びかけなどは、スラスラと心を読まれたものの、その陰で考えていた作戦については全く触れられなかった。

耳、鼻、触覚より優先して、眼だけを残したイチホIIイーガスが相手だからこそ、サツクの打開策は、気が付かれずに事を進めることができたのだ。

サツクは潜在解放^{ウエイクアップ}を使い、自身を吊るす『鉄の鎖』から【炎属性】を引き出していた。

手に巻かれた鉄製の鎖。これも、紛れもなく『道具』である。道具に分類されていれば、道具師^{アイテムマスター}は意のままに潜在解放^{ウエイクアップ}を行うことができる。

赤熱した鎖は、サツクが押し付けた薬草を燻し、多量の煙を発生させた。さらにサツクは回復^{ポーシヨン}の液体の蓋を鬱血した手で開け、鎖に振りかけた。『じゅうじゅう……』と薬液が蒸発する音に併せ、焼けた薬草と混ざった特異な臭いを伴い、蒸気を部屋に拡散させた。

物音が聞こえ、臭いを感じられていれば、サツクの異常行動はすぐ

に見破られていただろう。

しかし耳と鼻は死に絶え、目の視野も狭く、さらに部屋には既に御香の煙も充満し、また薄暗かったことも災いした。

イチホは、サザンカに異変が現れるまで気が付かなかった。

（種類？ 調合割合？ そんなもの適当だ……なんせ、何の薬か性格に判らないからな!!）

最低最悪でも、御香の効果を薄められれば良い。

サツクはそう考え、正に、手あたり次第の薬を鉄で焼いていたのだ。もちろん全ての薬に対して、潜在解放ウェイクアッブを施し、【状態異常回復】を引き出すことができるものを中心に、である。

しかし、彼が奮闘すればするほど、サツクの両の手は、鉄で焼けていく。薬効のある蒸気に混ざって、人間の皮膚が焦げる臭いも漂っていた。

『なんだ！ 何が燃えているのだ!!』

サザンカの催眠が解け始めたことで、イチホは、いまこの部屋で起こっている異常に気が付き始めた。音も臭いも感じないイチホは、やっと、サツクを吊るす鎖を凝視し、それが赤く焼けていることに気が付いたのだ。

『薬草だと……どこに隠していた!!』

しかしイチホの質問などお構いなしに、サツクはさらに薬を焼き続けた。

部屋に満たされた香炉の匂いを薄め、打ち消さんと、よりもっと濃厚な、治療につながる薬の臭いを充満させようとした。

「……ぐうっ！」

だが、赤熱した鎖は、サツクの腕をさらに焼きつづけた。サツクの体から脂汗が吹き出る。

『やめろ！ おい！ 忍者！ やつを殺せ！』

サツクの命を弄び、壁に飾り付けるつもりだったが気が変わったのだろう。イチホはサザンカに命じた。念話によってサツクの心に響くイチホの声は、明らかな焦りを見せていた。

「えあ……あ……」

しかし、サザンカは命令に従わず動かなかった。虚ろだった目は、今は大きく見開き、うわ言のような声を出していた。

じゅうじゅうと、薬草を焼く臭いに合わせて、肉の焦げる臭いも充満していたそれを、サザンカは一点に見つめていた。

『なんだ貴様は！ どこからその草を！』

「サザンカっ!! 意識をとりもどせっ!!」

サツクはイチホの質問など無視し、サザンカに再度呼びかけた。

このサツクの『急造策』を、イチホに説明する義務など無いのだから。

第8話【その3】

拡充収納術。荷物持ちの能力である。

旅には欠かせない荷物……回復アイテムに衣服、テントや食料。戦闘には欠かせない武器防具、それらの予備、修繕道具等々。

万全の道具を持ち運ぼうとすると、ただでさえ大荷物の上、旅先で購入物や、またダンジョンに一度探索に出れば、ドロップアイテムで文字通り手一杯になる。

そこで、多くの荷物を持ち運べる荷物持ちの出番だ。

彼らは荷物を運ぶ術——収納術と呼ばれる、多くのアイテムを効率よく持ち運ぶ技術に特化した冒険職である。

もちろん、荷物持ちも一応は冒険職であるため、一部の補助系の術や移動術などを使えるが、戦闘には向いていない。そのためほとんどの場合戦いには参加せず、また参加する場合も裏方に徹する。

また、荷物持ちとして習得した収納術は、他の職でも発揮することができるため、持ち物の上限枠を増やしたのち、別の、冒険に適した第二の冒険職に移行する人が、殆どである。

冒険職としてはいささか『地味』なことも重なって、ある程度の収納術を習得してすぐ転職される、正に『初心者向け』『駆け出し用』の職業と言われている。

では、荷物持ちの『スキルマスター』——荷物持ちを極めた先にはなにがあるのだろうか。

実は、多くの冒険者が世話になっている『国営預かり所』の経営陣が、荷物持ちの『スキルマスター』である。国認定の預かり所を経営するために必要な能力なのだ。

「ある街で預けた荷物を、別の街の預かり所で受け取る」

これを、荷物持ちマスターは行えるようになる。

彼らは、契約を結んだ倉庫へ荷物を『転移』させ、また荷物から『転送』させることができる。次元を越えて別の場所へ移動させることができるのだ。国営預かり所は、認可を受けたものが巨大な『国の倉庫』と契約しており、世界中の冒険者の荷物がその倉庫で出し入れされて

いる。

そして全ての道具のスペシャリストの道具師は、荷物持ちのマスターでもある。

勇者一行として旅をしていた際には、国の倉庫と契約を結んでいたため、冒険で入手した荷物を取捨選択する苦労は存在せず、倉庫に片っ端から突っ込んでいた（たまに整理整頓しないと、荷物をどこに置いたかの本人すら判らなくなるのはご愛敬）。

正に『歩く倉庫状態』であったが、サツクは、勇者を引退するに際して、この『倉庫との契約』を解いてしまっていた。魔王城の正面が最終キャンプ地になったため、必要な道具はすべて、そのキャンプ地に駐在にきた預かり所に預けたのだった。

そして、サツクはつい今朝方、新たな『倉庫』を契約した。

憲兵詰め所の武器庫だ。サツクは、武器庫のオーナー、つまりはジャクレイに使用許可を貰っていたことから、契約成立となった。

サツクが一人で、この教会跡に出向く前に、メモを残してきていた。それはジャクレイに宛てられた、サツクからのお願い。

『ありったけの武器、薬草、道具を、武器庫に詰め込んでくれ』

出し入れには一定の制約、特に、異空間転送を応用している関係上、倉庫から即座に取り出すことは難しい。そのため、普段使わないものを仕舞う、あくまで『倉庫』としての用途が正しい使い方だ。

しかしサツクは、全能力もとい、全神経をフルに使って、ジャクレイが適当に押し込んだ荷物から薬効のあるものを成り行き任せに引っ張り出していたのだった。

手品師のように、手のひらにポンつと倉庫からアイテムが転送された。一見単純そうに見えるが、荷物が異空間を通じて別空間に移しているという、魔術師も驚きの仕掛けを介している。しかも、サツクは荷物の置き場や状態を全く把握していない。転送される荷物を途中で選別して、必要そうなものだけを選びすぎている。

「……解析、転送、選別、そして潜在解放ウエイクアップに、焼けた手の傷み……頭と腕が、ぶっ壊れそうだ」

能力を使うたびに、激しい頭痛に見舞われる。以前から違和感を覚えていたことで、どうやら道具師の力を使うと襲われるようだ。

「……そろそろ、『限界』だ……」

誰に語るわけでもなく。サツクは呟いた。あながち冗談ではなく、サツクは力の限界を迎えようとしていた。

サザンカの意識はまだ、戻っていないかった。

第8話【その4】

サツクの手の先が一瞬だけ視認できなくなった。

正に今、サツクの右手が別空間を経由して武器庫にアクセスしていた。現状をさらに打開できる道具が収納されていないか、文字通り手探りでアイテムを漁っていた。

『その手かっ！ その手かあっ！』

一瞬の違和感——サツクの手が一瞬消えたことに、イチホが気づいてしまった。

音にならない筈のイチホの声。しかしそれは心に強く大きく響いた。まるで鼓膜を破らんとするほどの絶叫と勘違いするほどだった。

そして彼女の、動揺、憤怒、恨みといった負の感情に満ちていたことも感じられた。

『殺す！ 貴様を殺す！』

すると、殺意の念に溢れたイチホが、ゆっくりと立ち上がった。

足は骨と筋だけで、筋肉などは既に無い。彼女が立ち上がり動いたびに、乾いた表皮がバリバリと音を立てて割れていった。ずっと動かずにいたためだろう。

(しまった！ こいつ……)

感情をそのまま持ったまま蘇った死者。この情報だけでも、十分予測はできていた。むしろ、サツクの目にはチラチラと、視たくもない情報が映っていた。

イチホは生前、死体の解体を趣味にして、事あるごとに『死』に触れ続けていた。彼女は自然に、死術師の領域に足を踏み入っていたのだ。そんな人物が、強い『生』への執着を抱いたまま死に、そして蘇った。死を超越した死術師の最高位は、こう呼ばれる。

(……死せる大魔術師っ!!)

『半身を抉り！ はらわたを散らせろ！』

立ち上がった彼女は、右手の掌を持ち上げ、サツクに向けた。密閉された室内の空気が一瞬張り詰める。

すると、充滿する御香の煙が、イチホの掌に集まり圧縮されていくのがわかった。周囲の空気が、イチホの手のひらに集まっていたのだ。

『死D i n w t h a e d風精k n a r p r e t s k n a r pの悪戯心よ……』

(不味い!!)

呪文の詠唱だ。脳内に直接響く言葉の羅列からサツクは、おおよその術の構成を理解した。

(風と……闇の術の複合術、しかも高位術の混合！)

『数多n e t f o e m o c e d e f i l g n i e c r e i p t e l l u d sの生命を弄ぶ弾丸と成らん！』

圧縮空気は真空を産み、さらに周りの空気を集めた。壁に灯つたろうそくは空気の流れに逆らえず立ち消え、部屋は暗闇に包まれた……。ただ、サツクが潜在解放させ【炎属性】を持った赤熱した鎖を除いて。誰の目から見ても、格好の的となつてしまつていた。

そして、イチホの手に集められた空気の圧縮は臨界を超え、異空間へ繋がる暗黒球を生成した。

こぶし大の球の周囲は真空の刃を形成し、近づき触れればあらゆるものを細切れにする。そして球体自体は、全てを飲み込み彼方へ消し飛ばす。

触れればあらゆるものを貫く、闇と風の高位術。

『死デスゲイル・バレット旋風炸裂弾！』

(……！)

無情にも、赤く燃える鎖の下方。サツクが吊るされている方角に、それは発射された。

手を縛られ吊るされ、サツクは全くなすすべがなかった。

体を捻つたとしても、真空の刃が四肢のパーツのどれかを切り裂き、異空間へ引きずり込まれるだろう。

絶体絶命である。

が、幸運の女神は彼に味方した。

イチホが術を発動した瞬間、サツクの重さに耐えきれず鎖が焼き切れた。

潜在解放による、道具の劣化が始まっていたのだった。

「うおっ!!」

想定外のことにはサツクも声を上げた。うつぶせに地面に伏せる格好で落ちたため、背中をかすめるように死の弾丸は抜けていった。正に紙一重、ギリギリのところであった。

真空の刃は部屋の壁にぶつかると、まるでゼリーを砕くかの如く容易に石壁に穴をあけ、破片は全て中央の闇の中に吸い込まれた。

綺麗に、大人が通れるほどの真円の穴が出来上がった。

外はまるで昼のように月が明るく眩しかった。穴から月の光が差し込み、部屋を照らした。

『くっ!…どこまでも私を虚仮こけにしおつてえ!』

月明かりが差し込んだことで、サツクはイチホの動きを視認できるようになった。

イチホは、さらに右手を動かし、サツクに向けたが、先ほどから動きが早くない。

(こいつ…:エルダーリッチに『成りかけ』で、動くこと自体、慣れていないんだ!)

ストレージから武器を抜くにはタイムロスがある。戦闘中に取り出すのには向かない。

だとすればまずは、目下の『道具』を活用し隙をつくるしか方法はない。

「くらえっ!」

幸い、サツクは『こういう』戦いには慣れている。

手に巻かれていた鎖は一部が焼け落ちていたため、簡単に取り外すことができた。

サツクは残った鉄の鎖を、イチホ目掛けて投げつけた。

「既に潜在解放ウエイクアップによる限界を越えている…:とすれば、後は自壊するだけ!」

赤く、炎を纏った鎖は朽ちる寸前に、無理矢理に引き出された力を爆発させた。

「爆ぜろっ!!」

鉄の鎖は、イチホの目の前で粉々に砕けると同時に、崩れた際に生

じた鉄粉が、眩しい光を発しながら燃え上がった。閃光弾と同じ要領である。

『うぎぎやあああ!!』

唯一、『生』の活動を残した目を、激しい閃光が突き抜けた。急激な明かりの変化にイチホの眼球は耐えられなかった。朽ちた両の手で目を抑えながら悶え始めた。

サックは、この隙に乗り、ストレージ武器庫から武器をとった。咄嗟に、武器の柄のようなものを掴んだため、そのままそれを引き抜いた。

「……ジャクレイ、あんたのセンス、最高だっ!!」

ストレージこの武器庫から持つてこられる武器のラインナップは、せいぜい、警備する衛兵に配られるような、量産品の『鋼鉄の剣』くらいのもを想定したサックであったが、手にした剣は、それを凌駕した、現段階では正に最適解の武器だった。

『白銀の剣』

材質の一部には邪を払う『銀』を使い、また刃を焼き入れに際しては聖水を用いる、一般的には出回りにくく、高位な聖騎士などのみを持つことが許されるレア武器だ。

ジャクレイは、サックの残したメモから、ただならぬ気配を感じ取ったのだ。

詰め所にあるありとあらゆる武器防具に、薬草や回復薬、聖水に万能薬。加えて、取り分け武器は、ジャクレイ秘蔵の武器含め、その場にある最高のものを揃え武器庫に突っ込んでいた。

「うおおおー!」

サックは、白銀の剣を掴み、イチホに向かって駆け出した。大火傷やけどを負っている両腕は表皮が焦げ既に感覚が麻痺し始めていたが、最後の力を振り絞ったの行動だ。

『あいつは……あいつはなにをしている!』

最後に頼っていた五感の目を潰されたことに、イチホは感覚の切り替えができていなかった。もし、ゾンビとして……エルダーリッチとして永くいたなら、五感をすぐに取っ払い、サックの攻撃に備えることができた。

だが、まだイチホは『人間』だったのだ。人間として目を潰されたじろいでしまった。

(白銀の剣……ウエイクアップ潜在解放! 【光属性; 浄化付与】!!)

アンデッド特効効果を白銀の剣に付与し、さらに光属性を根底から引き出した。成り立てのリツチならば、致命傷を与えることができるほどの強烈な浄化作用を纏い、剣は白く輝き始めた。

そしてサツクは、両目を抑え悶えている動く死体の肩に目掛けて袈裟切りを放った。刃が肩に触れ入り込んだ瞬間に、さらに自分の全体重を乗せた、渾身の一撃だった。
が。

白銀の剣は、イチホの肩に刺さったものの、そこから刃が進むことは無かった。

潜在解放によって限界を超えたアイテムは、例外なく粉々に砕け、使い物にならなくなる。

例えそれが、伝説の武具や、勇者専用の装備品であったとしてもだ。そして、サツクは今、そのウエイクアップ潜在解放の加減ができない状況下にある。勇者追放のあの時から……常に、サツクは能力を使うたびに、その武器防具、道具の限界を超えた能力を与え続けるしかできなくなっていたのだが。

その能力付与を行う、自分の体の負荷について、加減ができていないことに気付かなかった。

限界を超えると、それは例外なく自壊する。

彼の右手首が、音もなく粉々に砕け、朽ち落ちた。

彼の腕は、能力を付与する『限界を越えた』のだった。

第8話【その5】

(これは……なんだ?)

サツクは現状が理解できなかった。皮膚はやけどで爛れ感覚が薄れてはいたが、右手の手首が砕け崩れ去った瞬間には痛みはなかった。

「……うっ……ぐああああっ!」

そして激痛は、手首崩壊ののち、時間をおいて襲ってきた。サツクは両膝を床に突きうつ伏せにうなだれた。崩れた手首は乾いた粘土のように固まり、失血は無かった。右手首が完全に『死んで』いることの証左でもあった。

『ひ、光が……焼ける! 体が焼ける!』

しかし、サツクが放った渾身の一撃は、生ける屍の肩にめり込み、光り輝く浄化の剣は終ぞ眩い光を放っていた。

『お、おのれ』

イチホは剣に手を掛けようとした。しかし、剣を抜こうにも浄化の光が邪魔をし、柄にすら手を近づけることができていない。

(まだ、浅い。もっと奥に突き刺さないと!)

右手を失ったものの、能力発動においては、左手でも可能である。サツクは、まずは自身の右手および全身の痛みを抑えようと、武器庫ストレージから回復アイテムを探そうとした。

しかし、能力を使おうとした刹那、激しい動悸に見舞われた。今まで生きてきた中で感じたことのないレベルの、異常なまでの心臓の鼓動。同時に多量の脂汗が額を濡らす。

(……心臓が、破裂するっ!)

心臓から全身に送り出される血液の量は、平時の何倍にもなっていた。異様に強く響く心音が、体中を震えさせ、同時に激痛を運んだ。腕だけではなく、体全部が、能力に対する限界を迎えていた。能力使用に併せて身体中から悲鳴が上がり、上体を動かすだけで、全身を針で刺されたような痛みが走る。

『うおおお!!!』

そうこうしているうちに、イチホIIーガスに動きがあった。

彼女の肩に深く食い込んだ白銀の剣は、未だに眩しい光を放っているが、しかし、少しずつだが発光が弱くなっていることが見て取れた。(くっ！・早く……この力が尽きる前に！)

イチホにとどめを刺さないよ。

浄化の剣をさらに押し込むだけ。しかし、ただそれだけの行動が叶わなかった。サツクは、自身の体を動かす体力すら持ち合わせていなかった。

『貴様さえ居なければ……』

するとイチホが、サツクのほうに向きを変えた。光り輝く剣を肩に突き刺したまま、彼女は右手の手のひらを、サツクのほうへ伸ばした。Dniw filefo worrana stooohs『風の精よ他を貫く矢とならん！』

先ほどの複雑な合成術式に比べて、イチホは詠唱が短い術を唱えた。空気を矢の形に固め、高速で発射する呪文である。

単純な効果であるが、高レベルの術師が使えば、十分な殺傷能力を備える。

『空圧破弾!!』エアロ・ブラスト

ぱんっ！ と、風船が割れるような破裂音とともに、サツクの右肩に風穴が開いた。

「くっあああああああああああああ！」

体中から走る傷みに乗じて、さらに肩を突かれた激痛に耐え兼ね、サツクは叫び声をあげてしまった。

部屋中にサツクの声が反響した。

「ぐあああ……」

右肩からも出血が起こる。押さえようにも、左手を動かすことすらままならない。

『いい声で泣く！ 眩しくて目測がずれたが、これはこれで甘美だ！』
イチホが笑った。弱点の光を多量に浴び、本人は苦しいはずだが、それを越えて、サツクの苦痛に歪む感情に酔いしれた。

『……だが、次は外さない。貴様の体をすべて消し飛ばしてやる！』
剣の光が明らかに弱まってきていた。そのためイチホもサツクを

目で捉えることができた。

イチホの掌に、三度^{みたび}空気が集まる。圧縮された空気は再度臨界を越え、全てを裂く真空の刃を纏う暗黒球体を作り出した。

(避けないと……けど……)

が、サツクの身体は動かなかった。痛みを感じるのに、同時に痺れが襲いかかる。脳が痛みを処理できていない。痛覚が狂い始めたのだ。

(これは……ダメか……)

サツクは、自らの死の空気を感じ取った。

『全て消し飛ばせ！ 死旋風炸裂弾！』
デスゲイル・バレット

当たれば確実な『消滅』を約束された弾丸が、イチホの手から放たれようとしていた。

サツクの回りの時間が、まるでスローモーションのように過ぎていった。

(……ああ、これが走馬灯というやつか)

このまま、あの術を受け、サツクの体は切り刻まれ消滅し、死を迎える事は自明だ。

そして、体は全く動かない。頭だけが冷静に回転して、現状を解析していた。

(すまん、助けられなかった)

だが、サツクは、自身の死よりも——自分のことより、彼女たちのことに気が向いていた。部屋の隅で横たえているヒマワリが、うつぶせになったサツクの目線の先にあった。

御香が薄まったことで、少しはヒマワリの負荷はマシになっただろうか。

顔色は、この角度からでは伺えないため、正確な情報はつかめなかった。

ここでサツクが死んでしまうと、サザンカもヒマワリも、イチホに『処分』されるだろう。

自分の死よりも、そのことが心残りだった。

そしてサザンカ……。薬の効果が薄まったようだった彼女の姿を

——、一目見れないものか。

サツクが死を覚悟し、最後に望んだ願い。

しかしそれは、別の形で叶うことになった。

イチホが発した全てを飲み込む弾は、まっすぐにサツクに向かうはずだったが、床に突っ伏していたサツクの上方を抜け、再度、建物の壁に大穴を開けた。

二か所の穴が開いたことで、空気の通り道ができ、部屋の中に夜風が流れ込んできた。

「……！ サザンカ！」

術を放ったイチホの右腕には、肘の部分に深々と『クナイ』が刺さっていた。

「……あつ……くうっ！ サツク！」

催眠の御香が薄まったことで、サザンカは僅かに正気を取り戻した。

そして理性を保とうと、もう一本のクナイを、左太ももに突き刺し無理矢理に意識を繋ぎ留めた。

苦痛で顔が歪み、額には脂汗が湧き、長い髪は埃と汗で乱れていた。

そして少しずつ覚醒していく意識の中、サツクの危機を察した彼女は、持っていたクナイをイチホに向かつて投げた。それはイチホの右ひじを挟み、サツクに向けられた術を大きく反らさせた。

『き、貴様あつ！』

イチホの叫び声がサツクの頭に響いた。目は大きく見開き、しかしそれに伴い、イチホの目の周りの皮膚がさらに剥がれ落ちた。

『この……死にぞこないの忍びがつ！』

イチホは、あさつての方向に折れ曲がった右手を無理矢理持ち上げ、手のひらを今度はサザンカのほうに向けた。先ほどの空気の弾丸を放とうと、呪文の詠唱を始めようとする。

が、対峙しているのは、勇者を暗殺しかけた忍びである。

サザンカは、左太ももの怪我を物ともせず、イチホの懐に飛び込んだ。忍び特有の柔らかな身のこなしは、先ほどまで催眠術で操られていたとは思えないほど、しなやかで美しかった。

『ひっ!!』

小さな悲鳴が、イチホの心から漏れた。呪文詠唱を始める機会すら与えられなかったのだ。

サザンカはイチホの肩に突き刺さったままの、白銀の剣の柄を強く握りしめた。

『な、なぜだ！　なぜ私を助けない！』

未だに、サザンカを操れると思いついでいるのだろうか。イチホはサザンカに命令を発していたが、それにサザンカは反応しなかった。

代わりにサザンカは、はつきりと答えた。浄化の剣を全身の体重をかけて、死^{エル}せる大魔術師^{ダーリツチ}の体内へ押し込みながら、イチホに聞かせるよう大きな声で叫んだのだった。

「……父の……父の敵^{かたき}だっ！」

第8話【その6】

『ひいああ……あり得ない……』

イチホの口、耳、鼻、開いた喉、傷ついた腹……体中の穴という穴から、白い光が漏れだした。体の奥底に、聖属性の刃が深く入った証だ。

浄化の光は邪な気よこしまを払い、しゅうしゅう、と腐肉を焼く音を発生させた。

そして、潜在解放された剣は限界を向かえた。刃の根元からポキリと、脆く崩れ、柄が床に落ちた。そして、浄化の光はゆっくり弱まっていき、途絶えた。

しゅうう……。

部屋に、先ほどの腐肉を浄化する臭いとは別に、遺体特有の腐乱臭が漂い始めた。

過去に、ゾンビやワイトなどと剣を交えたことのあるサツクは、その臭いの意味を知っていた。

特殊な力——術法や怨念で動かされた死体が活動を停止し、土に還るときの臭いと一緒だった。

「……あ……あ……」

腐り、朽ちていく、女性の遺体を目下に、呆然とサザンカは立ち尽くした。まだ本調子ではないようだ。呆けた口は少し開いてしまい、言葉にならない声を発していた。

「さ、サザンカ……」

サツクが、うつぶせに倒れたままサザンカに呼びかけた。イチホが消失したことに緊張の糸が切れてしまったのだろうか。先ほどよりも力が抜けてしまい、彼自身、まだ立ち上がることができない。

「サツク……？」

すると、サツクの呼びかけにサザンカが反応した。うつぶせのサツクに目を向け、その後ゆっくりと、体を向けた。

「いけない、サザンカ……無理はしないで」

そんなサザンカを見て、サツクは優しく声をかけた。

まだ、彼女が『危険な状態』であることを察したのだ。先ほどの機敏な動きを行ったとは思えない程、彼女の顔色は悪く、疲労が見えていた。本調子とは程遠い状態だ。

おそらく、イチホに対してのサザンカの突飛な行動は、彼女の意地か、執念が見せたのだろう。

「命を懸けて復讐を成す」というサザンカの強い心が、体を動かし、そして目的を達成した。

そしてサツクは、部屋の隅に目を配る。ヒマワリの様態も気になったのだ。

既に沢山の薬草や回復薬を焼き、御香の効果を薄めるとともに薬効による回復。さらに、今現在は偶然にも、部屋は風穴が二つ空き、夜風が流れ空気が入れ替わっている。予断は許されないが、つい数刻前に比べ、状況は良い方向へ転がってくれていた。

「サツク……サツク……！」

するとサザンカが、ふらふらと、動き始めた。やはりまだ、催眠の薬は抜け切れていないようだった。

また、左足に残ったクナイによる傷も痛々しいが、おぼつか覚束ない足取りで、倒れているサツクのほうへ近づいて行った。

「サザンカ……無理はしないで……！」

サツクはそんなサザンカに労いの言葉を掛けた。無理はしないでほしい。という本心から出た言葉だったが、『自分は大丈夫だから』。とは言葉を続けられなかった。そんな強がりすら口に出せないほど、サツクも消耗していたのだ。

そしてサザンカも同じだった。イチホを仕留めた際の先程の威勢は消え失せ、まっすぐ歩くことすらできない。

肉体、精神ともに疲弊し、父の敵を討てたことかたきで完全に緊張の糸が切れていた。忍者の『隠密行動』スキルは途切れ、周囲への警戒心も同時に解けてしまっていた。

だからこそ、それに気づくことができなかった。

最初に違和感を覚えたのは、サツクだった。うつぶせから顔を上げてサザンカを見上げていたからこそ、朽ちて崩れ行く、イチホの目線

とも近かったからこそ、気付くことができた。

イチホの遺体は、まだ動いていたのだ。

浄化の光を体内から浴び、腐乱臭を発生させていた。体の下半分は既に風化が始まり、残っているのは頭と右腕くらいだった。

だからもう動かないはずと、高たかを括くくつていた。しかし、イチホは右の掌を、サザンカの背中に向けて伸ばしていたのだ。

イチホの、最後の『執念』——『復讐心』による、意地だった。

最愛の娘『ニオーレ』を失ったイチホの逆恨みが原動力となり、彼女をここまで駆り立てた。

だから彼女は、最期に、サツクの『最愛の人物』に手を掛けることにした。

『……風Dn i w f l eの精よ……他f o w o r r aを貫く、矢n a s t o o h sとならん……』

「やめろおおおおおおつっ!!!」

サツクは、全身全霊を込めて大声で叫んだ。声帯の振動すら、自身の体に負担がかかり、痛みが走った。

そんなサツクの懇願は、むなしく響くだけだった。そして皮肉にも、彼女が成仏する際の最高の『はなむけ』になってしまった。

『そう、その顔が見たかったの』

イチホの掌に空気が圧縮され、破裂音とともに、こぶし大の風の弾丸が発射された。

真空を帯びたその弾丸は、固い石壁にも穴をあけることができる。

そんな風の弾丸は、無情にも、サザンカの背中から心臓に向けて一直線に突き抜けた。

暗い部屋に差し込む月の光は、サザンカの鮮血を照らした。

まるで一輪の花を散らしたかのような残酷で幻想的な情景を、サツクは目に焼きつけることとなった。

第8話【その7】

体はあちこちから悲鳴を上げ、動かすことができなかつた。強引に動かせば、それこそ四肢が砕けてしまいそうだ。

だが、そんな些細な事は関係ない。

ほんの、わずかの距離だつた。少し体をひきずって手を伸ばせば届く距離。

びちやびちやと、ぼろぼろのサツクの体を赤く濡らしていた。サザンカの血液だつた。

彼女は、背後からの不意打ちによって心臓を撃ち抜かれ、そのまま仰向けに倒れた。

サツクは右手を伸ばすも、その利き腕は無く、空虚を搔いた。

失つた手首を支えにし、さらにサザンカのほうに体を滑らせ進めた。全身を激痛が走る。だが逆にこの痛みが、現状が夢ではない、現実のことだと彼に知らしめさせた。

そして彼の、いまにも飛んでしまいそうな意識は、その痛みがかるうじて繋いでいた。

「さ……ごんか……！」

届いた。伸ばした左手が、サザンカの体に触れることができた。まだ暖かい。

血液が巡っている証拠だ。彼女は、まだ生きている。

(葉草、ポーシヨン、万能薬、やけどの軟膏……なんでもいい！)

満身創痕のサツクであつたが、左手を武器庫ストレージに突っ込んだ。そして、手当たり次第に取り出した。先ほど以上に心臓の鼓動は早まり、全身が脈打つ。しかしそんな事はどうでもいい。

「いま傷を塞ぐ！ 気を確かに持て！」

サツクはさらに体を手繰り寄せ、サザンカに覆いかぶさるような姿勢を取つた。

回復液の瓶を開け傷口に直接振りかけ、さらに液体で湿らせた葉草を揉み込み、傷口に乗せた。

サツクの固有能力で回復力を何倍に高めた薬に、さらに彼は、奥底から力を引き出さんと、道具師アイテムマスターの能力を試みた。

「潜在……解放！」

しかし、その力は解放されることはなかった。

「なんで……!!」

利き腕は失してはいるが、まだ彼には左手が残っている。触れていれば、能力は発動するはずだ。

だが、イチホを討った剣の時のように、限界を超えた身体で能力を使えば、身体が崩壊するかもしれない。まして、今や彼の体は満身創痍だ。左手だけでなく、身体の全てが崩壊する可能性も否めない。

彼は、その覚悟はできていた。

愛した人が左手一本で助かるのだ。安いものだ。

なんなら、彼自身の命を投げ捨てるつもりでもあった。

だが、虚しくも、回復薬の能力解放は叶わなかった。

「出る……出るよ!!」

『アイテム効果倍増』の力は発動している。しかし、その程度の回復力では、心臓を貫かれたサザンカには無意味だった。だからこそ、尚のこと早く、回復薬への潜在解放ウエイクアップを行わないといけない。『手遅れになっってしまう前に』。

「……あ……」

サツクは、『潜在解放』ウエイクアップが発動しない意味を理解した。

内心、理解していたから、効果を発動しなかった。発動できなかつたのだ。

サザンカに触れた時に、否応にも彼は彼女を鑑定してしまっていた。鑑定士の脳裏に浮かぶ情報は、目に映るものよりも正確なものである。

サザンカの忍者スキル『隠密行動』は既に消え、彼女が鑑定が可能となっていた時点で、その鑑定結果を疑う余地は無い。

彼女はもう、手遅れだった。

『サック』

「……」

幻聴か。

ただただ、サックはサザンカの上に覆いかぶさり、未だに塞がることのない傷を左手で押さえていた。

しかし、心臓が潰され、既に事切れた者に、いくら回復薬を盛つても傷が癒えることは無い。

体重をかけて傷を押さえつけるも、失血に全く意味をなさない。

そんな彼女が、話し掛けてくることなどあり得ない。

『アツチだよ……サザンカだよ』

「……！ サザンカ!!」

いや、幻聴なんかではない。確かにサザンカの声である。

サックに、サザンカが語り掛けていた。

「サザンカー！」

サックは、サザンカに向かって声を挙げた。

しかし、顔は蒼白で血の気は無く、しかし溢れた血で赤く染められていた。

サックは彼女の口元に耳を近づけるも、その声は、口から発せられたものではないことをすぐに理解した。

彼女は声を出しているのではない。サックの脳に、直接語り掛けていた。

これと全く同じ現象を、サックはつい数刻前に体感していた。

サザンカの流れ出た血液は、床を濡らし、そして、イチホーイーガスの死体のところまで広がっていた。

イチホの顔は、目が見開き、本来なら無いはずの頬の筋肉がせり上がり嘲笑っている用であった。しかし、霊体が抜けた死体は急激に腐敗と乾燥が進み、砂のように脆く崩れ始めていた。

残されたのは、ボロボロに擦り切れ、汚れた若草色のマントだけだ。

『最期に、サックと話せる機会を貰えたようじゃ』

「……！ 福音奏者のマント！」

サザンカの血液は、福音奏者のマントに触れていた。念話での以心

伝心を行うことができるようになる勇者装備が、サザンカは僅かに残った意識を、テレパシーでサツクに伝えてたのだ。

『少し、早いお別れになったな』

「ばか！ そんなこと言うな！ 縁起でもない！」

脳に響く声に、サツクは大きな声で返答した。頭で念じれば伝わるのだが、声を上げずにはいられなかった。

「今、治してやる！ 意識を保て！」

サツクは、女神から貰った能力を初めて疑った。確かに鑑定目は、サザンカを死亡扱いたした。けど今彼女の声は聞こえている。まだ、生きている。

しかしサザンカが返した言葉は、サツクにとって全く意図しないものであった。

『サツク、無理しないでけれ。もう、アツチは大丈夫じゃ』

「何が大丈夫だ！ 今、オレの力で、傷を塞ぐ！ そうすれば……」

サツクは再度、回復アイテムに対して能力を使おうと——アイテムが持つ潜在効果を、限界を超えて引き出そうとした。しかし、それはサザンカの言葉が制した。

『……元々アツチは、父の敵を打てば自らの命を……断つつもりじゃった』

「サザンカ、何を……！」

その時、サツクは彼女と初めて手合わせした時を思い出した。ハクノ区の花街での出来事だ。

サザンカは、サツク暗殺に手ごたえを感じた後、確かに自分の喉にクナイを突き刺そうとした。サツクはてっきり、催眠による証拠隠滅と思っただが、どうやらその行動自体、彼女の『本心』だったという。

『忍びの村の掟じゃ。私利私欲、復讐に忍びの力を使うのは禁忌なのじゃ』

「そんなこと知らねえ！ 意味わかんねえ掟なんて、無視しろ！」

傍から見たら、意味不明の仕来りしきたりだろう。稀に、古い町や里などに残った風習、悪習である。律儀にサザンカ姉妹は、それを守り通そうとしていたし、逆を言えば、それほどの覚悟を持って、父親の復讐を

誓っていたのだ。

『ああ、こんな掟、アッチもおかしいと思ってる。今の時代に不釣り合いじゃ』

『ならー！』

『アッチの代で、終わらせることができてよかった』

「……違う！ そうじゃねえだろ！」

サックが物理的に力をいれる。止血だけでもと咄嗟に取った行動であったが、全く意味をなさなかった。

まだ、サザンカに意識がある。なら、今一度『潜在解放』ウエイクアツクが使えれば、彼女を蘇生できるかもしれない。

サックの体の負担もあるが、彼自体、サザンカを助けるためには命を投げ捨てる覚悟はどうにできていた。

『最後の願い、聞いてくりやれ？』

「縁起でもないぜ、サザンカ、君は戻ってくる。何故ならオレが……『勇者アイサック』が居るからな！」

サックは、改めて左手に力を籠める。青白い光がぼんやりと浮かぶ。能力が発動するに際して見えるそれは、サックにとって希望の光に見えた。

しかし、それに並行してサックの体がミシミシと軋み始めた、まるで体内で爆発が起こったような感覚。

『サック、いけない。主^{ぬし}まで死んでしまう』

「死なねえ！ 死なせねえ！ そして……また一緒にデートするぞ！ パンケーキ食うぞ！」

少しでも、現世が楽しかったと思われる事を伝え、少しでも彼女をこの世に縛り付けたとした。

『サック、もうよい、もうよいのじゃ』

「良くない！ 俺はまだ、力を使えるはずだ！」

『……なら、サック、最期のお願いじゃ。その力、アッチのためではなく……』

サックは、はっとした。頭に血が上り、冷静な判断など全くできていなかった。

サザンカの最期の言葉が、彼を現実に戻した。

『ヒマワリの——妹の、未来を繋ぐために使ってくれ』

「あ……」

サザンカの最期の懇願ののち、サツクは自然と体を上げ、傷口から左手を離していた。

この現状で、『助けられる命』はどこにあるのか。

「……」

『ありがとう』

サザンカが、サツクに囁いた。優しい弱弱しい声だったが、はつきりとサツクの胸に響いた。

「ありがとう」

それに、サツクが答えた。はつきりと、サザンカの心に響くよう、芯の通った声で返答した。

それに返事が来ることは、無かった。

「サザンカ……」

暗殺を生業としている、忍者が死んだとき。彼女は女神に迎えられ天国に向かえるのか。

一般的に考えれば、多くの血で手を汚しているなら地獄行きなのだろう。

だが、サツクは天を仰いだ。天を仰がざるを得なかった。彼女が無事に送り届けられると信じて、彼は薄汚れた天井をただただ見上げていた。

「……うおおおおっ!!」

未だに痛みが残る体に活をいれる。

サザンカの髪は、転倒の際して簪が外れ、大きく広がり血液に塗れていた。

そこから、落ちた簪を拾い、サツクは自分の太ももに突き刺した。暗器スキルによる『経穴刺激』である。活性のツボを突いたことで、痛みと併せて一気にサツクの頭が冴えわたる。

「ヒマワリっ!!」

しかし身体には痺れが残る。それが、折角の活性の効果を薄める。時間がない。サックはまだ立つことができないが、体を引きずりヒマワリに近づいた。

まだ10歳程の細い手首を掴み、脈を計る。

まだ、息はある。が、呼吸器が侵されているため、息は弱々しい。部屋が換気されたため、濃いガスが抜けてはいるが、如何せん長時間侵されすぎた。

「救ってみせる……サザンカの最期の願い!」

サザンカの遺体の横に並ぶ、全てのアイテムを引き寄せた。現状残っている薬でヒマワリの現状を打開する方法を思案しなければならなかった。

だが、サザンカに大部分を使ってしまったため、残った今のアイテムでは応急処置すらままならない。

「……毒をもって毒を制す」

そう呟くと、サックは、部屋の隅に置かれている香炉に手を伸ばした。もう既に火は消え、僅かに燻ぶっていた。

サックはそこに、左手を突っ込み灰を掴み持ち上げた。思った通り、奥のほうの一部は未だ燃えていない葉っぱが詰まっていた。

「人ひとり救えずして、何が勇者だ!!」

そう叫ぶと、サックは左手に力を込めた。

淡い青白い光が、しかし、力強く部屋を照らした。

第8話 【エピソード】

「こんなもんかな、みんなご苦労様！」

ジャクレイは、武器庫への荷物運びを手伝った部下たちを労った。一般兵の武器防具から、ジャクレイのコレクション武器、それに、薬草やら回復薬やらを、訳も聞かされず一心不乱に運ぶ作業であったが、誰も文句ひとつ言わずに遂行するあたり、ジャクレイとその部下たちの信頼関係は強く成り立っていることが分かる。

「悪いな、挨拶に來ただけなのに、手伝ってもらって」

「いえー、これも市民を守る一環なのであれば!!」

ビシッ! と、お手本のような敬礼。

金髪が似合う、小柄な女性だ。青い瞳を持つ彼女は、つい先ほどの詰所を訪れたばかりだった。

武器庫の前で一息つきながら、ジャクレイが彼女に話し掛けた。

「西部の奴らから話は聞いてるぜ。俺の部下には、脛に傷がある奴も多い。気にせず居てくれて大丈夫だ、『ナツカ||ノワール』」

そういつてジャクレイは、ナツカにウィンクをした。

大雑把で適当な性格と伺っていたが、それはジャクレイの気遣いなのだと思つたナツカ。彼女はジャクレイの心遣いに感謝した。

ナツカは、憲兵の本部へ直接懇願に出向き、ビルガド西部でのワイロ問題による処遇を直談判していた。その結果、『自分は憲兵としてやっていきたい』という熱意が受け入れられ、形式上2ヶ月の謹慎の後、ここ、ハクノ区に転勤になることが決定したのだった。

そして、根が真面目な性格もあり、ナツカは正式な転属前に、事前に区長と総隊長に挨拶に伺つた。するとどうだろう。

「なかなか……せ、先鋭的デザインの詰所だな……」

窓は全て吹き飛び、吹き曝しとなり、雨風は完全ウェルカム。

壁には所々にヒビが入り、少しの衝撃で崩れるのではと心配になる。

「なるほど、あえて窓を撤廃し外敵を中に招き入れ、建屋ごと鎮圧でき

る構造か……」

と、勝手にナツカは自分の推測ホケに納得し、うんうん、と、詰所の入り口で頷いていた。

しかし、もちろんそんなことは無い。

無い扉をノックして彼女は詰所をのぞき込むと、中では怪我人の応対や、建屋の修繕や片づけに追われていた。

ここでやつと、ナツカは事の重大さに気が付いた。これは流石に挨拶どころの話ではない。と、自ら率先して、手伝いに走ったのだった。

文字通り足の踏み場もないくらいに、武器庫には様々な道具が詰め込まれた。

「うっし。こんなもんだろ」

そういうとジャクレイが、懐から鍵を取り出し、武器庫を施錠した。爆発の影響で扉が歪んでいたためか、2, 3度扉を開け閉めし、やっと閉じることができた。

「あ、あの、ちなみにこれは一体……」

「ん？ 俺も知らん」

素朴な、正に直球の質問をナツカが投げつけるも、飄々とジャクレイは受け流した。

ナツカは続いて聞こうかと思ったが、なんとなくジャクレイの性格を察し、これ以上は尋ねなかった。

「助かったぜ。こんな意味不明な仕事を手伝ってくれて」

「総隊長殿のご命令とあらば！」

「あんまり堅苦しくなんなくていいぜえ。嬉しいけどな！」

がっはっは、とあまり上品ではない感じでジャクレイは笑った。しかしナツカは、その笑い方には特に嫌悪感を抱かなかった。

なんとなく、この総隊長は信頼できる。と、感じていた。

「事情は聞いている。ハクノ区こっちも、ひとりでも女性憲兵が欲しかったから、大助かりだ」

「わたしも、ここなら受け入れてくれると伺ってました」

ただ、『なぜ女性が必要なのか』とは、本部からも詳しく聞いていな

かったが、その理由はジャクレイの口から直接発せられた。

「遊郭のトラブル……娼婦絡みのトラブルがどうしても多くてな！
女の悩みは女性に限る。男だと警戒されてたまらん」

「……え？　しよ……娼婦……？」

「やれ、客をとられた、子ができた、○○○^ビされたとか。あと多いのは
恋愛相談。客と娼婦の恋物語は、下手な三文小説なんかよりよっぽど
面白いぜ、嫌になるほどにな。とにかく女性のデリケートな部分が人
手不足!!」

「まずい。」

ナツカは、そっち方面にかなり疎い。恋愛経験や、ましてや男性経
験なども無い。

本部に転属を掛け合った際に、間違った情報が伝わったのか。それ
とも、本部も意図してこの配属にしたのか。

「え、え、ぜ、善処します……」

ナツカは、将来の不安に顔を青ざめつつも、今後取り組む仕事内容
に、今度は顔を真っ赤に火照らせながら答えた。

「……つと、休憩はこれくらいかな」

気づいたら先程まで荷物運びをしていた衛兵たちは、既に新たな仕
事を見つけ動いていた。

ジャクレイの指示なくとも、ここの憲兵は自らの『やるべきこと』が
判っているのだ。

なんとなくつかみどころがないジャクレイであるが、部下たちを信
頼し、それをまとめ上げている。そしてここは、ジャクレイに認めら
れた、非常に優秀な憲兵たちが集められていた。

「……掴み続ける。そう決めたんだ」

この高レベルな部隊の中で、今後、私はやっていけるだろうか。そ
んな一瞬の不安がナツカの頭によぎったが、すぐにこの言葉を思い出
した。

あのととき、勇者アイサックに励まされた言葉を胸に、ナツカはこの
街にやってきた。

「頑張りますー!」

「ビシッ！」と、再度敬礼を正し、大きな声でナツカは返事した。

「いいね、そのクソ真面目な性格、逆に好感度高いぜ」

ニヤリ、とジャクレイは笑った。整った顔立ちのニヒルな笑みは、多くの女性を虜にしている。

ちよつと、ナツカもドキリとしたほどだった。

が、そんな空気を一気に変えるほどの、激しい音が響いた。

ガツシャン！ と、重いものが何かの上に落ちる音。

次いで、色々な棒状のものが倒れる音だ。

音はいずれも、荷物を詰め込んだ武器庫から聞こえてきた。

「なんだ？　荷崩れか？」

最終的にかなり適当に詰め込んでしまっていた。それら武器防具が、バランスを崩したのだろうか。

しかし、実際に音を聞いた二人は、違和感を覚えた。

最初の音は、天井から重いものが落ちたような音。

まるで、人が落ちてきたような……。

「……あ……」

いや、人だ。

人の声があった。僅かに、武器庫の中からうめき声が聞こえた。

ジャクレイと、ナツカが、顔を見合わせた。両者とも怪訝な顔つきだった。

「真つ先に疑ったのが、どこからか泥棒が入り込んだのでは？」　とい

うものだった。

「だれだ?!」

ジャクレイは勢いよく扉を開けた。建付けが悪くなっていたため、半分蹴り飛ばすような格好になってしまった。

すると、大量に詰められた荷物は、ものの見事に崩れており、周りに立てかけてあった槍なども、中央に向かって倒れ込んでいた。

そしてその部屋の中心をジャクレイが覗き込むと、誰かが倒れている。良く見知った顔だった。

「ジャクレイ……詰めすぎだ……」

「サック！」

「ゆ、勇者アイサツクさまっ!」

はっ、と、またしてもジャクレイとナツカは顔を見合わせた。

お互いがお互いに『なんで彼のことを知っているの?』のような顔で、見つめあってしまった。

「……つと、こんなことしてる場合じゃねえ」

ジャクレイが我に返り、サツクに声をかけた。いつもの軽い口調で、おどけた感じであった。

「おいおい、これで何度目の介抱だ?? おれは男を抱く趣味は無いんだが!」

冗談混じり、しかしはつきり聞こえるように、強い口調でサツクに話し掛けた。

そしていつもなら、サツクからも同じノリで言葉が返ってくるはずなのだが。

「……あれ? サツク?」

サツクからの返事は、なかった。

「……!! ひっ! 総隊長! 勇者様の手が……」

その場を後ろから覗き込んだナツカが、息をのんだ。サツクの右手首が無く、切り落とされている事に気付いた。

そして、彼は女の子を抱いていた。頭をぶつけないようにか、サツクは全身で彼女を包み込むようにしていた。

「これは……まずい! ナツカ、人を呼んで来い! あと医者だ!!」
「は、はいっ!!」

勇者アイサツク。

久々に出会えた恩人に、感謝の言葉も、気の利いた聞いた一言もかけることもできないまま、ナツカは武器庫を飛び出した。

まずは、自分が成せることを成せ。彼に教えられた事だ。

そんな自分の恩人を、死なせるものか。

彼女はその思いを胸に、慣れない詰所の廊下を駆けぬけた。

能力使ってケジメ付けるけど、そのぶん失うものも多
そうだ

第9話 【その1】

身体を動かすと、節々が軋んだ。皮膚はパリパリに表面が乾燥して
いた。

比喩ではなく、体中が固くなっていた。

痛みは、未だ残っている。しかし、もう慣れてしまった。生き物の
神秘などと思いたくないが、痛みから逃れるために、脳みそが痛覚を
忌避しているように思えた。

「……」

彼——サツクは、ベットに横たわったまま、まっすぐ両手を上げた。
窓から差し込む日の光は、白い部屋を程よく照らしていた。暖かな光
は、しかし、利き腕の手首から先が無いことを残酷に知らしめた。

だが、彼は安堵した。

「為すべきことを成せてことかな」

まだ、左手は健在だった。

あの時。

サツクは最後の力を振り絞り、ヒマワリへ回復薬を使用したのち、
武器庫^{ストレージ}へ繋がる異次元空間^{ワームホール}を無理やりに広げ、武器庫に飛び込んでき
た。

荷物持ち^{ポーター}は脱出^{エスケープ}スペルを取得できるが、その応用だ。

満身創痍だったサツクは、最後の行動の中で、左手も朽ちることを
覚悟していた。場合によっては、命をも投げ捨てる心持ちであった
が、有りがたいことに今はまだ、両方とも無事だった。

周りを見ると、そこは病院であることが一目瞭然であった。もちろ
ん見た目もそうだが、彼の鑑定眼には、否応なしに情報が飛び込んで
くる。

ふと横に目をやると、女性がベットの横に座っていた。背もたれの
ない椅子に腰掛け、サツクの顔を驚いた顔で見つめていた。

サツクの目が、彼女と会った瞬間、彼女……ナツカノワールは涙目になった。そして、驚愕の顔から笑顔に変わった。涙袋から涙があふれ出していた。

「アイサツク様……」無事で」

「サツクだ」

サツクは開口一番、自分の名前を否定した。言った本人もあきれほどデリカシーのない言葉だったと反省したが、否定を止めることは無かった。

「オレは、サツクリンガダルト。勇者アイサツクは……もう死んだよ」

+++++

「目覚めたときいてな」

ジャクレイが、病院の個室の扉をノックし入ってきた。

サツクはベッドの上で、乳鉢を使い、何やら怪しげな薬品を潰し、混ぜ、擦っていた。

利き腕の先端には包帯が巻かれてあった。しかし彼は器用に乳鉢を抱え、左手で乳棒を使い、薬を混ぜていた。

「丸1日で目覚めたか。今回はかなり危険だったな」

「ああ……何度も世話になってる」

「ホントだぜ。病院代以外に、俺たちへの謝礼も頂かないとな」

「もう、大丈夫だ」

サツクの返答は、心此処に有らずといったような、少しぼんやりとした物であった。

そんな会話をしながらも、サツクは乳鉢に、見慣れない木の实を入れ、ゴリゴリ、と押しつぶし始めた。

「しかし……私は未だ信じられません……」

「ナツカには、刺激が強すぎた話だったな」

七勇者は英雄的な扱いをされている。そのため、ボツサが謀反したなど、にわかには信じられないのも無理はない。

「それに、アリンシヨア様までも一緒だなんて……」
「……」

サツクはあえて、アリンシヨアも一緒に反旗を翻した、という趣旨で話を進めた。

アリンシヨアが「死んだ」という事実は、ジャクレイにも秘密にしておいた。

「なったものは仕方ない、それが事実だ」

サツクはそう話しながら、瓶詰めのパーションの蓋を片手で器用に空けて、半分ほど乳鉢に注いだ。

「今、勇者様たちは4人で世界を救おうとしてるってことですか」

「そ、だから、怪我が治ったら、俺が説得に行く」

サツクは嘘をついた。

ボツサに掛け合おうとしたクリエは、危うく命を落としかけた。

ボツサの催眠術で、集団自殺が行われる寸前までいった。

そして、イチホーイーガスと、サザンカたちの件。

「……」

サツクは、それ以降は無言で、回復薬に浸った薬草をまた擦り始めた。液をしつかり含浸させるように混ぜる音が、ゴリゴリと音が病室に響く。

「……サツクよう、さつきから何をやってるんだ？」

とうとう、しびれを切らし、ジャクレイがサツクに聞いた。こちらが話し掛けているのに、彼はジャクレイの目を見ることなく、ただただ、薬草を練っていたのだから。

「……女神に勇者選抜される前はさ、俺、薬師を目指してたんだぜ？」

「初耳だ」

「誰にも話してないからな」

急なサツクの身の上話に、ジャクレイはたじろぐ。しかし逆に、ナツカがこの話しに食いついてきた。

「アイサツク様は」

「サツクだ」

「す、すいません……サツクさま……サツクさんは、確か、勇者イザム

様と同郷ですよね」

「ああ、イザムとは幼なじみ。あいつの方が1つ年上だ」

乳鉢を擦る手を一旦止め、サツクは返事した。

「貧しい村だった。薬師みたいな専門職になれば、食い扶持ぶちも見つかるって理由でな。街の薬師の下で、バイトもしてたんだけ」

そういいながら、またサツクは薬を練り始めた。乳鉢の中に注がれた回復液は、粉末にした薬が液を吸い固まり、いつの間にか泥団子のように丸く纏まっていた。

「ま、そんな人生設計も、女神様の天啓を受けて大きく舵を切ることになりませんかね」

ふつ、と、サツクは笑った。自嘲を含んでいた笑い方だった。

その姿を見て、ナツカは思った。サツクは、能力を授けた女神を恨んでいるのではないかと。

超人的な力を得て、国王直下の役職を得たものの、人生を大きく狂わされたことに間違いない。

「……」

ナツカは、これ以上何も言えなかった。

薬剤のすりつぶしも終わったのか、サツクは泥団子を今度は細かく、人間の小指の先程度の大きさに細かくし始めた。

個室内に、しばらくの静寂が訪れた。誰も、口を開こうとしなかった。何を話せばよいのか、話すべきなのか、話してよいのか判らなかった。

そんな静寂は、ドタドタとお世辞にも上品とは言いがたい足音によって破られた。

「そろそろ、来ると思った」

その足音を聞いたサツクは、誰に聞かせるわけでもない、小さな声で呟いた。

そして、個室のドアが激しい音をたてて開かれた。

「……病院では静かにな、新聞屋」

「よくも置いていきましたね！ 危うく凍えて、魔物のエサになりかけましたよー！」

肩で息をしながら、新聞屋ごと、クリエIIアイメシアが病室に飛び込んできた。特徴的なチェック柄の服は乱れ、彼女のトレードマークの眼鏡も曲がっていた。

突然の訪問客に、ナツカは呆気にとられ、口を開きっぱなしになっていた。

そして、ジャクレイはいち早く、彼女の死角になる部屋の隅に身を潜めた。

「わりいな、そっちまで気が回らなかった」

「気が回らないって……！ 憲兵たちが来なければ、椅子に縛られたまま朽ち果ててました！」

クリエがさらに抗議の意を込めて、サツクを指さした。しかし、彼女の右手には包帯が巻いてあり、指には添え木がされていた。折れていた箇所を処置してもらっていた跡があった。

「ジャクレイ」

「居ナイヨ」

「憲兵を派遣してくれていたか……ありがとう」

「……そりやな。メモの後ろに地図がありや、調査にも向かわせるぜ……って、サツク！ 何をしている！」

体を動かすことすら難しいはずのサツクが、立ち上がろうとしていた。

体中に痛みが走る。しかし、そんな体に鞭打ち、サツクは起き上がろうとしていた。

彼には、行かなくてはならない場所があった。

「あつ」

先ほどまで文句を言っていたクリエであったが、彼の行動の意味を察した。

サツクは何とかベッドから足を下ろし、自立した。しかし体はふらつき、足元はおぼつかなかった。

「アイサツク様！」

先ほどまで呆けていたナツカが我に返り、サツクを支えようと体の前に出した。

「つと……！」

危うく前のめりに倒れ込む寸前に、ナツカはサツクの体を受け止めた。が、彼の体は思っていた以上に？せ衰えており、ナツカは息をのんだ。

支えた体の重さは、成人男性のそれとは程遠かった。

「……まったく！」

すると、プンスカと怒りながらも、クリエもサツクに肩を貸した。

「まあ、命を助けてもらったのは間違いないので、これで貸し借り無し……って、軽っ！ 細っそ！」

「うるせえ」

クリエとナツカに支えられたサツクは、それでも自分の足で動こうとした。向かう先は誰にも伝えていないはずだが、彼女には見当がついていた。

「ええーと、確か、付与エンチャンター術師ノワールの娘、ナツカさんですね」

「え!?!」

「ああ、私わたくし、新聞記者ですので」

初対面だったはずの女性に名前を言い当てられ驚くナツカを尻目に、クリエは話をつづけた。

「これから、アイサツク様が向かう場所については……私が付き添いますので、お引き取り願います」

先ほど個室にクレームを入れた時とは雰囲気が変わった、強く気丈な言葉遣い。彼女の変化ぶりに、ナツカはたじろいだ。と同時に、他の人間……部外者には知られたくない所に向かおうとしていることを理解した。

ナツカは特に返答をすることなく、ゆっくりとサツクの体から手を離した。

全体重が小柄なクリエの体にかかるも、クリエ自体は特に重たそうな所作など見せず、サツクに肩を貸して歩き始めた。

「場所は、この病院の地下です」

「だろいな、助かる」

クリエは、サツクが行きたい場所を知っていた。

なにせ、憲兵の馬車に乗せられ、一緒に『帰ってきた』のだから。
サツクとクリエは、病院に設けられている、遺体安置所へ向かつて
いった。

第9話【その2】

病院の遺体安置所は、大概は地下にある。

遺体の腐敗が進まないよう、また、臭いなどの問題もあるため、外よりも温度が低く保てる場所として、地下が最適なためだ。

遺体安置所に入ると、病院の敷地一面を全部使ったくらいの広い部屋になっていた。

そこには患者が使用するものと同じベッドが整然と並べられていた。

そして遺体は、丁寧にすべて、真っ白な布で包まれていた。

これだけ遺体置き場が大きいには、理由がある。少し前までは、ここビルガドのハクノ区は、魔王城の最前線基地になる可能性があったからだ。

しかし幸運にも、七勇者の活躍もあって、魔王の手はハクノ区まで十分に届かず、この広い遺体安置所の全てが埋まったことは今まで一度も無い。

もちろん、病院内で亡くなった人の遺体も、ここに一時的に安置される。

サツクがこの部屋に入った際には、4つのベッドが使われていたのが見えた。

いずれのベッドの横には、病院側の計らいで、季節の花が供えられていた。

いずれのご遺体も布で覆われ、中は見えない。しかし、彼は見えてしまっていた。

まっすぐ、目的の場所に向かった。軋む体を引きずり、しかし今は、誰の手も借りず、自分の足だけで、その場所にたどり着きたかった。

クリエは安置所の入り口で待っていた。流石に空気を読んだのだろう。サツクと彼女を二人きりにすべきだと……。

薄暗い遺体安置所は、外よりもだいぶ冷え切っており、吐く息もうつすらと白くなっていた。

サツクは、一つのベッドの前にやってきた。

体は白い布で覆われているが、顔には、一枚の布が掛けられているだけだった。

サツクは左手で、布を外した。

血色が抜け、真つ白な顔。そして、艶やかで真つ黒な、特徴的な長髪。

サザンカが、眠っていた。

「……」

遺体は、丁寧に処置されていた。体や髪に付いた血液や土汚れは綺麗に落とされ、いわゆる死に化粧も施されていた。

サツクの顔は、ただ一点。彼女の顔を見つめていた。その表情は、クリエの立つ側からは伺えない。

サザンカの遺体と一緒に帰路に着いたクリエは、だいたい事情を飲み込んでいた。

部屋の外で縛られ身動きが取れない中、イチホと勇者アイサツクの激闘が否応なしに聞こえていたし、サツクの叫び声も、鮮烈に耳に響いていた。

「……はじめ、付けてくるぜ」

サツクは、サザンカの髪を触ろうと右手を出すも、そこには手がなかった。すぐに右手をひっこめ、左手で髪を避け、露わになった彼女の額に、キスをした。

「もうしばらく、そっちには行く気はない。成すべきことを全部終わってくる」

サツクは、ゆつくりと布を、彼女の顔に掛けなおした。ふわりと、優しく彼女の顔に覆いかぶさる。

「クリエ。単刀直入に聞く」

「……ふえい!?!」

急に、サツクはクリエに話を振った。全く油断していたクリエは、いきなり話し掛けられたため、変な声が出してしまった。

サツクは、入り口に体を向けた。振り向いた彼の顔は、先程までの無気力なものではなく、何かの決意を固めたもののように感じた。

「えっ……なんでしよう」

彼の強い意志……気迫とも思える雰囲気^に飲まれ、再度びつくりした表情を示したクリエ。だが、なんとなくではあるが、サツクが何をしたいか、何を成し遂げたいと思っ^ているのかを、彼女も察した。

「ボツサは……ボツサ^あシ^バク^カレ^ヤの居場所は、どこだ」

第9話【その3】

クリエの持つ力のひとつ——勇者探索^{サーチ}。どこにいようと、七勇者の居場所を突き止めることができる。

この力もあつてか、彼女は『勇者専属記者』としてスクープを連発していた。

……勇者側としては、プライベートな内容も扱われかねないので、たまつたものでは無い。

「北の……大地、ここは……え、うそ……」

クリエは目を瞑り、顔を伏せ、ボツサの現在地を探索していた。どうやら彼を見つけたようだが、なんとも煮え切らない表情を浮かべた。

「アイサック様、場所は判りましたが……」

「サック、って呼んでくれ。アイサックはもう死んだ」

「は？ ……はあ、わかりました。——サック、ボツサ様の場所ですが、なんとというか……」

「滅ぼされた、極寒の街『イリサーヴァ』か」

クリエの戸惑った顔を見て、なんとなくサックは感づき、彼が脳裏に浮かんだ場所を口に出してみた。すると、クリエの困惑した顔は、一瞬のうちに驚きの顔に変わった。

「な、なんでわかつたんですか!？」

「なんとなく、勘だよ」

サックには僅かに、彼がそこに行く心当たりがあつた。

「すぐに出るぞ」

「はあ?! なに考えてるんですかっ!」

「決まつてるだろ、あいつをぶん殴りにいく」

「いえ、そうではなく!」

極寒の街、イリサーヴァ。

魔王直属の配下、三鬼神によって滅ぼされた街である。勇者と人類への見せしめとして、その街は一夜にして地図から消えた。

「ボツサ様は今、普通じゃありません! 出向くにも、こちららも準備が

！」

「んなもん、既に済ませた。時間が惜しい」

サツクは、クリエの焦りをものともせず、あっけらかんと答えた。体はポロポロで、右手の包帯も痛々しい。そんな彼が『既に準備は終えた』と言い放った。

素人が見ても、彼の自暴自棄……強がりにはか思えない。

「待ってください！ まだ私、アリンショア様の件でお伝えしていないことがあるんです！」

そういいながら、クリエは右手を差し出した。指の骨は折れており、添え木で固定されていた。

「この手は、アリンショア様と対峙したときに受けた傷です。アリンショア様は、生きてます。ボツサ様と行動を共にしておりました」

興奮気味に、クリエが説明をした。死んでいると思っていた人物が目の前に現れた驚きは、未だに忘れられない、といった所か。

しかしその調子とは裏腹に、サツクは特に驚きの表情は見せず、さも判っていたといった面持ちで返答した。

「そか。そりや大変だ」

この返しに、クリエは驚きというより理解できないといった表情を示した。

「わ、私の言っている意味、理解してます?!」

「ああ、分かるよ。だったら尚更早く、ボツサなむさに会いに行かないとな」

やはり、サツクの表情は揺るがない。なんとなく飄々としているように見えるが、しかし、眼力は死んでいない。目から強い決意を感じられた。

「それに！ ここからイリサーヴァまで、早馬でも丸一日はかかります！」

「それは大丈夫、名案がある」

「それって……」

「ヨロシクな、新聞屋。追加で一人くらいなら行けるだろ？」

サツクはクリエの前まで歩いていき、彼女の肩をポンッと叩いた。

クリエの特殊能力『女神のつばさ』だ。望む場所へ瞬時に移動でき

るスキル。

「ばっ……試したことないです!」

「なら、何事も挑戦だ」

今の今まで単独で行動していた彼女は、誰かと同伴してスキルを使用したことは無い。クリエの回答を待たずに、サツクはクリエの移動スキルを当てにしていた。

緊急事態ではあるが、こんな神経が凶太いサツクを見るのは初めてだ。想い人を失うことが、彼を大きく変えてしまったのだろう。彼の変貌ぶりに、クリエは軽く恐怖すら覚えた。

「……あーんもう!　じゃあ、女の子!　ヒマワリちゃんをどうするの!」

「……」

クリエがヒマワリの名前を出すと、今度はサツクは怪訝な顔をした。眉間にしわが寄り、口は真一文字に結ばれた。

先ほどからの威勢は、一気に衰えた。

すると、遺体安置所の入り口から男性の声が出た。

「医者の見立てでは、衰弱してはいるものの、峠は越えた。命に別状はないとのことだ」

声の主はジャクレイだった。彼の後ろにはナツカも一緒についてきていた。

ヒマワリは、サツクが抱きかかえてきた時には意識は無く、呼吸も弱弱しかった。体温は限界まで下がり、非常に危険な状態と思われた。しかし、サツクと一緒に担ぎ込まれたこの病院で懸命な治療が施されたことで、ヒマワリは一命を取り留めた。未だ、意識は回復していないが、昨晚に比べて呼吸は安定したとのことだ。

「そか、腕のいい医者がいてよかつ——」

「おまえさん、何か仕込んだな?」

サツクの安堵の言葉を、ジャクレイが遮った。ジャクレイも多くの人間の『生死の境』を見てきている。正直な感想を言えば、ヒマワリは助からないと思っていたのだ。

「あの衰弱っぷりは、生きる気力を失った人間特有のものだ。そうな

ると、もう、こっちに戻ってくることは難しい」

まして、ヒマワリには男性恐怖症というトラウマが根深く植え付けられていた。身も心もボロボロな状態では、そのトラウマに触れられてしまう事が致命傷になる懸念がある。

ジャクレイが抱く心配が杞憂で終わってくれれば。そう、ジャクレイは願っていたが、サツクの回答は明確なものではなかった。

「もう、彼女のトラウマは取りさらった。あとは、ヒマワリの心持ち次第だ」

あれほど治療が難しいと自身で語っていた心的外傷を、『もう取りさらった』とサツクは言い放った。

しかしジャクレイは、彼の言動に隠された何かを察した。

別の懸念事項が、ジャクレイの心の底から湧いてきた。

「あの娘に……何をした！」

ジャクレイがサツクに掴みかかった。サツクの服の襟を掴み、右手一本でサツクを壁に押し付けた。サツクの体は、ジャクレイが思うより軽く、掴んだ本人のほうが驚いた。

「……」

強く壁に背中を打ち付けたサツク。

あまりに突然の行動に、クリエとナツカは息を飲んで見守るしかできなかつた。

ジャクレイは、何に怒っていたのだろう。いまにもサツクの顔を殴り掛かりそうな雰囲気だった。

そして、ジャクレイ自体も、何に怒りを向けたのか理解できなかつた。しかし、ベテラン憲兵の経験、本能から、サツクが『取り返しのつかないこと』をしたのではと思いついて、体が勝手に動いてしまったのだ。

そして、そのジャクレイの考えはあながち間違いではなかった。

「……ヒマワリの記憶を——消した」

右ひじがサツクの首を押さえている。ジャクレイは力を加減しており、動くことは制限されていたが、呼吸は問題なかった。

「消したのは、トラウマ部分か」

「いや……彼女の記憶全てを消した」

「なん……だと……」

ジャクレイが、その重大さに気付くまで少し時間がかかった。

サツクは薬効の力を潜在開放し、ヒマワリの持つ記憶を『10年分』消し飛ばした。

彼女の年齢は10歳。つまり今、彼女の頭の中は0歳児と同じ状態だ。

「そうしないと、死んでいたよ。家族を奪われ、貞操を汚され、『生きる力』は心的外傷で潰されかけていた。体よりも、『心』が、持たなかった」

ヒマワリの命の灯が消えかかっている最中で、生きる力を呼び戻すには、弊害となる全ての記憶を潰す――。あの時、サツクが行えた唯一の策だった。

「……」

ジャクレイは、信じられないといった表情のまま、ゆっくりと右手を下げた。

ジャクレイから解放されたサツクは、左手で首部分を摩った。力加減はしてもらっていたが、多少なりとも首が締まっていたのには変わりない。

「ヒマワリを、頼みたい」

サツクは、ジャクレイに頭を下げた。

ジャクレイなら、近郊でそういった、身寄りのない子供を預けられる施設を知っているはずだ。口利きもしてくれるだろう。と、サツクは考えていた。

しかし、ジャクレイから出た言葉はサツクにとって意外なものだった。

「やだね。てめーが仕出かしたことだろ。自分のケジメは自分で付けろ」

おそらく、初めての明確な拒絶だったと思う。

勇者現役時代では、衛兵総隊長として勇者へのサポートを全身全霊で勤め上げ、そしてサツクとは親友としても長い付き合いだった。だ

からこそ、彼は拒否した。

予想外の返事に、サツクはまるで、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

その顔が面白かった……という訳ではないが、ジャクレイは先ほどとは打って変わって、笑いながらサツクの肩をたたいた。

「あのさ、サツクよ。ハクノ地区このあたりでいいなら、借家を工面してやるぜ。んで、右手がなくても出来る仕事を紹介してやる。なんなら、うちの家内たちも応援に出させる。家事が難しいなら、女中メイドを雇え。資金なら、元勇者が声を上げれば国が補助してくれんだろ」

ジャクレイは一気に捲まくし立てた。サツクはただただ、彼の言葉を浴びることしかできなかった。

（彼は……ジャクレイは、何を言いたいんだ？）

サツクには理解をするのに時間がかかったが、ジャクレイの熱弁を真正面から受け止めることで、やっと理解ができた。

「……オレに、ヒマワリの面倒をみる、と」

「ああ。責任逃れは、このジャクレイが許さねえ」

ジャクレイの顔が一瞬険しくなる。

「生きて、帰ってこいって、ことか」

「分かってんじゃないか」

しかしすぐに、ニヤリ、とジャクレイはニヒルな笑みを向けた。

「おめー、死ぬ気だっただろ。サザンカの復讐果たして、そのまま全部の責任を放り投げてよ」

サツクは言い返せなかった。正に、その腹積もりだったからだ。

だが、ヒマワリの存在がそれを許さなかった。サザンカが最期に残した希望だ。

「死ぬな。戻れ。そして、サザンカが成せなかった未来を、ヒマワリに繋げ。サポートはする。だから……」

ドンッ。

強く、サツクの胸に拳が突きつけられた。強く握られたジャクレイの拳は、小刻みに震えていた。

「だから、絶対に戻ってこい」

第9話【その4】

イリサーヴァは当時、高い城壁に囲まれていた。壁に使われていた石は一つ一つに浄化の紋が彫られ、邪悪なものは絶対に寄せ付けないと、街の首長は自負していた。

鉄壁の街とも言われていたが、そんな壁の一端が、易々と破壊された。魔王の側近である、三鬼神の仕業だった。絶対無敵と思われていた壁が壊され、魔物が一気に雪崩れ込んだ。

必ず守られている、壁が破られるわけがない。という奢りと、夜襲であったこともあって、イリサーヴァはものの一晩で滅んだのだった。

街の住人たちの遺体は、お世辞にも丁寧には葬られなかった。葬ることができなかった。

街の中心で、魔王の魔瘴気がバラまかれていたのだ。濃い魔瘴気は、触れるだけで命を落とす。

皮肉にも、城壁の浄化能力が作用していたことで、魔瘴気は壁を抜けることなく外部には漏れなかった。しかしそれが、被害をさらに拡大させたとも言われている。

結果、街の中は魔瘴気で満たされた。遺体は穢れ、そして腐敗した。このまま放っておけば、伝染病などの発生の帰来もあつた。

そのため、七勇者が一人『ヒメコⅡグラセオール』の炎の呪文と、『ボツサⅡシークレ』の浄化の術式を用いて、街全部を一度に弔うこととなった。

ボツサは空を見ていた。遺体が焼け、立ち上る煙をずっと眺めていた。

煙はどこまでも、果てしない空へ吸い込まれていった。

封じられていた街の入り口は、何者かにこじ開けられていた。誰がやったのかは、容易に想像できる。

サツクは特に臆することなく、ただまっすぐを見据え、街の中心に

ある広場を目指した。サツクの目論見が正しければ、彼はそこにいるはずだ。

ビルガドの街で急ごしらえした『フェンサーマント』が、時折吹く北風に靡く。

「私、入るの初めてです」

サツクをイリサーヴァ正門跡まで送り届けたクリエは、彼の忠告を無視し、勝手についてきていた。

なお、当初心配されていた『女神のつばさ』定員は、かろうじて二人分までなら移送可能であることが証明された——サツクは移動中ずっと、クリエの体に抱きついた状態、という非常に不格好かつ、危険な様相ではあったが。

「警告はしたぞ。それでも帰らないか」

「はあ、と、ため息交じりでサツクが話す。

左頬に受けたクリエの平手打ちの跡が痛々しい。

すると、はあああああ、と、それ以上の大きなため息をつきながら、クリエは反論した。

「あのですねえ、運送費がタダなんて、虫のいい話ありません！ しかも移動中、変なところ触られまくったし！」

「ごつちも、落ちまいと必死だったんだぞ」

「とにかく！ 運賃以上の情報を頂かないと、私も帰れません。腐つても新聞屋ジャーナリストですからね！」

「腐っている自覚はあるんだな」

ふふっ、と、サツクは鼻で笑った。

そして、いつものクリエなら10倍くらいの嫌味を言い返すところを、特に反論せず、クリエも微笑んだ。

「やっど、笑ってくれましたね、息が詰まりそうでした」

「……そんなに、険しい顔してたか？」

「ええそりやもう、まるで赤鬼レッドオーガみたいでしたよ」

クスクスと、悪戯っぽくクリエが笑った。

「……レッドなのは、ビンタの跡の所為じゃないかな」

それにつられてか、サツクの口元も緩んだ。

「サツクさん……見届けさせてください。あなたの覚悟を」

「ああ、新聞に乗せるときは、美化三割増しで頼むぜ」

「それはできません、捏造になります」

そんな、サツクとクリエの漫才のような会話を尻目に、彼らは街の中心に近づいていった。

奥に進めば進むほど、崩れた石造りの建物の表面の焦げ色は濃くなっていく。

魔物の襲撃を受けたとき、街の住人は、街の中央に立てられている巨大な『女神の像』に向かって避難してしまっていた。神聖な守りの加護が付与されていた像ならば、邪悪な魔物は近づけないはずであったが、しかし、敵の数が多すぎた。

女神の加護は破られ、最終的には、中央の広場では多くの遺体が折り重なっていた。

サツクたちは、その悲劇の場に近づこうとしていた。

「うっ……」

クリエが口を押さえていた。聞き及んでいたことであるが、いざ自分が、その現場に近づいているという現実を想像したら、自然と吐き気を催していた。

「クリエ、下がるなら今だぞ」

「いえ、できるだけ最後まで見届けます。ですが……」

クリエは言葉をつづけた。

「私も死にたくないのです。サツクさんの合図があったら、手筈通りに逃げますよ」

「賢明だな。方角を示すから、その時はその方向へ退けよ」

「はい」

クリエは、事前に渡された薬瓶を握りしめた。右手の骨折は、サツクが調合した回復薬で治癒してもらっていた。

*

女神の像ははまだ健在だった。所々にひびが走り、表面はすすけて

いたが、形はしつかり保たれていた。十分視認が可能だ。

イリサーヴァ中央広場。

平和だった時代は、民が集まり憩いの場として開放され、また、記念式典などの催し物も行われていた。

街の中央に大きく開けた場所は、全方位からも中央が良く確認できた。

その女神像の袂に、ボツサが立っていた。福音奏者のマントの代わりに白い外套を身に着け、司祭が着る服には汚れやシミ一つなく、真っ白な装いだった。右手には長い杖のようなものを持ち、じつと、女神像を見上げていた。

それともう一人。彼女も、女神像の足元——ボツサの横に立っていた。ちようど後ろ向きだったため顔は確認できないが、子供と見間違えほどの小柄な体型と、ネコ属独特の尖った髪型（毛並み）は、サックには見おぼえがあった。

「アリンショアっ！」

中央広場の端から、サックは呼びかけた。しかし、アリンショアは微動だにしなかった。その代わりに、ボツサが振り向いた。

「来ましたか」

元々の細い目をさらに細め、小さく口角を上げて微笑んだ。年齢は40を越えたばかりなはずだが、白髪や体つきの所為か、もつと年老いて見えた。

中央広場に入ったサックだが、歩みを止めなかった。女神像のほうへ向かいながら、サックはボツサに呼びかけた。

「止めに来たぞ、ボツサ！」

「……なにを、ですか？」

すると、サックは歩みを止めた。まだボツサとは距離が十分離れている。まるで、今の彼らの心の距離を表しているようであった。

「ボツサ、お前さ、そこまでやるか。気付いたときには血の気が引いたぞ」

サックの声は、周囲の静けさもあってボツサの耳に十分届いた。

「……」

ボツサは何も答えなかった。

「……大浄化術式、だな」
イア||ナテイカ

「ええっ！」

「……ほう」

ボツサの代わりに、サックが答えた。それは、魔王城前決戦で使用された、強大な浄化術の名前だった。後ろからついてきていたクリエが、つい声を上げて驚いてしまった。

「ボツサが通ったと思われる街を線で結ぶと、大陸の大都市を全て囲っていた。そこで、ピンと来た。魔王城前決戦で魔物を殲滅させた、あの大浄化式だ、ってな」

左手の人差し指で、空中にくるくると弧を描いた。最北の魔王城から、ボツサの通ったと推察される街をたどると、大陸をぐるりと周遊し、大都市を全て含んだ円になるのだという。

「お前……人間を『浄化』させる気だな」

「……!!」

その場で一番驚愕したのは、クリエだったのかもしれない。彼女は目を見開き、口元を手で押さえた。

「お見通しでしたか。流石ですね」

「いんや、思いつき。けどその返事ってことは、あながち間違いではなさそうだな」

サックには確証はなかった。だから少し、かまをかけた。ボツサはまんまと、それに足を掬われた格好だ。

ボツサの目尻が、少しヒクついた。未だ口元は笑みを作っているが、内心はサックへの怒りに溢れているのだろうか。

「やっぱり、昔からあなたのことが苦手です」

するとボツサは、携えていた杖——いや、布を被せた槍だ——を縦に構え、石突きで地面を小突いた。

コン、と、石畳とぶつかる音が広場に響く。

すると、先ほどから後ろを向いていたアリンシヨアが、ゆっくり振り向いた。

「——やりやがったな、ボツサ」

アリンシヨアを正面に構え、サツクの顔が一層険しくなった。

アリンシヨアの顔には全く精気が無かった。目は虚ろで、焦点は合っていない。口は半開きでヨダレを垂らしていた。

なにより、サツクは既に深層鑑定ディープアナリシスによって、アリンシヨアの真相は覗き見えていた。

「死者傀儡ネクロマンズ……！」

彼女は既に、死んでいたのだ。

第9話【その5】

アリンシヨアは、言うなれば『ゾンビ』であった。死体に彼女の意識を繋ぎ止め、この世に縛り付けられている状態だ。

「生きてます、訂正しなさい」

ボツサが強く否定した。確かにゾンビにしては、遺体は綺麗だった。致命傷を受け亡くなったと聞き及んでいるが、その傷跡も解らなかつた。

「なるほど。傷はボツサの癒^{リカバリ}しの力で治したな。いや、蘇^{リザレクシオン}生術か。だが……アリンシヨアは目を覚まさなかつた」

「……」

「だから、エルダーリツチの力に頼つたな。奴の力をもつてすれば、こんな芸当も可能だろう」

「……」

ボツサは押し黙つた。眉間による皺はさらに深くなつた。

するとボツサは、アリンシヨアを横から抱き締めた。身長差があり、親子のようにも見えた。しかしアリンシヨアは無反応——まるで、人形だ。

「アリンシヨアからは、昔から相談を受けてました。『何故、犯罪に手を染めた自分が勇者に選抜されたのか』と、彼女はずっと葛藤していました」

ボツサは、淡々と話を続けた。

「長いこと相談を受け、話しているうちに、私たちは惹かれあつたんです。聖職者として、仲間内として、あるまじき事と理解しながら」

(マジか)

サツクが頭を抱えた。これは全くの想定外だつたのだ。

(つまり、七勇者で俺だけカップル不成立だつた、ってことおっ?!)

ユーナリスとネアの同性カップルも含めるとそうなる。

全く意図しないボツサの攻撃に、サツクの心は深く傷ついた。

そんな傷心なサツクに気づいていないボツサは、さらに自分語りを続けた。

「魔王城の第3層で、彼女は私を庇って致命傷を負いました。勇者の力をもってすれば、傷を塞ぐのは容易だった。けれど……！」

ボツサは、アリンシヨアをさらに力強く抱き締めた。しかしアリンシヨアは微動だにしない。

アリンシヨアの魂は、戻ってこなかったのだ。

「そこに、あの死せる大魔道士、イチホーイーガスが関係してくるというわけか」

サツクは奥歯を噛み締めた。イチホの名前を出すだけで、腹の奥から嫌なものが込み上げてくる。

「私はアリンシヨアを連れて、世界の治癒を目指しました。様々な人を癒し、治し、救っていったのですが」

ボツサは、アリンシヨアから離れ顔を上げた。涙を流していたらしく、頬が濡れていた。

「ですが、無理でした。何をしてても、『私の心の傷』が癒えないのです。そんな折り、ミクドラムで彼女——イチホに出会いました。既に死んでいましたがね」

「勇者の力の限界に挑んだな？」

はい、と、ボツサは頷いた。

「私は死者の声は聞けません。ですが彼女から、死してなお呟く『復讐』の声が聴こえた。初めての事です。癒しの術を使うと、塞がらないはずの傷は癒え、彼女は蘇りました。ただ、エルダーリッチとして、ですが」

ボツサは、今でも信じられないといった様子で、頭を横に振った。

「元々、彼女にはそういう素質があったのでしよう。死術と黒魔術の心得もあったようです。イチホは、貴方への『復讐』を糧に蘇った。私は、強いて言えば、彼女に復活のきっかけを与えただけ」

「お前、アリンシヨアを蘇らせる可能性を探っていたな」

サツクはボツサに問いかけた。するとボツサは、サツクの顔を真っすぐ見据えた。目じりは釣りあがり、細い目をさらに細く見せた。先ほどまで上がっていた口角は、いつの間にか下がっていた。

「私は、イチホーイーガスの生きる力を後押ししただけ。それは、私が

行うことに必要だった。それでも、貴方は私を恨んでますか？ 憎い
ですか？」

さも、自分には悪気はない。と言いたげなボツサの態度は、サツク
の神経を逆撫でした。

「ああ……だから、てめえを、本気で、ぶん殴りに来た」

ギリギリ、と、歯を食いしばる音が広場に響いた。

しかし、そんなサツクの姿を見たボツサは、なぜ彼がそこまで怒っ
ているのか理解できないといった態度をとった。

「アイサツク。今、あなたの目的と私の願いは同じはずなのですがね」

ボツサは、残念です、と小さな声を漏らした。

「私は、私のやり方で世界ことわりを変えてみせましょう」

彼は手に掲げた槍を包んでいた布を外した。黒光りする刀身が露
わになった。

「ボツサ、それ何て言うか知ってるか？ 『独りよがりの正義』^{ワガママ}って言
うんだよ」

一方、サツクも左手を背に回し、腰に携えていた小剣を取り出した。

短い刃の切先をボツサに向け、言い放った。

「何が、世界ことわりを変える、だ！ 仲間一人救えねえくせによ！」

「……言って良いこと悪いことの、区別すらできませんか」

「アリンシヨアを縛ってるのはお前だ、お人形ごっこ遊びが過ぎたな」

サツクは、今しがた、ボツサの地雷を踏み抜いた。一気にボツサの
顔が陰しくなる。

「訂正しろっ!!!」

今までサツクも聞いたことのない大声で、ボツサが叫んだ。

彼は、手に持った黒い刃の槍を大きく振った。

(まったく、物騒な『エモノ』を持ち帰ってきたなっ！)

勇者時代には、ほぼすべてのアイテムを管理していたサツクであ
る。彼が持ち出した槍のことはよく理解している。

勇者専用装備『嵐ストームを運ぶもの』

一度掲げば雷雲を呼び、

二度返す切先は嵐を巻き起こし、

三度突けば、大地を抉り貫く。

正に文字通り、嵐を自在に操る槍だ。

水平に薙いだ刀身は嵐を生み出し、雷と風の刃がサツクを襲う。

「くっ!!」

「きやあっ!!」

ギリギリのところ、サツクは伏せ、クリエは後方に飛び、斬撃を避けた。

「つくそ。武器の強さは健在か……」

サツクの後ろの地面は、綺麗に扇状に抉られていた。強烈な電撃を浴びたレンガが焼け焦げ、真空の刃で切り刻まれていた。

「！ サツクっ!! 危ない！」

「……!!」

クリエの声が届くより前に、サツクの目の前に光が走った。正しくは、日の光に反射した、アリンショア愛用の勇者装備『幻竜の小太刀』によるものだった。

「……『七輝』……」

一瞬のうちに、サツクの後ろにアリンショアが回り込んでいた。ぼそりと、アリンショアが呟いた技名は、遅れて「七回の斬撃」が襲いかかることを意味していた。

アリンショアが得意とした、早業スキルだ。通りすがりに高速で斬撃を繰り出す業わざ。小太刀の切れ味も加わり、並大抵の固さでないとい瞬で細切れになる。

「終わりましたね」

「サツク！」

ボツサが放った、嵐ストームシーカーを運ぶものによる初撃は、目くらましだった。アリンショアの攻撃を本命として、サツクに彼女が『未だ現役』であることを伝えたかった意図もある。

もともと、五体がばらばらになってしまっただけ、それも理解してもらえないが。

「これでわかったでしょう？ アリンショアはまだ、生きて……」

てつきり、サツクの体は8個くらいに分割しているものと思ってい

たボツサは、目の前の光景に目を見開いた。

サツクは、神ゴッドスキル業アリンシヨアの攻撃を、全て受け流していた。

左手に持った、短い剣。鏢の部分が非常に特徴的で、球体を半分に割ったカップ状を呈していた。

その湾曲した鏢の部分で、勇者が放った全ての斬撃を『受け流し』ていた。

「ばかな!! そんな適当な武器で防げるはず……」

「馬鹿はどっちだ」

全てを受け流し切ったサツクは、一息ついたのち、改めて剣の切先をボツサに向けた。

「伝説の武器の強さは、オレが一番わかっているよ。だからこそ、その対処方法も熟知している」

剣はうっすらと、青光りしていた。これはサツクが、この武器――

『マインゴーシュ』に潜在解放ウエイクアップを施していることを示していた。

「元々、マインゴーシュって武器は、物理的な攻撃を弾くよう設計されている。だからオレは、ここに全力で【回避能力】を上乗せさせたのさ」

ひゅん! と、サツクは剣を振るって見せた。自分はまだ余裕があるという、彼なりの挑発だった。

「ボツサ、暫く会わないうちに忘れちまったのか? 俺を誰だと思っ

てやがる……俺は勇者、アイテムマスター道具師だぜ?」

第9話【その6】

嵐ストームシーカーを運ぶものの一風ぎは、周囲の瓦礫を吹き飛ばした。

「きやあ!!」

小型の暴風雨が目の前に召喚されるようなものだ。普通の人間なら一溜りもない。クリエも巻き込まれそうになるところを必死に耐えていた。

「クリエ、近づきすぎだ！ 巻き込まれる！」

体重の軽い彼女である。強風に煽られ、そのまま地面に叩きつけられることも有りうる。

サックは地面にしつかり足を付け、踏ん張っていた。マントを体に巻き付け、風からの抵抗を極力小さくしていた。

(あの男、風すら避けているのか……?)

その姿をみたボツサの感想だ。しかし、そうだとしても問題はない。あくまでも嵐ストームシーカーを運ぶものによる攻撃は、牽制だ。

アリンショアが、再度サックに飛びかかった。嵐に巻き込まれて自由が効かないサックは、それでも無理矢理に体勢を整え、身構えた。

「……『魂壊』」

「げっ」

先ほどとは異なる業だ。『七輝』の連続攻撃とは異なり、重い一撃を与えて相手の外装と防具の破壊、稀に即死効果を重ねる業である。

サックはマインゴーシュを構え、受け流しを試みた。しかし、この業はダメージ効果よりも、防具……もとい、ガード武器を破壊する効果が大きい。

そしてサックは、この攻撃の受け流しを失敗した。

なんとかマインゴーシュで攻撃を受け止めたものの、アリンショアの小柄な体からとは思えないレベルの重い攻撃が、サックの体を激しく揺すり、そして吹き飛ばした。

「うおっ!!」

彼は、崩れたレンガの山に、背中から突っ込んだ。ガラガラという無機質な音とともに、砂埃が舞った。

「……いてえ。病み上がり無理させんな」

しかしサックは、直ぐにがれきから現れた。アリンシヨアの攻撃は、マインゴーシユの刃の部分で受けていたため、刀身は根元付近から折れてしまっていた。

ウエイクアツ
(潜在解放している武器を破壊するか……流石だな、アリンシヨア)

しかし、彼は未だに大きなダメージを受けていなかった。

「……アイサック。目的は一緒、手を組みませんか」

なかなか決定打を与えられないためか。ボツサがサックに対して停戦を求めてきた。

「なーにが、『目的は一緒』だ。冗談は寝てから言え」

サックはそれを拒否した。バンバン、と体についた砂を叩きながら、あらためてボツサを睨みつけた。

「一緒ですよ」

ボツサは話す。

「……どういふことだ」

睨んでいたサックの眼が、懷疑の眼差しに変わった。ボツサが狂った原因を、サックは知らない。その原因が『理由』であれば、聞いておく必要がある。

ボツサは、両手を広げた。それはまるで、全世界を包み込み、抱かんとしているようだった。

「この世界の真実を知りました。あなたも、気づいたのでは？」

「……なにを言っている？」

「そのままの意味ですよ」

そんな会話の間、ずっとアリンシヨアは突っ立ったままだった。やはり彼女は自分自身の意志を持っていない。具体的には、ボツサの意思によって動かされている。サックの予想通りだった。

「あいたたた……」

すると、ガラガラと瓦礫の中から、クリエが現れた。結局、彼女は暴風に巻き込まれ、吹き飛ばされていたのだった。幸運にも大したケガは無いようだが、嵐に揉まれた彼女の髪はボサボサで、服も乱れていた。

「クリエ！ 退け！ 南南西の方角！」

サックは、クリエに後退を指示した。勇者二人の攻撃を耐え忍ぶのには、自分ひとりだけで手一杯だった。

「くっ……はい！ お言葉に甘えて！」

現状を鑑みると、クリエは完全に足手まといと言えた。彼女自身も、それを十分すぎるほど体験した。

クリエは背中から青く光り輝く羽を作り出し羽ばたいた。脱兎のごとく、その場から逃げ出した。

「……」

ボッサは、飛んで逃げる彼女の姿を見ていた。そして、ゆつくりと槍を構え、握る手に力を込めた。が、彼は、迎撃はしなかった。

「まあ、良いでしょう。わたしの思い違いでしたね」

一旦彼は槍を下ろし、改めてサックに向いた。

「サック、人は祝福が必要です。この世界の人間は皆、魔王に吸収される運命なのです」

魔王は人の絶望を食らう。だから魔王は魔物を使役し、人間を襲う。それは周知の事実である。童話として、子供たちにも教え伝えていくことだ。

「それを防ぐための、俺たち勇者じゃないのか」

サックの言ったことは尤もだ。そのために、女神は勇者の器を選抜し、能力を授けた。普通の人間には過ぎた能力だ。

しかし、そのサックの回答に、ボッサは頭を振った。広げた両手を下ろしたボッサの眉間の皺は、さらに深くなっていた。サックへの怒りではない、何か他のものへの怒りに見えた。

「サック、何故、過去の勇者の伝承がないのですか。数百年前とも言われている、魔王と勇者の戦いの記録が一つも残っていない」

ピクツ、と、サックの眉が動いた。ボッサの考えが、サックにも理解できた。

「ああ、それは思っている。余りに記録が少ない」

「私は福音奏者^{エバンジェリスト}として、女神の声を授かっていたが……彼女の、何気ない呟きが聞こえてしまったのだよ」

彼女とは、女神の事だろう。

「つまりはあれか。女神の独り言を聞いたつてのが、この騒動の一番の理由か」

サツクは再度、ボツサを睨んだ。常に冷静沈着な彼を、凶行に駆り立てた女神の一言とは一体何だったのか。

それは、特に焦らされることなく、呆気なく彼の口から発せられた。「勇者は、魔王にとってご馳走なのだそうぞ。いわば魔王が喰らうデザートだ。真の勇者ほどその味は甘美となる」

「……お、おい。それつて」

「私たち勇者は……女神が選んだ、魔王への生贄なのですよ」

第9話【その7】

北風が強くなってきた。空はいつの間にか黒い雲が覆っていた。気温は急激に下がり、これから夜にかけてはさらに冷え込むだろう。天候によつては雪が降り積もるかもしれない。

この体の冷えは、外気のためか。それとも、真実を知ってしまったがためか。

「勇者の冒険は……負けてもよかつたつてわけか」
オレたち

サツクの投げかけた言葉に、ボツサはただ頷いた。

「我々は、魔王に打ち勝つべく集められたのではない。勝ち負けなど関係なく、勇者の素質を持たせたものを、魔王に食わせる。それで魔王は、また永い眠りに入ります」

サツクは元々、女神への復讐……顔面一発ぶん殴るつもりで戻ってきたのだが、ボツサの語る真実を聞いて、女神は、自分の想定を遥かに超えた企みを企てていたことに驚かされた。

「なるほどな、女神を殴らなきやいけない理由が、さらに増えた」

「なら私と同じですね、貴方も女神へ復讐を……」

「違うぜ、ボツサ。俺は、世界の再構築なんぞ望んでない。俺は女神ヤツを一発なぐりたいだけだ」

サツクは否定した。ボツサの思いはサツクには理解できなかつたのだ。そしてボツサも、サツクの思いを理解できなかつた。

「女神の作った理ルレを変えるのですよ、私は。そんな、些細な復讐とはスケールが違う」

「神様にでもなるつもりか？」

「勇者なら、その能力も、素質も、資格も、私は有ると思ってます」

「そんな神様ごっこ遊びに、他人を巻き込むんじゃねえよ」

サツクとボツサの話は再度、平行線をたどることになった。

「残念です、アイサツク」

ボツサは改めて槍を構え、サツクに切先を向けた。

「残念だ、ボツサ」

サツクも左手を持ち上げ、切先をボツサに向けた。

ボツサが、付き出していたストームシーカーを横に動かした。その動向に気を取られたサツクは、彼女の動向に対して半歩ほど出遅れた。

ボツサより先に、アリンシヨアが突貫してきた。

「……………こんのっ！」

真横から突っ込んできたアリンシヨアを避けんと、サツクは体を大きく捻り、横に逸れた。

しかし、その回避運動は彼女に読まれていた。アリンシヨアも猫のように体を捻り、一瞬のうちにサツクの目の前に迫った。双剣が高速で振り下ろされる。

だがサツクも、不安定な体勢ながらも、刃を失った剣を構えていた。防御特化の短剣であるマインゴージュの、残された丸い鍔を巧みに使い、またしてもアリンシヨアの攻撃を受け流した。

(偶然ではない……………あの体で、アリンシヨアの攻撃を弾いている)

ボツサが改めて、信じられないといった表情を見せた。追放されたときの彼の容態を、誰よりも知っている。魔瘴気に蝕まれた体が、あそこまで動けるとは思えなかった。

(アイサツクめ、何か使ったな……………！)

アイテムマスター 道具師はあらゆる薬の調査も可能である。回復薬はもちろん、属性防御薬や、ステータス増強アイテムも調査可能だ。さらに、アイテム効果を何倍にも増強させることもできる。

さしずめ、強力なステータス強化薬を事前に服用していたのだろう。

だが、サツクが防御一辺倒なことには変わらなかった。

アリンシヨアの攻撃が激しすぎて攻め倦あぐねているのか、それとも、何かを企んでいるのか。

「時間が惜しい。これで決めましょう」

ボツサが槍を深く構え、強く突き出した。すると槍から強烈な風と雷が発生し、地面を走った。その攻撃と同時に、アリンシヨアがタイミングよく避け、射線には、サツクだけになっていた。

「やべっ……………」

とうとう、ストームシーカーの攻撃を真正面から受ける羽目になったサック。身をかがめ、強烈な嵐を耐え忍ぼうと身構えたが、しかし、その行動も、ボツサの狙い通りだった。

嵐に身を巻かれ、実質的に、サックは身動きが取れなくなった。そしてその嵐がサックに大きな隙を作った。

アリンショアが嵐に乗って飛び掛かっていた。そして彼女の『幻竜の小太刀』がサックの脇腹を突き抜け、体を貫通した。

嵐は、静かに過ぎ去った。

サックの体を突き抜けた刀身を目視した。剣先はサックの血液で濡れていた。

生ける屍となっても、アリンショアの強さは健在——衰えることはなかった。彼女はゆっくりと小太刀を抜いた。ボタボタと、サックの体からドス黒い血が零れた。

(……終わりましたね)

ボツサは呟いた。が、彼はサックの『しぶとさ』を忘れていた。

刹那、サックが動いた。体には穴が空いており、出血も激しかったはずなのだが、彼は残った左手で、力強く、しっかりと、アリンショアの右手を掴んだ。そのため、アリンショアはその場から動けなかった。

「よう、アリンショア、やっと話せたな」

彼は笑っていた。吐血を拭うことせず、優しい笑顔でアリンショアに語り掛けた。だが、既に死んでいる彼女は、何も返答しなかった。

「だよな……いま助けてやるからな」

「！ サック、貴方は何を！」

サックが、アリンショアを握る手にさらに力を込めた。青白い光が、アリンショアを包む。その光は、本来は『道具』にしか付与されないものだ。

「潜在解放!!」
ウエイクアップ

サックは、アリンショアに潜在解放を行った。すると彼女は全体を青白い光に包まれ、そのまま立ち尽くした。

「あ、アリンショアっ！」

ボツサ叫ぶ。サツクが取った行動の意味も分からない。そして今現状、彼女の身に降りかかっている事が理解できていなかった。

「ゆつくり昔語りでもしたかったなあ。猫舌」

サツクは、現役時代にアリンショアを揶揄していた時の呼び方で語った。

「猫舌のくせに、揚げ物^{フリッパ}大好物だったな……そうだ、港町ブロクダートに、旨い揚げ物^{フリッパ}を出す店を見つけたんだ。今度一緒に……」

「……ころ……」

アリンショアの口が動いた。僅かに、彼女は言葉を発したのだ。しかし、その内容は、あまり喜ばしいものではなかった。

「……ころ……して……アイサツク……」

「……だよな、つらいよな、ごめんな……いま、解放してやる」

サツクは今度は、ゆつくりと彼女の顔に手をかざした。

青白い光に包まれていた彼女の体は、サツクの合図に併せて、ゆつくりと崩れていった。

（……あ）

崩れる腕、礫塊と化す胴体。

彼女が最後に動かした唇は、最期にこう語っていた。

（……ありがとう……）

アリンショアの最期の声は、確かにサツクの耳に届いた。

第9話【その8】

「……サツクあなた……なにをー！」

地面には、伝説の双剣『幻竜の小太刀』が突き刺さっていた。それはまるで、元の持ち主であるアリンシヨアの墓標のようだった。

サツクは、ボツサのほうに向きなおした。着ている薬師のローブには確かに、脇腹部分に大きな穴が開いていたが、傷は完全に塞がっていた。

すると、サツクは足元に落ちているビンを拾って見せた。ガラス瓶は刃物で綺麗に切断され真っ二つになっていた。

「オートポーションによる反撃スキルだよ。知っているだろう？」

事前に調査した大回復薬を、アリンシヨアの攻撃に重ねて使用したのだった。彼女の斬撃がポーションを開封し、貫く攻撃とともにサツクを回復させていた。

「……そうではない。貴様、アリンシヨアに何をした……」

丁寧に説明をしようとしたサツクを、ボツサが遮った。ボツサが知りたいことは、そんな事ではない。

するとサツクは、「ああ」と小さく返答し、彼女へ仕掛けた内容を述べた。

『道具』の力を解放しただけさ。限界を無視して全力でな^{リミット}

「どういう……」

「リミットを越えると、そのアイテムは例外なく崩壊する。……勇者の剣『ハルペリオ』のときと一緒さ」

「そうではないっ!!」

ボツサは大声で怒鳴った。そんな事を聞きたいのではない。

「なぜ！ アリンシヨアが！ こうなったのだ！ これではまるで！」

「……気づかないのか」

ふとサツクは冷徹な、そして、ボツサを蔑む表情を呈した。その感情には彼なりの『怒り』も含まれていた。

「ボツサ、おめーは無意識に、アリンシヨアの遺体を『道具』と認識し

ていたんだ」

「……」

顔を真っ赤にして怒っていたボツサは、サツクの一言で押し黙った。少なくとも、心当たりがあったのだろう。

そんな反応に気付いているのか、さらにサツクはボツサを捲し立てた。

「アリンショアを信頼し、愛していた？ 彼女が死んでもその気持ちには本物だったんか？ 教えてやる。おめーさんは、とうに見切りをつけてて、アリンショアを『道具』としてしか見れなかったんだ」

「……」

「俺は、道具なら例外なく『潜在解放』^{ウェイクアッパ}できる。これが効いたってことは……そういうことだ」

ボツサにとって彼女は『道具』に成り下がってしまったのだった。

サツクは、アリンショアの墓標から、双剣の片方を左手で抜いた。柄部分に竜の紋が彫られている小太刀は、持ち手部分は小柄なアリンショアの手に合うよう削られていた。

「そしてアリンショアも、既に死を受け入れ、生きる事を諦め、傀儡となっていた」

だから、蘇生や回復ができなかった。本人が生きることが拒否していた。

「……黙りなさい」

「お前もよく理解できているはず、だろ？ 意図せず望まざり得た『勇者の力』のせいで、責任を負わされ、そして世界に振り回されることに嫌気がさした。だからアリンショアは、自身の死を受け入れた」

「……黙れ」

「彼女の相談に乗っていたお前が、一番分かっているはず。そして、だからこそ、この世界の理をぶっ壊そうと……」

「だまれえ!!」

ボツサが『ぶちギレ』た。この表現が一番正しいのだろう。頭に血が上り、顔は真っ赤。垂れ目の彼の目は、まるで狐に憑かれたかのよ

うに釣りあがっていた。

彼は、その怒りにかまけて、槍を振りかぶってサックに襲いかかってきた。

(さすがに気づかれたか)

ボツサはストームシーカーの本領である、嵐の生成を行わなかった。

雷雲を伴わない、槍によるシンプルな物理攻撃だ。

それはつまり、属性を伴わない攻撃である。

サックは事前に『耐性薬レジストウインド、サンダー【風、雷】』を調査し、服用していた。ボツサが何か長い武器……『嵐ストームシーカーを運ぶもの』を持っていることは、クリエからの情報で知っていたためだ。

ボツサはそれに気づいたのだ。だから、直接攻撃でサックに挑んだ。だが、サックの左手にも、今は『勇者武器』がある。

ボツサが全体重をかけて振り下ろした攻撃は、虚しく空を切った。槍は、撫でるように柔らかく横に逸らされたのだ。『幻竜の小太刀』による回避行動だった。

地面を槍で叩きつけたボツサは、すぐには再攻撃に移らなかった。サックはそれを見越してか、ゆっくりと再度ボツサから距離を取った。

「手遅れになる。どうせ皆、魔王に食われる。勇者も……民も！ これはイザムでも、もう止められない！」

「だから食われる前に、皆で逝きましょうっか!? ざけんな！ 足掻けよ！ 藻掻けよ！ 他人ひとの命運を勝手に決めるな！」

「その行動こそ、無駄なのだ！」

ボツサはまた槍を構えた。今度は、また武器の力を使い嵐を起こそうとしていた。

「なんで諦めたんだよ！ なんでもやってみなきや……わかんええだろう!!」

サックは、幻竜の小太刀を地面に突き刺した。左手から発せられていた青白い光が、さらに強く、眩く光った。

「刮目しろ、ボツサ！ 道具を極めた、道具師アイテムマスターの戦い方!!」

さらに左手の輝きが増した。すると、サックとボツサとの間に、魔法陣が展開された。地面はもちろん、空間にも魔法陣は展開され、その正確な数は数えられないほどである。一つ一つは人間の顔程度の大きさであった。

「何だこれは！　こんな魔法陣、私は知らない！　見たことない！」

ボツサは驚愕した。昔の仲間同士、お互いの手の内はすべて知っていたと思ひ込んでいた。だが、ボツサはこの術式を知らなかった。

「当たり前だ。奥の手中の奥の手過ぎて、現役時代では使うタイミン
グ無かつたんだからな！　大盤振る舞いだ。釣りはいらねえ、取つと
け！」

ボツサとサックを中心とした空間に、数多の魔法陣が生成、固定化された。不気味に青白く光る魔法陣は、いずれもボツサに向いていた。

「見せてやるぜ……名付けて、『ウエボンマスタリ熟達の武装戯』!!」

第9話【その9】

『熟達ウエボンマスタリの武装戯スストレ』

契約した武器庫ストレージから、思い描く場所に武器を一度に『召喚』する、サツクの『奥の手』だ。

武器庫の中身を全て正確に知り、置き場所を覚えている必要がある。そのためサツクはボツサに会いに行くに際し、事前にわざわざ詰所に戻り武器を整理整頓していた。

無数に展開された魔法陣一つ一つから、別々の武器や防具、道具の一部が頭角を表した。と同時に、ボツサの上空に召喚された武器が、頭上に降り注いだ。

「そういうことですか小癩な！ ただの安物の……店売り武器を落とすだけ！」

向かってくる武器は、いずれも、街の武器防具店でも見かける、一般的な装備ばかりだった。鉄のオノや、鋼の剣、銀製のナイフに、銀の盾……。

ボツサはそれらを、勇者武器『嵐ストームシーカーを運ぶもの』で薙ぎ払おうとした。
「唸れ、ストームシーカー！ 巻き起これ嵐よ！」

槍の切先から、暴風雨と雷光が走り、落ちてくる武器を吹き飛ばす……はずだった。

ただただ、自由落下をしている、シンプルな武器防具だったのだが、それらはいずれも、サツクによって事前に『解放』されていた。

表面を磨かれた『銀の盾』は【属性攻撃反射】が付与され、『鋼鉄の槍』は雷を集める【避雷針】スキルが付与されていた。

「なにつ！！」

槍から放たれた雷が、ボツサのところに丸々反射してきた。同じく、激しい暴風もボツサを中心に巻き起こり、風の刃で傷を負った。落ちてきた鋼鉄の槍は雷を招き、それはボツサに電撃を浴びせた。しかし、彼も槍を構え、雷を相殺させた。

「サツク、貴方という人は……っ！」

ボツサが、今度はサツク本体に向かって武器を掲げた。

レジストウインド、サンダー
耐性薬【風、雷】が付与されていても、少なからずダメージは受けていたし、荒れ狂う風は足止めにもなる。効果が無いわけではない。

だが、それを先読みしたサツクは、バラまかれた武器を拾い、装備しながらボツサに突っ込んでいった。

拾った瞬間に装備される武器防具。戦闘中で装備変更な【早着替え】スキルである。

目の前に巻き起こる嵐は、

『オオカミの毛皮のマント』【付与；風完全防御】

『ルーンメイス』【付与；属性攻撃吸収】

そして、

『疾風のブーツ』【付与；倍速移動】

を使った高速移動で、瞬時に切りぬけた。

「ぬおおっ!!」

嵐の壁を貫き、突然サツクがボツサの目の前に現れた。想定よりはるかに早かったサツクの動きに、ボツサの攻め手が止まった。

その隙を逃さんと、サツクは『スレッズハンマー』に持ち換えて、殴りかかった。

「……いけませんー!」

しかしすかさず、ボツサが左手の掌を翳した。すると、分厚い光の壁が何重にも目の前に現れた。福音奏者が使える『絶対障壁』。攻撃をシャットダウンする防御スキルだ。

だが、それはサツクは織り込み済みだった。

まるで手品の如く、サツクはハンマーから『クロスボウ』に持ち換えた。左手一本しか使えないはずだが、まるで手が何本もあるかのような早業だ。

「貫けええええっ!!」

サツクの一声とともに、『クロスボウ』から一本の矢が発射された。武器自体は店で販売されている、量産型の自動弓矢である。しかし、サツクによって能力が付与された弓矢は、通常の威力を易々凌駕する。

『クロスボウ』に付与された力は、【バリア貫通】だ。

対バリア用に能力を付与された武器は、例外なく、バリアを貫く。それは、如何なる強力な力で生成されたものであっても。

突き抜けた矢は、ボツサの右足を抉った。予想だにしていなかった攻撃に対応できず、また、自分が傷を負うことを想定していなかったこともあり、彼は右足に意識が向いてしまった。

「ボツサあつ!!」

サツクの、渾身の一撃。左手に持つ武器は、巨大な槌に変わっていた。

「くっ!!」

ボツサは咄嗟に、持つ槍でガード体制をとった。しかしそれこそ、サツクの狙いだった。

ハンマーの一撃を受けた槍が、大きく^{ひしゃ}拉げた。ボツサは、この槍がここまで曲がったことを見たことがなかった。

勇者武器がひとつ、『嵐^{ストーム}を運ぶ^{シーカー}もの』は、この時役目を終えた。

サツクの持つ『スレッヅジハンマー』には「付与・武器破壊」がされていた。

激しい音を発し、勇者専用武具は、店売りのハンマーによって真っ二つに折れた。

そして、そのハンマーによる叩きつけの勢いは、槍を越え、ボツサの体を簡単に吹き飛ばした。武器でガードし、それが壊れたことで、だいぶ威力は抑えられているようだが、しかし、彼の体は軽々と吹っ飛び、中央広場の女神像の足元まで転がる羽目になった。

「そんな、店売りのアイテムで……」

ボツサは倒れ込んだまま、折れた槍をまじまじと見ていた。伝説の武器が軽々とへし折られたことが、未だ信じられないといったボツサに対して、サツクは言い放った。

「道具^{アイテム}マスターに、道具に頼った戦いを挑んだ時点で、お前の負けだよ」

サツクの武器はまた変わっていた。魔法攻撃を防ぐ効果を追加で付与された『ルーンメイス』だ。

サツクが、警戒しながらもボツサに近づいた。ボツサは、吹き飛ばされたときのダメージが意外に残っているのか、立ち上がることすら

ままならない。

「諦めな、ボツサ。槍以外の『攻め手』は無いんだろ」

「……貴方、『視えて』いたのですね」

じりじりと、サツクはボツサとの距離を詰めていった。ボツサは両手両膝を付いたまま、サツクを睨みつけていた。

「まあな、これが俺の力だからな」

サツクは特に表情を見せることは無かったが、額にはびっしりりと汗を掻き、呼吸が乱れていた。先ほど能力を使った反動だろうか。彼は肩で息をしていた。しかし、ゆっくりとボツサとの距離を縮めていった。

「貴方の負けです、サツク」

「負け惜しみを」

「いえ……貴方が、私を女神像まで吹き飛ばした時点で、貴方の負けです」

すると、ボツサは右手で何かの印を結んだ。同時に、呪文の詠唱を始めた。彼の持つ【早口】スキルは、瞬時に詠唱を終えさせた。

「私を『鑑定』するのに必死で、本来の目的を忘れていませんか」

ボツサが結び終えた印を展開させた。すると、中央広場の女神像を中心に、その左右から巨大な光の柱が走った。まるで、街全て……いや、もつと広域を囲うような勢いだ。

「私の術式は、今しがた完成した！ 私の心願成就の賜物！」

『大浄化術式^{イエアヒナテイカ}っ!!!』

もろ手を挙げ、光の壁にさらに力を注いだ。彼の願いは高速で広がる光に乗り、世界を包み込もうとした。それは、彼なりの女神への復讐だった。

そして光は、大陸全土を覆う……はずだった。

第9話【その10】

不発だった。

大陸を包み込もうとした光柱は、突然勢いが衰え、逆再生の如く消えていった。

「なぜ……だ……」

決死の覚悟で、命を懸けて組んだ、一世一代の大術式。

ボツサが敷いた軌跡を、光柱で編んだ巨大な円環がたどるはずだった。

「何が……おこった……」

ボツサの顔は、先ほどまでとは大違いだった。一気に頬は痩せこけ、髪の毛は真っ白になっていた。『すべての力を注ぎ込んだ』といった表現が適切だろう。サックに向けたその顔は、何か教えを懇願しているように見えた。

「俺はお願いしただけ。術式こを止めたのは……」

サックは、ボツサが聞きたいことを瞬時に理解し、そして、彼にとって酷なことを告げた。

遠くを指差すサック。方角で言えば南南西。

……そう、彼女が逃げた方向だ。

「クリエ。アイツに全部任せた」

サックは最初から、ボツサが大浄化術式イアーリナティカの完成を目論んでいることを知っていた。だからサックはクリエに、事前に『とある薬瓶』を渡していた。そして、彼女にこう伝えていた。

「俺がボツサを深層鑑定して、術式の交点を見つける。陣は交点を潰されると効果を失うはずだ」

「逃げるふりをして、この薬を撒けば良いのですね」

「開封注意な。結構な『劇薬』だ」

「街のバザーで原材料を探すの、大変だったんだぜ？」

強大な光の力すら漏らさず吸収する物質——『暗黒物質《ダークマター》』を、サツクは事前に調査させていた。

光の道筋に撒かれたダークマターは、繋がるはずの光を完全に退け、暗黒空間を一時的に作り出した。繋がるべき道筋は途絶え、結果、術式は未完成のまま崩壊したのだった。

「……新聞屋……そうですか……」

大きな肩をすぼめ、彼は俯いた。長身の体がここまで小さく見えるのか。気持ちで人間の大きさが変わることは無いが、取り巻く雰囲気フレイムがそう見せていた。

「終わったんだよ、ボツサ」

サツクは、ボツサに歩み寄った。しかし彼の足取りも覚束ない。フラフラと体を揺らしながら、立っているものやつとといった風貌であった。

（葉ヤクが切れた。体中から激痛が『こんにちは』し始めたな）

招かざる痛覚に耐えながら、サツクは時折、左手に持つ『幻竜の小太刀』を杖のように使い、体重を預けながら向かっていた。

だがサツクが到着する前に、ボツサは仰向けで倒れ込んだ。

「！ ボツサっ！」

軋む体を鞭打ち、急いでサツクが駆け寄った。そして彼の現状を、サツクは改めて認識した。

「ボツサ……やっぱお前も『限界越え』したのか」

ボツサの表皮は砂漠のように乾燥し、既に一部は崩壊が始まっていた。

力の限界を超えた際に、サツクの右手を奪ったあの症状と全く同じだ。

槍以外での攻撃——例えば、精神魔法や聖属性の霊撃など——を、ボツサが使わなかった理由は此処にある。スキルを使うと体に激痛が走り、崩壊が加速するため『使えなかった』。

「貴方の右手も……同じなんでしょうね」

「ああ。女神から貰った能力を使いすぎると、こうなるらしいな」

ボツサの意識はまだ残っていた。空を仰いだ彼の目は、サツクを見

ず、ただただ、曇天の空を望んでいた。

「私の負けです、サック」

「勝ち負け関係ねえ。ただただ、後味は最悪だ」

「同感です」

朽ち始めた体を横たえたボツサと、剣を杖代わりに体を支えているサック。

彼らはやっと、対等な関係で世間話を始めることができた。勇者現役時代に、野営の焚火を囲って語らった、あの時のように。

「私は死を恐れず、女神への復讐を試みたが……死を覚悟した貴方の力に、それは折られました」

「語弊があるぜ、ボツサ。俺はそれっぽっちも、死にたいと思っ
てない」

サックの言葉を聴いて、ボツサは気が付いた。「ああ、そうか」と
独白し、彼はサックとの会話をつづけた。

「死への覚悟より、生への執着が勝った、のかもしれない、あのイチ
ホのように」

「あいつと同じにされるのの本意なんだけど？」

「イザムと貴方は、常に生きる道筋を見据えていた。それが貴方達の
力の源だった」

「……冗談を。2回ほど人生諦めたんだぜ？ 俺」

サックが、僅かに笑いながらボツサに返した。するとボツサもつら
れて、口角を上げた。しかし乾燥しきった表皮は、口が動くたびにポ
ロポロと欠けていく。

「現に、『英傑の霊薬』を使ってもなお、生きるという一縷の望みを捨
ててない」

「なんだ、知^{ネタバレ}ってたのか」

サックは、ボツサと対面する前にとある霊薬を服用していた。『英
傑の霊薬』と名づけられたそれは、全ステータスを倍増させ、様々な
属性防御を付与。さらにデバフスキルを一時的に打ち消す効果があ
る。だがしかし、其れには大きな代償を伴う。薬効が切れると、使用
者は——命を落とす。

「飲んだ後にさ、親友に言われたんだ。『絶対戻ってこい』って。……
訳アリの子供を養う必要もできた。だから、死ねなくなった」

「それが、今のあなたの力なのでしょう」

「参ったぜ。薬で死ぬこと決定してるのに、生きろだなんてね……だから決めた。『絶対に諦めねえ』って。万に一つの確率で、薬の副作用が出ない可能性に賭けるさ」

「道具師の道具に、自ら欠陥を求めますか」
アイテムマスター

「まあね、其れしか、今は『道』がない」

「サツクも自然と笑みをこぼしていた。と同時に、彼の頬にもヒビが入り始めた。彼も、体全体の崩壊が始まりかけていたのだ。」

「……くっそー！ 崩れ始めた……俺は未だ、死ねねえのによー！」

左手で崩れた個所を抑え、必死に崩壊から抗い始めた。自ら調査した薬効と、能力の限界の相乗効果によるためか、ボツサの動きより崩壊が早かった。

（そうか、私は数ある『道』の果てが、全て絶望であることが見えて、進むのを諦めた。しかしサツク……貴方はこんな絶望的な状況で、目の前の道ではなく『新たに道を造ろう』としている……）

しかしながら現状、彼らの崩壊を停める手筈は思いつかなかった。そんな簡単な事情ではない。だが……

「……アリンシヨアには、悪いことをしました。自分のワガママで、縛りつけてしまった」

ボツサがぼそりと呟いた。死してなお『道具』として扱ってしまったていたことを、彼は心の底から悔やんだ。謝罪も何もできないまま、彼女は逝ってしまった。

「……ったく。向こうに着いたら、しっかり謝っておけよ……尤も、こればかりは、俺も一緒に頭を下げるに行く事になるかも……くっ、足にまで来やがった……」

サツクの膝がガタガタと震え始めた。自分の体重を支える事すらままならなくなっていた。顔は苦痛で歪み、しかし汗は出ない。乾燥した皮膚は汗を出す機能を失っていた。

「サツク、責任、取ってくださいね」

「ボツサが立ち上がった。動くたびに表皮がひび割れがさらに広がるが、そんなことも顧みず、そのまま右手をサックに向けた。すると刹那、ボツサの手に強い光が集約した。真っ白い光は暖かく、そして、周囲を激しく、眩しいくらいに照らした。」

「ボツサ！ 何を！」

「責任とつてくださいな。この世界、魔王に食われるわけにはいかないのでしょ？」

「サックの職業柄、彼の鑑定目はその光さえも即座に鑑定していた。それは、生きるための力の集合体——生命力の塊だった。」

第9話【エピローグ】

「女神は……何をしたいんだ」

「……」

再度、仰向けに倒れたボツサに向かって、サツクは直立した状態で訊ねた。

ボツサの右手から発せられた強烈な光の玉は、サツクの体にぶつかり、体内に入り込んだ。

すると、彼の体の崩壊は止まった。体に残された薬効の副作用は立ち消え、脳の奥にまで達していた魔瘴気の残骸は取り除かれた。

皮膚のひび割れも急速に改善され、肌にうるおいが戻ってきた。そして何より、失われた彼の『右手』が、光に包まれるとともに、再生したのだった。

勇者アイサツクⅡベルキッド、ここに完全復活である。

「お前の生命力、精神力。全部を受けとったんだ。ボツサが知る全てを、俺は知る権利がある」

「……」

しかし、彼は口を開かなかった。既に喋れないのか、それとも、あえて話さないのか。

サツクは三度、^{みたび}ボツサに問い掛けた。

「なあ、ボツ……ぶべらっ!!!」

「わ・た・し・を……殺す気かああああああああっ!!!」

サツクの質問は、ボツサに届かなかった。

!!!!!!!

強烈なドロップキック——放った本人の体重は軽いものの、しかし、有翼人種特有の空中高速移動から繰り出されたそれは、質量の軽さを十分補う速度を持ち、強大な運動エネルギーを伴っていた。

そして、それはサツクの横顔にクリーンヒットした。全エネルギーを首の上で受けた結果、彼の首はあり得ない方向に曲がったまま、キックの力のベクトル方向に吹っ飛んだ。

縦回転しながら瓦礫に突っ込んだサツクだが、反撃スキル『オートポーション』が発動したためか、怪我はすぐに癒えた。

「馬鹿ですか！ 劇薬ってレベルじゃない！ 『薬』の範疇を越えてました！ 前もって効能を伝えてください!! 何の気なしに開けたら、闇に飲み込まれかけました!!!」

クリエIIアイメシアだ。大浄化術式イブリーナティカの光を遮るため『暗黒物質』ダークマターの瓶を封切ったところ、どうも想像だにしない出来事が起こったようだ。使用するに際して、サツクから危険性の説明が十分にされなかったことにご立腹だった。

「おま……空気を……読め……」

砂埃を上げ吹き飛ばされたサツクが、瓦礫の中からうめき声に似た言葉を発した。

だがそんなことはお構いなしに、クリエのマシンガン煽りは続いた。

「気づいたら地面が抉れてクレーターになってました！ 光どころか、周りの瓦礫やら何やら全部吸い込んで消失！ あなたは加減つてのを……」

「騒がしいですね」

「……っとうわあ!! ボツサ様っ!!」

クリエはやっと、足元にボツサが横たえていることに気がついた。風化し始めた体は、風が吹くたび表面が砂塵と化していた。

「ボツサ」

やっと口を開いたボツサに、瓦礫から這い出たサツクが駆け寄った。ボツサの目は、何かを見据え、睨んでいるようにも見えた。

「ボツサ様……」

ついで、サツクへの不平不満を述べていた時とは全く真逆な表情で、クリエはボツサを見ていた。

「まったく……あなたは……」

ボツサは弱弱しいながら、しかし、二人に聞こえる声量で話始めるも、彼の体は限界に達した。

「あなたはいつも、邪魔をする」

世界を変え、女神に復讐を誓ったボツサの最期の言葉は、単なる悪態であった。

ボツサはそれ以降動かなくなった。そして体は一気に砂塵化が始まり、砂は風に乗って散り散りに飛んで行つた。

その場には、ボツサの衣服のみが残された。

「……終わった、んですね」

「……」

サツクは、先ほど吹き飛ばされた瓦礫の中から、折れた槍を拾つていた。ボツサ愛用の『嵐ストームシーカーを運ぶもの』だ。

それをサツクは、ボツサが遺した服の横に突き刺し、墓標に仕立てた。そして同じく、携えていた『幻竜の小太刀』も、すぐ隣の地面に突き刺した。サツクはあえて、それら互いを支えあうよう交差させた。

『幻竜の小太刀』も置いていくんですか!?! 誰かに取られてしまいますよ!?!」

無傷で遺された伝説の双刀。魔王と対峙するのであれば、店売り武器よりも断然心強い。しかし、サツクはそれを置いていくことにした。

「盗む奴は盗むかもな……。けど、もうその武器が必要な時代は、来させねえよ」

サツクの心は、ある決意で燃えていた。

「クリエ、最後の仕上げだ。また『女神のつばさ』をお願いできるか?」

「サツク……い、いえ! 勇者アイサツク様! もちろんです!」

クリエには色々世話をかけてしまっている。既に新聞屋としてのキヤパは越えていたにもかかわらず、彼女はサツクに協力してくれた。

今日の前にいるのは、先日まで夫婦漫才を繰り広げていた『サツク』ではない。

「目的地は、魔王城だ。……ちよつくら、世界救つてくる」

能力使って魔王討伐できなくても、そのぶん女神をぶん殴ればそれでいいや

最終話【その1】

「イズム様には、魔王攻略を一時停止してもらっています……って！
毎度毎度！どこ触ってるんですっ!!」

「仕方ないだろっ！魔王討伐前に転落死なんて、まっぴらごめんだ
！」

サツクは、クリエの腰にしがみついた状態で空を飛んでいた。クリエは背中に天使のような光の羽を生み出し、それを羽ばたかせていた。しかしその速度は、普通の鳥の比ではない。

空気抵抗は殆ど感じず、目的地まで、何も邪魔されない細い円筒の中を抜けていくような感覚——クリエが使える能力、『女神のつばさ』。

「対価は高くつきますよ、アイサツク様」

「サツクだ。アイサツクはもう居ない」

「……？まだそれ言いますか？まあ、いいですけど。今回の運賃はそうですね……私の目の前で、魔王討伐を見せてください」

「簡単に言ってくれるぜ。でもそれで支払ってやるよ、釣りはいらねえ」

「やっと、トントンってとこですよ」

そんな、他愛もない会話を交わしながらも、目的地はすぐに見えてきた。

魔王城前に造られた、最終キャンプ地——人類と魔王の最終決戦地だ。

全く慣性を感じることなく、サツクとクリエは地面に足をつけた。

「——道理で冷えるわけだ」

刹那、サツクが呟いた。飛んでいるときには、そこまで気が回っていなかった。

「——あ」

そしてクリエの口からも、声が漏れた。彼女のメガネに、小さな白い粒がぽつぽつと張り付いた。

雪がちらついていたのだ。

吐く息は白く凍り付き、地面には積雪があった。じんわりとつま先から冷気が染みてきていた。

最北端、インIIサクル。この世界の果てと言われている。これよりさらに北には、なにもない。ただただ、魔王城への入り口……ゲートが渦を巻いているだけである。

「アイサック様っ！」

「アイサック様が戻られた!!」

国の威厳をかけた戦争の前線基地。ゲート前のキャンプには、多くの兵士たちが戦いに備えていた。そして彼らは、七勇者のことも良く知っている。

例に漏れず、アイサックIIベルキッドの顔を知らない兵はいない。

「きたか、アイサック！」

その中で一際目立つ人物が歩み寄ってきた。他の兵とは明らかに、醸し出す風貌が異なる。

「リオ総大将。すまん、待たせた」

サックは、『彼女』と挨拶を交わした。

最終キャンプの統括を任せられた、ベテランの女性兵士だ。年齢性別を思わせない筋骨粒々な体型で、男でも重たいはずの重装備一式を着こんでいるにも関わらず、軽々と、あくせく動き回っている。肩まで伸びた髪は、丁寧に三つ編みにして後ろで丸めて束ねられていた。

余談であるが、リオ総大将は、あのジャクレイの姉である。

顔つきは非常によく似ていて、すつきりと通った鼻筋や、二重の目の明瞭さはジャクレイのそれに重なる。

なお、彼女には四人の夫がいるという。ジャクレイ共々、異性に非常によくモテルのは何かの血筋だろうか。如何に重婚が認められているといっても……この姉弟、底なしである。

「戻ってくると信じてたぜえ。勇者よ」

リオは鋼鉄で囲まれた小手を身に着けたまま、サックの胸を小突い

た。金属の塊で叩かれた箇所は非常に痛むも、彼女なりの挨拶である
と知っているため、サックは苦笑いで答えた。

それを見て、リオも笑顔になるが……しかし、疲労は色濃く現れて
いた。

「リオ総大将。早速だが、他の勇者たちに会いたい。ここで待ってい
るんだろ？」

サックは一刻も早く、馴染みの仲間達に会いたかった。ボツサの
件、アリンシヨアの件、そして、力を取り戻して戻ってきた自分のこ
とを伝えたかった。

しかし、リオ総大将は先ほどの威勢とは裏腹に、急に吃どもつてしまっ
た。「うっ」という呻き声と共に、罰の悪そうな顔をした。

「……リオ総大将殿、まさか……！」

クリエが、何かを察した。サックもリオの態度から、あまり良くな
い事情を感じとり、辺りを見回した。

「……あそこのテントか」

サックが指差した方角には、白い厚手の幌で組まれたテントがあつ
た。キャンプの中でもかなりのスペースを割いていて、重要な施設で
あることが伺えた。

すると、リオ総大将はサックたちを見据えた。彼女は、サックたち
をそのテントへ案内する覚悟を決めたのだった。

「こちらだ」

リオに案内され、テントの中に入った。入り口には『医務室』の文
字が記されていた。

中には所狭しと簡易ベッドが並べられていた。おおよそ半数が埋
まっている状況だったが、リオはさらに奥へ、サックたちを導いた。

厚手の布で隔離されていたその場所は、外気をあえて取り込み、テ
ントとしては温度が低く保たれていた。

目に飛び込んできたのは、二つのベッドだった。そこに横たわって
いたのは、丁寧に布にくるまれた人間大の物体。

ベッドの一つは、横に金色に輝く巨大な戦斧が立てかけてあった。

もう一つのベッドには、絢爛豪華な装飾が目立つ、踊り子用の扇が

二本、供えられていた。

「……なんでっ！ 待っててって、言ったのにつ!!」

その場でクリエは膝を付き泣き崩れた。相当ショックを受けたようだ。

サツクは静かに、二人の遺体を見続けていた。しかし強く歯を食いしばり、拳は固く握られていた。

「……第5層の攻略寸前だったらしい。ネア様とユーナリス様は……お互いを庇いあうように亡くなったそうだ。イザム様とヒメコ様の回復術では……」

リオは唇を噛んで俯いた。彼女たちを担いで戻ってきたイザムたちを、最初に迎えたのが彼女だった。全てが手遅れで何もできなかった自分が不甲斐なく、悔しかった。

ゴッドハンド

神手 ネアⅡマイア

ゴッドダンサー

神舞 ユーナリスⅡテンオウ

七勇者の二人が、魔王城で命を落としていた。

「……本当、遅くなっちゃったな……」

サツクが二人が眠るベッドに近づいた。彼はあえて、顔は確認しなかった。サツクの職業柄、隠されていても見えてしまっている。

「借りるぞ」

するとサツクは、彼女たちの武器を手を取った。

大人二人掛かりでやっと運べる巨大斧『ムーンエクリプス』を、彼は片手で軽々と持ち上げ、肩に担いだ。重さをもともせず、その斧を装備したのだ。

そして、二本の扇……『羅刹芭蕉扇』と『天下泰平』も、腰のベルトに挟み込んだ。

「イザムたちは？」

「お二人を連れ出したのち、すぐにまた魔王城に入っていた。それから暫く出てこない」

つまり今現在、イザムとヒメコのたったふたりで、魔王城に挑んでいるということだ。

「……急いだほうがよさそうだな」

サツクは旧知の仲間の遺体に、簡単な祈りをささげたのち、踵を返しテントから出た。彼女たちの武器を握りしめ、魔王城の入り口の方角へ歩みを進めた。

「……待ってください！」

「クリエ、状況が状況だ。残ったほうがいい」

サツクが元々考えていたプラン通りに、残っていた勇者4人全員と合流ができていれば、クリエも同伴を許すつもりであった。しかし、その予定は大きく崩れたのだ。

「俺一人では、お前を守りながら魔王に挑める自信がない」

「構いません」

先ほどまで大粒の涙を流していたとは思えない、気丈な顔立ちであった。メガネの奥には、力強くサツクを見据える瞳があった。――
気持ちの整理がついたのか。彼女自身、覚悟を決めたのか。

「自分の命は自分で守ります。足を引っ張るつもりはありません。です
ので、私も連れて行ってください！」

最終話【その2】

魔王城の低層階は、想定よりも物静かであった。まるで、何かに招かれていたようでもあった。そのため、4層まで特に大きな戦闘なく、降りることができた。

しかし、第5層からの敵の攻撃は熾烈を極めた。

いつの間にか、城のつくりも変わっていた。魔王城の入り口付近は石壁と石畳で造られ、文字通りの『城』だったのだが、奥に進むにつれてそれらが土壁に変貌し、そして今の第5層は、石や鉱物のような無機質なものではない。紫色を基調としたそれらは、おどろおどろしい肉の壁に例えることができた。

「雑魚は……引っ込んでろ！」

サツクは、本来は神手『ニアリマイア』が扱はずであった巨大斧『ムーンエクリップス』を、軽々と振るっていた。切先の鋭さは随一で、また、全体に帯びる光と闇の属性効果も相まって、刃先に触れたグレーターデーモンの体は易々と上下に分断された。

群れを成して襲ってきたヘルハウンドが、一斉に口から地獄の業火を噴き出すも、彼は臆することなく、左手に構えた『羅刹芭蕉扇』を一仰ぎした。すると扇から、凍てつく氷雪が巻き起こり、ヘルハウンドの群れは、噴き出した炎とともに氷塊へと姿を変えた。

敵の後方から放たれた闇属性の攻撃は、広げた『天下泰平』が光のバリアを展開させ弾き返した。しかしその攻撃を囨とし、地面からデスシャドウが湧き出てきた。ちょうど光のバリアを抜けた場所に現れ、サツクは不意打ちを受けた格好となった。

が、彼はそれにも冷静に対処した。デスシャドウの直接攻撃は、『韋駄天足』で速度が極限まで高まっているサツクにとっては避けるのは容易だった。そして、彼は天下泰平で撫でるように影を仰ぐと、扇の持つ浄化効果が発現し、影で構成されているデスシャドウの体は崩壊ののち、光の中に消滅した。

「……すげー」

クリエが息をのんだ。彼女の出番は、文字通り皆無だった。『精霊

鷲のフルーレ』はサツクに修理とメンテをしてもらい、かつ、潜在解放ウエイクアップによる強化も施されていた。しかしながら、サツクの一騎当千の快進撃によって、こちらの武器の活躍の場面はなさそうだ。

「武器が凄いだけさ。俺の力じゃない」

「それでも、貴方ではないと……道具師だからこそ出来る業です、アイテムマスター
イサツク様」

「……惚れたか?」

「いえ別に」

すこし食い気味にクリエは否定した。

「既に、魔王の体の中みたいです」

「だな……」

ぶよぶよとした壁に嫌悪感を抱くクリエ。壁伝いにあるこうにも、手を添えるのも憚れる。

そして奥に進むと、さらに濃さを増したのが魔瘴気だった。サツクたちは事前に、魔瘴気用の耐性薬を服用していたため、命を奪われるようなことは無かった。しかし、空気に含まれる魔瘴気が体にまとわりつく感覚があり、皮膚がピリ付いた。

「……」

「サツクさん?」

サツクが足を止めた。そして、壁の一点をじっと見つめていた。肉壁は相変わらず脈打ち、謎の粘液で湿っていたが、彼はそこから、他とは明らかに異なる雰囲気を感じた。

「……ここか」

「何もありませんよ?」

「オレには視えるんだよ。ここに道がある」

サツクはムーンエクリプスを振りかざし、壁に向かって叩きつけた。すると、壁が二つに切り裂かれ、道が現れた。

「イザムたちが通った道……ではないな」

「隠し扉、というものでしょうか。ほら、盗賊や鑑定スキルで見られる抜け道的な。ショートカットかもしれません」

「……なるほど」

これを使えば、イザムたちに追いつけるかもしれない。

サツクは深層鑑定で中を覗いたが、そこはただただ、深淵が広がっていた。十分な鑑定はできないが、奥に何かがあることが直感的にわかった。

「もう、戻れないかもしれないぜ」

「でも、魔王を倒せば戻れますよ。記事にするまで私は死ねません」

サツクは、「まったく……」といった表情をするも、すぐに闇を見据え、その足で中に入っていた。クリエも、臆することなくついていった。

そこは足音すらしない。光も音も吸い込まれているような暗闇だった。

「まずいな……」

奥に進むごとに、サツクに内心、焦りが生まれた。

(……武器庫ストレージに繋がらない)

道具を取り出そうとしたところ、武器庫にアクセスができなくなっていたのだ。過去に、呪文が封じられるダンジョンがあったが、それによく似た現象だ。

別空間に繋がる特技が封じされた、ということは、それはすなわち、エスケープ脱出術も使えないということだ。

(退路は断たれた、ってか)

「……」

クリエは黙って、彼について行っていた。サツクは、脱出術が使えなくなっている事実を、彼女に伝えるべきか悩んでいると、ふと、何か『白い粉雪』のようなものが、ふわりと舞っているのが見えた。

「……?」

かなり目を凝らさないと見えないほどの小さな粒だった。雪にも、埃にも見える。それは一粒だけ、ゆらゆらとサツクとクリエの間に浮いていた。

「? サツク、どうしま——」

「――！・ 離れろっ！」

ドンッ、サツクは言葉と同時に、クリエを押しつけた。すると、その場が一瞬白くなった。眩しく輝く光の球体が突如現れ、そしてすぐに消えた。謎の球の大きさは大人ひとりぶん程度の大きさだっただろうか。一瞬であったため正確には解らない。

「……痛つつつつ……。いきなり何ですかサツクさん！」

「……」

「ちよつと、なんか言い訳くらい……え」

派手に尻もちをついたクリエがサツクに食って掛かろうとするも、それは目の前の現実によって遮られた。

消えた白い球体は、その形に沿って、サツクとクリエが立っていた場所の床（らしき場所）を抉っていた。お碗状に地面が綺麗に『消えていた』のだ。

「え」

そしてクリエは、自分の愛用する武器『精霊鷲のフルーレ』を見て、再度唾然とした。先ほどの球体に刀身が触れてしまったため、地面と同じように刃の部分が消失していたのだ。

「やべえな、こいつは」

「サツクさん！・ 斧が！」

同じくして、サツクが背負っていた『ムーンエクリップス』も、球体の攻撃の餌食になっていた。クリエを押し退けた際に自分も十分に逃げる事ができず、斧の刃の一部が球体に接し、結果、カーブ状に削られてしまった。

（攻撃が、理解できなかった）

サツクの能力をもってすれば、一般的な攻撃の属性や、スタイル、タイプや、弱点などの鑑定を行うことができる。しかし、先ほどの現象（攻撃かどうか不明）については、鑑定が出来なかった。それは、単に間に合わないのではない。

サツクにすら『解らなかつた』のだ。彼の身体中から冷や汗が噴き出た。

クリエは攻撃に戦慄し、腰を抜かしていた。

(避け切れるか?)

白い粒が、現象の起点であることは間違いない。しかし、このただっ広い空間で、粉雪ほどの粒を見極めるのは至難の業だ。

「……来るっ!」

「ひいっ!」

小さな白い粒が、サツクの目前に落ちてきていたのが見えた。サツクは『韋駄天足』の力をフルで発揮させ距離を取った。が、

「……最悪だっ!!」

サツクが避けた側にも、その粒が舞っていた。しかも一つや二つではなかったのだ。

ポンツ、ポンツ、ポンツ。

小さな炸裂音とは裏腹に、当たれば瞬時に全てが消し飛ぶ攻撃。それがサツクの周囲で連続して発生した。

「うおおおっ!」

白い球体が現れ、消えていく。『韋駄天足』の超回避効果を全力で発揮させたサツクは、その爆発の僅かな隙間を見極め、飛び込んだ。

一時の静けさが訪れた。

床は多量のクレーターが出来上がっていた。サツクはそれらの間にできた僅かな空間に滑り込み、なんとか窮地を脱することができた。

「サツクさん!」

「クリエ、無事かっ!」

「は、はい、サツクさんだけ狙われていたみたいで……あ……ああ……」

サツクに駆け寄ったクリエの顔が歪んだ。彼女は、サツクの背後から迫る恐怖に、ただただ怯えていた。

まるでこの世の終わりを見たような表情をし、膝は震え、そのまま再度、力なく腰を落として座り込んでしまった。

サツクにも、その理由が何かは分かっていた。背後から今まで受けたことのない雰囲気を感じ取っていたのだ。

先ほどの決死の回避行動で、嫌というほど体は温まったが、今は背

筋が凍る思いである。

彼は意を決して振り向いた。

サツクの鑑定眼には否応なく表示される、その恐怖の正体。

初めて対峙する筈なのに、彼の目にははつきりと、その正体が映し出されていた。

最終話【その3】

(……………これが……………魔王……………なのか?)

丸い球体だった。黒色の、大きさはおおよそ、三階建ての建物くらいか。その黒色は、まるで闇を何倍も濃縮したような、そんな暗黒だった。サツクが造った『暗黒物質』^{ダークマター}以上かもしれない。触れれば……………いや、触れなくとも、それに吸い込まれ、取り込まれるのではと錯覚するほどだ。

そしてその表面は、紫色のガス状のもので覆われていた。人類を散々苦しめ、魔物に活力を与え続けた魔障気だ。魔王が生み出すとされる魔障気は、その球体から止めどなく溢れていたことで、その球体が『魔王そのもの』であることを、サツクとクリエに知らしめた。

呆然自失としていた二人は、さらに驚愕する。

ギョロリ、と、その球の中央から大きな目玉がのぞいたのだ。

「なに……………あれ……………」

魔王の空気に完全に飲まれたクリエは、恐怖と狂気に充てられ、立ち上がることもすら出来なかった。まるで、蛇に睨まれた蛙であった。

「……………伏せろ！ クリエー！」

サツクは、魔王の威圧を振り払い、冷静に『敵』の出方を見ていた。だからこそ、今しがた目玉の中央に、異常なまでの熱量が集まってきたことがわかった。

そして魔王は、目から強烈な熱光線を放った。

発射の瞬間は地を這うも、すぐに光線は立ち上がり、そのままサツクたちを一直線に貫いた。

地面は熱で融解し、一部から炎が上がった。触れずとも床を溶かすほどの熱量であった。

「……………間に合った！」

触れれば骨すら蒸発する熱量の光線を浴びたが、サツクとクリエは生きていた。彼らの服の一部は焦げ、僅かにやけどを負う程度で済んでいた。

サツクを中心に、熱が遮断されていたのだ。

（耐性薬【炎】と、『天下泰平』による光の壁の重ね掛けで、なんとか防げるレベルか……）

サツクの焦りは治まらない。属性攻撃ではあったものの、いままで戦ってきた中でも抜きん出て攻撃力が高かった。

すると、魔王の目玉がパチクリと瞬きをした。先ほどの熱線を放った眼に、次は異なる属性の力が集まっていたのを、サツクは見逃さなかった。

（雷属性?! くっそ！ 調合が間に合わない!）

今度は電撃が放たれた。先ほどの熱線とは異なり、魔王を中心に、無作為に高電圧の落雷を落としてきた。

とつさに、広げた天下泰平にさらに力を込めた。光の壁はさらに厚くなったが、しかし無情にも、サツクは雷の直撃を受けてしまった。

光の壁は粉々に砕け、さらにその衝撃は衰えを知らず、サツクは派手に吹っ飛ばされることになった。

「サツクさん！ 大丈夫ですかっ!」

後方に飛ばされたサツクに気遣いの言葉を掛けつつ、クリエが近づいた。

激しく転倒したものの、サツク自身は殆どケガはない。うまく吹き飛ばされたのが、逆に功を奏したのか。

「……わからねえ」

「ちよつと！ 自分のお体でしょ!」

サツクは、ゆっくりと立ち上がってみた。大したケガはなさそうだが、しかし目下、現状は何も好転していない。

巨大な黒い目玉は、少し離れた場所からサツクたちを見据えていた。

「サツク！ 何か魔王への対抗策はあるんですか!？」

未だに恐怖で体が縮こまってしまっているクリエが、声を絞り出すようにサツクに訊ねた。すると、サツクは渋い顔をし、答えた。

「策は、ある。魔王を倒すために必要な『女神の涙』の、場所が解った。けど……」

魔王に対抗できると伝承されるアイテム『女神の涙』。こぶし大の

大きさの鉱石であり、それは、サックとイザムがそれぞれ所持していた。

サックは、加工前の鉱石として。イザムは、それを加工し鍛えた『勇者の剣「ハルペリオ」』として。

だが、サック追放に至った『魔王城前決戦』にて、勇者の剣は粉々に砕け散った。この世界に残っているのは、サックが持っていた鉱石としてのそれだけだった。

その石は、イザムに引き継がれていたはずだ。

「どこに……まさか？」

先ほどからサックが見つめる目線の先。そこに答えはあった。

「ああ、もう魔王の腹の中だ……すでに『喰われている』」

女神の涙は目の前にあつた。しかしそれは……先にイザムたちが此処に来て、既に魔王に敗れ、捕食されていることを意味していた。

イザムが持っていた『女神の涙』も一緒に取り込まれたということだ。

「そ、そんな……」

クリエは、またしても力なくへたり込んだ。

サックは歯ぎしりした。なんとかイザムたちに合流したかったが、結局間に合うことなく、魔王に倒されていたのだ。悔やんでも悔やみきれない。

そんな彼らをあざ笑うかのように、魔王は浮いたままゆつくりとサックたちに近づいてきていた。

（戦意喪失した俺たちを、食おうつてのか……）

しかし、サックは諦めていなかった。クリエに伝えた『策』を実行できるか、頭の中で考えを巡らせていた。

（腹の中にある『女神の涙』に触れられれば、あるいは……）

「女神様……女神様……」

追い込まれた状況にクリエはただただ、祈りを捧げていた。

「クリエ」

「もう、これしかないんです！　女神様は魔王と勇者の戦いに降臨されたと伝わってます！」

クリエは祈りと共に、光の羽を大きく広げた。姿形を寄せて、女神により早く降臨してもらおうと言う魂胆だろうか。

「女神様……お願いです、私たちを助けて……」

彼女の両手は祈りの印を結んだまま震えていた。眉間にしわを寄せ、強く、強く念じていた。

（クリエの祈りが、女神に届くことはない……）

ボツサが遺した女神の呟きが、サツクの脳裏をよぎる。それが本当であれば、女神が助けに来ることは、まず無い。

「勇者は、魔王にとってご馳走なのだそう。いわば魔王が喰らうデザート。真の勇者ほどその味は甘美となる。私たち勇者は……女神が選んだ、魔王への生贄なのですよ」

（そしてなにより……ボツサの最期の言葉と、『あの内容』が真意なら……）

「……クリエ、時間を稼ぐ。『ちゃんと女神を呼んでくれる』こと、信じてるぜ」

背中越しにクリエに呼びかけ、サツクは魔王の元へ駆け寄った。サツクは、クリエの行動を見守るしかなかった。彼は、クリエのことを信じたのだ。

（クリエの祈りを信じるなら、この戦法で行く!!）

どんなに考えても、魔王の内部に残されている『女神の涙』の奪取方法が見つからない。だからこそサツクは、魔王に『あえて捕食される』ことを念頭に置いた。

激しい魔王の攻撃を避け、防ぎ、掻い潜り……しびれを切らした魔王が、大口を開けてサツクを食らう。その好機を狙った戦い方に挑むことにしたのだった。

（さあ、美味しい勇者が、お前の目の前に飛び込んでいくぜ。しっかりとお口を開けておくれよ!）

最終話【その4】

何度目の攻撃だろうか。

地面が一度に凍てつき、触れたものを瞬時に氷漬けにする。魔王の周囲は再度、一面の銀世界に覆われた。

属性攻撃を行うたびに、魔王の目にその属性の力が集まることに気付いたサツクは、今回も事前に耐性薬〔氷〕を調合し、凍てつく攻撃に耐えた。しかしこの攻撃は床が凍るだけでなく、一定のタイミングで床から巨大な氷柱が生えてくる追撃が発生する。

「やっぱ、一人だけって辛^っいなー！」

何度も攻撃を退いた『韋駄天足』は、既にボロボロだった。さらに、耐性薬の原料となる薬草の在庫は、既に心もとない。

サツクは氷柱を避け、移動をしながら、構えた『羅刹芭蕉扇』を強く扇ぎ巨大な吹雪を巻き起こした。生えた氷柱を砕き、巻き込み、氷の竜巻となって魔王へ向かって進んでいくよう仕掛けたのだ。

竜巻は魔王を巻き込むも、しかし、目を瞑った魔王には対してダメージが入っていないように見えた。表層の魔瘴気は一時薄れるも、またすぐに球体から湧き出て、魔王を覆った。

「……だめだ、何度やっても効いてるかすら判らねえ」

なにより、得意の鑑定能力がいずれも不発に終わってしまった。何をもってしても、魔王の力が鑑定不明だった。

魔王が勇者を欲するのであれば、それを『捕食する』タイミングがあるはずなのだが、それがサツクには判らなかつた。

既に魔王は、イザムとヒメコのふたりを捕食しているはずなのだ。

（……何かを見逃している……？）

魔王が『勇者を食べる』という事であれば、なにかしら食べる所作があるはず。それが、この魔王という存在からは全く感じ取れず、また、行動も見られない。

そしてなにより、サツクは先ほどから、魔王の攻撃に強い違和感を覚えていたのだ。

（……ちくしょう！　ちくしょう！）

その違和感が、サツクの想定通りであれば、今のサツクの作戦は崩れることになる。そして想定通りの場合、非常に残念な結末となる。その可能性から何とか逃れようと、試行錯誤を繰り返しつつ、何度も魔王の攻撃を退いた。しかしどう転がっても、それ以外の道筋は、破滅へ向かうしかなかった。

既にアイテムは底をつきかけ、武器には細かいキズやヒビが目立ち始めた。

『女神は、我々を見ている』

サツクが見つけた、先代勇者が遺した記録。一冊の本を呈したそれは、残念ながら結末は記されておらず、魔王城へ攻め入った以降は白紙だった。

だが巻末には、当時の勇者の一人の直筆が残されていた。書いた人物が思いを込めて記したのだろうか。荒々しくも感情がこもった一文——それが『女神は、我々を見ている』である。

『女神に常に見守られている』という意味合いだと、当初サツクは思っていた。魔王決戦前に、勇者の一人が自身の信仰心を後世に伝えたいと、示した言葉にも思えていたが……。

「……来るっ！」

魔王が大きく瞬きをした。そこに集まる力に、先ほどと異なり属性効果を感じなかった。属性効果を纏わないことから、サツクは『あの攻撃』と断定した。

魔王が見開く目玉から、非常に小さな粒が無数に拡散した。目を凝らさないと見えない白い粒。しかしそれは防御不能の攻撃。

「……もう、ジリ貧だ。手は尽くした」

先ほどから魔王は、いくつかの属性攻撃と『粒』の攻撃をローテーションしていったのだ。そんな単調な攻撃に、精神とアイテムを多く削がれた。

全く先の見えない戦いに、サツクは作戦変更を余儀なくされた。

「……信じてるぜ」

この作戦は、信じていると『不可能』な作戦であったが、彼は信じていたかった。

次の瞬間、彼は大きくジャンプした。靴の力と身体能力も相まって、人間とは思えない跳躍力。そして、彼は、大きなギャンブルにでるのだった。

(これほどまで『信じる』を『信じたくない』とは思ったことは無いぜ) 彼の目線の先には、彼女——肩を震わせ、しかし恐怖に打ち勝とうと動き、光る羽を広げ、俯きつつも強く念じ続けていた——クリエがいた。

「え?」

クリエが跪いている真後ろに、サツクが着地した。彼女の明るく光る羽は、深淵を明るく照らし、暗いこの部屋では良く目立っていた。

「サツクさん! あなた何を……?」

「クリエ、このままでは魔王に勝てない」

「ですから! 私は今、女神様への祈りを……」

するとサツクは頭を振った。ボツサから、女神の意図を聞いている。女神は、魔王に勇者を食べさせたいのだ。女神が助けに来る道理などない。

サツクとクリエの目の前に、白い粒が迫っていた。大量に降り注ぐそれは、まるで粉雪のようだった。

「サツク! 逃げ……逃げないと!」

クリエが祈りを中断し逃げ腰になるも、咄嗟のことで思うように動けなかったようだ。跪いた姿勢からよろけて、サツクの体にしがみついていた。

だが、サツクは動じなかった。魔王の正体不明の攻撃。ボツサが最後に残した言葉。先代からのメッセージ。その他、今までの冒険で得た情報と、そこで生じた矛盾点を重ねると、サツクはひとつの『可能性』を導いていた。

「クリエ、巻き込むことになったらゴメンな」

「な、な、な、な！ 何ふざけたこと言ってるんですか!!」

サツクは手を広げ、大の字で魔王の攻撃に備えた。しかし扇の防御壁を造ることなく、サツクはその攻撃を、全身で受け止めようとしていたのだ。

「来いよ魔王。命を懸けた……大博打だ!」

「わ、私を巻き込むなっ!!!」

魔王が放出した粒はすでに、サツクとクリエの周囲を取り巻いていた。どう足掻いても、避けられる隙間は無い。

それらは、遠くの粒から炸裂が始まった。ポンツ、ポンツ、と、遠くから等間隔で順々に光が爆発し、そして瞬く間に、サツクたちの目の前まで迫っていた。

「だ、だめ……! 食われる! 止まれえっ!!!」

クリエが大声で懇願した。目を瞑り必死になって、攻撃が止まることを願った。

しかしサツクは、微動だにしなかった。迫る攻撃に恐怖こそ感じ、冷や汗を流すも、彼は特に何もせず、ただただ両手を広げて構えていた。

そして光の爆発は、サツクとクリエの目と鼻の先。

ギリギリのところまで止まり……白い粒は、忽然と姿を消したのだった。

最終話【その5】

「……」

「……くっ」

サツクは両手を広げ、仁王立ちのまま、憂いを帯びた顔をしていた。これは『信じていると不可能な作戦』だったのだから。

そしてクリエは、今まで見たことのないほどの渋い顔を覗かせていた。彼女は、サツクの行動の意図を汲み取ったのだ。

先ほどの激しさとは打って変わって、魔王はふわふわと浮いていた。

「そっか。やっぱそういうこと、か」

「……サツクさん！ 危ないじゃないですか！ 私まで喰われたら、どうするんですか！」

いつものあのクリエがそこにいた。童顔に丸眼鏡。チエツク柄のジャンパースカート。赤インナーカラーの金髪。

「……まだ、信じてるからな、新聞屋」

サツクは彼女にそう告げると、再度、魔王に飛びかかった。

すると魔王が動き出した。眼が赤く光り、中央は高熱を帯びた。骨をも溶かす熱線だ。

だが、魔王はそれを打たなかった。いや、打てなかった。

またしてもサツクは仁王立ちで、両手を広げていた。特に防衛行動を取ることもなく、ただただ突っ立っていただけ。しかし、魔王から攻撃が来ることはなかった。

「……くそっ」

サツクは悪態をついた。残念ながら仮説が正しいことが証明されてしまった。

「これは……一体……」

クリエがサツクに問いかけた。サツクはちょうど、魔王とクリエを直線上に並べた位置に陣取って、クリエに背を向けていた。

「……『喰われる』」

「へっ？」

「俺すら鑑定できない正体不明の攻撃を、クリエは喰われると表現した」

白い発光体をばらまく攻撃のことだ。サックがクリエに近づいた際に、彼女は確かに『喰われる』と発言していた。

「そ、それは……なんとなくそうじゃないかな、って」

「こいつが魔王って、いつ気づいた？」

指差した先には、黒い球体。

サックすら、その球体を鑑定する前まで、ラスボスとして『魔王という魔物の長』が玉座とかに鎮座していると考えていた。少なくとも黒い球が、魔王だとは思わない。

「ふ、雰囲気的に……流れるにそうかなと……」

「魔王が攻撃を止めた。クリエを背にしてからな」

白の粒の爆発は、クリエを巻き込まないように働いていた。属性攻撃もサックのみ執拗にターゲットにされていたし、今しがたの熱線はクリエを巻き込む可能性があったためか、発射すらされなかった。

「……女神の……そう、女神様の加護が降りてきたのよー」

「ボツサの当初の目的を思えば、クリエをあの時、生かす意味はない」

クリエが単独行動で、ボツサとイチホの教会に乗り込んだときだ。

クリエの生死に関わらず、サックを挑発できれば良かったのだから、生かしておく必要性を感じられない。

「あれは、私を人質に……」

「ボツサの最期の言葉。ずっと引つ掛かってた。あれは、オレ宛てでなく、クリエに向かってのことだったんだな」

ボツサが残した悪態『あなたはいつも、邪魔をする』。

イチホを倒し、イアールナティカ大浄化術式を止めたサックに対してではなく、サックに話そうとした時に現れた、クリエに向かって言い放っていた言葉だと、今なら理解できる。

「……」

「……」

静けさが、この場を支配した。そんな隙だらけな二人に対しても、魔王は手を出さなかった。サックがクリエに近づきすぎているから

だろうか。

「クリエ」

沈黙は、サツクの口から破られた。彼は彼女に、最後の希望をこめて言葉を紡いだ。

「クリエ。俺はまだ信じてるからな。僅かな望みかも知れないけど」
「……」

しかし、クリエは下を向いた。そして、なにも言い返さなかった。
「クリエ。お願いだ……『メガネを外してくれ』ないか？」

あらゆる鑑定、精神攻撃を防ぐマジックアイテム『オールキャンセラー』。

彼女のトレードマークでもある。常に肌身離さずそれを身に付けていたことで、サツクは彼女の『正体』が掴めていない。

眼鏡を外してくれば、クリエの鑑定ができる。

「……」

「……」

また、二人は押し黙ってしまった。が、この沈黙はクリエの方から破られた。

「……あーあ、もう少しだったのになあ」

彼女は顔を上げ、そして、メガネを外した。

「……信じてたんだぜ」

「あ、そ」

サツクの顔は、怒りと切望、そして落胆の表情にまみれていた。

そんなサツクに、クリエは、あっけらかんとした言葉で返した。

彼女は自らの整った髪の毛を、片手でボサボサと乱した。インナーの赤毛を目立たせ、金髪と混ぜたことで、一気に外観の印象が変わった。

「やっぱちよっと、表に出過ぎたわね。次は気を付けないと」

すると彼女は、にこり、と、いつもの笑顔になった。悪戯が成功したときの、あの顔だ。

そして彼女は、改めて自己紹介を始めたのだった。

「そうです。私が、クリエイター女神ですっ」

最終話【その6】

「いつ頃から、気付いていたの?」

「確証は今の今まで無かった……けど、最初に違和感を覚えたのは、ブ
ロクダートの公園だ。アイスキャンディー食いながら、昔話をしてた
時だよ」

ええー! と、クリエは大げさに驚いた。

「早っ! さすがにそこでは『ボロ』は出していないと思っただけど
なあ?」

『既にシナリオを書いていた』って言って、俺の偽自伝書を見せたら。
その言いぐさが、ずっと気になっていた」

「ウツソ! これのこと!」

するとクリエは、何もない空間から一冊の本を呼び出した。

この空間では、道具師の武器庫能力ストレージすら使用不可のはずなのに、彼
女は易々とそのルールを破った。彼女が本物の女神クリエーターである証左とも
言える。

『勇者で道化師、役立たずで大した力もなく追放させられたけど名声
だけ利用して田舎で薬屋経営したらBクラスの冒険者にも認められ
ず詐欺がバレて破産しました!』

くく道化師アイサックIIベルキッド 認定自伝くく

「今回用意した話シナリオの中でも、自信作なのよ、これ。コメディタッチで描
かれるアイサックの珍道中!」

ぺらぺらと、綴じられた本をめくるクリエ。だが、すぐにその本を
手品のように消した。

「……大人しく引退してれば、こんなゆるスローふわ余生ライフも用意できたのに
ね」

ふわり。と、クリエが空に舞った。まるで重力を感じさせない飛び
方だった。光る翼等は今も必要ないのだろう。彼女はゆっくりと移
動し、そして、魔王の横に付いた。

「今回は試験的に、NPCのAI自由度を最大にしてみたの」

彼女は優しく、魔王に手を触れた。表面は魔瘴気で覆われているの

だが、彼女は全く意に介しなかった。

「そしたら皆で、まあ好き勝手動いてくれちゃつて。用意した道筋修シナリオ正、大変だったわ……けど、おかげで想定以上のデータを造れた」
「データ……だど？」

魔瘴気に体を預け無事な人間を目の当たりにするも、サックはそれ
にたじろぐことなく彼女の言葉に耳を傾けていた。

「いい質問ね」

サックの問いに、クリエはさも嬉しそうに答えた。

「Machine-learned
Artificial intelligence for
the Operation of
Urgency system。」

頭文字をとって、MAOU……魔王システム。私の最高傑作よ」

彼女は『魔王システム』と呼ばれたそれを撫で、そして顔を近づけ、
頬ずりを始めた。その顔は法悦としていた。

「これを完成させるのに、負の感情……特に人間の、死中求活しちゅうきゅうかつの感情
が足らなかったの。リアルこっちでの検体が少なすぎたのよ」

死中求活。『死中に活を求めろ』。つまり、死の間際に迫られながら
も『生きたい』と望む思いのことである。

「その中でも、いうなれば『火事場の馬鹿力』の発現。その条件を魔王
に学習させたかったの……だから『擬似的に』世界構築して、追い込
まれた人類の力を……」

「……疑似的って、どういう意味だよ」

するとサックが口を開き、彼女の言葉を遮った。彼女の言葉の半分
は理解できていなかったが、聞き捨てならない言葉に、彼は口を開い
たのだった。

「そのままの意味よ。疑似的。そうね、分かりやすく言えば……『紛まがい
物』」

クリエは懇切丁寧に、分かりやすい言葉に言い換えた。しかしそれ
は、彼の神経を逆撫でするのに十分だった。

「ぎげんじゃねえっ!!」

「あら、ふざけてないわ。大真面目よ、私」

鬼気迫るサックとは裏腹に、さも当たり前のように、クリエはキョトンとした。

「あなたが勇者として旅立ったのも、その後の追放生活も全部、うそ、偽り、捏造、虚言、仮初め」

「全て、嘘な訳ないだろ！」

「思うのはご自由に。でも、これが真実よ」

だんだんと熱くなるサックに反して、クリエの顔は冷徹なものになっていった。まるで、壊れたゼンマイおもちゃを見つめるような顔だった。

「この世界は、シナリオ私クリエイターが作ったんだもの」

「例え、作られた命であつたとしても……女神の創作物であつたとしてもっ！」

サックは『ムーンエクリプス』を両手で携え、クリエに飛び掛かった。

「勇者としての旅立ち、その後の追放生活も！ サザンカと出会ったことも！ 彼女との約束も！ 別れも！ あの時の額の冷たさも！ 抱いた時の温もりも！ 一緒に食ったパンケーキの味も！ ヒマワリの未来も!!」

斧を握る手に力を込め、振り上げ、斧に全力で力を注いだ。球体の魔王ごと真つ二つせんとするほどの勢いだった。

「全部が全部、てめえの『紛い物』だなんて、言わせねえ!!」

「はい、ざんねーん」

サックの振り下ろした斧は、魔王に触れることすら叶わなかった。サックは能力の解放を試みるも、斧に全く力が行きわたらなかった。

結果、魔王の目玉から発せられた衝撃波がサックを飲み込み、遙か彼方まで吹き飛ばされたのだった。

「わー、飛んだわねえ。おーい、生きてる?」

「……がはっ! ごほっ!」

「おお、流石勇者。丈夫ね。でも……回復できないでしょ? ごめん

なさいね、あたり一面を『アイテム禁止』ルールに変更したわ」

魔王の衝撃波は、サックを易々と地面にたたきつけた。

サックの反撃スキルオートボーションは発動したのだが、いくらボーションを浴びても、サックの傷は癒えなかった。

(回復しない……チート能力つてレベルじゃねえな、クソ女神)

負った怪我は治らなかったが、サックは何とかゆっくり立ち上がった。そして自らの足で、クリエたちに近づいていった。足をくじいたためか、歩くたびに激痛が襲う。

それを見たクリエは、感心した表情とともに、サックに拍手を送った。

「すばらしい！ その力が欲しいの！ 死中求活の馬鹿力！」

クリエは、魔王を連れてサックに近づいた。空中移動という速さを越えた、座標軸を転換させ移動する、瞬間移動の類だった。

「いろいろ、ズルいな、クソ女神」

「女神ですもの……でもね、いまは貴方の力が欲しいわ」データ

クリエが再度、瞬時に移動した。

サックが気がついたときには、魔王の球体の上にちよこんと陣取り、足を組んで座っていた。

「しかし今回は……手を焼かせてくれたわね、特に……」

魔王に腰かけ、女神が微笑む。この世界を構築したという女神は、この世界で発生した『イレギュラー』について語りだした。クリエイター

「ボツサとアイサックあ。よくもまあ、面倒なことをしてくれて……けど、貴重なデータも収集できたわ、ありがとう」

女神は笑顔でサックを見やった。しかしその笑顔は、クリエが冗談を口にしたときに見せる、あの笑顔だった。

最終話【その7】

「ボツサは異常に勘が良かったわね。だから私、教会でのクーデターに侵入したの。でも説得の甲斐なく。仕方ないから彼に『制限』ロックを掛けたわ。人を殺せず、私のことを話せないように、ね」

クリエにとっては、この世界の人間は全て、大切な魔王の食事データなのだ。特に、常に死と隣り合わせだった勇者の情報量は他に抜きんできていた。だからこそ、人類を無下に滅らされることも、勇者が死ぬことも、クリエにとっては痛手だった。

ボツサは、それが判っていた。

「ボツサも、制限の穴を探してかなり四苦八苦してたみたい」

クスクス、と、彼女は笑った。何がおかしいのか、サックには理解できなかった。

「でも、それ以上に想定外を起こしたのは……あんたよ、アイサックⅡベルキッド」

急にクリエの眼光が急に鋭くなった。それは目下のサックに向けられた。

「勇者を追放された、つてのも驚きだけど……それより！　なんで折角準備した『隠しシナリオ』壊すかなあっ！」

アツハツハ！　とクリエは笑った。しかしそれは表面上だけであつた。内心は腸が煮え繰り返るほど怒っていた。

いまのサックなら、彼女の内心を鑑定できる。いや、女神はあえて、鑑定させているのかもしれない。

「隠しシナリオって……どういう意味だよ……」

「文字通りに受け取ってもらって結構よ」

するとクリエは、指を鳴らした。パチンと乾いた音に合わせて、クリエとサック、魔王を囲むように無数のパネルが現れた。一枚一枚は冊子ほどの大きさで、それ自体が明るく光り、暗闇を照らしていた。

いきなり現れたそれに、サックは一瞬身構えるも、目を凝らすとそこには、見慣れた文字と、簡単なイラスト付きのプロット図が示されてあつた。

「魔王城突入後に解放される、隠しシナリオ『ミクドラムの悲劇』は、えーと——、あ、これこれ」

クリエが光るパネルの一枚を指差すと、それは滑るようにサツクの目の前に移動した。

そこにも他と同じように、文字と図が並んでいた。『シナリオ』から始まるそれに目をやると、よく知った人物の名前が記されていた。

クリエがサツクに、そのパネルの説明を始めた。

「野盗に娘を殺された母が、娘を蘇らせんと暴走し、ミクドラム全体を巻き込む悲劇！ それ用に、イチホーイーガスに死せる大魔術師の素質埋め込んだのに……あなたが娘を野党から助けちゃったから、もうメチャクチャ」

すると、サツクに示されていたプロット図に新たに線が引かれ、別に表示された図面に繋がった。

新しい話^{みち}が、示されたのだ。

「これが、女神の『仕込み方』か」

「ええ……そうよ。あ、そうそう!!」

クリエは、なにかを思いついたらしい。するとサツクに示されていたパネルの絵が変わった。

それには『モンスター図鑑』と記され、あのエルダーリッチと化したイチホーイーガスの姿が写し出された。

「ち・な・み・にー」

クリエの意思によるものか、写し出された画像がスライドし、別の絵が表示された。そこには、彼女たちの変わり果てた姿が映し出されていた。

「……くノ一姉妹は、そのミクドラムボス戦で、アンデッド忍者として登場予定だったのよ」

その言葉を聞く前に、サツクは動いていた。『韋駄天足』は効果を失い、単なる派手な靴に成り下がっていたが、そんな事は関係ない。元勇者の身体能力だけを頼りに、彼は高く飛んだ。

鬼気迫る顔。彼は怒りに任せて、クリエに殴りかかっていた。

しかし、彼の拳はクリエに全く届かなかった。魔王が彼と彼女の間

に割って入ってきていた。

「邪魔だあああつ!!」

構わず、サツクはパンチを繰り出すも、魔王の目は衝撃を吸収し、そして、再度衝撃波に巻き込まれた。

「無理よー、道具が使えない環境で、魔王に挑むなんて無謀すぎ。あと、絶対勝てないようにステータス弄ってるからね^^」

先ほど以上に遠くに飛ばされたサツクに、クリエが大きな声で呼びかけた。

ボロ雑巾よろしく吹き飛ばされたサツクは、しかし、まだ立ち上がろうと体を動かし、そして、クリエを睨みつけてきた。

「勝機が皆無なのに、希望を捨てず立ち向かう、か。もつと絶望持つてほしかったのだけど……あんたの性格上、難しそうね」

すると、彼女は目の前に、パネルを呼び出した。シナリオを示していたそれと違いはなく、しかし、殆どが文字で構成されていた。

「そろそろ飽きたわ。せつかくの貴重な勇者^{データ}が壊れちゃう」

小気味よく彼女はパネルをタップしだした。文字を叩くとさらに異なるページへ飛び、そこには名簿のように、数多くの人物の名前が列挙されていた。

「とんとん、つと」

その中から、彼女は彼の名前——『アイサツクⅡベルキッド』を見つけた。

「自由度が高すぎたわね、次回からは、もつと抑えましょ」

名簿に記されている名前の先頭には、全て四角いマークがついていた。彼女はそれ——チェックボックスを押し、チェックマークを付けた。

「クリエ……いや、クソ女神!!」

いつの間にか立ち上がっていたサツクが、遠くからクリエに叫ぶ。しかしクリエは、その言葉に耳を傾けることなく、目下の作業をつづけた。

「まあ、でもあれね……」

クリエは独り言をつづやきながら、パネルの右上に表示されている

『機能停止』ボタンに触れた。

【CAUTION】

指定されたキャラの機能を停止しますか？

『Y/N』

「AI相手だったけど、あんたとの漫談は、結構楽しかったわよ」
にこり。と、クリエは笑った。あの悪戯が成功したときに見せる、
無邪気で残酷なスマイルだ。

そして女神は、「Y」のボタンをタップした。

最終話【その8】

まるで時間が止まっているかのように、サツクは動かなかった。その姿を一瞥すると、クリエは魔王に号令をかけた。

「さて、魔王！ 残さず食べちゃいなさーい」

クリエの命令に呼応して、魔王が瞬きをした。すると、サツクの回りに、あの白い粒子が舞い散り、そして炸裂した。

空間ごと、魔王が対象を捕食する能力だ。動けないサツクは為すすべもなく、光の中に消えていった。

そして一際、辺りに静寂が訪れた。

よしよし、と、クリエは球体を撫でていた。まるで飼い猫をあやすように、ひとしきり魔王を撫で回ったのち、彼女はそこから離れ、光るパネルを展開させた。

「やっぱ、作り直しだなー。勇者のシステムは次も採用。見ててオモロいし。それに、苦難を乗り越えたキャラの情報量は段違いで、効率がいいわー」

ふん♪ ふん♪ と、鼻歌交じりに彼女はパネルをタップしている。すると、そのパネルが突然巨大化した。

魔王の半分ほどの大きさまでに広がったパネルには、大陸全体の地図が表示されていた。

「ほんと、今回は踏んだり蹴ったり……なによ、勇者生存3名って、今までの最低記録じゃん」

ぶつぶつと独り言を吐きながら、彼女はマップを眺めた。赤い点で濃淡が示されており、都市部にそれが集中していたことから、人口分布を表示していると思われる。

「マップは使い回そ……うーん、百年後で設定すると、一週間は掛かるわねー」

また徹夜だわ、などと呟き、彼女は伸びをした。

「と・り・あ・え・ずー」

ほっ、ほっ、と、体をストレッチしつつ、伸びをした手で画面に触れた。すると地図上に、

『魔障気の出力を上げますか？ Y/N』
と表示された。

「今生きてる人たちは、一旦ゼーんぶ……補食させちゃお、つと♪」
ストレッツチついでに腕をうんと伸ばし、彼女はボタンに触れようとした。

『フォン！ フオン！』

そのとき、聞き慣れない音が鳴った。

機械的な音ではあるが、なんとなく不快な感覚を覚えさせる、そんな音だった。

「ポップアップ警告？ 一体なん……」

突然の警告音に、彼女は驚き、そして別のパネルを呼び出し覗き込んだ。

【ERROR】

対象のキャラは存在しません。

「ん？」

エラーが表示されるも、彼女には覚えがなかった。いや、正確には、そんなこと忘れていたのだ。

「あん？ なんじゃこりゃ」

クリエは眉を顰めながら、念のためコードを表示してみた。すると、キャラクター機能停止コードで発生したエラーであることがわかった。

「——えっ」

ミシッ。

バキッ。

バキバキッ。

先の警告音とは全く異なる、物理的に何かが壊れる音が聞こえてきた。

モノが破壊されるといっても、そんなもの、暗黒が広がる空間では凡そ限定される。

そう、いまこの場で存在している物体といえば、魔王システムくらいである。

「……!? ちょっと! どういうこと!?!」

クリエは、別の光の板を取り出しタップした。そこには魔王のステータスと思しきものが記されていた。

ミシミシと、魔王の球体から異音が鳴り響く。その固い物体は歪み始め、軋んできたことが目に見えて判ってきていた。

「……内部から……干渉されている!?!」

クリエが疑いを持った時には、既に手遅れだった。

魔王は、内部から何かしら干渉を受けていたのだ。物理的なものではなく、何者かが、魔王の内側から、魔王のステータスをいじくりまわっていた。

異常なステータス変更を、何回も何回も繰り返され、また、上限を越えた数値を何度も入力されたことから、魔王の球体には、とうとう物理的な亀裂が生じた。

そしてその隙間からから青白い光が一気に漏れ出した。そう思った刹那、

『ばんっつ!!!』

呆気なく、まるで、劣化したゴムボールのように。

黒い球体は、木っ端みじんに爆ぜたのだった。

「うっそ」

「……てめえの好きな『紛い物』じゃなくて残念だったな。これは『現実』だ」

クリエは目を見開き、口を綴じるのを忘れ、ただただ呆けていた。全く想定外の出来事に、頭がついて行っていなかった。

そこには、サククがいた。

前に伸ばした両手は、青白い光を帯びていた。そのポーズのまま、魔王がいた空中から、地面へと落ちていき、そして着地した。

さらに、魔王に吸収されたはずの勇者が二人——英雄の服を着た勇者イザムと、ハイウィッチローブ姿の勇者ヒメコ。

彼らは意識を失っていたが、体には大きなけがは見られず、五体満足の状態で魔王の中から出てきていた。

「おっと、危ねえ」

自由落下してくる彼らを、サツクはとつきに反応して、なんとか受け止めた。大人二人程度であれば、特殊能力が使えなくとも、元々の身体能力が向上しているため問題なく対応できた。

彼は、気を失っているふたりを丁寧に地面に横たえた。呼吸を確認すると、弱弱しくはあるが、しかししっかりと息をしていることが判った。

そしてサツクは、改めてクリエが浮いている方向に体を向けた。

「……」

一方クリエは、バラバラに弾けた魔王システムのかけらを、放心状態で見つめていた。

魔王のステータスをもってすれば、サツクに勝てる要素など無い。まして、女神クリエならではのチートを、魔王には付与していたのだ。どんなダメージを受けても、魔王のHPは減らないように設定していた。

なんでこんなことになったのか。

クリエは、すぐには判らなかつた。しかし、彼女は一旦、目を瞑り冷静に、現実を受け止め、女神クリエとして考えを巡らせた。

「潜在解放……なの？」

道具の限界を引き出す能力だが、使い方を誤ると、限界を超えた道具は壊れ、使い物にならなくなる。

女神が道具師に与えたスキル。

しかし、その力をもって、どうやって魔王を内部から破壊したのか。なぜ魔王のステータスを弄れたのか。

そしてなにより。

何故、『アイサックIIベルキッド』の機能が停止していないのか。

二つの大きな疑問をクリエは抱いたが、そのうち最初のものは、すぐに解決した。

魔王破壊に至った、全ての回答が詰まった一言を、サツク自ら口に

出したのだった。

「魔王は、クリエイター女神のツール道具なんだろう？　そして、俺はアイテムマスター道具師……それが答えだ」

最終話【その9】

「本当に、気に入らない。ムカツク」

女神は汚い言葉を吐き捨てた。

丹精込めて築き上げた魔王システムが壊されたのだ。しかもその直接の原因は、女神が作った人間によって引き起こされたのだ。怒りが込み上げないわけがない。

しかしクリエは大きく深呼吸をして、心を落ち着かせようと試みた。

（折角の組み上げは無駄になってけど……魔王本体のバックアップは、取ってある）

だから、そんなに怒ることもない。

「けどね、あなたが嫌い。いつも、わたしの想定の一つ上をいく。なんでもそんな動くの。馬鹿なの？ ねえ、いくらフリー行動っていつても、限度があるでしょ!? 私の道シナリオから出るな！ 創造主クリエイターの想定を越えるな！ この、クソNPC！」

結局、クリエは怒りを抑えられることなく表にさらけ出した。

そんなクリエをみていたサツクも、怒りを露にしていた。拳は強く握られ、眉間には深い皺が刻まれ、女神を睨み付けていた。

そして彼は、歩み出した。

ゆっくり、しかし着実に、一步一步。

クリエに近づいていった。

その動きを見て、クリエは空間に漂う光る板を一枚引き寄せ、タツプした。先程と同じ名簿が並んでいた。

（アイザックは死んだ、と、口々に言っていたのは……そういうことか）

彼がアイザック呼ばわりされると、事あるごとに言い返していた言葉の真意を、クリエは理解した。名簿には、クリエが設定した覚えのないキャラ名『サツクⅡリンガダルト』が載っていたのだ。

「勝手に……改名してんじゃねえよ!! 私に作られた玩具おもちゃのクセによ!

クリエの怒りは有頂天だった。童顔は歪み、目は充血。唾をまき散らしながら恫喝しながら、彼女はパネルに示された、その男の名前をチエックして、機能停止をタップした。

だが、彼女の思惑は大きく外れることになる。

スタスタ。

「……は？」

彼の歩みは止まらなかった。真つすぐに、迷いなく女神に近づいていた。

『フォン！』

そして、クリエの持つパネルから警告音が鳴り、つい先刻と全く同じ画面が表示されたのだ。

【ERROR】

対象のキャラは存在しません。

「お前、誰だよ！　なんでだよ！　何者なんだよ！」

クリエは怒りとともに、得体のしれないものへの恐怖感に取り込まれていた。

創造主が想定していないことが一度に起こりすぎている。しかも、たった一人の人物キャラクターの手によつて。

じりじりと近寄るサックを見据えると、クリエは彼の違和感に気が付いた。彼は、右手を自分の胸に押し当て、そこからは青白い光が漏れていた。『道具にしか使えない』というルールのそのスキル、潜在解放を、サックは自分自身に向けて使用していた。

「魔王と同様に、俺たちはお前の道具ツールに過ぎないんだろ？　試してみたら、ピンゴだ。ステータス改変させまくってもらっているぜ」

彼の力は道具の潜在解放。道具に眠る力を、例外ルールで引き出す能力。

「自分自身に使うことに、正直悩んだ。もし効果が出てしまったら、それは自分が女神の道具であることを認めざるを得ないから……けど」

彼は右手を胸から外し、改めて強く握り直した。

「これでためえをぶん殴れるなら、安いもんだ」

サツク……いや、『彼』は、クリエに向かって走り出した。青白い光は、いまや彼の全身を包み込んでいた。それによるステータス改変は、攻撃や防御の枠を超え、名前までもがバグって読めなくなっていた。

（自分自身で能力プログラムを書き換え、改質？ いや、ルール改竄？ 枠組みを崩したのか？ 女神しか触れない不可侵領域に踏み込んでいる――

――こいつはもう、私の作ったキャラでも、ノイズやバグでもない！）

女神は、この世界を作った創造主として一つの結論に至った。

（こいつは――コンピュータウェアウイルスだ。環境に沿って自己進化する、一番厄介な奴タイプ！）

「く、く、く、来るなっ!!」

女神の顔は恐怖でひきつった。しかしそれは、彼の決死の剣幕おののに慄いたのではない。自分が組み上げた世界という籠の中で、その世界を壊すウイルスが自然発生してしまったことに対してであった。

（早く……コイツを駆除しないと!!）

それには、まずは迫ってくる『彼』の動きを止める必要がある。

女神は、目の前に光の壁を展開した。それは幾重にも重なり、束になつてクリエと彼の間には障害物として現れた。

女神の作った世界では、この壁を通過できるものは存在しない。その理ルールに定められている。しかし、それは無意味だった。

「道具師が道具の力を解放して、負ける訳ねえだろ！」

彼は、そこに壁があることすら感じさせない動きですり抜けていった。全くといっていいほど、干渉を受けていなかった。

彼自身が改編され、女神が作ったルールから逸脱していたのだ。

「わ、女神を消して、この世界を支配する気か!! 世界の運命を担う管理者めがみが居なくなれば、その瞬間、世界は消去デリートされるぞー！」

彼女は彼に説得を試みていた。データを壊す存在に話し掛けるというのも、おかしな事であるが、元は彼女が組み上げたNPCであり、いまだ感情は見え隠れする。少しでも話が通じれば……問い掛けに

応じてくれれば、マルウェア用のキラースフトを準備する時間が稼げる。

しかしそんな思惑は通用しなかった。

感情があるが故、彼には、彼女の願いに答える義務も義理も道理も無いことが判っていた。

「支配？ 興味ねえよ。世界の命運？ なんとかなんだろう」

彼は、女神の目と鼻の先で止まった。小柄なクリエでは、彼の表情を伺うには顔を上げるしかなかった。

女神は顔面蒼白で、引きつり、怖気づいていた。噛み合わせた歯がちがちと鳴っていた。

そんな彼女の様相などいざ知らず。彼は腰をしっかり落とし、震える拳に力を込めた。

「……復讐を決意をしたあと、いろんな出会いと別れがあって、さらに女神への恨みつらみは積もっていった。けど、いざ女神と対峙してみると……意外と、思うことは一つだけなことに、俺も驚いている」

そして、彼女の顔面中央を目掛けて真つすぐに、強く握った拳を突き出した。

「俺はただ、女神をぶん殴りたかっただけなんだ、つてな!!」

彼の……サックの渾身のグーパンチが、クリエの顔面に直撃した。

最終話【その10】

彼女の体重は、特に修正などしていなかったため、クリエの時のままであった。

一般の大人よりも軽いため、彼の全力パンチを受けた事で異常な距離を吹っ飛ばされた。

彼女が地面に叩きつけられたことを確認した刹那、彼の体に異常が生じた。

「あ……」

何が崩壊しているのか、何が狂っているのか。何が正確なのか。いじくった本人にすら正しい情報がわからなくなっていた。そのためか、体内にステータスの矛盾が生じたことで、結果、彼の体の機能がフリーズを起こしたのだった。

「……やっぱり、自分にしちや駄目なやつだったか」

彼はゆっくりと膝をついた。顔にはぐっしりと冷や汗をうかべ、頭を項垂れた格好のままうつぶせに倒れたのだった。

彼と、イザム、ヒメコ、そして殴り飛ばされたクリエ。皆そろって、沈黙した。

しばしの静寂が、魔王城の中を支配した。

「……んもう！ さいつあく!!!」

彼女が急に起き上がった。顔に彼の決死の一撃を受け、ど派手に吹き飛ばされているにも関わらず、立った彼女の顔には擦り傷すら無く、いつもの童顔を保ち、チェック柄の衣服には汚れ一つ付いていなかった。

だとすると何が最悪なのか。

「マルウエアキラーが間に合った……ってわけでもない。てーことは、自己崩壊か。自壊型のウイルスだったのね」

彼女が両手を広げて掌をかざすと、無数の光のパネルが展開された。それぞれには別の文章が記されているのだが、そのほとんどは赤

を基調とした太黒字の言葉で潰されていた。

【CAUTION!】

不明なエラーが検出されました

これに併せて、それらのパネルから不快な鳴動音が響いた。いわゆるエラーコードに対する警告音であった。

「ああん!! 五月蠅い! わかつてる!」

彼女は、『アラーム』をタップし、全ての音量をオフにした。

「ほっつんと、最悪。やっぱ全部作り直そ」

多少落ち着きを取り戻したのか、今度は唸るように、口から不満が漏れていた。

「まずは、魔王を復活させて、と」

彼女は改めて、パネルの一つを引き寄せて画面をタップした。例に漏れず、そのパネルにも警告文が出ていたが、右上の×印を押してそれを閉じてしまっていた。

「バックアップって大切よね。想定外が起こっても、なんとかなる……あれ?」

彼女は、サーバー上に準備したバックアップフォルダに手をかけていた。アクセスには管理者権限に加えて、物理パスワード、指紋認証、網膜認証が必要になる徹底ぶりだったのだが。

「なんか……軽くない?」

何度も世界と歴史を巡り、数多の人間^{データ}を飲み込み、非常時感情制御プログラムとして完成の域に達した魔王のコピーが、そこに眠っているはずだった。

誰も入ることなどできない領域のはずなのに。魔王のデータが一部、なぜか欠損していた。

「ちよ……まさか!」

彼女の背中に悪寒が走る。冷や汗が止まらない。そして、彼女が他のシステムに目をやると、それらにも違和感が見られた。既に他のシステムも、何かに侵され始めていた。

「まって……まってよ！」

彼女は流れ動くパネルに目を通す。そこで初めて、『彼』に侵入されていることに気が付いた。

「世界という範疇を越え、彼女の不可侵領域にまで、彼の因子が入り込んでいた。」

先ほどから鳴っていた警告音は、現在進行形で異常が発生していることを示していた。

「どこから入った！ 最悪だ！ とまれ！ とまれ!!」

彼女は全く気付かなかったのだ。

顔を強打された際、彼女はVRゴーグルを付けていた。顔面パネルを受け吹き飛ばされた際には、臨場感あふれるアトラクションを味わっていた。

その時、彼は仕込んでいた。十分な理解はできていなかったが、彼はこう思っていた。

（世界を構築したのが女神。でも、さつきから光るパネルに依存している。だったら、このパネルの大元があるはず。その道具に潜在解放ツール ウエイクアップが出来れば……）

彼女を殴り飛ばした瞬間、彼が感じた違和感。彼女は頭に『何か装着している』。

だから彼は、その何かに対して、能力を発動させていたのだった。

不運にもゴーグルは、メインコンピュータとアクセスしていた。自己進化かつ、自己環境適応機能が付いたウイルスは、コンピュータの中でいち早く自己進化を遂げ、データの破壊を繰り返した。

そして瞬く間に、管理者権限フォルダを見つけだし攻撃を仕掛けていたのだった。

「ねえー。 お願い神様！ 止めて！ 止めて!!!」

彼女はとうとう、神頼みを始めていた。非科学的な事ではあるが、今の彼女には其れしかできなかつた。

対マルウェア用のキラースソフトも、あまりに早すぎる自己進化型ウイルスには間に合わず。逆に攻撃を受けて破壊されていた。

宙に浮く光のパネルに示された警告が、みるみるうちに消えてい

く。しかしこれは解決されたためではない。内部のデータごと消去されたのだ。

パネルはその後、光を失い地面に落下した。大量に展開されていたパネルは、そのほとんどが機能を失っていった。

そして攻撃は、基盤の保存領域にも達していた。物理保存していたデータも例外なく侵され、消されていった。

「……は……はは……」

彼女は膝をついた。実際にも膝を付き、そして、ゴーグルを付けたまま天を仰いでいた。

アバターも全く同じ格好になっていた。

茫然自失という言葉がこれほど似合う状態はないだろう。目には涙をため、口からはよだれがだらしなく垂れていた。

「わたしの7年……人生を賭けた……集大成が……」

彼女の目の前に広がる、コンピュータの中の情報は、全て虫食い状態になっていた。魔王システムと呼ばれたデータも、バックアップ含めて消去され、この世界を作るために用いられた制作ソフトや、使用したツール、パーツ情報、キャラアルゴリズムもすべて、失った。

再度、静寂が暗闇に訪れた。

闇が幾星霜の時間を飲み込んでいるのではと錯覚するほど長い時間、誰も何も、音も発せず、動きすらなかった。

そしてその沈黙は、再度、彼女から破られた。

「……やり直せる……私はまだ！ やり直せる！」

彼女は立ち上がった。全てを失ったはずだが、彼女の信念はそんなことで折れることは無かった。

「物理バックアップ……外付けHDDで一部だけ、2年前にとつたデータがある！ 私一人で、ここまで出来たんだ！ またやり直せる！ 私の体がある限り！」

彼女は声色高らかに笑った。アツはっはっはと、天を向き笑っていた。

しかし、彼女の悲劇は終わらなかった。サツクが仕込んだ異変は、まだ続いていたのだ。

彼女は突然、笑うのを止め、急に辺りをキョロキョロし始めた。見ている、というより、何かを『嗅いでいる』ようだった。

「あれ？ 焦げくさ……！ え、え、え、えウソ!!!」

すると、彼女はまるで、大きな帽子を取ろうとする動きをみせた。こちらの世界では彼女は何も被っていないため、些か滑稽な動きだったが、しかし、形相や所作は必死そのものだ。

「まって漏電?! 電圧ユニットをいじりすぎた! なんて負荷が掛かってるの?! ……なんでゴータル取れないの!! ばか! 馬鹿!!!」
まるで道化師がダンスを踊っているような。そんなコミカルな動きにも見えてしまっていた。彼女にとっては喜劇ではなく、悲劇そのものである。

「火が……火がつ! いやだ! 熱い! パパ! やだ! 助けて! たs」

ぶつん。

消えた。

そこには元から何もなかったかのレベルで、何も残さず彼女は急に消滅したのだった。

唯一残った痕跡は、光るパネルが一枚だけ。

先のウイルス攻撃を何とか退けたそれは、ふわふわと浮いていた。その脇には、3人が倒れていた。

そのうち2人は、僅かに息をしていた。しばらくすれば息を吹き返すかもしれない。

残りの一人は、状態は不明だった。

すると、残った光のパネルから警告音が鳴り響いた。

【CAUTION】

管理者をロストしました
セキュリティレベルが非常に危険な状態です
ワールドの消去の準備を始めます

どうやらこの最後のパネルは、この世界そのものの管理を担っているようだ。しかし、管理者……女神が消えた今、この世界自体を取り消そうと稼働し始めていた。

何度も警報が鳴動する。

しかし、この世界の住人は、このパネルの操作方法は判らないだろうし、ましてや、管理者という概念すら、理解ができないだろう。

このツールを止められるのは、誰もいない。

……ただ、一人を除いて。

【CAUTION】

新たに管理者を設定しますか？

Y/N

最終話【エピローグ】

「よく頑張ったな、三ヶ月つとこだ、おめでとう」
聴診器を置きながら、俺は目の前の夫婦に伝えた。

二人は、待ち焦がれた吉報に心震わせ、抱き合い、そして涙した。
「ありがとう、サツク」

「ありがとう！」

「俺は診ただけさ。しかしお前らも、わざわざこんな田舎の診療所にまで来るなんて、物好きだな」

イザムとヒメコ夫妻は、首都ビルガドに住居を構えている。首都あそこながらもつと医療の設備は充実しているし、診療所の数も多い。

それなのに、労してこんな辺境の診療所に来る理由など……一つくらいしか思いつかない。

「そりやお前に、まず最初に報告したかったからな！」

イザムは、当時と変わらない謎の魅力と自信を秘めた笑顔をみせつけてきた。

勇者してた当時は、この彼のカラ元気に、文字通り何度も勇気づけられたことを思い出した。

「頑張ったな……もう4年前、か」

俺は、幸せの絶頂にいる夫妻に、再度微笑みかけた。

勇者時代の無理が祟って、ヒメコの体はもう、妊娠は望めないと思われるわれていた。しかし、奇跡的に新たな命を授かることができたのだ。お世辞無しに俺も、自分自身のことのように嬉しかった。

四年前。

魔王は、滅んだ。

……というか、気づいたら消失していた。

魔王の消失とともに、そこにあった魔王城も併せて、全て消え去った。

俺は荒野のど真ん中で、気を失って倒れていたのだという。

先にイザムとヒメコが目を覚まし、彼らが俺を見つけ、そして叩き

起こしてくれた。

消えた魔王。そして魔王城。

驚くべきは、魔王城が消失したことで現れた、新たな大地だ。

魔王城の後ろには、果てしなく続く荒野があつた。地平線が望めて、遙か先に目をやるも、しかし何も見えなかつた。

グレートフロンティア
「大開拓期の始まり、か」

突如現れた広大な土地。当初は、魔王が訳あつて封じていたとされ忌避されていたが、1年も満たないうちに、無数の冒険者や、また国家権力が介入し始めた。

新たに開かれた未開の土地——つまりは、だれの所有物でもない大地なのだ。こぞつて人が集まり、我先にと未開の辺境地へ探求に向かうのは自然の流れである。

（現れた広大な土地——今まで存在していた土地の、ざっと50万倍の広さを持つ更地だ。今の人類には手に余る。『世界の果て』にたどり着くことすら、不可能だろうな）

しかしながら、それにもなう小競り合い……で済めば良いが。そんな争いも、最近は激しくなってきたと聞く。

冒険者同士の争いに加え、他国家間のにらみ合いも続いていた。事が大きくなるなら、願うばかりだ。

「この子が大きくなるころには……いざごぎは終わっているかしら」
ヒメコが、新たな命を撫でながら呟いた。イザムは後ろから抱き締め、そして彼女とキスをした。

未来は、誰にも分からない。

そして、誰も操作できない。

されてはいけない。

してはいけない。

4年前、オレが心に決めたことでもある。

未来が明るくとも暗くとも。

オレたち
人類は必ず前に進み、そしてそれが道になる。

『コン、コン』

そんな考えをめぐっていると、軽いノックと共に、診察室（といっ

ても、一軒家の一室を改装したものだが）の扉が開いた。

「……おちゃ、どーぞ!!」

明るい女性の声が診察室の中に響いた。彼女は、たどたどしい手つきで、お盆に人数分のお茶を汲んできていた。

診察テーブルに、彼女はお盆をゆつくりと置いた。多少お茶は波打ったが、いずれも零れることはなかった。

「ありがとう、カメラリアちゃん。またお手伝い、上手になったわね」

ヒメコが、カメラリアの頭を撫でる。だがカメラリアの身長は、既にヒメコの身長を越えていた。ヒメコの身長が小ぶりなこともあるが、しかし、ヒメコに撫でられた彼女はまるで、子供のように照れ、そして喜んだ。

「てへー……ねえねえ、お腹に、あかちゃんいるの?」

カメラリアは、妊婦に興味津々であった。好奇心だけで行動してしまう彼女の心は、まだ幼児レベルだ。

カメラリアは、オレの娘だ。正式な年齢は、今年で15になるはずである。

第2成長期に一気に身長が延び、同年代の女性よりも身長は高くなった。体つきも大人の女性と遜色なく、そして傍から見れば、非常に美人である（親バカではない）。

しかし、その体つきに似合わず、喋りや動きは未だ5歳児と変わらない。いや、やっと5歳児レベルに育ってくれた。

彼女が11歳の時、オレは、彼女の10年分の記憶を抹消させた。苦渋の決断だった。少しでも記憶が残っていたら、それを引き金にトラウマをフラッシュバックする危険性があったのだ。

「……いつか、本当の^{むかし}ことを話すのか?」

「いや、墓まで持っていく」

カメラリアが淹れたお茶をすすりながらイザムが聞いてきたが、オレは即答した。彼女は今、『カメラリアIIリンガダルト』という名前で、新たな人生を歩み始めている。

「……ねえ、カメラリアちゃんは私が見ているわ。積もる話もあるでしょうし、お外で話してくれば?」

イザムとオレは、ヒメコのお言葉に甘え、日が当たるデツキに出た。厳しい冬を越し、今は春真っ盛りだ。暖かな日差しが俺たちを迎えてくれた。

「冒険は再開するのか？ 新聞に『イザムが復活か？』って記事が出たぞ」

「馬鹿言え、そんな嘘記事を信じるな。ヒメコのこともあるし、首都で静かに隠居生活さ。お前は？」

「おれも、もう冒険は懲り懲りだ」

デツキの柵に体重を預け、オレたちは昔話に華を咲かせていた。

イザムとヒメコは、魔王討伐の名誉と多額の報酬を受け取った。それを元手に、彼らは首都の郊外で静かに暮らしている。

そして首都の中央広場には一昨年に、『六勇者の像』が設けられた。人類が魔王に打ち勝った記憶として、未来永劫称えられるだろう。

……一方オレは、王様曰く『アイサクは追放された身。報酬は与えられぬ！』とのことで、無報酬無名誉のタダ働きとなってしまった。

銅像からもハブられてる。あの新聞記者の記事で、大々的に『勇者道化師 ベルキッド追放！』として名を馳せてしまったのが不味かったようだ。

真相を知らない国民が、オレの銅像を建てるのに大反対。結局、国側が折れて『六勇者』になってしまった。

……ボツサの裏切りは直隠しひたにされ、彼すらも英雄扱いなのに、である。

あのクソ女神。最後の最後にオレを貶めていきやがった。

さすがに見かねたイザムが抗議して、報酬については幾分頂戴できた。しかし彼らほどとはいえず、こうやって都心から離れた田舎で、細々と医者をやっている。

それでも、勇者の時に培ったスキルの一部が使えるため、生活には困窮してない。

むしろ、このスロークライフをエンジョイできている。

「……あ、そうだ忘れてた」

イザムが、懐から一枚の封書を取り出した。

封印には見たことのある紋様。

あのビルガドで世話になった、ジャクレイの家紋だった。

オレは、なんとなく『嫌な予感』を覚えながら封を開けた。

「……何かの冗談か？」

「いや、マジ話だ」

封書には、ジャクレイからの簡素なメッセージと、一枚の写真が入っていた。そこには、白いスーツに身を包んだ白髭のオッサンと、よく見知った若い女性——こちらも白い花嫁衣装に身を包み、頬を赤らめている人物が並んでいた。

長い金髪にぷつくらした唇。凜とした青い瞳が夢見るのは、華やかな新婚生活か。

笑顔のナツカノワールがそこにいた。

「……いやいやいやいやいやいやいやいやいや」

「正しいリアクションだな」

「ここ4年で一番の衝撃なんだが。ジャクレイとナツカがこんな関係になる未来なんて読める訳ねえ。それにジャクレイ、4人目の妻だぞ？」

「……リオ総大将は来月、5人目の夫と挙式を上げるらしいぜ」

「……いやいやいやいやいやいやいやいやいや」

なんなん？

この世界を、ジャクレイとリオの姉弟の子孫たちで埋め尽くす気なのか？

最後の最後まで、彼らの底無しバイタルには度肝を抜かれる……。

日はまだ高かったが、イザムたちは用事があるとかで、早めに帰路に着いた。

といっても、時限式の転送装置ポータルゲートを使うので、移動の時間など殆ど無いに等しいが。

なんでも、夕方には防衛大臣との謁見があるとのこと。隠居生活と

いっても、未だに『元勇者』の肩書きは強く、多くの人たちが彼を頼っている。国の要人からも引っぱりだこで、引退済みといいながらも結構大変らしい。

最後にそんな愚痴を吐きつつ、彼らは帰っていった。

イザムが気を許して愚痴を吐いてくれるのは、昔は、幼馴染のオレだけだった。今は、ヒメコという相思相愛のパートナーがいる。

住まいも離れているし、互いに子供を見るようになれば、イザムと語らう時間も短くなっていくだろう。

(ちよつと、寂しいものだな)

そんなことを思いながら、彼らが転送装置ゲートに消えていくのを見送った。

「さて、と」

おれは自宅に踵を返し、本日残った家事に従事した。

部屋の掃除をしようかと箒に手を伸ばすと、

「手伝う!!」

カメラリアが先に手を出し、箒を半ば無理矢理奪い取った。5歳児なりに掃除の真似事を始めたが、振るう箒は如何せん、埃を巻き上げてしまっていた。

だが俺は、特に叱ることなく。彼女の行動を見守った。自分自身で違和感を覚えてくれるまで黙っていることにした。

父親のやることを真似したがる年頃で、やり方はめっちゃくちゃだ。しかしそこから学べることは非常に多い。

そんな彼女をぼんやり眺めつつ、診察台のカルテを整理している
と、それはやってきた。

『フォン！ フォン！』

オレの頭にだけ響く、不快な警告音。

4年経っても未だに慣れないものだ。

「……お仕事ですか？」

だがカメラリアは、オレの異変にいち早く気づき、心配そうな顔で見つめてきた。

この子は普通の子供に比べ、非常に勘が鋭い。体が、昔の感覚を忘

れていないのかもしれない。

「ああ……今日もついて来るか？」

「いいの?! うん!」

するとカメラリアは喜び勇んで、大急ぎで箒を片付け、オレの手をとった。

「にへへー」

へらへらと笑うカメラリアに微笑みかけ、

「行くぞ」

オレは、手をかざして転送術ゲートを開いた。

最終話【エピソード2】

そこを覗けば、底は無し。

ひとたびそれに落ちれば、ただただ落ち続ける。

「見事に割れてるな……もう少し街に近かったら危なかった」

周囲をうっそうとした森に囲まれた場所で、それを見つけた。

ハクノ区の郊外の森は良質な狩り場として、レンジャーや狩人が多く出入りする。そのため早急な復旧が必要だ。

この『裂け目』に人が取り込まれたら、まず生きて帰ることはできない。

昨日の荒天で、崖の一部が地滑りを起こして崩落していたのだ。それまで草木や岩石、他のパーツに隠されていた場所——地面と地面の境目に、それは現れていた。

「こういう細かいところの作り込みが、ホント甘すぎんだよな……」

オレは、目の前に光のパネルを呼び出した。光り輝く画面に描かれた図形の中から、その場所に近い『岩』と『地面』のパーツを選び出した。

「よっと、よし嵌った」

それらのパーツを指でスワイプし、欠損個所に落とし込んだ。あとはテクスチャを伸ばし、境界面が完全に繋がるよう、伸縮を繰り返した。

穴は完全に埋まった。『データの奈落』とも言えるその隙間が、ちゃんと埋まっているか、実際にオレは体を擦り付けてみた。

服は土で汚れるも、そこから『すり抜ける』『落ちる』といったことは発生しなかった。

「まだまだ、バグ修正フィックスが終わる気がしねえ」

オレは4年前。どうやら女神を倒してしまったらしい。

女神を失った世界は、崩壊のカウントダウンを始めていた。これを止めるには、誰かが新たな『管理者』になるしかなかったのだ。世界を制御する道具ツールを理解できる誰かが……つまり、適任は一人しかいなかった。

承認ボタンを押したその刹那、頭に流れ込む世界のルールと構成。そしてそれらを自在に操作する術^{すべ}。

結果的に、オレは思い掛けず、世界を意のままに扱うことができる。「チートツール」を手にするようになった。

この力を使えば、不可能なことなどない。

自由に大地を隆起させ、海を干上がらせることも。

人間の思考を操ることもできる。金も名誉も思いのままだ。

人の命も、指一本で支配できる。生かすも殺すも、新たに命をつくるのも、人間を消失させるのも、片手間で出来てしまう。

その気になれば、亡くなった人を蘇らせることも可能だ。当時の記憶は残っているため、それをコピーするだけだ。

魔物に殺された命も、共に戦った勇者たちも、滅んだ街の人間も。

そして……彼女を現世に呼び戻すことも。

(女神の力……それを使わない愚か者め、なんて思われるかもだけど……)

けど、オレはその力を自分の利益に使うことは無い。

こうやって、世界に残る『バグ』を修正するためだけに留めている。

過去は、もう過ぎたのだ。

世界は、未来に向かって進んでいる。

未来は、今を生きる人々の手で作っていくべきだ。

もう、女神が用意した道筋^{シナリオ}など存在しないのだから。

「ねーおとーさんー！」

ちよつと感傷的になつてしまったオレに、カメラアが声をかけた。僅かに目を話していた隙に、彼女は崖を上り、何かと戯れていたよ。うだ。

「みてみて！ 狩ったよ！ 今夜は焼き肉だね！」

「……うーん……」

オレは頭を抱えてしまった。

そこには、野生^{ワイルド}のイノシシ^{ドボア}がいた、いや、『あつた』が正しい文法か。それは綺麗に頸動脈を裂かれ、地面は血で濡れていた。しかし、サ

バイバル用のナイフを携えたカメラアは、返り血すら浴びていなかった。

……うーん。

記憶は消しているのは確かなのだが、いわゆる、体が覚えているよ
うなのだ。

日常生活の中でもその傾向はみられ、咄嗟の際に出る動きは、暗殺
者のそれだった。

(5歳の動きじゃないんだよ……困ったなあ)

ふと、光のパネルを見やった。

管理者権限を使えば、記憶操作に行動制限も容易に可能だ。性格や
年齢でさえ変更することもできる。

……いやいやいやいやいや。

ついさつき、使わないと決意したやん、自分。

おれは頭を振り、邪な考えを消し去った。

これを使うのは、本当に最後の手段。

手に終えないレベルで問題になるようなら……おいおい、ね。

「さ、帰ろうかカメラア」

そんな事を思いながら、オレはその野生のイノシシを転送させた。
誤解のないように説明するが、これは管理者能力ではなく、道具師も
とい荷物持ちの拡充収納術である。今は自宅の地下倉庫に繋げてい
る。

「うーん……」

近くの沢で手を洗っていた彼女は、帰宅するのに不満のようだ。折
角の遠出(転送術で一瞬だが)なので、彼女はどこかで遊びたいといっ
たところか。

現在地は、ビルガドのハクノ区にほど近い。ここから徒歩で森を抜
けても、街の入り口まで30分もかからないだろう。

そんなことを考えていると、オレも、ジャクレイに挨拶してやろう
かと思いはじめた。

急に現れたら、奴はどんな顔をするだろう。新婚ホヤホヤな場所
に、あえて土足で邪魔するのも悪くない。

「そうだな、街に遊びに行くか！」

「……うん！」

カメラリアは明るい声で返事をし、太陽のような笑顔を見せた。成長したカメラリアの笑顔は、時折、彼女の顔と重なるときがある。

傾き始めた太陽の光を頼りに方角を定め、オレは彼女の手を取り歩み始めた。

能力を使わず、一步一步、しっかりと地面に足を付け、踏みしめ、確実に前に進み始めた。

「そういえば、お腹空いたな」

「うん、わたし、お腹ペコペコだよ！」

昼飯のタイミングを逃していたことを思い出した。来客対応と緊急警報で、すっかり忘れていたのだ。

頬を膨らましご立腹な彼女を宥めながら街に近づく。着いたらまず、遅い昼食を頂こう。

「カメラリア、何か食べたいものあるか？」

今日は彼女のリクエストを優先しよう。意見を振られた彼女は「いいの!？」と喜び、うーん、と悩み始めた。が、答えはすぐに返ってきた。

カメラリアが最高の笑顔で出した提案に、オレも満面の笑みで答えたのだった。

「んとな……おっきいパフエと、あとパンケーキがいい!!」

~~~~~  
F i n ~~~~~



【?????????】

【??】

『……次のニユースです。世界的に蔓延したコンピューターウイルス『アイサック』の猛威が止まりません』

抑揚の無いAI音声のニユースキャスターが、同じくAIが書いたニユースを読み上げる。

『……これにより大統領府が、緊急の休戦宣言を発令しました。ウイルス攻撃により銀行口座が凍結されたことで、事実上、軍資金が断たれたためと思われまます』

『……与野党最大候補の機密メールが流出しました。いわゆる裏金作りに使われていた可能性があるとして……』

『……飛行機が何らかの異常を感知し、緊急着陸……乗客3人が頭を打つなどで……なおこの3人は指名手配を受けており……緊急着陸はウイルスによる影響……』

……………

1 : [DenBEY] ID : EKEmgNmtu7

アイサックウイルスヤバすぎ。

的確にヤベーところ撃ち抜いてる

2 : [ふおい] ID : tC879ad99J

誰かが操作してんだろ？

3 : [一平] ID : UcssLQcp8X

いや、自己進化プログラム仕込まれてるって解析済み。

4 : [まるす★しかく] ID : QXOHdsdVL

アイサック ↓ I s a c r i f i c e d ↓ 人身供物ウイ

ルスとはまあ、すごい名前。

侵入されると、AI自壊するんだっけ？

5 : [DenBEY] ID : EKEmgNmtu7  
特定のAIだけね。なんでか、悪人にしか作用しないwww  
6 : [オレンジオイル] ID : BZ7lvATVRr  
製作者判明ってマ?

7 : [DenBEY] ID : EKEmgNmtu7  
ほぼ確。

昨年事故で入院したクリエちゃん。

8 : [富士二鷹] ID : 86wYhGcy4k  
クリエちゃんって犯罪者でしょ?!

9 : [ふおい] ID : tC879ad99J  
→ おまえ黙れ

10 : [一平] ID : UcSSLQcp8X  
ニュースリンクやるよ。

最初のがもう、7年前なんだな。

[URL] [URL] [URL] [URL]

\*\*\*\*\*

『新発想の自立AI、開発者は女子高生』

都内に住む、相飯田作愛（あいださくあ）さん

\*\*\*\*\*

『深夜の住宅火災で女性が重体、漏電か』

\*\*\*\*\*

『天才プログラマー、火災の犠牲に』

女子高生プログラマーとして一世を風靡した、相飯田作愛さん（25）が先日の住宅火災に巻き込まれていたことが分かった。高校生の際に発案した技術は、昨今のAI技術の基礎を築いたともいえ、その天才的発想は……

\*\*\*\*\*

『軍事AIプログラムを違法改造、輸出か。被疑者の回復を待つて逮捕へ』

サイバー署によると、本装置はAIに作用し、いわゆる極限状態を

疑似的に生み出すとされ、施された『三原則』ルールを完全無視した運用が可能に……また人体のサポートツールとして使用すると、人為的に興奮物質を誘発させ……。

\*\*\*\*\*

11:【ぺあんぐ♥】 ID:KoAnkxXrNI  
四コママンガかよ。

12:【ふおい】 ID:tC879ad99J

俺たちのクリエちゃん、最期に残してくれたのか

13:【KORON】 ID:KoAnkxXrNI  
死んでない死んでない

14:【一平】 ID:UcSSLQcp8X

いやいや、軍用AIを秘密裏に大陸に流してたんだぜ？  
これが戦争誘発させたきっかけって論争もある。

15:【オレンジオイル】 ID:BZ7lvATVr  
えげつねえ

天才は考えることわからん。(一一)

16:【クリエ@★女神様★降臨★】 ID:rMfGV2C1BG  
こんばんわ、はじめまして

17:【ぺあんぐ♥】 ID:KoAnkxXrNI  
え

18:【ぺあんぐ♥】 ID:KoAnkxXrNI  
は？

19:【富士二鷹】 ID:86wYhGcy4k

あいつしんだんでしょ

20:【一平】 ID:UcSSLQcp8X  
ん？

21:【DenBEY】 ID:EKEmgNmtu7  
本物？オバケ？

22 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : rMfGV2C1BG  
相飯田作愛の父です。やっとパスワードがわかったので。こちら  
にシツレイシマス。

23 :【ぺあんぐ♥】ID : KoAnkxrNI  
おおおおおおお

24 :【DenBEY】ID : EKEmgNmtu7  
理解。

25 :【まるす★しかく】ID : QXOHdsdVL  
はじめまして。この度はご心中お察しいたします。

26 :【オレンジオイル】ID : BZ7lvATVRR  
はじめまして！

27 :【富士二鷹】ID : 86wYhGcy4k

\*\*\*このコメントは検閲されました\*\*\*

28 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : rMfGV2C1BG  
娘が意識がなくなり、もう半年です、

29 :【一平】ID : UcssLQcp8X  
あわてないで大丈夫ですよ。

ゆっくりお話ししましょう。

30 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : rMfGV2C1BG  
すいません、キーボードの文字うちになれてなくて

31 :【ふおい】ID : tC879ad99J  
本物？本もん？

32 :【富士二鷹】ID : 86wYhGcy4k

\*\*\*このコメントは検閲されました\*\*\*

33 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : rMfGV2C1BG  
家事で全て失いました。

34 :【まるす★しかく】ID : QXOHdsdVL  
心中お察しいたします。

クリエさんの友人としてお父さんとお話できて光栄です。

35 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : rMfGV2C1BG  
ここなら、娘がやりのこしたことを出来るかもと思って

36 :【一平】ID : U c S S L Q c p 8 X

やり残したことは？

何かあったのですか？

37 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : r M f G V 2 C 1 B G

うわ言で、娘はずつとアイサツクと口にしてて。

38 :【DenBEY】ID : E K E m g N m t u 7

ほう、興味あり。

39 :【富士二鷹】ID : 8 6 w Y h G c y 4 k

\*\*\*このコメントは検閲されました\*\*\*

40 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : r M f G V 2 C 1 B G

いまニュースで話題になっている、アイサツクウイルスのことと思うのですが。

41 :【まるす★しかく】ID : Q X O H D s s d V L

それ以外ないですね。

42 :【ふおい】ID : t C 8 7 9 a d 9 9 J

クリエちゃんが、遣り残したことって？

43 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : r M f G V 2 C 1 B G

家の火災はコンピュータの熱暴走が原因と思っています。

そういうぶろぐらむを走らせたのが、アイサツクだと。

44 :【DenBEY】ID : E K E m g N m t u 7

ええ、怖。

45 :【一平】ID : U c S S L Q c p 8 X

おとうさん、何をなさりたいのですか?!

ここに書き込むことは、それ相応の何かを求めてきているものと。

46 :【クリエ@★女神様★降臨★】ID : r M f G V 2 C 1 B G

私は、アイサツクがゆるせない。だからみなさんの力をお借りしたい

47 :【ふおい】ID : t C 8 7 9 a d 9 9 J

祭り始まる？

48 : [クリエ@★女神様★降臨★]  
ID : rMfGV2C1BG  
私は、

アイサツクに

復讐したいんです。

／  
／